

博士論文

論文題目

出版を巡る流通と文化
文化資源学の視座による
取次を軸とした
出版流通分析

氏名

すずき ちかひこ
鈴木 親彦

博士学位論文：

出版を巡る流通と文化 文化資源学の視座による取次を軸とした出版流通分析

鈴木 親彦（学生証番号：21-127076）

序文 文化資源学から考える出版流通と出版文化.....	5
1. 本論文の構成.....	5
2. 分析対象の整理.....	6
3. 文化資源学の視点とその理念.....	8
第1章 「出版」「流通」の整理と取次の機能.....	13
1. 出版流通を巡る議論の多様性と共通項.....	13
2. 出版を巡る「生産・流通・消費」.....	15
3. 流通の射程、取次の機能の整理.....	22
第2章 「出版」「文化」の整理と出版流通の射程.....	32
1. 日本における近代出版流通産業の成立.....	32
2. 戦後の出版流通、大量流通・流通改革・新たな可能性.....	36
3. 自由で不自由な「出版文化」、その数量的確認と利用傾向.....	38
第3章 ジャパンブックセンターに見る書籍流通改革の諸要素.....	49
1. ジャパンブックセンター＝須坂構想の概要.....	49
2. 地方発の構想・地域振興としてのジャパンブックセンター.....	57
3. 出版流通改革としてのジャパンブックセンター.....	62

第4章 雑誌流通改革に見る衝突と協力.....	68
1. 1975年の「発売日論争」：業界と読者.....	69
2. 雑誌定価販売・委託制への移行：業界文化の醸成.....	74
第5章 取次の変化、出版流通の変化.....	86
1. 二つの時代の取次危機.....	86
2. 取次機能と前提の動揺.....	91
3. 取次改革から流通改革へ.....	99
第6章 出版文化のせめぎあいとしての出版流通改革.....	106
1. 新たな枠組みの中での出版流通研究.....	106
2. 出版文化を起点に見る出版流通・出版産業の変化.....	111
謝辞.....	120
参考資料：第2章においてKH-CODERに利用したタイトルリスト.....	122
参考文献一覧.....	160

序文

文化資源から考える出版流通と出版文化

序文 文化資源学から考える出版流通と出版文化

本論文は日本の出版流通、特にその中心的なプレーヤーとしての役割を果たしてきた「取次」を対象とし、文化資源学の立場から分析を行うものである。出版流通と取次を巡る議論に含まれていた「文化」と「産業」という二つの軸を、相互に関連するものとして捉え直すことで、現代日本の出版流通に対して新たな見方を示す。同時に文化資源学の研究として、文化と、産業の直面する現実の問題とを乖離させずに、どのような分析をなしえるかという実験を行うものでもある。

1. 本論文の構成

本論文の分析は、次の問いに答えるために組み立てられた。日本の出版流通産業はいかなる枠組みで改革が行われてきたのか。そしてその際に「出版文化」という言葉で語られてきたものが、どのような役割を求められ、実際には何を担ってきたのかということである。この問いに答えるには、出版産業の内外で使われている出版文化という語を分解し、再構築する必要がある。また出版文化とともに進められてきた具体的な出版流通改革の事例を再検証する必要がある。

そのために本論文は以下の様な構成をとる。まずはこの序文において論文全体の問いと構成を明示する。そして第1章において出版流通を「出版」と「流通」の側面から分析する。さらに、2020年現在も実態的に出版流通の主軸を担っている取次の機能も整理する。このことで出版流通が支えている実際の範囲を明確にし、議論の前提を整えていく。

次いで第2章において、「出版」と「文化」の合成語である出版文化について腑分けを行う。まず、出版流通産業そのものの変化を振り返ることで、出版文化が多様性を持たざるを得ない背景を整理する。その上で、出版文化という語が恣意的に使われうることを、事例とともに示す。さらに、実際にはどのように「出版文化」という言葉が使われてきたのか、論文、図書、雑誌や博士論文などの学術情報の検索サービスであるCiNiiから取得したデータと、テキストデータを統計的に分析するためのツールであるKH-Coderを利用して数量的に把握する。

第1章・2章において整理した全体を踏まえて、第3章から5章にかけては出版流通改革の事例を再検証していく。ここで示すのは、雑誌を中心に置いてきた出版流通によってもたらされた恩恵と限界、出版社・取次・書店という出版産業のプレーヤーそれぞれが持つ流通に対する価値観の相違、出版社が主に東京に集中している一方で書店は日本全国に存在するという地域差の問題である。第3章ではこれらの問題を解決するために「業界横断」のローガンのもとで立ち上げられたジャパンプックセンター(JBC)の理想と現実の落差を示す。そして第4章では、JBCが乗り越えようとした流通構造が作られてきたプロセスと、経路依存の経緯を、雑誌流通を巡る出版業界内の対立とルール策定に関する事件を取り上げることで確認する。さらに第5章ではJBC以降大きく変化した出版流通について取次を軸に整理する。2000年以前までは常識であった雑誌中心の出版流通が大きな曲がり角を迎え、安定的と思われてきた構造が崩れ去る中で、取次そのもののあり方が変化していることを示す。

以上の整理を受けて、問いに対する答えを導くのが第6章となる。ここではまず、出版流通を巡る産業的視点にとどまらない先行研究を検証する。これらの先行研究を補助線としながら、出版文化と流通改革を別個のものとして捉える考え方、つまりこの後に示す文化資源学的視座に立って出版文化と流通改革の関係を再検討する。

2. 分析対象の整理

分析対象となる出版流通と取次の組織およびその機能については、1970年代に出版を研究する学問としての「出版学」が成立した時期から議論されてきた。研究対象のほとんどは、いわゆる新刊出版物を巡る商業出版流通だが、雑誌中心に流通を組み上げてきた取次の流通現場の問題や、再販制度などより大きな法制度やシステムの問題まで広い視野で議論が行われている¹。個別の先行研究については1章で考察するが、出版流通研究の多くは、流通の現場に踏み込むよりもより大きなシステムの変化や連続性に注目してきたことができる。多くの出版社と書店をつなぐ取次は、出版産業全体を捉えるためには格好の研究対象であった。しかし一方で、いわゆる「出版流通論」といった体系的な研究領域が学問のディシプリンとして明確に確立しているとは言えず、また産業研究をベースに流通を考える際には取次システムの特異性を強調する記述に終わってしまうことが多かった²。

出版流通研究のさしあたっての目的として、橋本博樹は流通の「機能不全の原因を探り解決の方策を描き出すことがさしあたっての出版流通研究の目的」という定義をし、問題解決を強調している³。しかしながら、出版流通において解決すべきとされてきた問題は、実は2000年から2010年の間に、大きな変化・断絶を経験している。変化の例としては、歴史的な産業変化を背景として取次が雑誌流通を中心においたために生じた書籍流通の問題、第3章および5章で取り上げる読者が注文した書籍（客注品ともいう）が書店店頭が届かないといった問題がある。この問題は2000年以前には出版流通と切り離せない問題だった。しかし、2020年現在は中心的な課題ではなくなっている。取次や業界内部での改善も影響しているが、根本的には出版物購入方法の多様化によって後景化したのである。具体的にはAmazon⁴をはじめとするインターネットによる通信販売の定着、IT化による在庫管理効率のアップ、出版産業外の宅急便等も含んだ配達システムの充実によって、ほとんど聞かれなくなっている⁵。目の前にある問題の解決といった狭い意味での「流通」の機能不全を論じるのみでは、本論で議論したい流通と出版文化の関係は十分に捉えることができない時代に入りつつある。

これまでの出版流通を巡る議論では、肯定的にせよ否定的にせよまず取次主導による大規模流通の問題が扱われてきた。しかしながら具体的な数字を見ると、取次による流通ルートを紹介した出版物の売上そのものは1996年の26,564億円をピークに下がり続けている。これを俗に出版業界「失われた10年」と称した時期もあった。そして現在、出版業界の「失われた10年」は倍の20年を超え、2018年の取次ルート販売額は12,921億円とピークの約半額となり、連年の前年割れが当然の状況になっている⁶。

売上の減少とともに、新たに登場した電子書籍・電子出版もインパクトの大きな話題となってきた。従来型の紙の本の流通にとってみるとパイの食い合い、つまり売り上げの間

題としても取り上げられるが、この売上も、電子を含めてみれば横ばい、または増加傾向であるという説⁷や、そもそも電子出版物の売り上げには何を含めるべきかという問題に発展してきている。後者は、出版産業として扱う出版物をどの範囲まで広げるかという問題⁸、例えば古本・新古本や商業以外の出版形態を含めて考えるべきかどうかという問題の焼き直しと言う側面もあるが、一方で一冊の冊子の形に ISBN や ISSN をつけて取次を通して書店に送る営みに無意識に限定されてきた出版という行為が、「出版＝パブリケーション」という言葉が持つ本来の広がりを取り戻しつつあると考えることも出来る。

このように議論を展開して「出版流通」の概念を幅広く考えることも必要となってきたのは、現在のところ旧来の流通の担い手であった取次が、電子出版のキープレーヤーとしての位置を得ているとは言い難い。むしろ取次自身がかつてのように出版業界全体の金融までを担うセーフティネットであった状況も終わり、取次そのものが経営危機に陥り再編が行われている。こういった状況を受けて、従来型の出版流通をいかに効率化するかについての議論が、体系的に行われる必然性は低下してきている。ただし、この必然性の低下は出版流通の問題点が解決されたから起きているわけでも、取次の存在意義がなくなったから起きているわけでもない。実際は出版産業全体に与えるインパクトの問題で、相対的に改善要求が後退しているに過ぎないのである。

例えば、電子書籍やネット書店へ対抗するような話題として、物理的に本のある空間議論がなされる。そうした空間として魅力ある書店についての話題が、特に雑誌やムックの特集として、しばしば提供される⁹。雑誌の企画として、書店に出向いて来て紙の本を買う層の求める情報やニーズと合致しているので、こういった企画が積極的に展開されるという予想は成り立つ。また、単に特集の傾向というだけではなく、出版流通の変化として捉えることもできる。

「下北沢 B&B」のような「個性的な書店」にトーハンが見計らい¹⁰を行わない特別な配本条件を付けて扱っているように、取次も積極的に個性的な書店を応援している。しかし、こういった本のある空間が提供されているのはほとんどが大都市圏で、その大半が東京であるという事実も厳然として存在する¹¹。本論3章で取り上げる流通改革事例のきっかけとなったような、大都市以外での出版物へのアクセスに困難がともなっているという種類の問題提起は今やほとんど聞かれることがないが、出版流通をめぐって行われてきた議論が解決をみたというわけではないのだ。

この状況からは、一見すると従来出版流通の主軸となってきた論点、つまり取次と流通をめぐる問題が、出版全体および出版文化を考える上で重要ではなくなってきたという議論が導けそうであるが、実はそうではない。小規模な書店の減少や郊外化・大型化、さらに郊外型の大型書店ですら経営的に立ち行かなくなりつつある状況のあおりを受けて、日常的に物体としての出版物に触れられる空間は希少化しつつあることなど、むしろ従来型の出版流通が支えてきた現場にも新しい問題が生まれてきている。この問題の表裏として、雑誌についてはコンビニエンスストアの全国展開によって、書籍の注文に関してはネット書店がカバーしているので、一見すると問題がないように見えるという面もある。いずれにせよ、出版物と人々を結ぶ状況は大きく変わってきている。従来型の取次中心の出版流通の終焉が論じら

れるとしても、「終焉」を巡る議論から新しい出版流通構造のもとでの出版産業の変化や、出版文化の変容の予感すら見られる状況となっている。

本研究は日本の出版流通を対象としている。戦中は日本唯一の出版流通機構だった日本出版配給が解体され、日販・トーハンをはじめとする取次が流通を担って「きた」時代を中心に据え、その時代に行われた流通改革に焦点を合わせて分析していく。ただし、上述のように出版流通・出版産業が直面している課題を具体的に解決する研究を行うことを目指すものではない。また、業界を見直して取次の活動を分析した結果を産業の効率化や高度化につなげる研究を目指すものでもない¹²。今日の変化において、またはそれに至る段階で、出版に関わる産業の現場とそこで求められる「出版文化」が常に絡み合ってきたことを示す。そして今日の変化も、出版産業と出版文化の相互の影響関係に立脚していることを明確にし、出版流通という概念のもとで分析されえる領域の重要性を再評価することを目指すのである。文化資源学の視点を持って取次と出版流通を見る意味がここにある。

3. 文化資源学の視点とその理念

では、文化資源学の視点で見るとは、どのような分析を意味するのであろうか。その前にまず、文化資源という言葉および文化資源学という学問領域について、枠組みを提示する必要がある。文化資源は、2000年に東京大学人文社会系研究科に属する専攻名として公式の場で使われ始めた。この専攻のマニフェストにおいて提示されているのは、人間が生み出すさまざまな文化を、既成の観念や既存の制度にとらわれず、「ことば」と「おと」と「かたち」を手掛かりに、根源に立ち返って見直そうとする姿勢を持つ学問が文化資源学であるということである¹³。多様な観点から「文化」をとらえ直し、新たな価値を発見・再評価して文化資源としてとらえ直す、さらにそれらを活かしたよりよい社会の実現をめざす方法を研究・開発する学問が目指されている。

現在のところ、明確に文化資源学が対象とする範囲や文化資源の明確な射程が定められているわけではなく、個別の研究対象についての「これは文化資源である」という提起を軸に研究が進められている。このことは学問領域としての曖昧さにつながる可能性がある一方で、伝統的な人文社会系研究の対象以外にも、文化資源を見出し得るという可能性も秘めている。なお、包括的な定義はなされていないが、文化資源学研究専攻における教育内容を学生に明示するマニフェストであるシラバスと、専攻における教育の成果として提出され受理された修士論文の内容を分析した結果から、「政策的」「博物館学的」「産業的」な研究対象が選ばれてきたことは分かっている¹⁴。

文化資源学と産業の関係を整理してみると、分かりやすいものとしてはすでに産業としての役割を終えた対象に関する研究がある。いわば産業考古学ともいえるもので、産業そのものを文化資源と考えるアプローチである。一方で、産業そのものを文化資源とは考えないが、何らかの文化資源を生み出したり、支えたりするものと位置づけて研究するアプローチもある。生み出される文化資源や支えられる文化資源が何であるか明確になっている場合もあるだろうし、社会貢献やメセナといった形で間接的に文化資源を支える仕組みを考えることもある。

本論の位置は後者に近い。しかし、出版物を文化資源と考へて、それを流通させる仕組みを分析する研究を目指してはいない。産業内に存在する、または醸成されるふるまいをも文化ととらえ、産業の変革が文化的な相互作用をどう生み出すのか、一方で文化的な相互作用によってどのような産業の変化が生まれるのかを事例に沿って示していく。

これまで文化資源学において、文化資源を支える産業を軸とした研究が行われる場合、対象は公的機関と何らかの関わりを持つ、またはその補助を受ける場合がメインだったともいえる。例えばまちおこしや芸術祭など、行政の支援や市民による活動、言わば主目的が利益追求である私企業とは異なった対象を設定することが多い。産業を考察する場合も、既に失われた産業や過去の産業による成果のアーカイブを文化遺産として考察し、資源としての活用を考えるアプローチが主体となうものが多かった¹⁵。

しかし、現在も継続して利益追求型の活動している企業や産業の動きも、文化資源にとっては重要な意味を持っている¹⁶。資本主義的な構造からこぼれ落ちがちである文化や、未だ文化として評価されない文化資源に対するセーフティーネットとして、行政や市民の活動を評価する意味は大きい。しかし、文化財にとどまらない「ことば」と「かたち」からなる文化的事象を、そしてそれを支える制度を研究する文化資源学の考え方からは¹⁷、今回対象としている出版文化という概念的な側面と、取次や出版流通といった産業の具体的な変化や効率化を同時に評価し、その関係を整理することもできるはずである。このことはまた、文化資源学が目指す多様な視点からの捉え直しと、よりよい社会の実現という理念を、理念にとどまらず現実的な産業の分析に活かすことにもつながる。文化資源および文化資源学が、人文社会系分野に属する専攻としてスタートしたことは、この学問が現実社会から隔離された概念の世界のみにとどまることを意味しない。むしろ伝統的な学知を現実の社会の中に置きなおし、学際的な手法で産学の垣根を超えた研究を行うからこそ、前述のマニフェストで示された文化資源学の理想を描き出し得る。

こうしたアプローチのためには、出版文化という言葉また、単に産業に対置される文化的な事象という曖昧な位置に置かず、明確化する必要となる。出版と文化というどちらも多義的な言葉の合成語である以上、出版文化という言葉の意味も多様性を持っている。特に「文化」はいわばマジックワードの様に利用されることも多く、特に議論を行う際には相互がそこに込める意味のずれが混乱を招くこともある¹⁸。また出版の範囲も産業化した商業出版から同人誌や自費出版までの広がりをもちえる。あるいは執筆という行為、またはそれを受け取って読む者の動きまでも含む抽象的なものとして出版が使われる場合もある。出版と文化を掛け合わせたことで、読み込む意味の組み合わせは、じつは無限に広がると言ってもよいだろう。本論において対象とする出版産業を巡る議論においても、様々な意味で出版文化という言葉が使われてきた。本論内では、第2章において出版産業の歴史を振り返ったうえでテキストマイニングを行い、産業に関わるプレイヤー及び研究者が発した出版文化を、大きく三つに分けて整理していく。

また、こうした出版文化と取次や出版流通が担う具体的な機能がどのような関係にあるかについても整理が必要となる。出版流通は、どのような形態の出版物がどのようなシステムで全国に送られるかを支えている。つまり出版物のメディアとしての側面を規定する一要因

であるといえるし、出版流通自体を一つのメディアとして捉えることも可能である¹⁹。メディアが変化することが、メッセージそのものに影響を与えるという前提に経てば、流通の変化を追うことで、流通する出版物とそれをめぐる出版文化について語ることも可能であると考えることができる。

重要な点なので敢えて繰り返すが、本論文では経済的利益とは別の評価軸が重視されるものとして、つまり「経済的利益が生じるのか否かは別にしても、存在させねばならない」といった対象として出版産業を扱おうとするものではない。文化資源学の対象としての側面をも持ちながらも、基本的には経済的利益を生み出し、それを再配分するものとしての出版流通と取次を考える。出版文化として語られるいわば概念的な面と流通改革の現実を区別しつつも、別々の領域の議論として断絶させず、その関係の考察することを試みるものでもある。

¹ 全般的なものとしては出版学そのものを基礎づけた箕輪成男『出版学序説』日本エディタースクール（1997）pp.142-146、清水英夫『出版学と出版の自由』日本エディタースクール出版部（1995）pp.21-29が端的な例となる。

一方で日本出版学会においては、吉田則昭「90年代の出版流通研究—何が語られてきたのか」『出版研究 32号』日本出版学会（2001）pp.41-43、橋元博樹「2000年代の出版流通研究」『出版研究 44号』日本出版学会（2014）pp.3-27などが「〇〇年代の出版研究」という特集内で行われてきた。

² 出版学の立場ではなく地理的・流通的研究の見地からまとめられたものとして、秦洋二『日本の出版物流通システム』九州大学出版会（2015）。また、出版流通が体系立てて研究されていないという指摘は、10年の間が空いている吉田・橋元両者のレビューで共通である。吉田「90年代の出版流通研究」、橋元「2000年代の出版流通研究」

³ 橋元「2000年代の出版流通研究」P.4

⁴ ネット書店でもあり、ネット通販サイトでもある Amazon.com は 2000 年に日本での正式サービスを開始した。

⁵ 本論 4・5 章での議論を参照

⁶ 『出版指標年報 2019 年版』全国出版協会・出版科学研究所（2019）P.3

⁷ 林智彦は他の経済指標や人口変化を考慮に入れ、電子書籍を加えた出版売上は、持続的に増加傾向にあると述べている。林智彦「「活字離れ」論の文化史——「定義」と「統計」の実証研究」日本出版学会春季研究大会（2015）

⁸ 佐藤健二「テキスト空間論の構想-日本近代における出版を素材に」『テキストと人文学』人文書院（2009）pp. 158-165、および鈴木親彦「出版流通の再評価—文化におけるストック形成に焦点を合わせて」東京大学人文社会系研究科修士学位論文（2012）

⁹ 一例として 2014 年の上半期において出版されたこのような特集を組んだ雑誌を挙げるだけでも、『ソトコト』2月号、『ケトル』4月号、『大人の隠れ家』5月号、『Brutus』8月号合本、『本の雑誌』別冊特別号などが挙げられる。

¹⁰ 「見計らい」とは、書店と契約を結んだ取次が、新刊・重版本を中心に、その店に合うと判断した商品を返品条件付きで自動的に送る商行為。新商材を熟知していなくても送品される利点があるが、在庫全体を自身で管理したい書店にとっては余計な在庫を抱えることになる。

¹¹ 個性的な空間にとどまらず、出版社および書店が東京および各地方の大都市圏に集中している。蔡星慧（チェソンヘ）『出版産業の変遷と書籍出版流通—日本の書籍出版産業の構造的特質』出版メディアパル（2006）pp.117-119。近年の状況についても大きな変化はない。

¹² 吉田「90年代の出版流通研究—何が語られてきたのか」

¹³ 「文化資源学とは？」『東京大学人文社会系研究科文化資源学研究専攻 Web サイト』
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR/outline/>（2019年9月30日閲覧）

¹⁴ 鈴木親彦・中村雄祐「文化資源学の射程：大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ」『文化資源学 第13号』文化資源学会（2015）pp. 91-101

¹⁵ 文化資源学の研究成果として、『文化資源学 第1号』、文化資源学会(2002)から、『同 第14号』(2016)までに掲載された論文、研究報告を対象として確認した。同時代の産業に対するアプローチは、行政関係や美術館・博物館の問題を除くと、漆原拓也「グローバル時代の日本の伝統的工芸品産業—秋田県川連漆器産地の海外進出事業を事例に—」『文化資源学 第4号』(2005) pp.75-83、三谷八寿子「街をしつらえる技術と時間—汐留シオサイトの開発を通して」『文化資源学第14号』(2016) pp.95-111の二点のみである。

¹⁶ 実際に文化資源学の修士論で引用されてきた定期刊行物の発行団体の間にマニフェスト等を読むと、「サービス」と言った側面が重要視されていることも分かる。

中村雄祐・美馬秀樹・増田勝也・鈴木親彦 Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku 文化資源学) in Japan, *Journal of the Japanese Association for Digital Humanities* (2017)

¹⁷ 「文化資源学とは？」『東京大学人文社会系研究科文化資源学研究専攻 Web サイト』

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR/outline/> (2019年9月30日閲覧)

¹⁸ 佐藤健二・吉見俊哉『文化の社会学』有斐閣(2007) pp.4-25

¹⁹ 柴野京子『書棚と平台 出版流通というメディア』弘文堂(2009)

第1章

「出版」「流通」の整理と取次の機能

第1章 「出版」「流通」の整理と取次の機能

第1章では、出版流通に関わる先行研究の議論と、流通を実際に担うプレイヤーが持つ機能を整理する。この整理を通じて出版流通を分析対象とするための前提を明確にしていく。これは出版流通をより広い概念の中で位置づける前提となる整理でもある。

まずは「転換期」というキーワードを軸に、出版流通を巡ってなされた議論を振り返ることで、流通を巡る問題の多様性と共通項を見出す。次いで、出版流通という言葉が前提としている産業機能の区分「生産・流通・消費」を見直す。こうした区分を前提にすることを批判した提言を起点にし、なにゆえこのような区分を前提とせざるを得なかったのか、そしてこれまでの流通研究において等閑視されてきた問題は何かについて明らかにする。フローとして流れ続ける出版物の流通経路を把握するのみではなく、ストックとして蓄積される出版物のありかたをも考えなくてはならない。

この二つの整理を踏まえて、具体的に流通の射程を確認するために、出版流通を支える主要なプレイヤーである「取次」の持つ機能を具体的な業務に則って腑分けしていく。取次の機能を明示することで、出版流通がいかにして出版産業のインフラたり得ているのかを再確認することができる。さらに、取次の機能がカバーする範囲、つまり流通の担い手が改善しうる範囲と、出版業界として流通改革に期待してきた範囲を比較することが可能になる。

1. 出版流通を巡る議論の多様性と共通項

産業としての日本の出版は転換期を迎えている。この言葉は、昭和初期に宮武外骨が円本批判をした際にも、2000年にAmazonが日本に上陸した際にも、1970年代後半から繰り返し出版物の再販売価格維持制度をめぐる公正取引委員会の動きがあった際にも、主力商品であったはずの雑誌がその地位を失いつつある2020年の今日においても繰り返されている¹。

繰り返し論じられる転換の内容は、具体的な論点に落とし込めば時期によって異なる。宮武が批判している円本の登場が、彼一流の毒舌で述べられているように「害毒」であり「円本の著訳者は不正不義不道不徳の小人バラ、出版屋を贓物故買犯者、著訳者を背信、偽作、剽窃の常習犯者」²といえるものであったかは議論の余地がある。しかし、円本による産業の変化が出版の大衆化と大量流通という今日まで続く方向性の源であることは確かである。清水又吉の議論によれば、書籍価格の低下や著者との取引制度の整備、書籍販売流通の新展開といったプラスの効用があった一方、宮武も指摘しているように無理な販売による返品増加や破綻、文化財となる学術・研究出版の後退、出版社の経営体制の自転車操業化などがまとめられている³。

Amazonの上陸による影響は、単なる出版産業に関わる新しいプレイヤーの出現にとどまらず、これまでの出版社・取次・書店といった産業のあり方に大きな波紋を投げかけている。当然ながらAmazonについては現在進行系の議論が続いている。実業に関わる議論では過剰とも取れるほどにAmazonを問題視したり、出版の未来を絶望的に捉えたりする言説も見られるが、一方で出版学そのものではAmazonの影響を明瞭に分析する研究枠組みは明確になっていない。本論ではAmazon定着による出版物の買い方の変化について、およびAmazon

と取次の流通システムとのせめぎあいについて第5章で考察している。

転機の三つ目の例とした再販売価格維持制度（再販制）の議論を確認する前に、再販制について簡単に説明をしておく。今日出版社-取次-書店というルートを通ずるほとんどの書籍・雑誌に対して取られている販売契約で、メーカーである出版社が独占的に小売価格を決定し、流通業者および小売業者にそれを強制することを認めるものである。正確には出版社と取次、取次と小売店の間でそれぞれ再販契約書が結ばれることで成立している。これは独占禁止法で禁止されている行為であるが、適応除外品目として出版物が明記されているため許可されている⁴。今日の取次流通ルートはこの制度を前提として取引システムが組み上げられている。

1978年に公正取引員会がこの制度を見直そうという動きを見せたことで、出版業界全体を巻き込んだ議論が行われた。最終的には弾力運用の努力が強調されたのみで独占禁止法の改正には至らなかったが、この論争はそれまで業界の常識だった制度が自覚的に研究されるきっかけにもなった。業界関係者の多くは、「文化的な商品をまもるために必要な制度である」、「不必要な価格競争によって最終的に消費者に不利益をもたらす」などの主張をおこない、再販制見直しに対して反対の声を上げ⁵、研究者側からも箕輪成男がイギリスにおいての再販制を巡る裁判について研究を行った様に再販制の必要性がアピールされた⁶。

一方で木下修は再販制導入時の歴史を精緻に確認することで、元々の立法趣旨には文化性は盛り込まれていないという事実を示し、再販制という経済に関わる法律を議論する際に、無意識に文化を振りかざしてしまっている危うさを示した⁷。業界の内部からも、例えば取次に勤務しながら筆名「寺林修」で活動していた畠山貞のように、再販制がなくなった場合のシミュレーションを示しつつ、

法定再販という政府の保護のもとに、大出版社はマスプロ・マスセールの類似企画を追い求め、中小出版社の少数数書籍はその流れの中に埋没し、取次はシェアの拡大に明け暮れ、書店はベストセラー商品の獲得に狂奔し、読者は欲しい本がないと嘆き、総体として“相違と傍系の精神に欠如した時代”であった」という汚名を後世の出版史研究家から冠せられないと誰が断言できようか⁸。

と喝破するものも登場した。

このように円本・Amazon・再販制の三つの転換を簡単に例示した。なお雑誌の問題については第3章以降の事例の中で詳細に触れていく。いずれにせよ、それぞれの時点で中心となる議論は異なっている。一方で、議論の組み立てを考えると共通項も見出すことができる。一つは産業そのものの変化に対する懸念や改善の努力を巡るものであり、これには流通の仕組みの問題が含まれる。円本における大量流通、Amazonの登場における取次の位置や書店のあり方、再販制を前提とした産業の問題などである。

もう一つは産業とあるときは一体のものとして、またあるときは産業的な利益や効率とは全く別の評価軸として、付かず離れずの関係で語られる出版文化をめぐる問題である。出版物の流通改革の問題は、様々な意味を込めることができる便利な言葉として繰り返し使われ

る出版文化の問題と共に語られてきた。出版文化を支える出版流通という構図は、一面においては正しいものの見方ではある。出版流通とは出版物を全国に届けるインフラであることは確かであるし、永嶺重敏がベネディクト・アンダーソンを引いて述べているように、明治以降の全国出版流通網の成立と、同じ本を読むことで成立する全国読書（読者）共同体の成立は不可分と言うこと可能である。

こうして、明治二〇―三〇年代を通じて、全国の各都市・各地域の地方読者たちは、東京・大阪発行の新聞・雑誌・書籍という共通の均質なメディアによって一つに結び付けられ始めた。⁹

しかしながら、商業出版と言う範囲ではあるものの、様々な書物が、それほど大きな苦勞もせず日本全国どこでも手に入る状況が成立した後では、出版流通とその改革の持つ意味は変質する。出版流通によって支えられる出版文化についての整理を行う前に、まず流通の問題について腑分けを行うことが必要になる。そして出版文化もまた便利なマジックワードとしてではなく、どのように利用されているのか腑分けをおこなわなければならない。

そこで次項では一般的な流通の位置づけ、つまり産業における「生産」「流通」「消費」という三区分別における「流通」のあり方を、次いで第3項においては、「流通」を具体的に支える取次の機能を整理することで、「出版」と「流通」の関係について考察する。さらに、実際に物体としての商品の流通を考える際の、移動元と移動先について整理を行う。この整理を前提として、次章では「出版文化」の問題を議論していく。

本章から次章にかけての問題整理は3章以降で考察する具体的な出版流通改革の問題と、概念としての出版文化の間の橋渡しとなる。

2. 出版を巡る「生産・流通・消費」

出版流通の意味と言う議論を展開するためには、そもそも出版流通における流通とは何かと言う問題を考えなければならない。一般的な商品と同様に、出版物は商品がメーカーによって生産され、何らかの形で社会の中に流通し、小売店などの手を経て消費者の手に渡ると言う過程を経ている。いわば流通という言葉を使うことで、無意識に「生産」と「消費」をつなぐ「流通」という構造を前提としてしまうことは、避けることができない業のようなものと言ってよい。

また流通という言葉のみに注目しても、それが持つ意味に関しての幅という問題もある。出版に対する学問的なアプローチを「出版学」という形で提唱した箕輪成男は、初期の著書の中で物流研究を重要な分野として取り上げている¹⁰。さらに、箕輪の言より20年以上前、1969年に成立した日本出版学会における初期の出版研究において、清水英夫も流通研究の重要性を唱えられている¹¹。箕輪は『消費としての出版』において「消費」時代の取次を効率・利益・返品といった面から具体的な数字を置いて分析している¹²。箕輪が「物流」と言う言葉を使っているものの、流通とは技術的に説明できる物流の問題だけではない。出版社から受け取った商品を、どの様な運送システムに乗せ、いかに正確に書店に届けるかとい

う物流の問題は、確かに流通の効率化などの側面で論じられてきたし、第5章で述べるように今日でもコスト面で大きな問題となっている。しかしながら、こういった技術論やマーケティングに対する研究は、流通研究の重要な事例となり得るが、実際には流通の一側面に過ぎない。

他の側面として分かりやすいものは、物流に対応する言葉としてしばしば使われる商流、いわゆる物そのものではなく所有権や受発注の流れである。また、注目商品の売上数を人間が数えて情報交換していた時代から、POSレジ（出納のみではなく、販売情報を管理する機能を持ったレジスター）の導入やインターネットなど情報技術の発展した今日に至るまで、情報の動きやその把握も流通の重要な要素となっている¹³。単に商材が生産者から消費者へと一方的に流れていくだけではなく、その流れに乗った出版物がどの様に社会に一時的にストックされ、社会に配置・蓄積されるかということも流通の一側面である。

上述の諸側面をまとめると、箕輪が前述の『消費としての出版』以前、『情報としての出版』において学術書出版をまとめた際に、「トータルシステムとしての学術情報の伝達」として提示した「終わりなき還流」としての文献・文献情報・その利用・再生産までとほぼ合致する。この考え方を全出版物に広げたものこそが、出版流通の射程と置くことができる¹⁴。この射程に収まる範囲の機能はまた、現実の産業においてはその多くを取次が担っている機能でもある。そのため、出版流通の機能を明示するために、取次の持つ機能を一度整理する必要がある。

具体的に取次の機能を見ていく前に、生産と消費の間におかれる流通についてさらに一步踏み込んだ議論を確認しておく。後述する村上信明の流通経路図などの出版流通に関わる先行研究を引きながら、佐藤健二は以下のように指摘している。

先駆的な労作だったこの図も含め、その後の出版研究者が描いた図のいずれもが、生産／流通／消費の関係をほとんど一方的な流れにしてしまっていることは、なんとも落ち着きが無く、テキスト空間論として不十分である。その出版分析の基本的な視座が狭い意味での「流通経路」の概念に縛られるために、結果として印刷物というテキストの持つ事物としての性格は、ひどく平板で外面的になってしまう。（中略）フローを中心にすることで分析し得る出版物の特殊性は、それが日本の出版流通機構という特殊な流通形態上で扱われるという点のみにとどまってしまう¹⁵

彼は「生産」「流通」「消費」という、言わば借用語である産業分析の言葉によって一般化した流通経路を想定し、その経路上における一方的な流れとして出版を説明する従来の取り組みの限界を示した。概念レベルでの提示はあるが、彼は面的な広がりを持った空間として読書・テキスト世界を分析する「テキスト空間」の方向性を提案している。フローのみでなく、ストック機能としてどの様に社会と出版物が繋がるかという点、現在もマーケティングに利用されている売買情報を従来型の統制や経済支配と言った観点から切り離して考えるべしという提案も、試論として示されるにとどまっているが、出版流通について考える際に重要な指摘である。

この佐藤の議論は文化資源的に出版流通を考える際に重要な起点となるので、第6章においてより詳しく見ていく。しかし事前整理の段階でも重要な佐藤の指摘がある。「一方的な流れ」による分析に対する、つまり出版物が川上である出版社から川下である書店へと流れるという、一面的な分析に対する警告である。佐藤の批判する一方向的な観点で研究が行われる限り、出版流通の問題は「いかに効率よく上から下へ物を運ぶか」という問題に終始せざるを得ない。

ただし、出版流通をめぐる議論そのものが、なぜ産業分析の議論や一般化した流通経路を前提とした構造に閉じ込められているのか、佐藤はそのことまでは示していない。流通経路の問題は、まさに箕輪を始めとする産業研究において主軸となるものである。そして、前述の箕輪や清水を嚆矢とする出版学においては、序文で橋元の議論を引いたように、実際の産業との関係から出版流通を語ることを求められている。佐藤が問題とする語り方を解きほぐす前段階として、限定的な範囲である出版流通機構そのものを解きほぐさない限り、実際の産業の問題と概念的なテキスト空間をつなぐ議論は成立し得ない。

そのためには、一度佐藤によって「不十分」とされた出版流通構造を分析する先行研究を確認し、そこに何を加えれば一方的なものではなくなり、産業視点の出版流通とテキスト空間における出版物の動きをつなぎ得るのかを確かめなければならない。

この種類の研究は、出版学が学問としての分野を確立し始め、また出版産業の売り上げが堅調に伸びていく時代、大まかに言えば1960年代から1990年代の動きを背景として進んできた。大きな目的の一つは、出版産業の現状整理および歴史的な変化をたどることである¹⁶。出版産業に関わるプレイヤーを列挙し、各プレイヤー間をどの様に商品が移動するかを見ていくというのが基本的な手法であり、いわば産業構造を商品流通の構造を軸としてマクロ視点でまとめていくアプローチである。

多くの場合、この分析の結果はフロー図の形式でまとめられてきた。この取り組みで、情報を徹底的に収集した例として、村上信明が『出版流通図鑑』においてまとめた「出版物流通チャート」をあげることができる(図1-1)。1980年代後半の産業プレイヤーの関係図として、出版社と取次、小売からなるメインルートにどの様なプレイヤーが存在し、それらの間をどの様に出版物が流れていったのかを詳細なフローチャートで示している¹⁷。

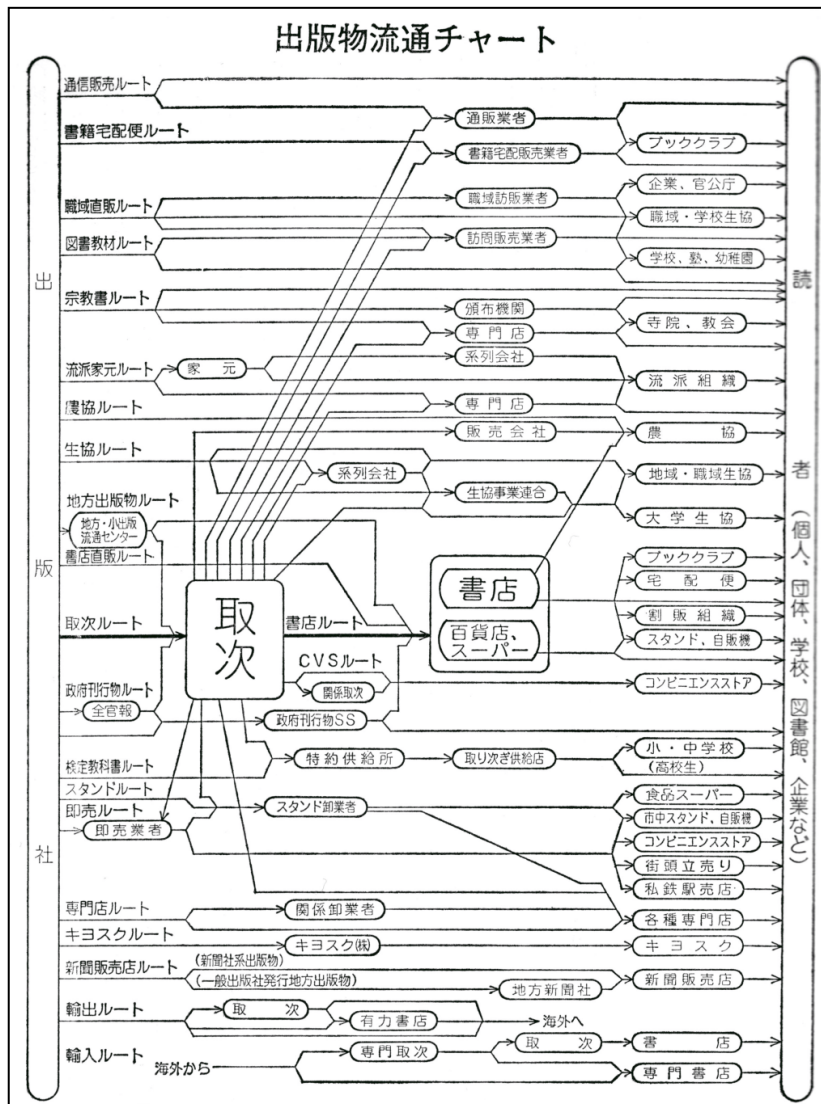


図 1-1 村上信明『出版流通図鑑』より

同様の試みは、出版産業を整理するために継続して行われている。例えば電子媒体に目を向けると、常に最新の情報を公開し、研究としての形をとっていないが多くの出版人に参照されている yamakai による『電子書籍情報まとめノート』における「業界地図」は、この系譜の最新版と位置づけることができるだろう¹⁸。

このアプローチは出版産業と出版流通の歴史的変遷の研究でも用いられている。江戸期から明治期にかけて、いわゆる近代出版産業の黎明期から、取次による大量流通ルートの成立までの変遷は、高橋正美によって複数のフロー図を並べる形で示されている(図1-2、図1-3)。2000年代に入って出版産業の変遷を網羅的にまとめた蔡星慧の研究でも同様のアプローチを見ることができる¹⁹。地理学的な視点で出版流通を捉えた秦が前提として出版流通を整理する際にも、やはりこのフローによるまとめが行われている²⁰。フローの中で、プレイヤーがどう入れ替わり、つながり方がどう変わったかを示すことで、産業全体の変化を端的に表現することができるため、マクロな視点のアプローチには有用な手法である。

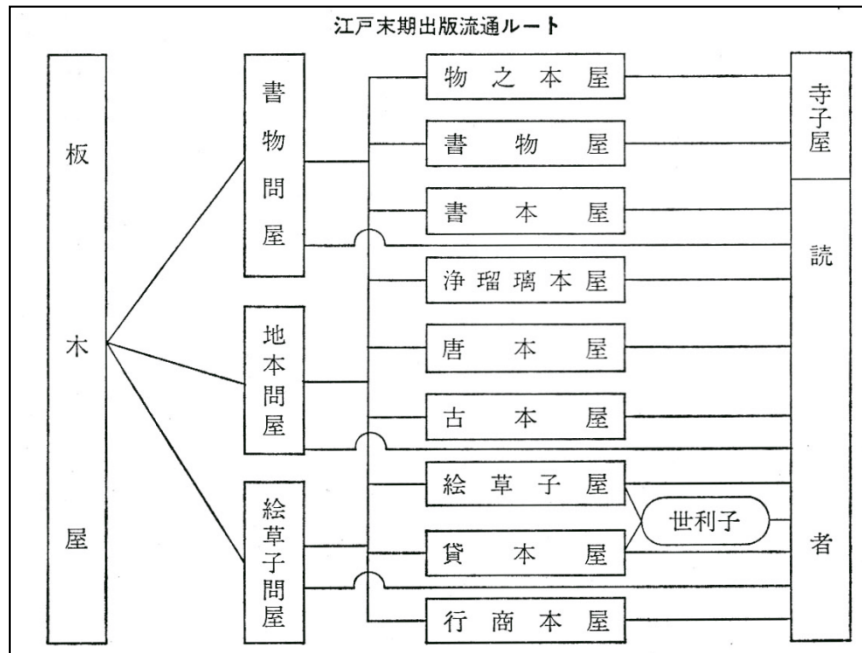


図1-2 高橋正美「出版流通機構の変遷」『出版研究』13号よ

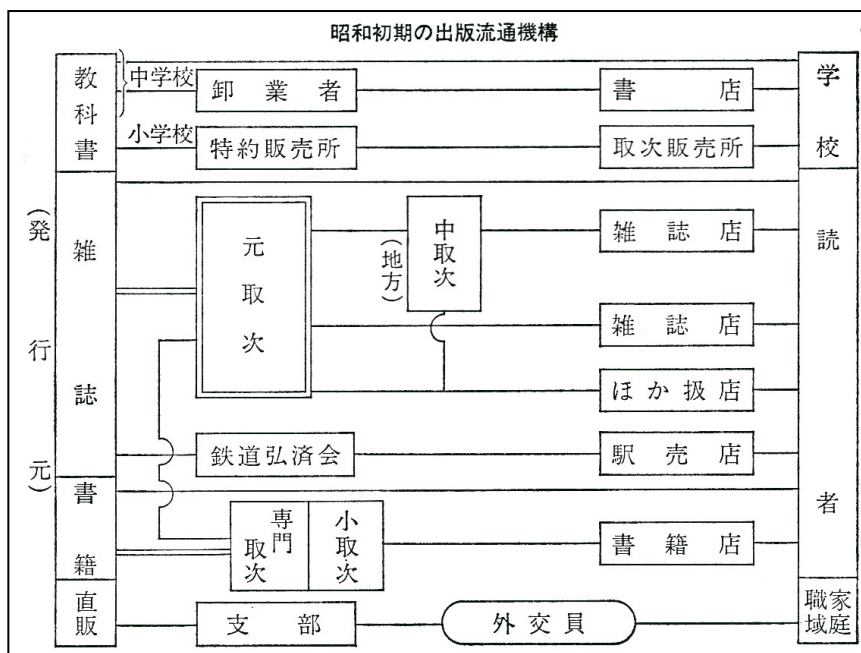


図1-3 高橋正美「出版流通機構の変遷」『出版研究』13

こうしたマクロに出版流通を見ていく取り組みの最新の例が、蔡星慧による研究である。蔡は近代書籍流通の成立期から、現代（2000年代初頭）までの出版流通経路を、可能な限りミクロな具体的な出版社の歴史を引きつつもマクロな視点で図にまとめ、さらにアメリカやイギリスを始めとする諸国の出版流通経路を示すことで、日本の出版産業の構造的特徴を明らかにしている。蔡は「雑誌中心の出版が成立してきた背景要因とはなにか、書籍と雑誌の総合流通体制は合理性を持つと言われる一方で、書籍流通との適合性が議論されているのはなぜか、そのような問題意識から始まった研究である²¹⁾」と述べているが、まさにこの点、実際の産業の問題を解くための出版研究という面が、出版産業研究の方向性として重視されている。

一方でこのアプローチは、出版社から始まり取次を経由して小売りである書店に流れる、いわば川上から川下への流通という枠組みを無意識の前提としてしまっている。これは前述した佐藤の指摘、「基本的な視座が狭い意味での「流通経路」の概念に縛られる」の通りである。村上による前述の調査でも、流通する商材として考えられているのは、基本的に出版社が作ってISBNが付与された出版物であり、取次を通して小売へと流れて行く商品である。また、高橋の研究を除いて、多くの場合は小売から出版物を受け取る消費者は一括りにされていることが多い。読者として個人以外に図書館や企業などをおいてはいるが、産業の変化と共に読者と出版物の接触方法も変化してきた点が考慮されていない場合もある²²⁾。

また、複数のフロー図を作成して歴史的変遷を把握する場合においても、明治期・大正期にその中を流通していたが、今日はメインルートから排除された商材についてはあまり追及されない傾向にある²³⁾。もちろん前述の村上の『図鑑』のように、いわゆるメインルート以外のキヨスク・即売・新聞販売店などの14ルートに分けて見ていく視点は存在する。しかし、それであっても今日のメインルートが確立する以前から流布していた同人誌、せどり本や赤本などの出版物、そしてそれらの流通を担ったプレーヤーは、ほとんど無視されていると言ってよく、周辺的なものとして扱われている²⁴⁾。しかし、第5章で示すように、現在においては小規模流通が再び存在感を持ってきている。中小規模の取次や「トランスビュー方式」と呼ばれる流通システムを巧みに利用して小規模出版物の流通網を作り、出版流通を担うプレーヤーが存在している²⁵⁾。

話を戻すが、フローを軸としたアプローチでは、各プレーヤー間の関係を商品の流れを中心に置いて捉えようとしている。そのためプレーヤー間の関係を整理しやすく、またその変化も明瞭に描くことができる。その一方で、出版物が流通の各段階で社会の中にどの様に配置され、誰がアクセス可能な状態にあるのか、つまりは各段階の出版物がどの様に機能するかを見えにくくしている。流通倉庫に存在する出版物と、書店店頭の本棚に置かれている出版物、ブッククラブで共有されている出版物は、全て同じ出版物ではあるが、受け取られ方も利用目的も異なっている。同じ倉庫に存在していても、出版社の倉庫にあるか、取次の流通基地にあるのか、書店のバックヤードに置かれているかでも、読者からのアクセスのあり方は全く異なる。しかし、フローを中心としたアプローチでは出版物は各プレーヤーをつなぐ線の上にしか存在しておらず、絶えず流れ続ける商品としてしか考えられない。ある意味において、出版流通は社会から切り離されたルールとしてのみ扱われており、読者や社会とど

の様な関係にあるのかという点について、考慮することが難しい。

流通構造を見る上では、出版物が蓄積される状態や場所は結節点として重要であるにもかかわらず、これまであまり重視されてこなかったことが分かる。後述するように、出版流通が文化と、なにより文化資源の形成と関わるには、ストックされる状況や場を考える必要があるのだが、その点はこのアプローチからは発見できない。

また、歴史的な展開を見ていく中で最終的に取次による流通システムが無意識の前提になっていることも含めて、このアプローチの整理が分かりやすい故に生じる問題点も存在する。取次が寡占状態であることが、場合によっては必要以上に強調されてしまうのである。単純な図式化は、二大取次と呼ばれるトーハンと日販が出版界全体に対して支配力をふるう恐れがある、小規模流通は業界秩序への挑戦であるといった、不必要に対立をあおる言説が出回る原因にもなっている²⁶。また取次の経営状態悪化を、出版産業全体の危機に直結させるような言説にもつながる。

しかしながら、流通構造を分析することそれ自体はやはり重要な研究である。流通の全体的構造と参加プレーヤーを示す手段としては、ときに単純化の嫌いがあっても明快な見取り図を示してくれる。また、取次の立場が大きく揺らぎ、出版流通の経路が大きく変化する可能性が現実味を帯びている状況を考えると、その変化を歴史的に掴むために研究成果の更新が求められてもいる。本論文の第2章において出版流通の歴史を振り返る際に、やはり流通構造を軸に見る方法を採用することとなる。ではどうすれば、産業視点のフロー型の流通とストック型の出版物の蓄積と動きをつなぐことができるのであろうか。そこで注目すべきは出版流通と言う言葉そのものである。出版流通は出版物を扱う営みとしての「出版」と、モノや情報を動かす営みとしての「流通」から成り立っている。そして、どちらを地としどちらを図とするかを意識的に考えることで、研究アプローチの整理が可能である。

流通を軸として、その上で出版を考えるアプローチは、冷静に産業を分析する際に適している。しかしこのアプローチは、あらゆる産業に存在する種々の特殊性に還元される問題を取り上げるに過ぎないともいえる。例えば、医薬品や化粧品など、厳密な管理が必要な上、有効に利用できる期間が限定されている商品については、「安全」という面での特殊な管理が求められ専門の流通業者が存在する。そして、出版物が独占禁止法の適応除外であるように、医薬品についても個別に細かい法律が存在し、それに配慮した流通システムが作り上げられているし、処方薬については保険が介在するため複雑な支払い方式がとられている²⁷。個別の産業の事情を並べていくことで、それまでなかった新たな流通改善を見出すことが可能となるかもしれないし、出版流通のある種の相対化にはつながるかもしれないが、本論の目指すところとは趣を異にする。

出版流通を描き出し、その上に立つ出版文化に関する議論との橋渡しをするためには、地としての出版に対しての図としての流通を語る必要性がある。出版流通が流通産業一般に対して持つ特殊性を語るのではなく、出版という産業の中で流通が担っている機能を見出し、その積極的な意味を述べなくてはならない。出版流通をマクロに捉える研究は、こうしたアプローチそのものではないが、その土台となりえるものである。本論ではこの土台の上に、出版流通が改革される複数の事例を置き、その上で転換と改革の意味を見出していく。

3. 流通の射程、取次の機能の整理

「地」として出版を置くこと、そしてその上で流通の持つ積極的な機能を語る上で、前項で佐藤が問題とした生産・消費・流通の三区分をいったん認める前提に立ったとしても、整理して置かなければならない問題がある。いわば、流通に込められる出版をめぐる生産と消費からの過剰な期待と呼ぶべき動きがそれである。

出版流通改革が行われて生産・消費・流通のうち流通にあたる部分が改善されることと、生産と消費が改善すること、例えば個々の書店や出版社の経営環境や競争力が改善されることは、一部は合致する場合もあるが、必ずしもイコールではない。問題があるとされる流通環境下においても、経済的またはその他の影響力の面で、例えば地域の文化発信拠点として成功している書店や出版社がある一方、そうでない書店も存在する。場合によっては転廃業を余儀なくされる書店もまた存在する。流通を改革することは出版の各プレイヤーが活用できるインフラを改善することにつながるが、前述の「そうでない書店」グループに属するプレイヤーが「成功している」グループに移動することは直接的な関係はない。それは流通の問題ではなく、個別の経営戦略や周辺環境の問題である。

もちろん、流通に問題がある点が改善されれば、書店は他の努力を行う余地が生まれ、全体的な底上げにつながることは事実である。その一方で、むしろ流通以外の問題も含めて書店が減少する中で、出版産業全体を支えるために出版流通の改革が目指されるというのが現在の状況である。この点については第5章で触れる取次の危機の問題と関わってくる。商業的成功や文化的影響力における差別化をもとめれば、流通改革がなされないことすらもチャンスにつながる場合すらあった。例えば1990年代においても、業界専門誌新文化の記事「レジから檄 有難い客注の現状」には「他の店は面倒がって客注を断るから、客注を積極的に受け入れると差別化を図れる」とある²⁸。

現在、実際に流通を担うプレイヤーは何ができるのか、その改革の射程はどこまでなのかを考えなければ、出版流通とその改革の意義を正しく示すことができない。この点を整理するためには、出版流通を担っている具体的な機能を概観しておく必要がある。戦後の出版流通全般を担ってきたのは、一般的には取次と呼ばれる（近年は出版販売会社を自称することも多い）企業である。その中でも大きなシェアを占める日販・トーハンの大手取次がその主軸を担ってきた。他に複数の専門的な取次や中小の取次は存在するが、シェアの多くが上記2社に占められている上、第6章で詳しく示すように、2000年以降は小規模取次の倒産が相次ぎ、ついには業界3位と4位の2社、大阪屋と栗田出版販売が合併する事態にも陥っている。

一方で、2017年の段階においては日本における出版社数は3,382社、書店数は13,576店となっている²⁹。その間をつなぐ取次は、大手とされる日販・トーハンの2社がシェアの多くを占め、それ以外を加えても取次の社数は全体でも2桁にとどまる。砂時計に例えられる出版流通の圧縮具合がよくわかる数字である。ただし取次経由での売上がピークだった1996年段階において出版社4,561社、書店数25,673店であったことと比較とすると、特に書店については大きく減少してきており、第5章に示すように産業が前提とする価値観その

ものが変化しつつあるという実態もある³⁰。

出版社で作られた出版物は、流通業者から小売業の手に渡り、読者の手元に届いていく。前掲の図 1-1 で村上が出版流通のルートをもとめているが、このルートの中で重要な軸となってきたのが「取次ルート」、その中でも取次から書店を経由する「書店ルート」である。書籍だけでも一日平均 200 種類程度発行される新刊商品は、多くが取次ルートを通して書店に送られるが、これには返品可能という条件が付いている。売れなくても本を出版社に返すことで仕入額と同様に返金されるため、仕入の損失を受けないのである。書店は商品をあくまでも一時的に預かっているこのシステムは、「委託販売制」（以下：委託制）と呼ばれている。また、大半の商品はすでに概説した再販制での取引となっており、出版社が決めた価格を取次も書店も変更することができない。つまり中間段階での価格自由決定権がないのである。その一方で日本中どこでも、新刊書店で購入すれば同じ出版物は同じ価格と言う状況が出来上がっている³¹。

この委託制と再販制の下で、日々発行される大量の新刊は、取次によって自動的に書店に割り付けられ、送られる。見計らい配本と呼ばれるこの流通形態に載ることで、書店はすべての商品を把握して注文しなくても、日々新しい商品を店頭並べ、デットストックを持つことなく商品を返品することができる。この様に、在庫リスクが低い反面、書店が受け取る売り上げのマージンは 20～25%程度と、他の小売業に比べて極めて低く抑えられている³²。

また、日々大量に発行される新刊を自動的に流通させることに特化したシステム、特に商品としてのスピードが速い雑誌に重点を置いた流通システムのため、大量の商品を一気に全国に届けるには極めて効率的だが、特定の一商品を手に入れるには極めて効率が悪いという難点を抱えてきた。この注文流通問題は、第 3 章に見るジャパンプックセンター構想、そして第 5 章でみる今日の改革と密接にかかわっている。

こういった流通を支える取次会社の機能を整理することは、「流通」のもつ可能性と限界を語るために必要である。ただし、会社によっては他業種の経営や賃貸物件の管理、保険業務など出版および出版流通以外の多角的な業務を行っている場合がある。これらの業務は個々の会社に対する分析に際しては重要な要素となりえるが、本論文の趣旨、および出版流通に関する議論からの脱線を招く恐れがあるので、議論から除外することを明記しておく。取次の業務内容については執筆者による 2012 年の論文で既にまとめているので³³、以下ではそこから整理した部分を抜粋し、さらに近年の変化を加えた形で説明していく。

取次の機能は以下の五つに分類することができる。(1) 仕入配本機能、(2) 物流機能、(3) 営業機能、(4) 開発機能、(5) 金融機能である。これらに加えて、出版事業や技術開発、人材派遣なども出版産業に関わる事業であると言えるが、流通に議論を絞るために本論では詳細な説明を割愛する。以下五つの機能それぞれに項目を分けて説明していく。取次の持つ機能を明確にすることで、出版流通を支える前提となっている機能そのものを明確にすることができる。翻ればこれらの機能を整理せずに中間的存在の取次を語ることは、具体的な事例との関わりを考える上での接着面を等閑視することにも繋がってしまう。

(1) 仕入配本機能

一口に仕入配本機能と言っているが、大きく仕入機能と配本機能に分けることができる。簡単に言えば、仕入とは出版社からどの出版物を何部（何冊と数える場合もある）仕入れるかを決定することで、配本とはどの取引先小売にどの本を何部送るかを決定することである。しかし、全体としての仕入部数が決まらなければ個々の店の配本部数は決まらず、一方で仕入部数を決定する際にはどの程度の部数を配本できるかを考慮する必要がある。結果としては一体不可分の機能であるということが出来る。

多くの書籍やムックなどの場合、新規出版が決まった後、出版社が取次の仕入窓口で企画を持ち込むことで仕入業務が始まる。出版社は仕入窓口担当者へ出版物の内容や価格を提示し、流通させる部数を提案する。一方の窓口担当者は、同じ作者が以前出した作品の売上実績、似た内容の企画商品の売れ行き、取引先書店の状況や季節指数などの各種データを参照しながら提示された部数を検討する。ここでの交渉の結果として、仕入部数が決定することになる。版を重ねて再度出版される商品、いわゆる「重版」についても、まとまった部数が刷られる場合は同様に交渉が行われる。

売れ行き良好の出版物が重版される場合、大ヒット映画の関連本や話題の暴露本が出版される場合など、あらかじめ売れることが予想される商材については、取次側から出版社に対して仕入れ交渉を持ちかける場合も多い。また、出版社によっては新刊商材を買い切り条件で流通させている場合もある。その様な出版社に対しては取次の仕入部門が、各書店の注文を取りまとめる機能として利用される。

日本の仕入機能の大きな特徴として、発売が決定した後にある意味「駆け込み」の形で取次に持ち込んでも、流通に乗せることが出来る点があった。例えばアメリカの出版はいわゆるシーズン毎に出版を決める形式で、一年以上先の出版物を決定し、発売の数ヶ月前には見本をもって営業活動を行う。そこで受けた注文をもとに出版物を書店へ配送していく。一方で日本では、下記の配本を取次が担っているため、発行後非常に短いスパンで流通に乗せることができる。この方法は長年出版流通を支えてきたが、第5章で見るように大きな変化に直面している

仕入部数が決定した出版物を、全国の書店にどの様に配分するかを決めるのが配本機能である。なお出版業界の用語で「配本」と言った場合は、本項で説明する取次がおこなっている機能を意味する場合と、「今日はその箱の中の本が配本されてきた」という様に使い、商品が小売店に到着することを意味する場合とがある。ここでは、混乱を避けるために取次の業務としては「配本機能」「配本業務」、広義の配本は単に「配本」と表記する。

配本業務では、個々の書店の立地条件、客層、販売実績、事前注文部数、さらに書店や出版社との交渉で設定されている商品ジャンル毎の優先度を勘案して、個々の書店に割り当てられる部数を決定する。これを各書店付きの営業担当者が確認し、最終的な配本数が決定する。仕入担当者が全体としての数字を扱うのに対し、配本業務の担当者は個々の書店のデータを把握することが求められる。

翻ると書店や読者は出版の直前まで出版物の内容を知ることができず、書店にとっては商品構成の判断が難しくなるという問題を含んでいる。そのため配本業務によって割り振られ

た結果が、ほぼ新刊出版物が店に並ぶ部数とイコールになるため、小売店と取次との間の対立を生みやすい。この問題の主導権争いにも変化が求められており、詳しくは第6章で述べることにする。

また「話題の新刊がほとんど配本されてこない」「不必要な本の配本が多い」「ベストセラー商品の重版配本が、近隣店舗に比べて少ない」などの小売店からの不満に繋がる部分にもなっている。実際に書店によるクレームに対応するのは営業担当者であるため、同じ会社内であっても仕入配本部門と営業部門間での駆け引きが生じる事にもなる。このような仕入配本業務の結果をうけ、次段階の物流業務で実際に出版物を動かすことになる。

(2) 物流機能

仕入配本機能で扱っていたのが内容情報や部数と言った出版物のデータとしての側面だったのに対して、物として側面から出版物を扱うのが物流機能である。大まかにいえば、出版物の入出荷および在庫を管理し、出版社や書店に輸送する機能であるが、内部では大きく「新刊物流」「注物流」「返品物流」に分けて業務が行われている。

新刊物流は、前述の仕入配本の結果をうけて行われる業務である。仕入が決定した商品は、書店毎に宛名や部数が記載された送品表などの帳票類が作られると共に、物流部門に情報が伝えられる。物流部門では、商品が搬入される日程や発売日などを把握して、商品を店舗ごとに箱詰めするために毎日の出荷計画を立てていく。実際に商品が搬入されると、計画に従って仕分・箱詰めが行われ、各地方の輸送業者別に荷造りが行われる。その後、最終的な個数の確認を経て輸送業者に引き渡され、全国の小売店へ配送がおこなわれる。

注物流は、小売店などから個別に指定されてきた商品を在庫から出庫、在庫がない場合は出版社から調達して発送する業務である。注文を受けて、その商品を発見し出荷するという業務ではあるが、実際には単に入出庫をする以外の機能が必要となる。例えば、どの出版物が倉庫のどこに何部あるのかを管理する在庫管理や、注文を正確に出庫するための作業効率化が求められるし、市場動向を見てどの在庫をどれだけ持つかという判断も重要となってくる。自社の倉庫内にある場合と、ない商品を出版社から調達する場合とでは、時間の面でも正確さの面でも大きな差が生じるからである。

取次に在庫がない場合、まず出版社の在庫状況を問い合わせる必要がある。もし「在庫なし」という場合は注文者に返答する必要があるが、小規模な出版社の場合などは自社在庫の管理がシステム化されていないことも多く、返答までに時間がかかってしまう。また、在庫があったとしても出版社からの出荷を待ってから、他の注文品とあわせて箱詰めする必要があるためやはり注文者を待たせることになる。しかし、物理的な問題として現在流通している全ての商品を取次が自社倉庫に在庫しておく事は不可能である。そこで注文が来る可能性が高い商品を販売データや広告関連の情報から割り出し、注文が来た商品の多くが在庫されている状況を作る様にしていくことが、物流機能にとって重要となってくる。

返品物流も物としての出版物を扱う業務であるが、今まで示した二つの物流とは商品の流れが逆向きとなってくる。委託制の下では、日常的に小売から出版社への返品が行われるため、これは出荷業務とは別に機能を持つ必要が出てくるのである。物の扱いという側面のみ

を考えれば、前述の送品業務と変わらず、商品をまとめる先が書店毎の箱詰めから、出版社毎の荷造りに代わるだけということもできる。大きく違うのは、前述の二つでは配本または注文データを受けて物流業務を行ってきたのに対し、返品においてはデータも物流部門を起点に発生する点にある。各小売からどの商品が何部返品されてきたかは、物流現場で荷ほどきをして検品を行うことで初めて分かるからである。買切商品や委託期限切れ商品をいわゆる事故品として書店に送り返す。出版社に返送する商品と、自社在庫に組み込む商品を仕分ける。また返品せず古紙化する商品を分別するなどの業務も、返品物流上で行われる。

物流機能は、他の卸売業や物流業と共通する点の多い機能であると言えるが、商品の種類が非常に多い状況に対応するため、常に改善を要求される点においてやはり特殊である。特に注文物流においては新刊物流以上の多品種少量対応になる。そのために、箱詰め時の人為的なミスが発生しやすいという問題があった。そこで、ミスを減らすために個々の出版物の重量をデータ化し、一箱毎の重量からミスを発見する重量検品システムなどが開発されてきた。出版物に小型のICタグを埋め込み、RFID技術によって管理する実験も行われていたが、その分のコストをだれが負担するのかという点がはっきりせず、大きな進展は見られなかった。

取次が担う物流機能における運輸部門のあり方にも他業種との違いがある。送品返品いずれの場合であっても、商品は各地方の輸送業者によって運ばれるが、首都圏および一部近畿地方を除き取次各社は同じ輸送会社と契約して一括して配送を行う「共同配送」を行っている。このために、出版物の輸送費が各社共通に抑えられ、また書店への到着も各社で差が生じにくくなっている。

(3) 営業機能

取次はこれまで紹介した出版物の移動に直接関わる機能のみでなく、販売促進やコンサルティングなど、ビジネス用語でいうリテールサポートを担う機能も持っている。それらの機能を合わせて営業機能として説明する。簡単にいえば、取引先の小売に対しての直接の窓口となり、サービスを提供する機能である。

提供するサービスは、小売業の業態や規模によって多岐にわたる。書店という業態を考えると、規模や組織形態、販売方法が様々に変わってくる。アルバイトと店主できりもりする街の小さな書店を担当する場合と、専門的な知識を持った従業員を複数雇用し数フロアーに渡って売り場を展開する大型店を担当する場合には、要求されるサービスは違ったものになる。また、複数の店舗を管轄する本部機能を持つチェーンと、個人で一店舗だけ経営している書店とでも、提供できるサービスにはおのずから差が生じてくる。傾向としては、小売側が持つ専門的な業務遂行能力が高まるほど、主導権も小売側に移ってくるという事ができよう。専門的な能力を持った従業員に対して十分な報酬を提供できる小売は大規模であることが多い。そういった大規模書店では出版社からも直接営業担当者が訪れて情報が入手できる、チェーン店内のネットワークでナレッジが蓄積されるなど、取次に対して優位に交渉を進められる可能性が高くなる。

さらに言えば、取次が扱う出版物はいわゆる書店のみではなく、コンビニエンスストアや

図書館、駅売店やスーパーの雑誌スタンドなどにも置かれている。これらに対しても、提供できるサービスは全く違ったものになる。この様な個々の業態に対して提供されているサービスを詳細に比較することも重要ではあるが、機能の説明からすると大幅な脱線になりかねない。ここでは、より一般的化して、営業機能がどのようなものであるかを説明していく。

小売に対する窓口であるため、営業担当の多くは小売店からの注文を受けつけ、クレームの対応を行っている。つまり小売との間での情報共有と物流円滑化を担っているということができる。情報共有という意味では、新たに発売される企画商品や重点商品をアピールし、また売れ行き良好な出版物の情報を提供して売り場に反映させるといった業務も含まれてくる。

これらの情報提供は、小売業に対して無償で行われることが多いが、これは単なる二次的なサービスというわけではない。前述の通り小売で販売できなかった出版物は、取次を経て出版社に返品される。当然ながら返品が少ないほど取次の利益は拡大するので、小売の売上を伸ばすことは取次の利益に直結するのである。このため、単なる情報や物の仲介を越えて、店頭での販促イベントや客寄せイベント、デモ販売などを、場合によっては取次から人材を提供して実施している。さらには、出版物のジャンルや形態別に書店の売上状況、返品状況などを確認し、より効率的に利益が出る様にコンサルティングを行うことも営業機能の重要な要素である。

(4) 開発機能

取次各社は、小売業の出店や廃業を手引きする開発機能も担っている。出店をする主体は小売業であることを考えると、この役割を取次が行うことは奇妙に映るかもしれないが、次の様に考えれば極めて合理的と言える。

取次は全国の小売店と取引を行っており、自社の取引先がどの地域にどのように分布しているかを把握している。また、シェア争いに勝利するために、他社の取引先に対して新規取引を持ちかける、業界用語でいう所の「帳合切替」を狙った仕事を日常的に行っている。そのため、全国にどの様に小売店が展開しているかという情報が取次内に蓄積されていくことになる。

新規の出店を考え販売戦略を組み立てる際には、周辺の競合店の情報が重要であることはいままでもない。昔からある大型店舗の近くに特徴のない小型店舗を出店した場合、普通に考えれば利益を上げる可能性は極めて低い。至近距離でなくても、商圈内の客数が少ない場所で、二軒の書店が併存することは難しいだろう。こういった情報は、出店側が一からリサーチを行っても限界がある。むしろ日常的にこういった情報を蓄積している取次に任せておいた方が効率的という判断になっている。

実際の動きとしては、各地方の不動産業者と情報を交換し、出店余地のある物件情報をストックしておく一方で、新規出店を考えている経営者を探して物件の紹介を行う、場合によっては資金的な余裕のある小売店に営業担当者とともに出店を提案する斡旋業務を行っている。さらに、出店が決定した場合には周辺の人口や競合店の規模、交通アクセス等を分析して市場調査を行い、どの様なコンセプトの店舗にするか、当初在庫にはどの様な出版物を

そろえるかなどの提案、コンサルティング業務を行っていく。また、書店が廃業して空き店舗となった場合には、次の出店者を探し、その地域に書店の空白状況が生じない様に管理を行うのも、開発機能が担っている部分である。

従来の出版流通研究では、開発機能についてはほとんど触れられていない。商品の流通に重点を置けば、それほど重要視されない点であったということもあるし、また最終的に出店を決めるのは各小売店の判断だということも理由として考えられる。しかし、出版物が社会に配置される地点を増やす（場合によっては減らす）ことと直結することを考えると、この開発機能は取次と出版流通の今後を考える上で非常に重要な要素となる。この点については第5章において考察を加える。

(5) 金融機能

多くの出版社と書店を少数の取次が結ぶ砂時計型とも言える日本の商業出版流通において、資金の流れを管理することも取次の重要な業務となっている。これが取次内では「取引業務」と通称される、出版産業内の資金融通機能である。

出版物が送品され返品される経路と同じ流れに、資金も乗っていると考える事が出来る。取次は出荷した商品と返品された商品の差額を計算して書店から売上を徴収し、一方で商品が入荷した金額と返品された金額の差額を計算して出版社へ売り上げを支払う。

現在の出版物の支払いは、委託商品であっても店頭で売上が発生した時にそのマージンを支払う方式ではなく、期間内に発生した送品金額と、期間内に発生した返品金額の差額によって計算される。資金繰りが苦しくなると書店が在庫を一気に返品する、「金融返品」、決算期に出版社や取次が大量に送品を行う「送り込み」などが行われることがあった。当然ながら、これらの行為は一時的な資金の動きを生み出すだけで長期的には売り上げや返品率の悪化に繋がるのがほとんどであり、今日は是正されつつある。なお、通常は各月に集計されるが、商品によっては「延勘」とよばれる支払い先送りの条件が付けられているものもある。

経営が安定しているとは言い難いプレーヤーが存在する状況で、支払いの仲介のみでなく、資金の調整を行う事も取次の重要な機能となっている。分かりやすいものとしては、出店に先立って初期在庫の支払い条件等を調整し、一時的に負担を肩代わりするものがある。出店時には店の棚をゼロから全て埋めるだけの出版物が必要となり、一括で支払うとなると当初在庫に対する支払い額が非常に大きなものとなる。そこで先ほど示した延勘等の取引条件を利用して、支払いを先送り、または分割しておくという方法である。

さらに売り上げ不振が続き、入金状況が悪い書店に対しては、より思い切った対策が取られることもある。営業提案による売り上げの底上げを図ることから始まり、通常の金融機関が融資の際に行う様な担保の確保、送品する商品の絞り込み、最終的には人材を送り込んでの経営再建や他社との商品差し押さえ競争と言った、踏み込んだ対応も行われる。

特に出版社にとって、この金融機能は極めて重要なものである。自社商品が送られる先の、つまり個々の書店一つ一つの経営状況を考えなくとも、取次を介することである程度は資金の融通が可能になるのである。取次は書店が支払いを行えない状況に陥った場合に備えて「貸倒引当金」といった資金をプールもしている。一方で、この機能は多数の書店と多数の

出版社をつなぐことを前提として成り立っている。第5章で見ると、この状況が変化している中で、取次の担ってきた金融機能も限界を迎えつつあり、実際に複数の取次が経営破綻に追い込まれている。

最近の動きでは、取次は小売である書店を子会社化し、五つの機能に加えて配本や営業機能のさらに先、直接に消費者に関わる部分も担い始めている。現状は、経営層として書店に役員を送り込む場合などが目立つが、店長や店員として自社の社員を派遣する例、また日版と書店チェーン TSUTAYA (蔦谷) グループの共同会社 MPD のように、その書店対応専門の別会社を共同出資で組織するような、より踏み込んだ結びつきも生まれている³⁴。

いずれにせよ、これら取次機能がカバーする範囲、つまり流通の担い手が改善しうる範囲と、出版業界として流通改革に期待してきた範囲を比較すると、そこには大きな齟齬がある。第3章以降で実際に解決が求められた流通問題に関して、個別の事例を読み解くことで、出版流通を語ることで何を示すことができるのか、その手掛かりを示すこととなる。

¹ 宮武外骨『一円本流行の害毒と其裏面談』有限社 (1928)、小田光雄『ブックオフと出版業界』ぱる出版 (2000)、山田順『出版・新聞絶望未来』東洋経済新報社 (2012)

² 宮武『一円本流行の害毒と其裏面談』

³ 清水又吉『本は流れる 出版流通機構の成立史』日本エディタースクール (1991) pp.90-92

⁴ 「私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律」第二十三条

⁵ 当時の動きに関しては、小田光雄によるまとめおよび、小田と高須次郎の対談を参照。小田光雄『出版業界の危機と社会構造』論創社 (2007) pp.9-21、高須次郎『再販／グーグル問題と流対協』論創社 (2011) pp.44-84

⁶ 箕輪成男「イギリス出版再販制史」『新装版 本は違う イギリス再販制裁判の記録』新泉社 (1992) pp.191-234

⁷ 木下修『書籍再販と流通寡占』アルメディア (1997)

⁸ 寺林修『増補 出版流通改善試論』出版研究センター (1984) P.83

⁹ 永嶺重敏『読書国民の誕生』日本エディタースクール出版部 (2004) P.45

¹⁰ 箕輪『出版学序説』 pp.142-146

¹¹ 清水『出版学と出版の自由』 pp.21-29

¹² 箕輪成男『消費としての出版』弓立社 (1983) pp.87-138

¹³ トーハン発行の『よくわかる出版流通のしくみ '07~08年版』メディアパル (2007) では、「販売会社の仕事」を「仕入配本」「出版物を運ぶ」「代金を回収・支払いする」「情報を提供する」の四つとしてまとめている。

¹⁴ 箕輪成男『情報としての出版』弓立社 (1982) pp.248-252

¹⁵ 佐藤「テキスト空間論の構想」 pp. 158-165

¹⁶ 出版流通を時代別に整理し、以降の構造研究の基礎となったフロー図が高橋正美によってまとめられている。高橋正美「出版流通機構の変遷—一六〇三—一九四五」『出版研究 13号』日本出版学会 (1982) pp.188-228

また、高橋には終戦直後の動きをまとめた続編を執筆している、高橋正美「出版流通機構の変遷—一九四五—一九四九」『出版研究 15号』日本出版学会 (1984) pp.59-113

¹⁷ 村上信明『出版流通図鑑—50万アイテムの販売システム』新文化通信社 (1988)

¹⁸ yamakai「業界地図」『電子書籍情報まとめノート』<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yama88/pla.html> (2018年12月31日閲覧)

¹⁹ 蔡が戦前の出版流通史をまとめた際、高橋がまとめた図がそのまま利用されている。蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』 pp.50-86

²⁰ 秦洋二『日本の出版物流通システム』 P.44

²¹ 蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』 P.3

- 22 村上や場合も、およびそれを利用した蔡においても、小売業に接続するのは読者のみである。括弧つきで個人や企業などと記入することで、その多様性を担保する姿勢は見せているが、寺子屋や学校、職域集団を個人読者とは分けて明示している高橋の様な意識を見る事が出来ない。村上『出版流通図鑑』、蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』、高橋「出版流通機構の変遷一一六〇三～一九四五」。
- 23 この点については、高橋も基本的に雑誌と書籍を中心に扱っている。高橋「出版流通機構の変遷一一六〇三～一九四五」
- 24 柴野『書棚と平台』P.76においても同様の指摘
- 25 石橋毅史『まっ直ぐに本を売る』苦楽堂（2016）
- 26 糸田省吾「出版業界に求められる「再販制度」からの脱却ー日本の出版業の健全な発展と消費者利益の向上のために」『出版研究 37号』日本出版学会（2006）P.91
- 27 公正取引委員会「医療用医薬品の流通実態に関する調査報告」（2006）
- 28 「レジから檄 ありがたい客注の現状」『新文化』新文化社（1997）
- 29 出版社数は出版年鑑編集部編『出版年鑑 2018』出版ニュース社（2018）P.288、書店数は『出版指標年報 2019年版』P.302
- 30 出版社数は出版年鑑編集部編『出版年鑑 1996』出版ニュース社（1996）P.370、諸店数は『出版指標年報 1998年版』全国出版協会・出版科学研究所（1998）P.344
- 31 これらの制度の歴史的な問題に関しては後の第3章・4章で述べる。
- 32 マージンの外側にもいわゆる「部戻し」「バックマージン」と呼ばれる資金の流れがあり、取次・書店の収入に関わっている点も注目されるようになってきた。
- 33 鈴木「出版流通の再評価」pp.30-34
- 34 共同出資の株式会社MPD（MulPackage Distribution Co.,Ltd.）は、現在日販51%、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（TSUTAYAの経営母体）49%の出資率。

第2章

「出版」「文化」の整理と出版流通の射程

第2章 「出版」「文化」の整理と出版流通の射程

本章では、第1章に引き続いて分析対象の概念的な整理を行う。前章では「出版流通」を対象としたが、本章で対象とするのは、序文で示したもう一つの軸「出版文化」である。前章では「出版」と「流通」の問題を、地と図として整理する必要性を確認し、さらに実際に出版流通の多くを支える取次の機能を腑分けした。流通及びその具体的な機能を整理した上でさらに、出版文化が多様に使われている状況を確認し、本論における出版文化を定義しておく必要がある。

出版文化の持つ多様性を確認するためには、まず出版産業のそのものの歴史的な変化と多様性を振り返る必要がある。その前提に立つことで、出版文化という語もまた変化に富み多様であらざるを得ないことを理解し得る。本章ではまず、現代型の出版流通が成立するまでの歴史を概観し、次いで出版文化を巡る議論の難しさを示す。それらを一度突き放して定量的に扱い、本論における出版文化の扱い方を示していく。

出版流通史については、すでに厚みを持った研究がなされている¹。本章では先行研究を引用しつつ、一部を資料から補う形で歴史を整理していくが²、その上でその重点を「物流」ではなく、出版文化の問題として「生産者」、「読者」および「出版物に関わる人々の営みのありかた」そして「社会への出版物の配置」に移していく。また、歴史的変遷の各段階には3章以降で取り上げる具体的な事例・改革の動きが関係している。

その上で、実際にはどのように「出版文化」という言葉が使われてきたのか、日本の論文、図書、雑誌や博士論文などの学術情報を横断検索できるデータベース・サービスであるCiNiiから取得したデータと、テキストデータを統計的に分析するためのツールであるKH-Coderを利用して数量的に把握する。

1. 日本における近代出版流通産業の成立

まずは本項及び次項示す歴史的な流れを概観しておく。近世以前には出版と流通と販売がほぼ一体化している一方で、大都市単位での出版コミュニティーが成立していた。江戸や大阪といった都市間での交流がなかった訳ではなく、「替え本」などの制度を利用して出版物の交換が行われ、また勝手に同じ書籍を作らないように異議申し立てシステムが存在していた。明治時代に入ると、「読書国民」を作り上げる、日本全国をカバーする出版流通が誕生する。当初は近世から連続する流通体制であったが、新聞の流通網とともに全国に雑誌の流通網が広がり、大売捌を経て元取次と中小の地方取次による流通網が完成する。明治から昭和初期にかけては、産業としての出版流通の成立期であった。

第二次大戦下において、昭和初期までに成立していた出版流通は国策会社である「日本出版配給」（日配）に統一される。日配は物資の払底の中で、流通の効率化と国による出版統制を担った組織ではあるが、今日まで続く出版流通の基礎となる流通施策にも取り組んでいく。戦後、GHQによって5社に分割されることで、日販・トーハン・大阪屋など、現在の取次が成立し、日配から受け継いだ流通網を整備しながら、流通改革を行っていく。

戦後日本の出版流通は、売上を劇的にのばしながら、雑誌を中心とした大量物流体制を作

り上げていく。その中で、今日まで続く「再販制」「委託制」が整備され、「世界最高水準の出版流通」を自負するまでになる。一方で書籍の一品注文など、少量多品種の流通は取り残され、改革が求められるようになる。2000年前後を境にIT化による流通改革が進んだこと、ネット書店と宅急便による配送が一般化したこと、そして電子書籍市場の萌芽が生まれたことによって、それ以前に求められていた流通改革は一気に後退する。

では、この歴史的な流れを流通の変化を軸により詳細に見ていくこととする。日本の出版流通史の起点をどこに置くかは難しい問題だが、本論の目的は出版史・出版流通史そのものをまとめることではないため、近代出版の前史として江戸時代を起点として設定する。古典籍という面から考えれば古代日本から書物は存在しているし³、木版を始めとする印刷・複製技術も存在した。しかし流通を伴う商品として扱われる様になったのは、木版印刷による量産が拡大し、また社会も安定して消費が活発化した江戸期からと考えられおり⁴、本論もこの前例に従う。

江戸期の出版は近代的な出版産業の前史と位置付けられており、今日の出版流通体制とは大きく異なっている。全国一律の流通網や、雑誌・書籍と言った区分、出版・流通・小売の機能分化などについては江戸時代に何らかの萌芽を見ることができのかもしれないが、あくまでもメタファー的なものでしかない。しかし、今日の出版流通と生産者・読者・業界の文化を考える上で抑えておくべき要素が二つ存在する。

一つ目は今日の「ベストセラー」に当たる全国区規模の出版物が登場してきた点である。今日の取次ように、日本全国に一律に出版物を配送するという形態での流通網は未だ存在していない。しかし出版と販売の両方を担った本屋仲間、書物屋仲間などいわゆる「株仲間」のネットワークは、特定地域を超えて存在しており、ある程度の広域流通が行われていた。言うまでもなくその中心は大都市圏であり、寺社の典籍や娯楽書物なども含めて早い時期から出版が商売として発展した京都、井原西鶴『好色一代男』が発行され「仮名草子」の時代から「浮世草子」の時代への転換の起爆剤となった大阪などで出版された本が、江戸などの大都市においても流通していた⁵。

二点目としては、産業として、特に地場産業として出版が発展していたということである。江戸の名産物として人気を博した江戸地本や、それほど大きな規模にならないものの各藩で作られた藩版や地元知識人の著作も出版されていた⁶。出版されている本のジャンルも、古典から入門書、娯楽、料理本や作法などの実用書、アートブックに当たるような絵手本、寺子屋の教科書に当たるような往来物など多岐にわたる⁷。また、こうした動きの中で須原屋茂兵衛や蔦屋重三郎など、今日の出版社を彷彿とさせるプロデュース能力を持った人材も登場している⁸。これらの動きから、今日の出版産業そのものに直接つながる動きを読み取るまでには至らないが、少なくとも明治以降の全国展開の下地を作ったということが出来よう。

このように近世において下地が作られてきた出版流通が大きく転換するのが、明治時代である。明治新政府は江戸時代の産業構造を脱却し商業の自由化・近代化を後押しするなかで、明治6年に前項で見た各種の仲間組織の解散を命じる。出版および流通の両面を担っていた仲間組織が解体される一方、それまでは一体となっていた出版と小売が徐々に分化していく

ことになる。流通という面では、新しいメディアとして登場し、全国に読者を開拓した雑誌・新聞を中心に扱い、大量流通の機能を担う取次が登場してくることになる⁹。

また、明治20年代からはじまった鉄道網整備が40年代に入って一段落し、主要幹線がほぼ日本全土を網羅する状況となった。さらに鉄道において雑誌を対象とした特別運賃が定められたこと、新聞販売が徐々に直営店による専売にシフトして他の出版流通から独立していくなかで、雑誌が取次の主な商材になっていく。こうした鉄道と雑誌販売店の系列化が、「大取次」「元取次」と呼ばれる大手取次による東京に一極集中した出版流通の寡占化を生み出した。一方で書籍については、中規模の取次店による複数の流通システムが併存する状況がこの後もしばらく続いていく。

当初は書籍のための客寄せとしても扱われていた雑誌が出版産業を支える商材に変わっていくまでには、薄利多売による価格競争を抑え定価販売を徹底するという取次主導での制度の醸成が行われた。この運動は今日の再販制度見直しの問題にも、記憶として引き継がれている。この点については第4章後半で詳しく触れていくことになる。

いずれにせよ、地域内での生産を軸にいわば地産地消的に行われ、全国展開する場合は仲間を介した地域間交換が中心だった出版物の流通は、スピードの面でも量の面でも整備されていく中で今日の出版流通で想像するシステムに近いものとなっていく。同じ商品が全国で流通、全国で同じ出版物を読む事が可能になったことは、読者側に新しい感覚、いわば新しい読書体験と文化を醸成することとなる。この中で、出版の中心である東京からの物理的な距離によって発生する到着時間の差も意識される様になった。永嶺重敏はこの状況を、近代の「全国読書圏」の形成と名付けたが¹⁰、まさにこの読書圏の成立が、さらなる読者と産業の出版文化の相克を生むこととなる。

全国読書圏内に組み込まれた読者はその意識においては、中央のメディアと直結し、一体化していた。そこにおいては何らの距離感も存在しない。しかし、現実には全国読書圏の内部においては、中央との距離や鉄道の整備・未整備によってメディア流通の様々な格差が存在していた。

それはベネディクト・アンダーソンの言葉を使えば、全国の読書国民が参加するマス・セレモニーとしての「聖餐式」に、毎回必ず遅れて参加せざるを得ない地方読者の焦燥感と表現できるかもしれない。すなわち、全国読書圏は速度の追求への代償として、その構成員である地方読者と中央との無限の〈距離感〉を再生産し続けることになる。¹¹

永嶺はこの段階において地域商品だった出版物が「全国の読書国民が参加」できる全国区の商品となったこと、そのことで中央の発売日と、地方との差異が明示される様になったと述べている。注目すべきは彼が引用しているように読者の「遅れ」を認識させることになった素材が「雑誌」という定期刊行メディアだったことである。こうした大取次のよる雑誌大量流通と、それとはやや切り離された形ながら円本や文庫の流行によってやはり大量物流が整理されていく書籍流通という状況は、中心となるプレーヤーを変え、関東大震災を起点とした「取次危機」（第5章で詳しく述べる）を経ながらも、大枠としては昭和へと引き継がれ

ていく¹²。

こういった変化の最終段階として、今日展開されている書籍・雑誌一体流通、大量物流主導型流通が成立する契機の一つとなったのが、第二次世界大戦とそれに合わせて行われた国家による出版産業への介入である。戦時色の強くなる中で1941年、日本中の出版流通が一本化されて国策会社「日本出版配給株式会社」（日配）が発足する。終戦後、1949年にGHQによる過度集中経済力排除法の適応を受けて分割されるが、分割後の会社が現在も続く大手出版販売会社そのものである¹³。システム面・人材面の連続性は今日も続く出版流通体制に影響を与えている。

日配はある日突然に成立した訳ではない。成立の前史は経済統制と出版・政治の関係、取次と出版社の力関係、商品の変化と絶対量の絞込みなどの流れの上で整理することができる。しかし、やはり注目すべきは、強力な指導のもとに、それまでは個別の企業が競争していた出版流通が一元化されたこと、全国に発送を行うインフラを持っていた大取次各社、雑誌を軸に大量の出版物を全国に届けていた取次の流通網が、横断的に全出版物に適用されるようになり、以降の出版流通のベースになっていくという点である。日配は戦後の取次と連続性を持っていることから、今日問題として語られてきた雑誌中心の流通網、大量物流を前提にしたシステムと言った問題の起源の一つを日配の成立にもとめることもできる。結果としてこれ以降の出版流通において、雑誌の流通に関する問題が、書籍の流通に影響を与える結果になる。しばしば日本独自のスタイルと呼ばれる雑誌・コミック・書籍などのジャンルを取り揃えた出版小売スタイルの定着もまた、ここで方向付けられた¹⁴。

また日配の成立によって雑誌ジャンル別の発売日設定、いわゆる外地を含めて全国一斉に基準が設定されている。このことは第4章前半で詳しく見ていく「発売日論争」にむけて、永嶺の示した「読書国民」内の〈距離感〉をよりはっきりと系統的に分断していくこととなる。もう一点、今日まで続いている出版業界の意識に埋め込まれているのが、日配が目指した「適正配本」の問題である。データに基づく配本制度向上、適正配本による返品率の低下は今日においても求められているが¹⁵、日配成立時の宣言にあたる創立趣意書にはっきりと「適正」の言葉が掲げられている。

全日本ノ出版業者及ビ出版物取次業者ヲ打チテ一丸トナシ日本出版配給株式会社ヲ創立シ一切ノ出版物ヲシテ整然タル統制ノ下ニ置キ持ツテソノ適正ナル一元的配給ヲナサントス¹⁶

戦況の悪化によって、人的物的両面での資源の効率利用、情報の効率伝達に対する要請が強められる中、適正配本のために日配が取った手法もまた徹底したデータ分析であった¹⁷。最終的にこの方針は失敗し、必要とされる場所を発掘するよりも、あらかじめ組織化した読書サークルを作る方向へ転換していくが、この適正配本思想は今日も取次がもつ機能の中に影響を残している。もちろん今日の効率化の目的は「読者のニーズ」に応えるためであるが、データを用いて予めその本を送るべき先・読者の居る地域の書店を割り出して流通させるといふ部分は根本的には異なる¹⁸。この問題は、読者が求めるテキストの配置と、それに

対応するための流通の努力と限界につながってくる。この点は5章と6章で取り上げる議論において重要な観点となる。

第二次世界大戦、日配は解体されて複数の取次が成立するが、これが今日まで続く各取次会社の基礎となっていく。分割の際に生まれた企業が「東京出版販売」（東販、現：トーハン）、「日本出版販売」（日販）、「日本教科書販売」、「中央社」であり、独立した地方支店が「株式会社大阪屋」（現：大阪屋栗田）の母体となっている¹⁹。組織やインフラなども各社がそれぞれ引き継いでいき、戦後も人材・システム両面で連続性が保たれることとなった。その後、再販売価格維持制度の成立と取引制度の整備を受けて、出版社、取次、小売というメインルートによる出版流通は完成を見ることとなった。トーハン・日販は2019年に創立70周年を迎えることとなったが、この解体からの70年間はいわば日配を一つの源とする大量物流による出版流通の完成、「世界最高のシステム」とを自負するまでの興隆、そして崩壊の歴史と捉えることができる。

2. 戦後の出版流通、大量流通・流通改革・新たな可能性

1949年に日配が解体され、今日まで続く「1949体制」とも呼ばれる取次による出版流通体制がスタートする²⁰。今日最大手の取次とされるのはトーハン（当時は東販）と日販であり、実態として2社の業態に大きな差はない。しかし一時期は「雑誌の東販・書籍の日販」と呼ばれていた。これはトーハンの創立発起人が大手出版社中心だったのに対して、日版が初期から出版社・取次・書店のバランスを取って「三位一体」と称する体制を取っていたことから分かる。日販は初期から書店に対しての報奨制度を充実させており、その性格を伺うことができる²¹。ただし最終的には雑誌の売上がインフラにおいて大きなウェイトを占めることには変わりなく、第5章に見るように今日の雑誌販売減少の影響はどちらも等しく受けている。

戦前の流通インフラに加えて、今日までの日本の出版流通が前提としてきたのが、すでに取次機能の確認において整理した再販制および委託制である。再確認すると、前者はメーカーである出版社が決定した小売価格を販売者が守るように契約する再販契約に基づいたものであり、この制度があるために国内であれば新刊書籍の価格は一物一価の法則が守られることになる。この契約は通常では独占禁止法によって禁じられている行為だが、出版物は「著作物」として独占禁止法に適応除外として認められており、再販制によって流通が行われている。

一方の委託制は戦前から継続して行われてきた取引方法である。書店は出版社から商品の委託を受けているだけ、また取次はその間を取り持っているだけなので、新刊書籍であれば105日間など、一定の委託期限内は自由に返品が可能であるという取引形態である。表で示している様に、出版物の業界内分類によって日数は異なるが、大半の商品はこのシステムに則って流通している²²。

戦後の取次による流通はこの二つの制度を前提として拡大を続けてきた。しかし再販制については公正取引委員会による見直しの動きによって大きな議論が生じた。最終的には、公正取引委員会は弾力運用の努力を前提において、当分の間は再販制度存続という結論を出し、

その後再販制が議論の対象となることも少なくなった。しかし、この議論からは戦後の短い期間でこの制度が出版流通の前提として業界に根付いていることもまた明らかになったといえる。

再販制に比べて文化をめぐる議論に直接的には結びつかなかったが、出版流通メインルートを支えるものとして重要な委託制については、経済的問題から議論されてきた。実はこの問題は、2010年代後半に入ると具体的な改革の対象として再び熱い視線を注がれている。この点については、5章において現在の産業状況と共に整理していく。

委託制とは、商品の流通条件の一つであるが、今日は多くの新刊商品に対して適応されているものである。委託条件で発送された商品に関しては、書店は出版社から商品の委託を受けている、また取次はその間を取り持っているということで、新刊書籍であれば105日間など一定の期限内は自由に返品が可能な取引形態をとっている。表2-1で示している様に、業界内における流通条件の分類によって日数は異なるが、大半の商品はこのシステムに則って返品可能な条件で流通している²³。

書籍の流通条件			
条件	請求方法	返品期限	概要
普通委託	即月	105日	新刊や重版に通常用いられる条件
長期委託	繰延	数か月	期間商品のフェア用セットなど、売り場での長期展開を考えたもの
常備寄託	繰延	1年	年間を通して店頭で陳列する条件の商品、多くの場合補充義務がある
注文品	即月	返品不可	書店の自主判断や客からの注文によって発注された商品
買切品	即月	返品不可	書店買い取りが条件で販売する商品、一部出版社や豪華本など
延勤品	繰延	-	請求期日を繰り延べる条件の商品、通常は買切品などにつけられる
※即月は次の請求時に計上されるもの、繰延は翌月以降の請求に回されるもの			

表2-1 『よくわかる出版販売のしくみ』に基づき、論文執筆者が作成

この制度で取引をすれば、一日平均200種類を超える大量の新刊書籍が発行されるなかで、書店としては仕入れに失敗するリスクが少なく新しい商品を店頭で並べることができ、取次・出版社としては一元管理の下での一括大量物流が可能になる。このシステムに則って、書店が細かい判断をすることなく取次が自動的に書籍を割り振って送品する行為がすでに見た「配本」（新刊配本）であり、大量の出版物を全国一律に配本することを「このようなわが国の取次は、世界にも例を見ない存在であり、効率のよさは世界最高である」と称した時代もあった²⁴。

しかし、近年は出版物の売上が減少、配本されて書店に届いた本の大半が返品されるという状況が続き、委託制の制度疲労が明らかになってきた。比較的速くこの変化に注目した小田²⁵を始め、今日は流通現場や会社経営の問題としても見直しが行われている状況である。

長らく議論になってきたものの、再販制と委託制によるシステムそのものの制度疲労は誰の目にも明らかになってきたともいえる。第5章で詳しく取り上げるが、そもそも取次、再販制、委託制という柱に支えられた出版流通は、一部で破綻をきたし始めている。従来の制

度を考えてきた研究のうち、新しい制度確立に向けた議論の参考となるものが、実は少ないという点は十分に注意すべき問題である。

第1章で「転換期」を巡る動きの一つとして示した通り、再販制をめぐる議論に際して業界関係者および出版研究者は見直し反対の姿勢を取った。ここで、業界で最適化したふるまいと社会的な要請との齟齬という問題が立ち現れ、次項で示す出版文化という言葉の問題も見えてくる。すでに示した木下や畠山のように、出版研究者や業界人の中にも、再販制など流通にかかわる制度の問題を広く文化に関わる問題と扱うことに対する違和感を示したものもいる。やや強い言い方をすれば、この議論では出版文化を盾にして、出版流通の既存のインフラを変えないよう、業界のふるまいとして定着している状態を守ろうとしていたと見ることもできる。

特に戦後の出版流通における再販制の問題と、時に混乱して語られるのが、明治大正期の雑誌乱売とそれに歯止めをかけるために業界団体が推し進めた定価販売の運動である。第4章の後半では、再販制の議論で出版業界として守るべきものとされた文化の一端が、実は明治大正の雑誌流通改革を通じて形成されてきたという歴史的な変化を見ていく。

出版流通は常に改革を求められては来たが、実際にインフラそのものを変える動きが具体化、大型化するのもまた1990年代に入ってからである。その中で重要な課題として繰り返し現れるのが、雑誌中心の流通への反省であり、取り残された書籍の少量多品種の流通への要求である。特に書籍の多品種少量流通、注文での一品流通については常に大きな問題となってきた。同時に委託制と再販制への過度の適応が、返品が増加につながっているという批判と、責任販売制等新しい流通体制への要望が断続的に行われるようになる。こういった中で、業界上げて書籍の流通改革を行おうとしながら、結局は理想のままに終わったジャパンブックセンター構想（須坂構想）について、その夢と現実、さらに読者の要求に応えるという読者側に立った建前と、業界のふるまいを変化から守る動きについては、第3章で詳しく見ていくことになる。

今日、IT化による流通改革が進んだこと、ネット書店と宅急便による配送が一般化したこと、そして電子書籍市場が生まれたことによって、2000年代前後まで声高に求められていた種類の流通改革の必要性は後退している。さらに、これまで出版流通が前提としていた多数の出版社から多数の書店へ、多数の出版物を送るための環境も失われつつある。出版流通改革が取次に要求される、いわば取次改革であった時代は終わりを告げようとしている。取次の行う改革は、取次自身の生き残りのための改革へと変化してきた。一方で出版業界全体が無意識に取次をインフラの前提として成立してきた出版流通が終わりを告げようとしている。ここで求められているのも流通の改革であるが、これまで求められてきたものとは質を異にしている。この変化が出版という行為の多様性を生む可能性をはらんでいるが、一方で出版物そのものの多様性を担保するかは明らかではない。この点についても第5章においてAmazonの日本における影響を軸に考えていく。

3. 自由で不自由な「出版文化」、その数量的確認と利用傾向

ここまで見てきてように、今日における日本の出版流通システムは歴史的に徐々に変化し

形成されてきた。そして序文で示したとおり、2010年代後半以降にはこれまでの取次の機能の拡大や統合といったものとは別の軸での変化がみられる。産業としての安定感の喪失も言われる時代に入った。出版流通と出版産業の変化をめぐって、変化を推進するものと従来のあり方を守ろうとするもの、または第三の道を探るものと様々な立場が取られている。そして、あらゆる立場からの議論において守るべきものとしての「出版文化」が語られてきた。それゆえに出版文化は一種のマジックワードとなってしまうている。歴史的な形成と近年の急激な変化の中での議論をすべて包括することは現実問題として不可能である。そこで本論では、やや抽象化した数量的な方法で「出版文化」に何が託されてきたのかを再確認する。

前提として一般的に「出版文化」がどのようなものかを規定することは難しいが、出版史をまとめたものとしてアクセスがしやすい年表形式辞典である『日本出版文化史辞典』を引くと、冒頭に次のように記してある。

本書は、1868年（明治元年）から2010年（平成22年）までの143年間における日本の出版文化に関する出来事を収録した年表形式の事典である。近代的な出版事業の開始から印刷技術の進歩、主要な文学作品の刊行、ベストセラー、芥川賞・直木賞をはじめとする文学賞の受賞状況、著作権問題、再販制度、電子書籍まで幅広いテーマを収録し、明治以降の日本の出版文化を概観できる資料を目指した²⁶。

具体的には出版社や書店など会社の改廃、名作の出版、受賞、社会的事件などが取り上げられており、編者が出版文化に係ると考えたこれらの事象がそれぞれ数行でまとめられている。出版に係る文化の一面を端的にまとめた利便性の高い年表である。しかし、このように年表的に示せる事象にとどまらない、様々な問題を包摂してしまうのが出版文化の難しさである。

出版文化という言葉の扱いの難しさは、端的に次の批評に現れている。元『新文化』の記者で、長年の出版業界ウォッチャーである長岡義幸が、『誰が本を殺すのか』で有名となった佐野眞一らが参加する出版労連のシンポジウムに参加した際の記事がある。タイトルはそのまま「出版文化なるものに対する違和感」となっている。長岡は、一方では鍋や釜とは違う精神に作用する特別な商品である出版物を語り、その一方で再販制改革の際などには経済的な制度をあたかも出版文化を保証する制度であるかのようにすり替えて主張する業界団体に対して痛烈に批判を行っている²⁷。

もちろん出版文化の射程は一義的に決められうるものではなく、定義を巡る議論も結論が出る性質のものではない。しかし長岡の指摘の通り、発言者の都合によって自由に、または恣意的に使われうる言葉であることは確かである。完全な定義は不可能だとしても、出版文化がいかに関語られてきたかを一度整理することで、ある程度の筋道を立てることは可能である。そのことでひとまず出版文化「で」何でも包含してしまう状況から、出版文化「を」整理しそれを軸に説明する足がかりとし、少なくとも本論文において出版文化をどのような概念として議論を進めるか、その射程を定めておくことは可能である。

長岡に批判されるような形での出版文化が最初に使われたのはいつかを明確にすることはできないが、その早い例の一つとして奥山益朗『出版文化』を上げることができる²⁸。出

版文化をタイトルに冠したこのエッセイにおいて、奥山は明らかに良書・悪書という判断基準を持って出版文化を語っている。その一方で、読み手が相応の努力をしなければ出版文化は受け取れないということも述べている²⁹。ちなみに前章冒頭であげた宮武外骨の論では、出版産業にもたらした経済的な問題や、「衆の名をかりて徒らに末梢神経をのみ刺激する非芸術品の横行」などと作品の質の低下が嘆かれてはいるが、直接的に出版文化やそれに相当する言葉は使われていない。

出版文化の難しさは、それが容易に「守る」という言葉と結びつき得ることにもある。ここで守られる出版文化が何であるのかは話者によって異なるのだが、現実起きている問題を直視せず、変化を拒もうとする際にも容易に利用され得ることは、前述の長岡の論のとおりである。典型的にこの傾向を示す例が、論壇誌として新潮ジャーナリズム路線を標榜した時期の『新潮45』の特集「出版文化こそ国の根幹である」に見られる³⁰。ここに掲載されている議論では、登場する学者（藤原正彦・磯田道史）、作家（林真理子）、出版産業関係者（高井昌史・石井昂）らの主張が同じ「出版文化を守る」言葉からスタートしている。しかし、読書をしないことへの警告（藤原）、出版物の情報が無料であると考えられることへの抵抗（林）、江戸時代の出版事情と出版物への敬意（磯田）、ネット販売大手のAmazonによる既存ルール破壊への危機感（高井）、図書館による貸出増加への危機感（石井）と、守られるべき対象がそれぞれ全く別の方向へ展開していく様、そしてそれらが「出版は大事」という言葉に収束して行く様は出版文化を語る難しさを十分に示す例と言える。

このように出版文化が一種のマジックワードである以上、出版文化を扱った議論を逐一確認することは、無限のバリエーションのリストアップ作業に陥ってしまいかねない。そこで、少なくとも一つの指標として扱うことができるのが、どのような言葉と共に出版文化が使われてきたか、出版文化は何と共起してきたのかという点である。この視点に立つと個別の議論の詳細までは立ち入ることができないが、数量的に出版文化の状況を概観に、整理するために有効な手段となる。

ここで共起解析のツールを活用して、その大まかな傾向を見ていくこととする。「論文、図書・雑誌や博士論文などの学術情報で検索できるデータベース・サービス」であるCiNiiから、「出版文化」というキーワードで論文を検索すると、学術論文から専門雑誌の記事に渡って1200のタイトルを取得することができる³¹。最古のものは「毎日出版文化賞うちわ話」で『毎日情報』に掲載された1950年12月の記事である。実際に1200件全ての記事内容を読み込んで確認することも可能であろうが、今回の目的には冗長にすぎるので、タイトルに登場する単語から一定の傾向を見いだすことにする。文学研究において定着しつつある「遠読」では、タイトルの変化から文学作品の傾向を見出す試みがある³²。今回の試みは、百年単位の時間変遷の中で文学作品の変化を見ていく「遠読」ほど精緻なものではない。しかし、出版文化に関わる論考のタイトルを使い、数量的な分析から質的な方向を見出してみることが可能である。

タイトルを一覧化したものは、本論文の末尾に参考資料としておく³³。タイトルの入手元であるCiNiiに掲載されている情報の偏りとして2000年以降の情報が多く、それ以前については各年数点ずつという事実がある。この偏りは歴史的な分析を考えると問題だが、今日

における出版文化の使われ方を見ると考えれば、むしろ好都合ということができる。ここでは専門的なテキスト解析ではなく、以降の議論に向けた方向性を見出すことを目的としているため、テキスト解析ソフトとして普及している「KH Coder」を利用し、タイトルに使われている単語の傾向を確認する³⁴。

まず、出現する単語の大まかな傾向を確認して議論を進めるため、二つの手法で分析を行った。一つは単純な単語の出現頻度の傾向、もう一つは単語の共起の傾向に基づく分析である。改めて断るまでもないが、ここで行ったのはあくまでも機械的な分類で、「唯一の正解」を出すものではない。

各タイトルを単語ごとに分割し、個々の単語の出現回数を確認してみる。上位の単語は「絵本」277回、ついで「図書館」125回、「作家」116回、「本」112回、「研究」101回、「読む（活用含め）」83回、「読書」75回、「日本」75回、「子ども」69回、「プログラム」64回（表2-2）、「JPIC（出版文化産業振興財団の略称）」61回などである。

抽出語	出現回数
絵本	277
図書館	125
作家	116
本	112
研究	101
読む	83
読書	75
日本	70
子ども	69
プログラム	64
JPIC	61
アドバイザー	59
文学	59
世界	55
近世	51

表 2-2 「出版文化」で検索した記事タイトルに登場する単語の頻度

なお「出版文化」「出版」「文化」は必ず登場する語なのでストップワードとして対象から外している。同様にストップワードとした単語は「ブック・ストリート」「ブック」「ストリート」（業界誌『出版ニュース』に長期掲載されたコーナー名のため）、「特集」「回」（記事に内容とかわかわらず登場する語のため）、「TI」（CiNii で付与されるタイトルを意味する接頭辞のため）がある。

単語の出現頻度のみから見ると「絵本」「読書」「子ども」「プログラム」「JPIC」など、いわゆる読み聞かせを推進するような記事が多いような印象を受ける。これはCiNiiに収録されている雑誌の傾向もあるだろうが、こういった記事は発見性を高めるために一貫したタイトルを付けているということからも来ている。こういった最上位を別とすると、本と読者の接点である「図書館」「書店」といった単語が登場することも分かる。

より踏み込んで、単語の共起（単語が同じ文章内に登場する傾向）を計算するネットワー

ク図を見ていると、タイトルの傾向をより読み解くことができる。下の図はKH Coder が共起分析をもとに自動で作成するネットワーク図で、線で結びついた語は一緒に出現する頻度が高く、同じ色の円で囲まれた単語はより結び付きが強いことを示している（図 2-3）。先程の頻度以上に、どのようなタイトルが付けられているかの傾向がつかみやすい。

頻度の分析で述べた通り、右下にピンク色のグループを作っている「JPIC」や「読書」は読書推進プログラムについての記事であることが一見して明らかである。「昔ばなし」「セミナー」に関しても同様に、読み聞かせや読書推進の活動に当たるだろう。その他に大きなグループを作っているのは、「作家」と緩やかに結びつくグループで、これは作家へのインタビューを中心としたものである（「あの作家に会いたい」「こんにちは！絵本作家さん」など）。左側に配置されている「レポート」を中心としたグループも作家へのインタビューが主だが、「レポート」を軸にゆるやかに「海外」のグループと結びついている点は面白い。後者は海外の出版産業事情を紹介するレポートが多いグループである。

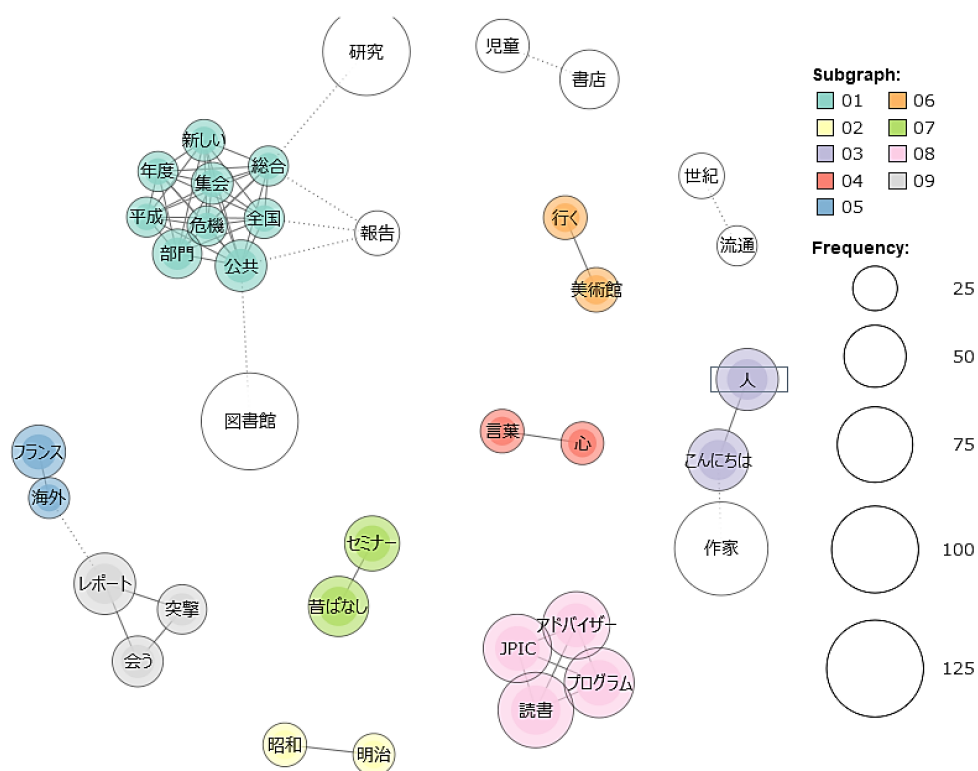


図 2-3 : KH Coder による 1200 タイトルのネットワーク図

作家や読者のグループとは違う場所で稠密な単語のネットワークを作り出しているのが、「新しい」「危機」「集会」「部門」などである。これは出版文化の「危機」や学会の研究「部門」など、産業そのものの分析や研究に関わるタイトルのネットワークからできている。「図

書館」と緩やかに結びついているのも、産業構造に関わるタイトルが多いためである。なお「流通」という単語は「世紀」と緩やかなグループを作っているが、これは「一八世紀の出版流通」などといった、研究論文に登場しやすいタイトルがまとまったものである。

以上はあくまでも傾向の把握であるが、「出版文化」を巡って語られてきた複数の軸を見出すことができる。一つは読者や読書推進を巡るグループである。図 2-3 におけるピンク色および薄緑色のグループが該当し、単語の出現数の上位とも一致する。また作家に関わるグループも見いだせる。作家という単語そのものと結びつく薄紫のグループとレポートに関係する灰色のグループである。このグループは作者の人となりを示すような「人」や「会う」「突撃」といった語とともに現れている。これらとやや異なった位置にあるのが、産業そのものの状況を確認しようという意識が現れているグループである。「研究」や「報告」の円と結びつく青緑のグループがこれに該当する。そのなかでは産業の危機や公共性、新しいあり方などが語られている。

このような結果を踏まえて、本論では出版文化を大きく三つの重なりに分けて議論を進めることとする。それが

1. 出版物を生み出し世に送るものとしての文化（作家に結び付くグループから）
2. 出版物を読むことで生まれる文化（読者と読書推進と結びつくグループから）
3. 出版物を作り出し世に送る人々・組織のふるまいとしての文化（産業そのものに結び付くグループから）

である。段階的にまとめれば、まず「もの」としての出版物が生みだされることを巡る文化があり、さらに二つ目に「もの」としての出版物が読者に読まれることによって生じる文化がある。この二つをさらに大きくまとめると、実際のテキストを巡る文化、出版物の内容にかかわる文化、著者や読者の文化と言い換えることもできる。

これらとは異なった次元に存在するが、こういった出版物を生み出し社会に送り出す人々の行動、またはその行動を安定化させるために守るべき制度としての出版文化も存在する。この、産業的文化、産業のふるまいの文化とでもいうべき出版文化は、素晴らしい作品の紹介や読書のための共同体形成といったものとして語られる出版文化とは大きく意味を異にするが、インフラとして他の出版文化を支える要因としてやはり重要な文化となる。

この把握を、これまでの出版研究における出版文化のあり方と対比してみる。出版文化を制度から出版物の中身までも含む広範なものと捉え、読者や作者のために守るべきものとしながら、実態としては自身の主張を擁護するために使用している例は、すでに挙げた『新潮 45』の特集に見ることができる。しかし、特に制度面の問題に触れる際には、他の議論においては冷静な研究者であってもこの問題に足をすくわれることが少なくない。序論で紹介した再販制度を巡る議論において、畠山が喝破したように、出版人も研究者も再販制度を守ることが読者や著者の育む文化を守ることだと語りながら、その実は従来の自分たちの行動規範となっているふるまいとしての出版文化を変えようとしなかつただけだと見ることが出来る³⁵。

公正取引委員会による見直しは、

著作物再販制度については、研究会の提言にあるとおり、競争政策の観点からは、廃止の方向で検討されるべきものであるが、本来的な対応とは言えないものの文化の振興・普及と関係する面もあるとの指摘もあり、これを廃止した場合の影響について配慮と検討を行う必要があると考えられる。したがって、この点も含め著作物再販制度について引き続き検討を行うこととし、一定期間経過後に制度自体の存廃についての結論を得るのが適当であると考えられる³⁶。

という弾力運用の努力を前提にしながらも、当分の間は再販制度存続という結論になったことを受けた後、それ以前のように大きく再販制度が出版業界を上げた議論の対象となることはなくなった。当時言われていた出版文化の危機が去り、再販制度のみを切り出してその正当性を論じる意味が低下したというよりは、議論をするモチベーションが失われたと見ることもできる。これは後に示す出版流通改革事例においても見られる動きである。現在はむしろ、再販制単体ではなく委託制度と組み合わされて、産業にとってのより経済的な問題、利益配分の問題として取り上げられるようになった。

このような形で出版文化という言葉に足をすくわれぬように、再度上記の3種類の出版文化を前提として、出版流通と出版文化の関わりを考えてみる。第1章で取次の機能を整理したことから明らかになったように、実際に出版流通とそれを担うプレーヤーの機能として語りえるのは、「生産物としての出版物を受け取り、読者に届ける」範囲に限られている³⁷。この範囲にとどまる限りにおいて、出版流通あくまでも出版文化の仲介者の役割を担うに過ぎない。取次が実際にもつ機能と、それを超えて求められる出版流通改革という問題と相似形である。

前章と本章1・2項で示した出版流通研究は、現在の産業を理解するために意義のある取り組みであるが、それゆえに現在の流通システムをゴールに設定して各時代の変化を確認し、その中での差異を見出す取次論の枠を出ることができない。出版を地として流通を語ることで文化を語るには、出版文化とは別途の、外側の概念を加える可能性を論じなければならない。出版物が生み出される場と、読まれる場をつなぎ、これらを包括するものとして、出版物が社会に配置される状況とそれが生み出す可能性が設定されなければならない。

出版物の社会への配置という側面に注目したものとして、著者が修士論文のテーマとして設定した「文化におけるストック形成」³⁸および、2010年に東京大学文化資源学研究室によって開催された文化資源学フォーラム『書棚再考』を挙げることができる。後者では人々が本の集積アクセスできる状況を、文化資源学として議論の対象としている。フォーラムに合わせて作られた冊子の冒頭で、次の様に述べられている。

あるべき理想や本に関する既存の枠組みを前提とするのではなく、既存の枠組みを踏まえながらもそれにとらわれず、現実には本と人が出会う場所やそこで生じていることそのものに焦点を当てたら、どのようなことが見えて来るでしょうか。私たちは、本が集められた場が人々に開かれている状態を〈書棚〉と呼ぶことにし、そこから何が生まれうるかを探ろうと考えました。³⁹

ここで「書棚」と呼ばれている、出版物と読者が接点を持つ場の存在を考慮に入れることで、流通が「営業機能」および「配本機能」の先のものとして切り捨ててきた「消費」を含む動き、出版物の手に取られ方、参照され方、読まれ方そして集められ方と言った部分を考える必要が生まれる。それは、単にモノとしての出版物が流通の末端に届けばよいという前提を捨て、流通の末端の多様性および、そこから読者に届くまでのあいだに中間的に存在する様々な集積に積極的な意味を見出すことにも繋がる。書店と言う一つの場に加えて、図書館やコンビニと言った別の場を考えることにとどまらず、それらの場における出版物のあり方、場で起きる相互作用、そこによって読者が置かれる出版物の空間までも含みこんだ、出版物の社会配置が何を支えてきたのかまでを語りえる枠組みが必要になる。この議論は、第1章で紹介した佐藤の試論⁴⁰と現実の出版流通をつなぐ、本論文の結論とも直結する問題である。

序文で述べたように、2000年以降の変化によって、過去の出版流通を研究することが、直接産業の高度化や改善につながる可能性は消えつつある。その一方で、出版流通改革を作者や読者の出版文化を社会に配置させることを担ってきた産業の動きとして位置づけなおすことが可能である。さらに、そこに産業に定着した振る舞いとしての出版文化がどのように関係してくるかという視点を加えることで、出版流通研究は文化資源学における産業研究の可能性を生むものとなる。現在の出版物の流通状況、例えばAmazonなどネット書店での買い物が一般的になり、書籍の注文によって生じていたストレスが大きく低下し、さらには電子書籍の普及による地域格差が消滅するといった状況は、確かに合理化であり読者の利益にかなっている。この変化のプラス面は否定するべきものではない。しかし、効率化のみを軸として、産業規模として縮小したため後景化している諸問題を追及することをノスタルジックで意味のないものとして片付けてしまう限り、出版流通と出版文化を組み合わせることはできない。

以降の章では、出版流通と出版文化を巡るこれらの問題を整理するために、出版流通改革の事例を複数の側面から分析していく。この分析は、出版文化のせめぎあいがいかに実際のどのようなものであるのか、三つの出版文化が流通改革といかなる相互作用を持つかについて、第6章で結論付けるために必要な概念的整理と産業的現実をつなぐものとなる。

序論で述べた通り、本論文は産業の未来を予言する、または出版産業そのものの経営状態を改善する提言を出すことは目的とはしない。本章までの概念整理と次章からの事例分析を受けて、2000年前後までにかけての出版流通が、何を支え、また何を支えなかったのか。出版文化という側面からの議論と、実際に起きた産業の変化を俯瞰することで、出版流通をとらえ直し、出版物としてのテキストの社会への配置と出版流通の関係をとらえ直すものである。

1 近世から現代までの全体的な流れをまとめた研究では、最新のものに小田光雄『書店の近代一本が輝いていた時代』平凡社（2003）、柴野『書棚と平台』、および蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』がある。また、近世については、長友千代治『江戸時代の図書流通』思文閣出版（2002）。また取次による自社史も定期的に刊行されている。二大取次では、『東販創立五年誌』東京出版販売（1954）、『東販十年史』東京出版販売（1959）、『東販二十年史』東京出版販売（1969）、『東販三十年史』東京出

販売 (1979) (東京出版販売はトーハンの旧社名)、『飛翔：トーハン 50 年の軌跡』トーハン (2000 年)、『トーハン 10 カ年の歩み・平成 12 年 1 月～平成 21 年 12 月』トーハン (2010)。

『日販 20 年の歩み』日本出版販売 (1969)、『日販三十年の歩み』日本出版販売 (1980)、『日販四十年の歩み』日本出版販売 (1990)、『日販 50 年の歩み』日本出版販売 (2000)、『日販 60 年の歩み』日本出版販売 (2010)。

² ここでの流れをまとめる際は、主に蔡および永嶺による研究を利用している。なお、現在の取次成立に重要な第二次世界大戦直後の動きは、特に庄司徳太郎・清水文吉編著『資料年表日配時代史—現代出版流通の原点』(以下『資料年表日配時代史』) 出版ニュース社 (1980) に当たっている。

³ 例えば国文学研究資料館が提供する「日本古典籍総合目録データベース」で最古の書物として登録されているのは、聖徳太子筆の『法華義疏』(現在は御物) である。http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_W_1018491

⁴ 蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』、長友千代治『江戸時代の図書流通』、小田光雄『書店の近代』平凡社 (2003)。

⁵ 上里春生『江戸書籍商史』出版タイムス社 (1930) pp.102-103。上里は特に第五章を「大江戸の小説本」とし、江戸期の庶民出版文化についてまとめている。

⁶ 長友『江戸時代の図書流通』P.43、および中野三敏『和本のすすめ—江戸を読み解くために』岩波書店 (2011) pp.67-72

⁷ 江戸時代の出版物の多様さは、今日デジタルライブラリーなどで簡単に閲覧し、実感することができるようになった。国立国会図書館提供のNDL デジタルライブラリー、人文学オープンデータ共同利用センター提供の日本古典籍データセットなどの例がある。

⁸ 鈴木俊幸『蔦屋重三郎』若草書房 (1998)

⁹ 取次の成立事情については、蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』pp.56-61、永嶺『読書国民の誕生』pp.3-14、および柴野『書棚と平台』pp.34-56

¹⁰ 永嶺『読書国民の誕生』pp.41-46

¹¹ 永嶺『読書国民の誕生』pp.44-45

¹² 雑誌の他には、大正～昭和の流れの中で大量物流の問題として「円本」「ゾッキ本」「赤本」という廉価かつ大量生産される書籍の問題がある。これについては柴野『書棚と平台』pp.75-105 を参照。

¹³ 日配の分割については庄司『資料年表日配時代史』pp.137-141。

¹⁴ 日本の書店の独自性については、星野渉『出版産業の変貌を追う』青弓社 (2014) P.125。ただし、あくまでも欧米と比較した傾向であり、併売が世界的に見て全く無い形式というわけではない。能勢仁『世界の書店さん図鑑 45 カ国・50 書店の横顔見て歩き』出版メディアパル (2016) を確認すると、台北にある誠品書店信義店など、雑誌と書籍を併売するスタイルは海外でも見られる。

¹⁵ 本論文第 7 章で議論するように、適正配本よりも一歩進んで、より注文に重点を置いた新しい仕組みも考えられている。

¹⁶ 庄司『資料年表日配時代史』P.110

¹⁷ 柴野は日配には文化統制的な意味よりも経済合理性の追求の側面が強かったとしている。出版物流の規制には言論統制的意味もあったが、それは従来の出版条例等から引き続いた方向性であることも確認できる。柴野『書棚と平台』pp.57-73。また、思想的な面までを含めた統制団体としては 1940 年に設立された「日本出版文化協会」(文協、その後「日本出版会」→「日本出版協会」と変化) の存在も大きい。日配の取締役には文協から 2 名が参加している。

なお、戦前の出版統制の全体流れについては橋本健午がまとめている。橋本健午『発禁・わいせつ・知る権利と規制の変遷』出版メディアパル (2005) pp.18-64。

¹⁸ トーハン Web サイト「店舗オペレーション TONETS V (トネッツヴイ)」

<https://www.tohan.jp/works/retail/operation.html> (2018 年 12 月 31 日閲覧)

¹⁹ 庄司『資料年表日配時代史』pp.140-141

²⁰ 「1949 体制」は蔡『出版産業の変遷と書籍出版流通』P.88 より

²¹ 橋本求『日本出版販売史』講談社 (1964) pp.624-630

²² 表はトーハン『よくわかる出版流通のしくみ』から必要な情報のみを抽出して作成した。

²³ 表 2-1 は『よくわかる出版流通のしくみ』p.24 の表から必要な情報のみを抽出して作成した。

²⁴ 箕輪成男『消費としての出版』弓立社 (1983) P.91

- 25 例えば小田は 1990 年代に既に制度の限界を指摘している。小田光男『出版社と書店はいかにして消えていくか 近代出版流通システムの終焉』論創社（2008）pp.249-273
- 26 日外アソシエーツ編集部編『日本出版文化史辞典』日外アソシエーツ（2010）P.3
- 27 長岡義明「出版文化なるものに対する違和感」『出版ニュース』2009.1 上、出版ニュース社（2009）pp.64-65
- 28 奥山益郎『出版文化』東京堂書店（1972）
- 29 なお、奥山は「わざわざ難解な文章で論文を書いて得意になっている」のも出版文化に背くと述べている。奥山『出版文化』P.31（前掲）
- 30 「「出版文化」こそ国の根幹である」『新潮 45』新潮社（2015）pp.19-49
- 31 この結果は 2018 年 12 月時点のものであり、より増加していることが予想できる。
- 32 フランコ・モレッティ『遠読』みすず書房（2016 年）
- 33 今回の分析を再現可能にするために、利用したデータそのものも Web 上に公開しておく。このデータを本文内と同じ設定で実行することで、同じ結果が得られる。
<http://ik1-305-12975.vs.sakura.ne.jp/var/www/html/datashare/titledata.xlsx>
- 34 ここでは基本的な解析のみを実施している。KH Coder の詳細については、<https://kncoder.net/> および樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版（2014）。なお樋口耕一は KH Coder の開発者である。
- 35 もちろん、再販制度を巡ってその擁護に回った際の箕輪のイギリスの状況の研究は精緻で、研究としての価値が毀損されているわけではない。
- 36 公正取引委員会「著作物再販制度の取り扱いについて」2001 年 3 月 23 日
- 37 あくまでも主に担う機能の問題でもある。流通を担うプレイヤーの個別の取り組みに注目すれば、トーハンの「朝の読書」運動や「ほんをうえるプロジェクト」、日販の「おはなしマラソン」など、単純に出版物を移動させるという意外に社会に出版物を定着させ、読者の育成にまで踏み込む活動が行われている。
- 38 鈴木「出版流通の再評価」
- 39 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室「文化資源学フォーラムの企画と実践』2010 年度履修生『書棚再考 本の集積から生まれるもの』東京大学文化資源学研究室（2010）pp.4-5
- 40 佐藤「テキスト空間論の構想」pp.158-160

第3章

ジャパングックセンターに見る書籍流通改革 の諸要素

第3章 ジャパンブックセンターに見る書籍流通改革の諸要素

本章からは、1・2章での概念面での前提整理を受けて、出版流通改革の事例を再検証していく。本章では、ジャパンブックセンターと呼ばれる流通改革を軸に置く。ジャパンブックセンターとは、1990年代に計画された書籍流通改革構想であり、そこで計画された物流基地の名称でもある。第2章でみた通り、歴史的には雑誌中心となって拡大した出版流通であったが、この時期にはその限界が指摘されていた。それを乗り越えるために出版業界横断でなされるはずだった改革は、スローガンとしては出版物が内包する出版文化を支えることを打ち出していたが、実態的には出版産業のふるまいとしての文化を部分的に変えようとしつつも、大きな視点では変化に抗う動きにつながっている。

1996年に須坂市と協力した第三セクターとして立ち上がりながらも最終的には成立を見ずに終わっているこの構想は、出版社・取次・書店全てが参加していること、長野県の地場書店である平安堂社長（当時）平野稔による提案が元となっている点、出版産業の中央対地方という二項対立のものとは従の立場をもっていた地方都市に新たな流通の中心を設置しようとした点において、大手取次と呼ばれる日販やトーハンの主導によって行われる個別企業レベルでの流通改革とは一線を画している。成功・失敗という点は大きく異なっているが、次章で見ていく業界挙げての雑誌定価販売と並んで考えるべき、書籍流通の事例である。

また、当初の平野による構想、作家や出版関係者のための住宅と大規模印刷所も併設した一大職業都市構想が、現実的な落としどころとして書籍流通基地構想となった後も、公正取引委員会との交渉の席で「出版業界の努力の表れ」として引き合いに出されるなど、業界全体の制度問題と関わりを持って語られてきた計画でもあった。新たな動きとして大きな期待を背負いながらも、取次が主軸となった流通システムそのものには踏み込まず、サポートとしての共同倉庫を目指したということ。その一方で大きな流通システムを変えずに新たな書籍流通を目指していたことや、2002年に最終的に基地の成立を見ずに解散した経緯までも含めて、書籍流通とその改革が語られる要素を多層的に示す事例となる。

本章では、ジャパンブックセンターそのものの概要を示したうえで、地場書店である平安堂の主導、市議会や地方新聞において議論された須坂市としての立場など複数の視点を導入する。そして流通改革として出版業界においてはどのような位置づけにあったのか、出版文化、特に産業のふるまいとしての文化がどうこの動きを規定したのかという、ジャパンブックセンターの諸側面を確認していく¹。

1. ジャパンブックセンター＝須坂構想の概要

ジャパンブックセンター（以下JBC、図3-1）は、1990年代後半に構想された大規模な出版物流基地である。後程、考案者である平野稔の考えを引いて詳しく述べるが、もともとは単なる物流基地と言うだけでなく、一種の職業都市ジャパンブックランドとして構想されていた。構想をスリム化し、須坂市と協力した第三セクターとして書籍流通の改善、特に「注文品」の流通改善を狙うことを主目的として成立したJBCは、用地買収計画まで進みながら、2002年に未完のプロジェクトとして解散することになる。

JBCは出版業界誌や業界新聞で盛んに取り上げられる一方、一部長野県の地場新聞などでも注目されていたが、解散後はまとまった振り返りも研究もおこなわれていない状況である²。このこと自体がJBCにとっての一つの問題提起となっているのかもしれない。もちろん、研究が少ない理由として、2000年以降事業が停滞し、最終的には未完成のプロジェクトとして解散したという事、そして解散にさいしては「出資金不足」という明らかな理由が示されているという現実的な問題の影響も少なくはないだろう³。

また、特に中期以降になると、出資していた取次であるトーハンとJBC構想の立ち上げを担った書店平安堂の関係が悪化し、第三セクターの理事会内においても人事がもめるなど、ゴシップ的な個人・会社間の対立構造がからむ事態になる。こういった点に足をとられないように気を付けなければならないという部分も、研究の遅れにつながっていると言わざるを得ない。



図3-1 JBC完成予想図（須坂市保管資料「須坂JBC計画案（1998年10月版）」から抜粋）

JBCを問題として取り上げる前提として、1990年から2000年にかけての出版業界の状況を確認しておく。構想が出された1990年代初頭と、最終的に成功を見ずに解散した2002年の間に、出版業界の状況は大きく変化したからである。出版物の売上額は1976年に1兆円台に乗り1989年には2兆円を突破、1996年ピークを迎えるまでやや速度を落としながらも成長を続けていた。しかしその後は連続で売り上げが減少し、2002年の段階では1990年代初頭の水準まで落ち込んでいる。端的に言えば、JBCが構想された1990年代初頭は出版業界にとって余力と希望があった時期であり、構想が敗れた2002年はいわゆる「出版不況」が到来した時期だった。

また2000年以降はいわゆるIT化と共に、取次が独自の流通改革を新たな段階に進めた時

期であった。大手の一翼を担う日販は 1990 年代末から IT 化を促進していく。2001 年からは書店・出版社との間にオープンネットワークを構築し、売上や在庫情報を効率的に交換するトリプルウィンプログジェクトを開始した。またトーハンも、実際の全面稼働は 2007 年と日販に後れを取ったが、桶川 SCM センター構想を立ち上げ、データによる管理と書籍物流の効率化に乗り出した。

こういった変化と共に、外的要因で無視することができないのは 2001 年に公正取引委員会が出版物の再販制度にたいして「当面存置」という判断を下した点である。出版業界としては、再販制を守るための方針として、弾力運用と流通の効率化を掲げており、JBC もその一翼を担っていた。公正取引委員会が再販制度の存続を当面とは言え認めたことが、そのまま JBC の必要性とは関わらないにせよ、前述の取次による独自取り組みの開始と相まって、業界全体として推し進めるモチベーションに影響したのは確かであろう。

JBC の構想は、平安堂の平野稔によって提案された開発計画をその源としている。平安堂は長野県を中心に複数の店舗をもつ書店チェーンであり、2020 年現在もカフェやレンタル業態などを含めて 18 店舗を展開している。平野によって提案された初期の構想では、平安堂を中心とした複数企業や公共団体の協業体として、須坂市に市民のための公園とスポーツ施設、それと併設した出版物流センター、印刷所、出版関係者のための住宅からなる開発を行うというものであった。この構想は 1992 年から 1993 年にかけて、より拡大したジャパンプックランド構想として提案されることになる。ジャパンプックランドは、平野の当初の構想であった流通基地（JBC）と出版関係者の住宅街、印刷所という出版関係施設と、市民公園とスポーツ施設に、その二つを結びつける書籍資料館を併設し、須坂市に「活字文化の発信基地」を作るというものであった。

平野の構想については、本章第 2 項で詳しく述べていくが、言うまでもなく規模の大きさや資金の問題で現実的な落としどころを見つける必要が生じた。大手を除く取次 6 社（大阪屋・栗田出版販売・日教販・中央社・大洋社・協和出版販売）による物流基地早期開設の要望や、一連の用地見学や事前折衝を経て、最終的にはジャパンプックランドのうち流通施設部分、具体的には出版社の共同倉庫事業に絞って先にスタートさせるとして、第三セクター株式会社ジャパンプックセンターが 1996 年に設立された。

株主としては、用地を提供し第三セクターの事務局を中心的に努める須坂市、地場の企業であり共同倉庫の設計と運営を担う小松フォークリフト、株式会社キトーと甲信小松システム、大手取次会社であるトーハン、出版社である新潮社と二玄社、そして構想の立案者ともいえる平野が社長を務める平安堂が名乗りを上げている。最終的に社長に就任したのが、大手出版社でも取次でもなく、比較的専門的な出版に特化した中規模の二玄社社長であった渡邊隆雄であったことが、後から振り返れば JBC の方向性に大きく影響することとなる。

1998 年までの二年間で基本的な構想設定と業界への運動を行い、出版社では文芸春秋社、岩波書店、中央経済社、農山漁村文化協会、東京大学出版会、三修社、八木書店、大修館書店が、取次では日本出版販売、大阪屋、栗田出版販売、中央社、日教販、大洋社、協和出版が出資者に名を連ねることとなった。この年からは、共同倉庫を実際に利用する出版社の参

加拡大を第一方針として、JBC 内に営業専任担当が置かれ、東京に構えた事務所を拠点に各出版社への説明と営業活動を行うこととなる。同時期に須坂市による用地買収が完了し、業界紙『新文化』紙面上などでも「99 年末本格稼働、六千万冊を保管」として JBC への期待が高まっていく⁴。

事業計画についても、三菱総研による資金調達及び事業方針へのコンサルティングが行われ、1999 年には基本的な事業計画が発表される。この際に想定されていた取扱量は、出庫量一日 10 万冊、保管部数としては 3000 万冊である。最終的な結果を見れば単純に比較はできないが、現在大手取次トーハンが書籍の物流基地として活用している桶川 SCM センターの扱い量が 1800 万冊であることと比較すると、少なくとも当時においても十分な物流量で計画されていたことが分かる。

しかし 2000 年代に入ると、JBC の事業化の遅れが目立ち始める。最も大きな問題として、資金調達の壁が立ちふさがってきた。JBC は第三セクターとして公設民営形式による流通基地の立ち上げを目指して、須坂市単独の資金に加えて長野県及び各企業の出資を募り、さらに公的補助金の導入を目指すという方針をとってきた。ここで具体的な資金獲得手段として二つの方法が考えられていた。第一は出版社を中心とした事業協同組合を設立し、いわゆる「高度化資金」を獲得する方法。もう一つは第三セクターの代名詞ともいえる「民活法」⁵の適応を受けて補助金および無利子融資を獲得する方法である。事業協同組合形式では事業立案までの意思統一が遅れると言う問題が指摘され、コンサルタントからの助言も受けて、最終的には民活法を活用した資金調達を目指すこととなっていた。

しかし、民活法の適応を受けるための条件とされた出資金の増額と、政策投資銀行からの融資のめどが立たない状況が続くこととなる。既にみたように、「不況に強い業界」という出版産業神話は、1996 年以降の連年の売り上げの減少で完全に崩壊しており、いわゆる出版不況と呼ばれる時代に入っている。出版業界内から新たな大型融資を得ることは難しい状況になっていたことは言うまでもない。

また、JBC 共同倉庫の利用料についても協力出版社拡大の障害となっていた。JBC では事業継続のための収入源として一冊当たり 35 円程度の出荷手数料と、一冊一月当たり 1 円 70 銭以下の保管料を設定していたが、営業担当からはこの価格設定に対する出版社からの反発が大きいと言う報告が繰り返しあげられている。仮に一般的な利益計算を行ってみると、1,000 円の書籍の場合、書店の取り分が 25%程度、流通を担う取次が 7%程度で、残りの 68%が出版社の取り分となる。この本が 2 か月 JBC に保管されて、出荷されたとすると、38 円程度の手数料がかかる。例えば 1 万冊売れた場合の遺失利益は 380000 円、600 冊ほど多く売らなければ、当初の計画利益に届かないこととなる。書店での引き合いが大きいコミックや文庫本となると、価格は 500 円以下と言う事もあるので、言うまでもなく手数料の負担はさらに大きなものとなる。

事業化の遅れと並行して、「何故須坂なのか」という新たな問題も生じる。バブル崩壊以降の地価の下落によって東京近郊の土地が入手しやすくなり、地方に共同倉庫を作らなくてはならない訳ではないと言う声が上がりに始めてきた。実際、JBC 理事会においても東京近郊に第二基地を作ると言う案が提出されるようになった。このような当初の構想からのズレに

加えて、JBC の中心となっていた平安堂とトーハンの取引問題から理事会内での対立が深まっていくこととなる⁶。

最終的には、資金調達の方法が立たないことを理由に、2002年11月27日の臨時株主総会を持って JBC は解散を宣言、残余財産の清算に入る。2億2000万円出資金に対して最終的な返還額は8300万円余り、須坂市も3000万円を出資していたが、市に対する残余財産分配金としては1100万円程度となった。

このように、最終的に成立を見なかった JBC 構想ではあるが、共同倉庫の設計図や実際の流通方法など、かなり具体的な事業計画が立案され、資料として残されている。JBC の流通改革としての諸側面を考える前提として、出来上がるはずであった JCB 共同倉庫を復元してみることは無駄にはなるまい。

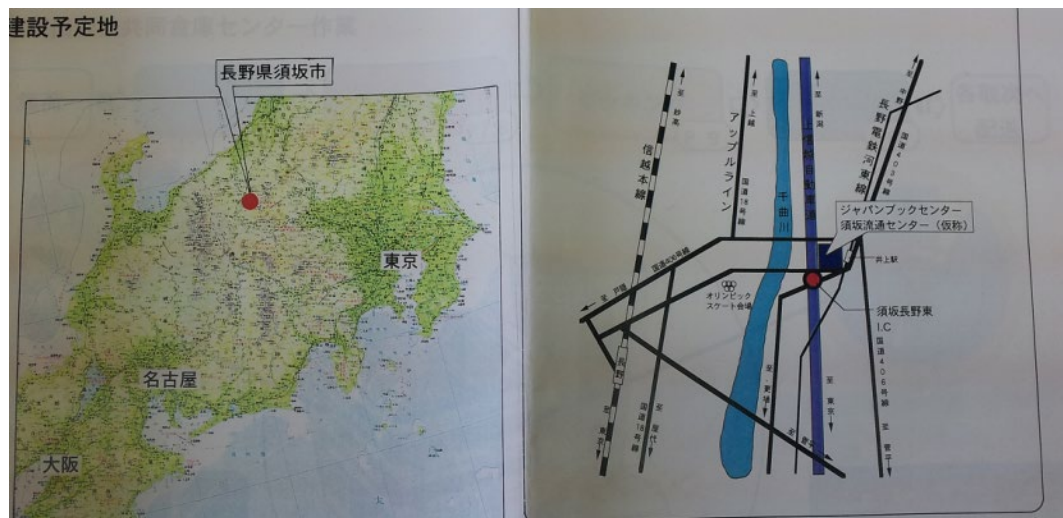


図 3-2 JBC 建設予定地（須坂市保管資料「須坂出版共同倉庫の概要」より抜粋）

繰り返しにはなるが、JBC は長野県須坂市に建設が予定されていた（図 3-2）。長野県は 1990 年後半においては、首都圏と比べて広大な土地を安価に確保できる環境にあった。予定された延べ床面積は 60000 m²、建設予定地は上信越自動車道の須坂長野東インターとほぼ隣接しており、関越道および中央道にもアクセスがしやすい。また 1998 年の長野オリンピックに向けて一層のインフラ整備が進む見込みも大きかった。とはいえ、首都圏からのアクセスが必ずしも良いとは言えず、そのことは既に述べた首都圏近郊の第二基地問題につながる事となる。

実際に JBC が計画した流通体制はどのようなものであったか、須坂市に残された資料から復元してみる。第一に押さえるべきは、JBC が出版流通のどこまでをどう担うつもりだったかという点である。JBC 計画は出版流通の経路整理、標準化、スピードアップ等をうたっているが、あくまでも従来の取次による流通のサポートとしての立場をとっている。JBC 自体が独自の配送網を持つのではなく、各出版社から預かった書籍を管理保存する役割を担う。実際に各書店に対しての配送は、書店から注文を受けた各取次が JBC から在庫商品を受け取ることによって行われる。JBC が担うのは出版社から持ち込まれた商品を保管管理し、状況

に応じてスピーディに出荷する役割である（図3-3）。

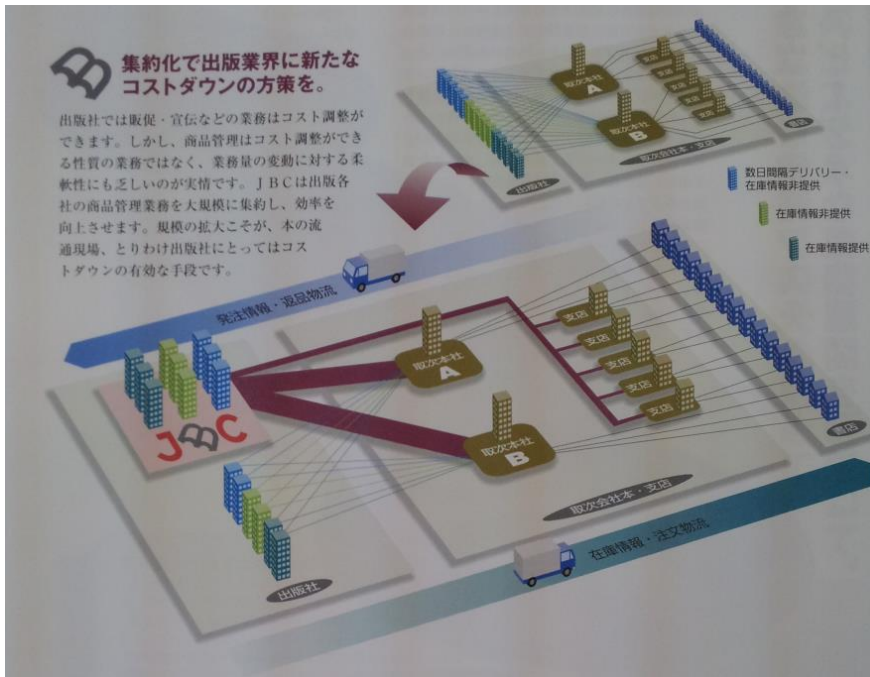


図3-3 JBCによる流通の効率化（須坂市保管資料 パンフレット「JBC JAPAN BOOK CENTER」（1999）より抜粋）

スピーディに出荷するためのパターンとしてJBCが打ち出しているのは、通常の委託配本から漏れるきめ細かな書籍流通である⁷。一括大量物流では対応が難しい一冊単位の注文、特に客注対応を売りにするほか、出版社と書店の契約による独自のセット組販売や常備商品の随時補充などの利便性を高めるとしている。これはいずれも1990年代の書籍流通において、効率性が劣っていた出荷方法である。このうち、セット組については追って対応するとし、立ち上げ時にはまず客注と補充に力点が置かれることとなっていた。出荷体制に加えてJBCの強みとして示されているのが、集約化によるコストダウンとデータによる在庫管理の促進である。さらに、中京圏へのアクセスの良さや、取次の拠点との利便性など、高速インター直結の立地をアピールしていた。また、やや変わったアピールポイントではあるが、出版社にはない就業体制による「時間や届け先を選ばない柔軟な発送」を打ち出している。これは、須坂市地場での労働力受入れ、雇用の創出とも関わってくる。

この様に、JBC計画は集約化によって多品種の書籍を扱うことを目指していたが、最終的な流通ラインは取次に依存すると言う形をとっている。JBC利用の成果として、繰り返しアピールされているのも「ローコストオペレーション」と「コストダウン」であり、そこで述べられているのは、取次による効率化と大きく変わらない、むしろそれを補助する役割を担おうとしていたと見ることができる。

ただし、JBCが既存の流通体制を全く変えようとしていなかったわけではない。JBCのパンフレットには、特色の他に“Future”と題された囲み記事（図3-4）があり、そこにJBCが目指す三つの未来像を示している。一つは書籍の新刊・絶版情報を合わせた本のデータベ

ースの作成であり、もう一つは JBC による在庫情報の開示、流通の効率化である。この二点は、IT 化の波の中で出版業界に求められていたデータベース構築とネットワーク化を明示したものととることができる。しかし三点目はやや方向性が異なる。「注文流通はもうからない、という常識に一石を」とうたっているのである。ここで、JBC はいわゆる新刊中心の出版流通に変革をもたらそうと言う意思を示している。「我が国の本の流通の欠陥が委託流通の過剰にあることを考えると、この構造を大きく変化させる JBC は、注文流通の増加、返品物の減少に大きく貢献することになるでしょう。」とはっきりと流通の構造改革を明言している。従来 of 大きな流通は変えないが、それをサポートする形をとりながら、雑誌中心から書籍中心へと切り替えていく。雑誌が他のメディアに取って代われ、むしろ書籍が中心の商材になりつつあるその後の産業の変化を考えてみると、これは先見的なスタンスであった。

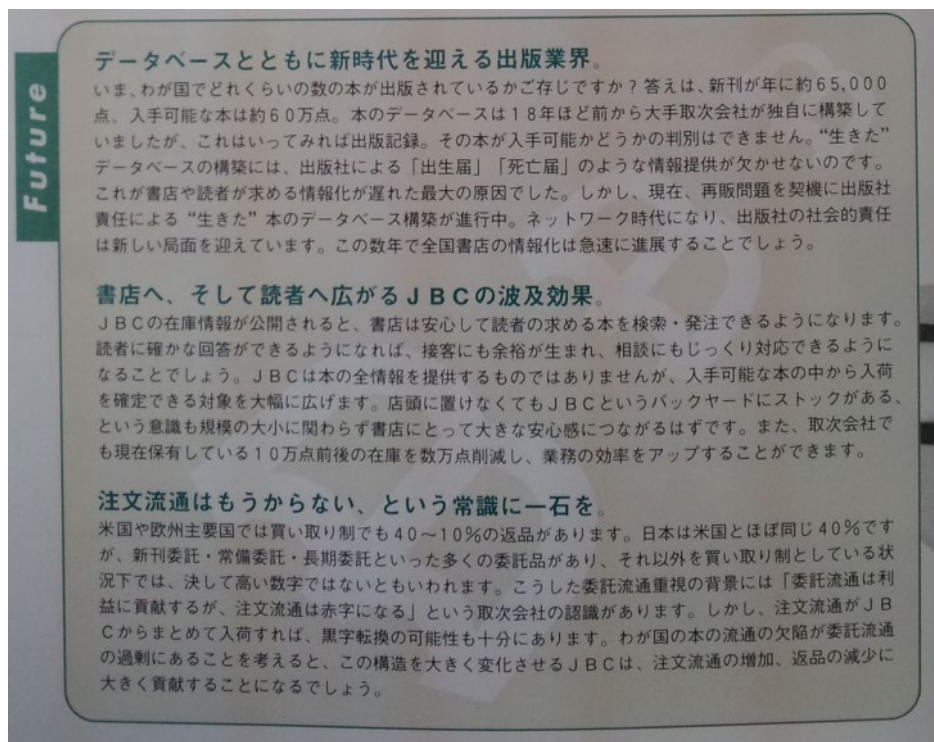


図 3-4 JBC が示す未来（須坂市保管資料 パンフレット「JBC JAPAN BOOK CENTER」（1999）より抜粋）

この「書籍流通の最適化」については、当初の設計（図 3-5）から東京における第二基地を想定した設計（図 3-6）までのシステム構想の変化を伴いながら、方針としては一貫している。

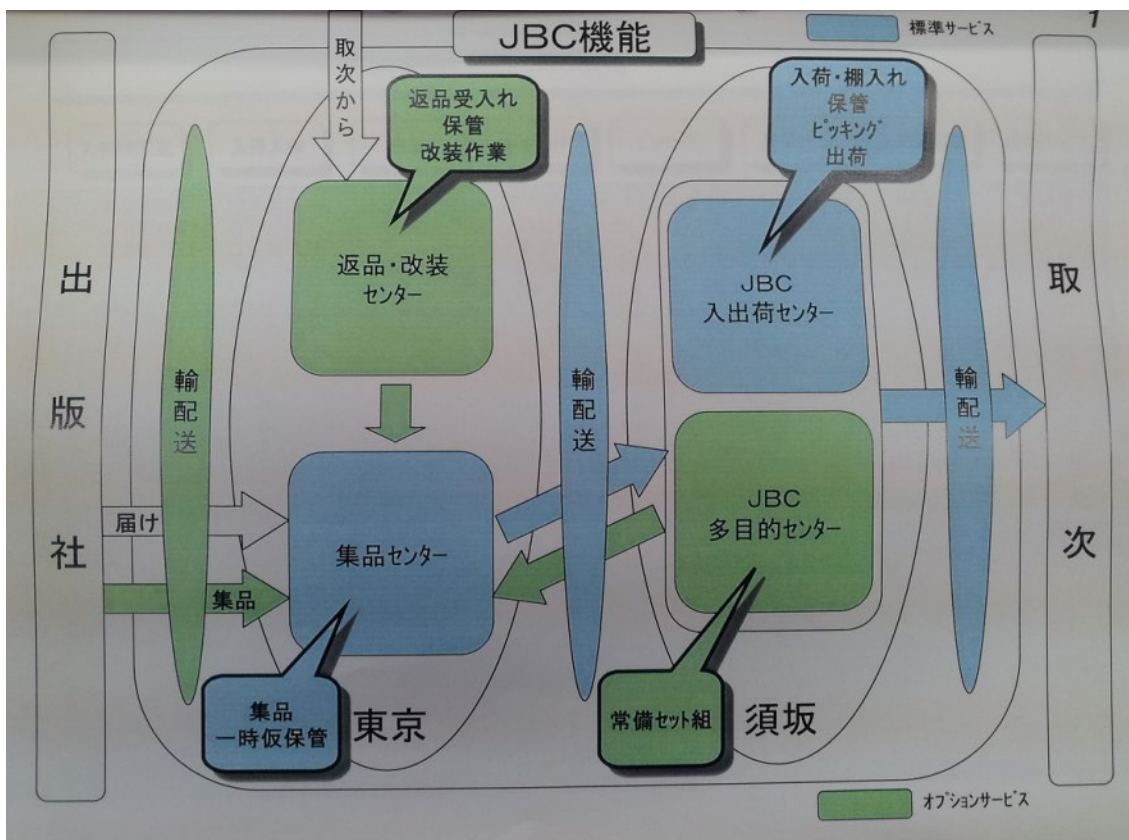


図 3-5 JBC 機能概要図・初期（須坂市保管資料「基本システム構想の策定」より抜粋）

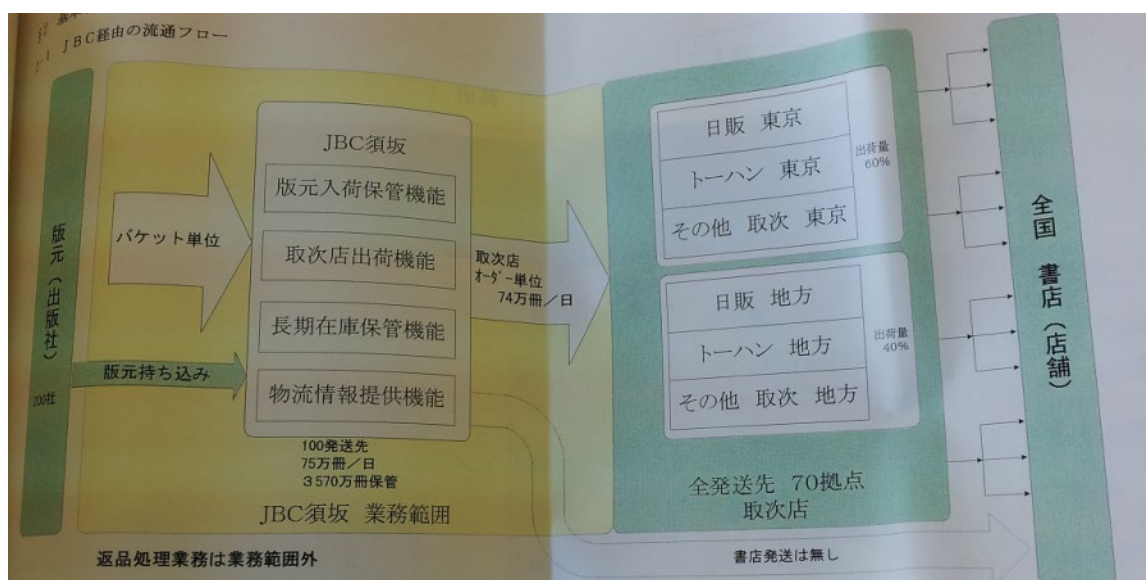


図 3-6 JBC 機能概要図・後期（須坂市保管資料「ジャパンブックセンター 須坂出版共同倉庫業務一覧」より抜粋）

2. 地方発の構想・地域振興としてのジャパンプックセンター

地方発の構想である JBC の動きを追うと、地域を飛び出し全国の出版を改革する理想と地域振興の要求が、時に絡み合い、時に反発し、また時に全く無関係に現れる。その中で日本の文化としての出版文化と、地域の文化としての出版文化が語られている。「中央」対「地方」の読み込みと、地域にとっての産業としての位置づけの読み込み双方が可能な事例であるといえる。一方で、文化資源学における文化経営学的⁸な視点をとれば、JBC は地域の文化資源として、文化行政の視点でどう活用されたのかについて読み込める。

既に見た通り、JBC およびその前身の JBL は長野県を中心に展開する書店、「平安堂」の平野稔によって発案された構想である。平安堂の歴史をまとめた『平安堂八十年のあゆみ』⁹には JBC について「JBC の夢と現実」と銘打った平野を主演として書かれる一章がおかれている。

JBC の「夢のはじまり」になったのは、書店としての流通問題、特に書籍流通問題に直面していた現実である。この状況は、平野稔の視点でこう書かれている。

それでも口惜しい思いをしてきたのは、注文品がすぐに届かないということだった。「十日から二週間お待ちください」という言葉を店頭でいくたび繰り返してきたことだろうか。だが、それは自分の手が及ばない、流通の問題だった。

売れ筋の本はトーハン、日販などの取次が競争して出荷すればいいが、少部数の本、品出しの頻度が少ない本は、版元が共同で作った倉庫に集め、注文品はそこから送り出せば、全国の書店に三日で届けることができる。

その原因は、この業界全体に本の物流システムがないところにある。

こうして生まれたのが、ジャパンプックランド（JBL）構想である。¹⁰

戦後作り上げられてきた出版流通のシステムは、雑誌および新刊書籍の大量一斉流通には極めて高い効率を持っていたが、そういった大量流通にうまく適応しない出版物、特に少部数の書籍については極めて不安定な状況であった。平安堂は、1970 年代には長野県内に向けた本の宅配制度を整備し、80 年代には出版業界初といわれる POS システムの開発、導入を行っている¹¹。いわば地方書店でありながら、改革の先端を行く書店チェーンでもあった。そんな平安堂にとっても、書籍流通の遅さは「手が及ばない」が解決を求め続けた問題であった。

さらに、この問題解決のための手段が、単に書籍流通基地構想にとどまらず、一種の文化的意味を持った構想となった点は注目に値する。

印刷、製本、保管管理、出庫の機能を一地域に集めて、コストと時間の削減を図り、わが国で印刷されている書籍を集約して、書店・読者にできるだけ早く配本ができる、合理的なシステムを作る。その上で、周辺に作家の創作活動に役立つ自然の豊かな環境を提供

して、本が生まれてから読者の手に届くまでの流れを効率化した、出版コンビナートを造成しよう、という壮大なプランだった。実現すれば、日本の中心に書籍の流通基地ができるだけでなく、一台情報発信基地が誕生するのである。¹²

平野の初期構想は、その実現性をいったん棚上げして、日本の出版文化、および社会への出版物の配置という視点に立てば、いくつかの注目すべき可能性を持っていた。いわば受け手としての地方から、出版関係者を「住まわせる」ことで、出版物を生み出巢部分までも含め、流通の中心となることで全国へ出版物を届ける中心ともなる、「発信者としての地方」へという可能性さえも含んでいる。もちろん、成立したとしても多くの出版社の軸は東京に残るであろうことを考えると第二の中心または「従」の立場としての発信者という一種の補助的な役割にとどまった可能性は高いが。

もちろん、実際にはこれだけの規模での開発は、おそらく「出版界挙げて」行われたとしても無理な計画だった可能性が高い。いずれにせよ、第三セクターとして正式に JBC としてスタートを切った時に、「共同倉庫がまず当初の構想」という言葉で示されているように、実質的に平野の当初構想は失われている。平野にとっても「すでに JBC は個人の手を離れて、公の存在」となっており、彼個人の当初構想とのずれは、現実的な問題、特に実際に共同倉庫としての JBC を稼働させるという問題の中で後景化していったのだと思われる。

一方で JBC の立地場所、いわば地元にあたる須坂市にとってみると、JBC 第一には「公共事業」「開発事業」という位置づけにあった。第三セクターと言う形で JBC が設立されたものの、須坂市はあくまでも事務局を用意し、土地と金を出して、事業化を待つという立場であった。書籍流通の遅れという問題は須坂市という自治体にとっては必ずしも当事者意識を持てる問題ではなく、第三セクターの事務局として送り込まれる市の職員が出版産業に関しての専門的な知識を得る機会はほとんどないことを考えれば、JBC 全体の動きの中で市が受け身の姿勢になることを責めることはできない。当時、事務局として参加していた須坂市元部長玉井淳一氏の話によれば、第三セクター内では基本的に議事録等の作成と、いわばスポンサーである市への情報提供が多くの業務であったという。実際、出版業界で長年働いていたとしても流通について必ずしも詳しくなるわけではないと考え、致し方ない状況であったといえよう。このことは、須坂市の市議会における議論がつねに「伝聞形」であることから読み取ることができる。

次に、現在の進捗状況と今後のスケジュールの概要についてであります。JBC 推進委員会は現在の出版社 10 社、取次会社 6 社に新たに書店などのメンバーを加え、拡大推進委員会として引き続き JBC 計画について調査研究、検討を続けていく予定とのことでございます。¹³（下線は本論文著者によるもの）

その一方で、地元にとっての影響という面で、出版文化を含めた文化振興を地元の文化と組み合わせていこうという意図が、ほとんど読み取れないことも注目すべき事実である。これは、平野稔が当初から地域と全国の文化を結び付けて語っていたこととは対照的と言える。

再び、須坂市議会の会議録に戻れば、JBC についてはその開発および資金に関する問題がほとんどである。出版業界の動きを受けてのものが多数であり、須坂市からの働きかけや須坂市そのものの文化に関係する言及はほとんどない。この傾向は、1994 年 3 月の議会における質問に圧縮されている。

このことについて、昨年、永井市長を先頭に議会の代表及び企画財政部長も同行のもとに、書籍流通の先進地ドイツ及びフランス等を、ジャパブックセンター計画の事業目的達成のために視察されました。視察の結果を永井一雄議員が 12 月議会で報告されております。その報告の中に、日本のジャパブックセンター計画が実現されることにより、我が須坂市が書籍流通基地としての役割を担うことになれば、その経済的、文化的波及効果は、以前から市長が言われておりますように、その効果は図り知れないものがあると参加者全員が確認した。市長を初め、関係者の一層の御努力をお願いすると、このように報告されております。私もこの計画が早期に事業着手できますよう願っておる次第であります。そこでお伺いいたします。¹⁴（下線は筆者によるもの）

JBC の波及効果で期待されるのは、第一に経済的、次いで文化的なものであった。これは議員個人の発言にすぎないが、地元にとっての意見も同様だったことが、地場新聞「南長野新聞」や「須坂新聞」「信濃毎日新聞」からも読み取ることができる。JBC の物流基地が建設される予定であった須坂インター周辺の開発は、いわゆるバブルが崩壊し全国的に景気が低迷する中で、須坂にと周辺地域にとっての希望の星であったし、そこに日本の出版流通を支える倉庫ができるとなると、その効果に対する希望は大きなものになるのが当然であった。

そもそも JBC 以前から、インター周辺の土地開発は注目されていた。JBC 設立前後の地元新聞に記事を追えば、次のような JBC も計画に入っていた高速道路一体の開発事業への期待にあふれた記事が次々と繰り返し現れてくる。

「更北の 1.5 キロ区間事業化へゴーサイン 地元の熱意と協力に県が決断」¹⁵「7 ヘクタール 33 区画来週分譲へ 景気回復足踏み状態の中 市『希望多い』と期待」¹⁶「動き始めたインター周辺開発 須坂市アビス（信州名品プラザ）テナント募集へ」¹⁷「新たな顔へ進む化粧直し インター周辺集客力期待大きく」¹⁸

その一方で、全国紙には「売れぬ工業団地地方の「重荷」に 経営に甘さ、財政圧迫」¹⁹など先行事例の失敗記事も載せられている。こうした状況においては、JBC への関心も、それが地元で作りに上げる可能性がある文化よりも、経済効果を中心としたものになったことは特に不思議ではない。

そのため JBC 立ち上げ後の関心も、その進捗状況について、特に実際に成立を見るのかに集まっていく。そして時とともに須坂長野東インター周辺の開発もそれほど順調ではないことが窺える記事も増えていく。JBC が成立した年の新聞記事には「分譲の申し込みにぶく製造業以外も含め明日から二次募集」²⁰と言った記事も現れてくる状況であった。須坂市議

会会議録に戻っても、第三セクターが立ち上がって以降、実際に事業が始まるのか、建築計画の遅れはどうなるのかという指摘に対する答弁が繰り返されている。

こうした中で、一步一步着実に進んでおりました、先日古谷議員の御質問にお答え申し上げますとおりの、JBCの取締役会の中で厳しい議論を重ね、市民の皆様に御迷惑をかけない、間違いのない方向で、早く立ち上げに向けて最大限の努力をいたしておりますし、今後もまたいたしてまいる所存でございますので、御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げますとさせていただきます。²¹

最初に、JBC倉庫立ち上げについての経過についてであります。この経過につきましては、今までの議会定例会の都度申し上げてまいりましたとおりでございまして、昨日の永井一雄議員の質問でも御答弁申し上げますが、出版市場が3年連続で総販売額が雑誌等を中心に前年度割れを起こしているという大変に厳しい経済情勢にあることから、民活法と新たに中小企業等協同組合法に基づく事業協同組合を設立して高度化資金を活用しての事業立ち上げの方法についても検討すべきであるとして、現在その両方の案で全体計画の洗い直しを行いまして事務局段階での検討がされております²²

計画が明らかに停滞してくる2000年以降は、進捗の遅さ問題、投入した資金の回収などより具体的な問題が議論の中心に移っていく。一部にはJBCに対して損害賠償請求をすべきではないという議論まで登場することになる。

もちろん、これら地元における議論の中で、日本全体の出版流通の問題やJBCのもたらす文化について語られなかったわけではない。永井市長の「知識産業の集積」による特徴ある都市づくりに触れている記事、「須坂ブックセンター 文化の集積へ夢膨らむ構想」と銘打った元旦記事では、

出版界では電子出版時代をにらんだ取り組みが進むだろう。マルチメディア研究所のような施設も、出版文化の集まった場所ならメリットが大きいはず。

出版社がくれば、作家や評論家、研究者、ライターたちが集まってくる可能性も強い。書籍で、また映像や音声、文字を組み合わせたマルチメディア技術で彼らのメッセージを世界に伝えることができれば―。²³

と高らかな希望がうたわれている。ここまで理想像を追いかけていない場合でも、たとえば次の須坂市議会の議論に見られるように、日本全体の出版に対するインパクトとそれによる文化発信性を語っている例もある。

しかしながら、新刊書は別として、既刊書はどこに、どのくらい在庫があるのかははっきりしていなければ、どのような注文方法をとろうとも本は読者のもとへ敏速に届けることはできないわけであります。

そこで JBC は、従来の新刊書や雑誌中心の販売システムとは異なる新たな既刊書を中心にした販売システムを構築するとするものであります。JBC の共同倉庫に多くの書籍を集積して在庫管理を徹底することによって、いつでも、どんな方法でも書籍の検索ができ、注文に応じて発送する、この JBC 事業があれば、インターネット通販も生きてくるものがありますし、それゆえに関係業界からこの事業の重要性が認められ、注視されているものであると思っております。²⁴

こうした議論の中には、出版流通という本題からそれはするが、文化資源学の研究として見逃してはならない点がある。それは、市議会においてもまた地場新聞においても、JBC によってもたらされる新しい文化について語りながら、それらを全体として従来からある地元の文化と融合させ、須坂市全体のまちづくりに反映させる視点が見られないという点である。

須坂市は、「蔵の町並み」を残す蔵のまち、また明治以来の製糸業で栄えたまち、ぶどうやりんごのまちなど、いくつかのイメージを作ろうと努めてきた。2005 年からは「蔵の街並みキャンパス」と称した、大学との協力体制をつくっての地域振興活動をおこなっている。

しかしこと JBC に関しては、こういった地域の動きにつなげようという視点が見られない。須坂市議会の会議録においても、同一の答弁の中で JBC が地域にもたらす影響と、地域文化振興の両方について語っている例があるのだが、その二つはまったく切り離された、別の話題として語られている。ある議員は、JBC 同時期に建設が計画されており、こちらは成立を見た「笠鉾会館ドリームホール」の文化的影響力と、JBC の問題についてまとめて質問しているが、こちらも別々の項目として質問され、全体としての地域文化を醸成するような戦略の議論につながっていない。

JBC は実現そのものが問題となる段階であり、地域におけるまちづくりといった意義について語ることは、前述の新聞で見たような理想像の追及や、先走った議論となってしまう可能性はもちろんあった。そもそも多くの自治体において文化行政が重要な位置を占め、総合的に考えられるようになったのは、2001 年の「文化芸術振興基本法」の成立を見て以降である。その意味では、JBC の事例に文化資源学的な文化経営の読み込みをするのは、酷な要求であるかもしれない。本題からはそれしてしまう可能性があるのも、議論はこの程度にとどめておくが、出版流通が地域文化と結びつく稀有な例であるため、もし実現していたら文化資源における文化経営の側面からも興味深い例になったことは確実であったといえよう²⁵。

話を本題である JBC と地方の問題に戻すと、平野の構想に織り込まれていたという意味においても、また地域からの期待がこめられていたという意味においても、初期段階の JBC には地域性を転換させる可能性を読み込む余地があった。初期構想からも、その理想像から離れて議会で議論されていた物流基地が須坂に移動するという点のみに限定したとしても、中央対地方という出版産業のもつ基本的な構造を変える可能性も含まれていたことが読み取れる。

しかし、いざ実際に計画が動き始めると、議論の中心は実現できるかという問題に、特に後半は責任問題や財源問題に移行してしまった。これは、JBC 本体においても、受け入れ側の地域にとっても同様であったし、そもそもスタート時点でも「経済」が先行したのは事実

である。しかし、単に出版流通が失敗した事例として設定するのではなく、最後に示した地域全体の文化も含めて、須坂市という地域・地方の問題として総合的に見ることは、JBCにとって、そして出版流通改革にとって新たな視点を提供することとなる。

3. 出版流通改革としてのジャパンブックセンター

本章第1項で見たように、JBCは共同倉庫によって取次による従来の物流を支えながらも、委託中心の出版流通を脱却し、書籍の新たな流通構造を作り出す目論みを持っていた。そもそも第2項で示した通り、平野によるJBC構想のきっかけもまた、売れ筋以外の少数の本に対する注文が上手くいかない流通の状況に対する憤りであった²⁶。

1990年代には、「近代出版流通システム破綻論」とでもいべき議論が各方面から出されている。湯浅俊彦の「雑誌や店頭で売れ筋の新刊書籍の補充には確かに合理的なシステムでも、読者からの一冊ごとの注文品には必ずしも十分な対応ができていなかったのは事実です」という指摘が端的な例であるが、同様の指摘は木下修、小田光雄、そして後期のJBC営業の中核を担った畠山貞らによってなされている²⁷。JBCが構想された時代は、「世界にも例を見ない存在であり、効率のよさは世界最高」と称したこともあった日本の出版流通の問題点、特に多品種少量流通である書籍流通に対応してこなかったと言う問題点が直視されるようになった時代でもあった。

この様な時代の要求と合致した新たな流通改革を目指すJBCは、その一方では出版業界のふるまいとしての出版文化を守るための役も、特に公正取引委員会による再販制見直しに際して担わされることとなる。公正取引委員会橋口委員長が1978年に再販制廃止発言をしたことに端を発した再販制見直しは、出版業界をあげての大論争を巻き起こしていた。一部の例外はあったものの、出版業界全体としては再販制護持を掲げており、複数の出版研究者も再販制の支持に回っていた²⁸。そして1990年代末には、再販制の見直しについて、公正取引委員会と出版社刊で行われる意見交換の窓口を、日本書籍出版協会（書協）の理事でありJBC社長でもあった渡邊隆男が務めていた。渡邊と親交があった元新潮社の鈴木藤男の証言によると、公正取引委員会に出版界の努力をアピールする実例として、再販制の弾力運用とJBC計画をアピールするように助言したと言うことである。出版流通改革と言う看板が出版業界の中で常に求められ、流通を担うものではなく、流通を利用するものがその看板を用いて語るという構図はJBCにもまた当てはまっている²⁹。

再販制とJBCの関係は、実は逆の視点、誘致する側の市にとっての問題提起としても現れている。須坂市議会で、再販制見直しの動きがJBCに影響するのではないかという議員の質問に関する答弁である。

次に、再販制度の動向によっては、JBC計画が根本から崩れてしまう不安があるという御指摘でございますが、書籍の再販制度の議論は大変古くて新しい課題として今日も議論をされております。現在、新刊はおよそ年間3万5,000点から4万点以上に上り、この新刊書の大半は厳しい価格競争をしていると聞いております。こうした競争社会の中で、書籍の再販制度の持つ大きな役割は、全国どこでも同じ価格であるということでございます。

現在こうしたことを踏まえまして、出版文化の健全な発展のために、公正取引委員会で議論されておりまして、現在のところ現状維持との観測でございます。万が一撤廃されたとしても、書籍流通のインフラ整備による客注文の迅速化、いわゆる読者に3日で本を届けるという流通改革が、業界として避けて通れない緊急の課題でございますので、版元の共同倉庫は必要不可欠でございます。³⁰

JBCが打ち出したコンセプトは、内部から書籍流通の変革が求められ、また出版流通全般を改革すべしという外圧がかかっていた中で、時代に合致したものであった。書籍中心、注文中心の出版流通の確立し、また従来の出版業界とは異なった業務体制をつくって安い労働力による時間外対応を行い、実験的ではあるが電子書籍を扱おうと言う構想まで含まれていた。この体制は、従来の流通を担っていた取次の物流に近くもあるが、後に登場することとなるAmazonの商品管理体制とも奇妙な類似性を持っている。第5章でも見るようにAmazonも日本上陸直後は雑誌よりも書籍に注力し、それまでの出版業界のシステムを超えるIT化と集約化によって、どの時間どの場所へも発送するというシステムを作り上げている³¹。ただし、JBCが成立したとしても、その当時の大手取次が雑誌型大量物流体制であると言う全体の状況は変化しないし、大手出版社・取次共に雑誌に利益の中心があった状況は変化しなかった可能性も高い。

変化が求められた時代、過渡期的な時代であるゆえの限界も存在した。本論文冒頭で述べたように、2000年以前の出版流通問題は、売り上げに関わる問題ではあるものの、出版産業全体にとってそれほど大きなインパクトを持つことはなくなっている。実際、1999年からJBCの営業担当の中核を担っていた畠山貞は、2014年に執筆者が行ったインタビューに際して次のように述べている。

私は渡邊社長と懇意にしていたので、頼まれてJBCに入ったが、これは実現しないだろうと思った。既に宅急便での書籍宅配はできつつあったし、自前で倉庫を持っている大手出版社にとってはうまみの無い話だった。中小、専門書の出版社にとってはいい話ではあったが。

渡邊社長には、できるだけ早くおやめなさいと言っていた。それでと言うわけでもないが、解散時に40%弱の出資金を返せたのは決断が速かったから。もしあのまま成立し稼働していても、今となっては役に立たないものになっていたはず。

これは現在から振り返っての証言だが、JBC営業担当だった時にも、畠山はルポライターの佐野真一のインタビューも受けている。佐野は2000年に畠山に合った際の様子を次のように書いている。

畠山にあらためてJBC構想を尋ねると、最初に合った時の鼻息の粗さはどこに消えたのか、小さな声で「2001年春に開業できるか、それともポシヤるか、今はその瀬戸際です」と、思わず本音を打ち明けた。³²

2014年のインタビュー内容と併せて考えれば、内部にいた畠山にとっては既に早い段階でJBCは終わるべき構想だと見えていたのだろう。1994年の段階では愁眉の急であった書籍流通の問題も、出版業界全体の売り上げ低下、別業態からの参入による流通の変化の中で、意味を大きく変えていたのである。

2000年前後から取次大手トーハン・日販はそれぞれ独自の動きとしてIT化を押し進め、出版流通改革を始めている。例えばトーハンはJBC立ち上げの際に当時の社長遠藤が全面協力しており、その後も主要な株主として参加、理事会にも後に会長となる上瀧を送り込んでいる。しかしその一方で、首都圏以外の物流基地として、近畿トライスセンターや中部ロジスティックセンターなど地方物流拠点を作り、また後には閉鎖していく。こういったトーハンの動きはJBCの目指した流通改革イメージとオーバーラップする。さらにトーハンは注文品専門サービスを行う子会社ブックライナーを立ち上げる。またその後、クロネコヤマトの子会社であったブックサービスも、書店向け客注配達サービス、「おとりよせ@ブックサービス」を開始する。手数料の取り方や在庫の持ち方という点ではJBCとは異なるが、畠山の述べているとおり、この時点ですでにJBCが担べき機能は従来の出版流通プレーヤーと他業種の宅急便とによって代替されつつあった。

出版流通改革としてJBCを考えると、1990年代の出版業界のおかれている状況、単に流通の状況のみではなく、再販制維持の最後の詰めの時期であったということも含めた全体的な状況を見出すことができる。そして、出版業界のふるまいという意味での出版文化の負の側面も映し出す鏡となっている。2014年の筆者によるインタビューの中で畠山はこう述懐している。

JBCには結局リーダーがいなかった。構想を出した平野さんはアイデアマンであり、非常に優れたスポークスマンだったが、流通事業を立ち上げるリーダーシップをとるタイプではなかった。社長の渡邊さんも、交渉は粘り強くやるし人当たりがよい人だが、強い指導力でみんなを引っ張る人ではなかった。須坂市の人々も出版については素人で、金と土地は出すが、実際の運営には口を出すことができなかった。

出版業界は、再販制維持や新規参入に対しての抵抗など、従来のシステムを変更させようとする圧力に対しては、団結して立ち向かう組織力を持っている。翻って、自ら新しいことを始めようとする際には、横の組織力よりも、牽引力となるリーダーシップが必要になる場合が多い。例えば、次章で詳しく見ていくように、明治大正期に成功した雑誌の定価販売導入は、取次各社の強力なリーダーシップと、そこで示された方向性に従来の利益構造とは別の可能性を見出して協力する書店という体制が整ったうえでの成功であった。もちろん、多様性が重要な出版産業において、特定の方向性に向けて強制力を働かせるべきではないといった意味では、強力なリーダーは存在しないほうがよいのかもしれない。しかし、取次を軸とした出版流通が役割を縮小し、ネットや電子書籍までを含めた新たな出版システムが求められる中で、リーダー不在というふるまいとしての出版文化が足かせとなる可能性は高い。

大手出版社が JBC に積極的に協力しなかったことは、大手は独自路線、中小は連合してスタンダード化を目指すと言う、今日の電子書籍に関する動きとオーバーラップする。発行する・扱う出版物の内容については個々のプレーヤーに任せるとしても、新たな出版システムを作りあげるためのリーダーシップを、とりえる立場のプレーヤーがとるべき状況にきている。いかなるプレーヤーがどのような役割を果たそうとしており、それが読者にいかなる影響をあたえるのかは、最終章で議論することとなる。

JBC は、失敗に終わった未完のプロジェクトである。そこでなされてようとしていた流通システムは、既存の流通経路や出版業界のふるまいを根本的に変えるものではなかった。出版業界全体が、読者や作者の出版文化を盾にとり、産業の従来型のふるまいとしての出版文化を守るための旗印として JBC 構想を利用したという側面も持っている。しかしながら、JBC が無意味だったわけでも、単なる言い訳に過ぎないプロジェクトだったわけでもない。JBC が意図した書籍への注目、そこに読み込まれた中央と地方の逆転といった要素には、単に「もの」としての出版物が効率よく読者に届くというだけではない、社会に出版物を配置するあり方を変える可能性を、あくまでも萌芽ではあるが読み取ることができる。

とはいえ、2020 年現在からの後知恵的な視点にはなってしまうが、JBC で掲げられた出版産業のふるまいの変化、つまり雑誌中心の流通からの脱却がなされるためには、産業利益が大きく棄損されるという危機的状況の到来を待たなくてはならなかった。その理由を見るためには、雑誌中心の構造が作られてきた、そのプロセスと経路依存性の経緯を確認しなくてはならない。この確認は、一度強力な力で作られたふるまいとしての文化が長期間にわたって定着する実例を示すことにもなる。第 4 章では雑誌の販売について、発売日と価格という二点が出版流通の前提として確認され、又確立されていく事例を見ていく。

さらにいえば、JBC で示された理想とその可能性は、「ジャパブックセンターの夢と現実」から「出版流通の現実」へと議論を拡大させる契機となる。第 5 章では 2010 年前後に安定的であった状況が崩れ、出版流通を支える取次が否応なしに変化せざるを得なくなった状況を確認する。さらに出版物の配置を支える出版業界のふるまいという観点に立ち戻り、問題を整理していく。

1 本章は鈴木親彦「ジャパブックセンターの再評価 出版流通研究の拡張可能性を視野に入れて」『出版研究 45 号』日本出版学会（2014）pp.159-179 をもとに再構成している。再構成前は純粋に JBC の歴史を追った論文であったが、本論では特に結論部分を大きく書き換え、業界のふるまいとしての出版文化を明確にすることを目指した。

2 島山貞「付論「ジャパブックセンター（JBC 構想）顛末の記」『出版販売試論 新しい流通の可能性を求めて』論創社（2010）が唯一の振り返りと言ってよい

3 JBC からの株主通知「ジャパブックセンター解散」

4 『新文化』1997 年 12 月 25 日（1997）

5 正式には「民間事業者の能力の活用による特定施設の整備の促進に関する臨時措置法」、「この法律は、最近における経済的環境の変化に対処して、経済社会の基盤の充実に資する特定施設の整備を民間事業者の能力を活用して促進するための措置を講ずることにより、国民経済及び地域社会の健全な発展を図り、あわせて国際経済交流等の促進に寄与することを目的とする。」と言うもので、指定を受けると補助金や無利子での融資などの優遇を受けることができる。

6 この点に関して、JBC 議事録にも理事会人事に関しての対立が明確に残されている。また平安堂の社史をまとめた本の中で、平野稔が上瀧体制のトーハンに問題があるとの批判を繰り返している。平安堂『平安堂八十年のあゆみ』平安堂（2007）pp.161-176

7 JBC の PR パンフレットより抜粋。JBC は事業計画を設定し、東京に事務所を構えた 1999 年に、PR 用のカラー刷りパンフレットも作成している。そこには、以下の 9 つの項目が特色として掲げられている。

1. 読者との絆を大切にす出版流通の理想に向けて。2. 混乱する本の流通経路、その標準化への挑戦です。3. 集約化で出版業界に新たなコストダウンの方策を。4. 読者ニーズに対する業界のレスポンス向上に貢献。5. 本の流通のプロとして行き届いたサービスを提供。6. 物流の安定性を確保できる「須坂市」を拠点に。7. 地元からの追い風を受けて、好条件で計画が始動。8. 業界を挙げて構築された最新データベースを軸に。9. 利用者の立場に立った情報ネットワーク化を推進。

8 第2章で示した通り、文化資源学において文化と法律や行政の関わり、特に文化政策という視点は重要な軸となっている。ただし、「文化経営」という言葉には、商業的な意味での経営や文化政策のみにとどまらないより広い意味が込められてもいる。

9 平安堂（前掲）

10 平安堂（前掲）pp.144-145

11 「沿革」（平安堂 Web サイト）<http://www.heiando.co.jp/company/index.php>

12 平安堂（前掲書）P.145

13 須坂市議会会議録、平成6年6月14日（1994）

14 須坂市議会会議録 平成6年3月9日（1994）

15 『南長野新聞』1994年10月14日記事（1994）

16 『北信濃新聞』1995年11月27日記事（1995）

17 『須坂新聞』1995年10月7日記事（1995）

18 『信濃毎日新聞』1995年11月14日記事（1995）

19 『日本経済新聞』1995年4月18日記事（1995）

20 『信濃毎日新聞』1996年2月29日記事（1996）

21 須坂市議会会議録 平成9年6月12日（1997）

22 須坂市議会会議録 平成12年6月14日（2000）

23 『信濃毎日新聞』1995年1月1日記事（1995）

24 須坂市議会会議録 平成12年6月14日（2000）

25 なお、偶然ながら東京大学大学院文化資源学の教員である小林真理准教授（当時、現教授）が、2013年度より学部学生とともに「蔵の街並みキャンパス」に加わり、須坂市の文化振興について研究していた。

26 平安堂（前掲）pp.143-145

27 木下『書籍再販と流通寡占』、小田『出版社と書店はいかにして消えていくか』、畠山『出版流通ビッグバン』、湯浅俊彦『デジタル時代の出版メディア』ポット出版（2000）

28 再販制の問題については第2章を参照。箕輪『本は違う イギリス再販制裁判の記録』、木下修（1997）『書籍再販と流通寡占』

29 鈴木藤男（講演）「電子「書籍」の再販について考える—公正取引委員会への異論—」出版流通研究部会（2013年11月12日）

30 須坂市議会会議録 平成9年6月12日（1997）

31 横田増生『潜入ルポ アマゾン・ドット・コム』朝日新聞出版（2010）、脇英世『アマゾン・コムの野望』東京電機大学出版局（2011）

32 佐野真一『誰が「本」を殺すのか』（文庫版）新潮社（2004）p.152

第4章

雑誌流通改革に見る衝突と協力

第4章 雑誌流通改革に見る衝突と協力

第3章に引き続き出版流通改革の事例を再検証していく。前章ではJBCの再検証を通して、雑誌中心の出版流通という問題、出版産業のプレーヤー間での流通に対する足並みのそろわなさなどが示され、さらに流通改革において出版文化がむしろ産業としてのふるまいの固定化に利用されてきたことを示した。本章では、こういった状況を生む前提となったプロセスを二つの事例から確認していく。雑誌の流通が確固たるものになった後に生じた発売日問題、そして雑誌が出版産業の軸となっていく根源となった定価販売制の確立である。産業のふるまいとしての出版文化を考えると、前者からは相互のふるまいの衝突と結果としての出版文化の継続が見出せる。後者からは、強力なリーダーシップによるふるまいの根本的な変化が、その後に起きる別の改革においては業界の記憶として根付いた出版文化となり、新たな変化を抑制するという状況が分かる。

出版物を扱う際に、少なくとも流通の機能上においてははっきりと「書籍」・「雑誌」の二区分が設けられている¹。この区分においては、雑誌こそが2000年台初頭までの戦後日本の出版業界を支えてきた。2章で確認したように、全国的な出版流通も、定期的に発行され、管理がしやすく、売上げもとれる雑誌に適したシステムに則るものとなってきた。しかしながら、生産・流通両面の中心からの距離の問題によって、地方によっては発売日が数日遅れるという事態が生じてきた。この問題は完全には解決できていない。これは、明治時代の全国読書圏の成立から改善を要求され、2000年代に入っても要求され続ける問題である。

この、全国にできるだけ均質に物流を行うという動きは、漫画雑誌の全盛期において「届いている雑誌の発売日を遅らせる」という逆向きの動きにも発展する。これが、鉄道弘済会売店での早売りに対して出版業界あげての議論が巻き起こった「発売日論争」である。これは、まさにこれまで積み上げてきた出版業界のふるまいとしての出版文化を守る動きとしてみることができる。

雑誌を巡る出版文化護持の動きは、より制度的な部分にまで踏み込んだ事例からも見ることができる。その早い例は1914年に、当時加熱していた雑誌の販売競争・割引競争を防止するために大手出版社と大取次によって作られた「東京雑誌組合」である。この雑誌定価販売の動きは、出版流通における雑誌のあり方や各プレーヤーのふるまいを根本的に変化させた。そして1970年代から活発になる再販制見直し反対運動での出版文化の扱いに関連して、この定価販売制の記憶が再販制護持の旗印として言及されてきた。雑誌と言う「速報性」と「共同性」の高いメディアを社会に配置するという動きを見ることで、こういった雑誌流通改革の動き、およびある意味で一度確立したふるまいが新たな変化を阻む出版文化のあり方と出版流通改革の関係を見出すことができる。

なお、速報性および情報の共同性どちらでもメディアとしての位置が揺らいでいる点でも、また出版流通を支えるメインの収入源であったという長年の評価が覆りつつあるという点でも、2000年以前と比べて2020年現在においては雑誌の置かれている位置が変容している。却ってそれ故に、流通改革が追及した均質性とそこに読み込まれる出版物の配置の意味を相対化することが可能になっている。

1. 1975年の「発売日論争」：業界と読者

本項では、1975年に起きた「発売日論争」を取り上げる。この問題は2012年に執筆した修士論文において中心に置いた事例である。当時の論文では、出版流通において、流通の速さと中央からの距離を改善する流れに一見矛盾する事例としてこの問題を取り上げた。そして、の論争は、産業のふるまいとしての出版文化という面からみると、各プレーヤーと業界全体の動きを確認することができる重要な論争である。本章では、修士論文掲載の発売日論争に関する事例部分を中心に利用し、問題の位置づけについては本論文に合わせて大きく修正している。

この論争は、「早売り」と呼ばれる商行為が、社会的状況を受けて出版業界全体に波及する議論となった事件であった。まずは、早売りとは何かを簡単に説明しておく。現在、出版業界内の雑誌小売に関しては日本雑誌協会、日本出版取次協会、日本書店商業組合連合会(以下日書連)が雑誌発売日励行本部委員会を結成している。この委員会における協約によって出版物の発売日は地域ごとに決定されており、「同一地区同時発売」と呼ばれている²。商品発送のスタート地点となる大手取次の拠点がある東京からの距離に応じ、都道府県単位で徐々に発売日が遅れていくという仕組みになっている。出版情報などに掲載されている発売日は、出荷日がベースとなっているため、地域によってはその1日後、2日後に店頭に並ぶという事態が生じる。一方で、取次の休業日と発売日の関係、またはスタンド店など二次卸を利用している場合などに、実際は設定された発売日より早く店頭で出版物が届いている場合もある。この状況で、雑誌を受け取った店側が発売日より早く出版物を店頭に並べてしまうことが、早売りと呼ばれる行為である。

例えば、少年向け漫画雑誌大手の一角を担う集英社『週刊少年ジャンプ』は毎週月曜日発売(月曜日が祝日の場合土曜日に発売)となっている。多くの書店では月曜発売なので月曜日に店頭で並ぶのだが、一部の書店や雑誌スタンドを併設して数冊程度雑誌を販売する酒屋など書店以外の小売で、発売日以前に店頭で置かれる様な状況がある。これが早売りであり、発覚すると小売業者へのペナルティーの対象となる。

ただしこの「同一地域同時発売」は、読者側からすると必ずしも受け入れられるものではない。2001年に四国新聞のコラム「シリーズ追跡」に掲載された記事では、「いつまで続く、雑誌2日遅れの発売」と銘打ち、徳島以外の四国地方では雑誌が2日遅れ販売になることへの問題提起を行っている。

一九九〇年五月、シリーズ追跡の第五回で取り上げた「なぜ遅れる週刊誌」。東京などに比べ週刊誌が二日遅れで発売される香川の読者の嘆きを取り上げ、反響を呼んだ。あれから十一年、事態は一向に改善されていない。対照的に岡山、広島では三月中旬から一日短縮され、東京圏の翌日発売が実現した。この高速交通時代、情報化時代に香川では、なぜ二日遅れが改善されないのか。読者はいつまで、このデメリットを受認しなければならないのか。二十一世紀に持ち越された「同一地区同時発売」の制度と、幾つかの「なぜ」を追った。

(中略)

「高松の発売が郡部より一日早い時代もあったんですがね」県書店商業組合の政本公男専務理事は「近辺の書店がターミナルまで雑誌を引き取りにきて、いち早く店頭に出していた」と話す。早い話が制度破りのフライングだが「慣行として黙認されていた」という。

ところが十数年前、空前の少年漫画ブームで事情が一変。人気雑誌は奪い合いになり「発売日のずれは死活問題」と郡部の書店が組合を突き上げた。この時、発売日を「後ろ(郡部)に合わせて統一」(政本専務理事)したのが、二日遅れの定着につながった。

(中略)

実際、「たかが一日、二日の遅れに目くじらを立てなくても。読者の不満だってあまり聞こえてこない」と言い放つ書店主は少なからずいるという。「取次会社が東京発送を前倒ししてくれさえすれば片付く話」と、中央にゲタを預けて傍観者を決め込む声も。

読者の最も身近にいながら、読者の便益を第一義に考える姿勢はそこには感じられない。〈一日目の壁〉より〈二日目の壁〉の方が、問題の根はどうやら深い。³

この記事によると、10年前にも同じ内容を掲載しているという。とすれば、比較的再燃しやすい問題であるということもできるだろう。これは雑誌のみにとどまることなく、話題の出版物が発売されるたびに、店頭では発売日の朝にいち早く手に入れようと読者が列をなし、店によっては通常よりも開店時間を早めて販売するという状況が見られた。例えば、2000年前後に刊行され、発売のたびにベストセラーとなった『ハリー・ポッター』シリーズをいち早く手に入れようとした人々の熱狂が例として挙げられるだろう。しかし、「シリーズ追跡」で述べている様に、本当にこの問題は「読者の便益を第一義に考える」とことと繋がる話なのであろうか。この問題は、流通によって作られた読者側の出版文化が、逆に流通に物申す意識として前提化してきたものだといえる。インターネットでの情報収集、デジタル雑誌販売サービスが普及している現在においても、紙の雑誌についてネット上で「雑誌の早売り店を教えてください」などの情報交換が行われており、一定数の読者にとっては未だに定期販売誌を発売日より「早く手に入れる」という行為に対するニーズは存在している⁴。

一方で、出版業界人のふるまいとしての出版文化を考えると、雑誌の販売に関しては別の問題、「届いている雑誌を敢えて遅く売らせる」という行為が立ち現れてくる。1975年に、通常の流通とは異なった物流ルートを持つ鉄道弘済会売店において早売り行為が一斉に行われた。この状況に対して、一般の書店が中心に作られた組織である日書連が反発し、弘済会には早売りの停止を、出版社と取次には早売りに対する規正強化を求めたのが発売日論争である。なお発売日論争は、この事件を指す固有名詞として正式に使われている用語ではないが、問題を端的に示す用語として修士論文執筆時に採用したものである。

なぜ発売日が問題になったのかは、後で示す様に社会的状況もあったが、店頭への到着が「早い」または「遅い」という概念が、出版物に付与されていることに起因している。これは流通の担い手にとっても、消費者にとっても絶対的な判断基準ではなく、出版流通発展の中で形成されてきたものである。

ではまず、1975年の発売日論争について詳しく見て行こう。発売日論争は、先述の通り

鉄道弘済会による集団的なルール違反によって生じた。しかし、単に流通スピードが守られないというだけでは、大きな問題にならなかつたはずだということもできる。その背後あったのは、出版物を巡る社会的状況の変化があった。それが、「マンガブーム」の発生によって少年週刊五誌⁵とよばれる漫画雑誌の売り上げが急増したことである。週刊少年五紙の売り上げは、昭和45年時点で五誌合計1億4876万冊、昭和49年の時点では2億4275万冊と、5年間で1.6倍という増加をたどっており、これは同期間における週刊誌全体の伸びが1.09倍であったことに比べて非常に大きな増加幅となっている⁶。

もう一つ、新業態参入という問題、つまり鉄道弘済会売店の持つ販売力の向上という問題

「発売日問題」に関する主な『新文化』掲載記事一覧		
日付	新文化 記事見出し	記事概要
2月13日	雑誌発売日問題が再燃	マンガブームによる少年週刊五誌の売上増により、問題が再燃。
2月20日	京都・東京で早売り	弘済会・スタンド業者による早売りにたいして雑誌発売日敢行京都地区委員より報告。 日販、中央社が指導監督を実施として、当分静観の方向。
6月26日	雑誌問題に総力体制	6月20日に日書連が雑誌問題特別委員会を結成。内部に雑誌発売日調査委員会を設置。
8月28日	雑誌発売日協約改定を提案 (日書連)流通期間による 差認めず	日書連は、出版社、取次、弘済会、卸売と交渉を進める一方で総決起大会の準備。 取次は「取協として検討する」と回答。 弘済会は「書店とは競合しない」という考えを変えず。
9月11日	雑誌発売日問題、打開へ 弘済会も早売り中止	共産党系議員の仲介で9月4日に日書連と弘済会が協議し、弘済会側が前日発売の中止を約束。
9月18日	雑誌発売日 即売も当日発売 (児童七誌)	即売所が「全雑誌の当日当売はすぐにはかなえられないができる範囲から実施していきたい」という姿勢に変更。
10月9日	発売日問題 13日の小委 で決着か 大詰め、残る週 刊誌も当日に	即売所が「当日発売の実施期日は、十月十三日の委員会の場で明示」と回答。
10月23日	書店・スタンド紛争に幕 発売日問題 即売も完全実 施へ	即売所が10月17日に「全雑誌を十二月十一日から実施したい」と発表
11月20日	協約修正で罰則強化 雑誌 発売日違反処置は厳しく	協約を修正して罰則を強化することで、監視委員会の設置は避ける事が決定。 罰則決定時に違反者の利益を代表する委員は出席できなくする。

表 4-1 『新文化』掲載記事の概要

があった。1970年代は「鉄道売店」などと呼ばれていた鉄道弘済会売店が、「キヨスク」と呼ばれるより親しみやすく、また一般的な形態へ変化していく転換期であった⁷。その上弘済会は、国鉄の輸送網という自前の経路を持っており、共同配送によるトラック輸送とは別に雑誌を駅売店に配送することが可能であった。この状況で、到着した日に即店頭で並べることによって、いわば組織的な「早売り」が可能になったのである。この弘済会の行動を日書連が問題視して調査を始めたことがきっかけに問題が拡大した。ここでは1975年の展開を、出版業界の専門新聞である『新文化』の記事を元に整理していく。なお、関連する記事概要を時系列でまとめたのが表4-1である。

最初に記事が登場するのは1970年2月13日である。この記事では、早売りが行われているらしいことに言及し、問題化する背後にマンガブームがあることを述べるにとどまっている。続いて翌週の記事では、具体的に鉄道弘済会の名前が上がってくる。売店での雑誌早売りに対する調査が行われ、鉄道弘済会の主取次であった中央社からの指導が入るということで、一応の解決に至ったという記事である。記事では「当分の間静観」と書かれている通り、この後数ヶ月は弘済会の早売り問題についての議論は紙面に掲載されなくなる。この段階では、まだ大きな事件に発展する様子は見られない⁸。

しかし6月26日に再び掲載された記事では状況が一変する。それまで三面の小さな記事だったものが二面の主要記事になり、見出しも「雑誌問題に総力体制」という勇ましいものとなる。ここでは、早売り状況の改善がなされないことにしびれを切らした日書連が6月20日に雑誌問題特別委員会を結成、内部に雑誌発売日調査委員会を設置して本格的に調査に乗り出すことが報じられている。ここにおいて、弘済会と日書連の対決姿勢が明らかなものとなった⁹。

8月26日号では、日書連の動きが一層活発化していることが報じられる。「雑誌発売日 協約改定を提案(日書連) 流通期間による差認めず」という大見出しの下には、「日書連 総力を挙げて展開」との小見出しが置かれており、日書連が「早売り根絶総決起大会」準備を行いながら、出版社、取次、弘済会と交渉も進めるといふ、業界全体を巻き込む運動を行っていることが報じられる。記事によるとこの段階で弘済会は「書店とは競合しない、発売日の早い方に合わせるべきだ」とコメントしており、日書連の動きに対抗する姿勢は変わっていない¹⁰。

対立構造が崩れるのが9月11日号の掲載記事である。この号では、二面に黒地白抜きで「雑誌発売日問題、打開へ」、その下に「弘済会も早売り中止 取次系スタンド 実施に入り違反激減」と見出しが打たれ、今まで以上に大きな紙面が割かれている。記事によると9月5日に書店、取次、弘済会売店などの代表が協議を行う「発売日敢行本部委員会」で、雑誌発売日に関する協約の修正が協議される前日に、言わば滑り込みの形で弘済会側が早売り中止を申し出たということになっている。ここでは、衆議院議員の仲介で日書連と鉄道弘済会が会談を持ち、発売日を守るという形での約束文章を交わしたことが記されているが、その前後の水面下の動きははっきりとしない¹¹。

いずれにせよ、この合意を受けて発売日論争は解決方向へ向かうことになる。翌週の記事

では、弘済会に続いて雑誌即売店と呼ばれる、いわゆる雑誌スタンド店も発売日厳守に合意し、まずは影響の多い漫画雑誌から順次徹底していくと約束したことが報じられている¹²。10月に発行される各号では発売日厳守の合意が進む様子が報じられていき、10月23日号では『発売日問題 書店・スタンド紛争に幕』として、最終的な合意に至ったと報じられる¹³。以降はこの合意を文章化する過程が報じられていくことになるが、そこには既に「発売日問題の解決後、発売日違反が起こったさいの処置をどうするかをめぐって話し合いを進めている」¹⁴と記されており、業界としては解決した問題となっていることが分かる。ここにおいて、2月から始まった発売日論争は決着をみる事となった。

発売日論争を冒頭で設定した出版文化の区分で考えてみると、そこには永嶺が指摘する歴史的に形成された読者の文化から生まれる「早く」という要求と、業界の文化による「均質に」という要求がぶつかりあり、場としての流通の方向性に影響したと整理できる。これは言うまでもなく、第2章において示して出版流通全国化、永嶺の言葉を使えば同一の流通圏における「読書国民の誕生」を前提とした出版文化のせめぎあい。

ここには、可能性としての少なくとも二通りの解決方法があった。遅い方に合わせて均一性を保つのか、早い方に合わせるために何らかの措置を講ずるのかである。結果としては前者の解決方法が取られ、場としての出版流通は一定の秩序を保ったということになる。この秩序形成は平等化の裏返しと捉えることもできる。四国新聞では中央と比べてどれだけ送れるかを「二日目の壁」と称して問題視している。ここで求められている取り組みが、発売日「プラスX日」での販売をできるだけ減らそうというものだとすれば、発売日論争は発売日「マイナスX日」での販売をなくすことで、やはり均一な流通を達成しよう、不公平をなくそうとする取り組みと解釈することができる。その意味では、遅れと早売りの問題は、業界による同一の努力が別角度から表象されたものということもできるだろう。発売日論争に見える不公平の是正には、読者間の入手時間差の問題も含む。しかし大きな議論となったのはそれ以上に、小売間の販売時間差の問題である。

この結果は、考えようによっては業界が読者を無視したという構図とも取れる。ただし、2000年代に入っても解決できていない全国同時配送の問題を、1970年代の状況で簡単には解決できないことは確かであるし、マンガ雑誌が売上における重要な存在であった以上、日書連側の動きを単純な読者無視と決めてかかるのは厳しすぎる見方であろう。

ここで注目すべき点は、どちらの方向にせよ流通の場のあり方を変え、または規定するための動きに、まさに出版業界全体が大きな動きとして歩調を合わせた点にある。これは前章のJBCで示した「掛け声」としての業界横断とは全く異なった対応でもある。読者を無視したとしてこの動きにマイナスの評価を加えるよりも、出版業界のふるまいとしての文化が、その範囲から出ようとした業界内プレーヤーの動きに対して掣肘を加えたと例として見ることで、本論で議論したい軸に合致している。そして、この業界としてのふるまい、出版文化が団結した規定の中で醸成されていく例がよりはっきりと見られるのが、次項で示す「雑誌定価販売」の問題である。

2. 雑誌定価販売・委託制への移行：業界文化の醸成

定価販売は、2章で述べた通り再販制・委託制が定着した現在の出版流通のもとでは、ごく当たり前の前提として商取引に組み込まれている。再販制に対する議論は今日も続いているが、質的転換の障害と考える畠山のような考え方もあれば、高須と小田の対談で示されているように再販制の緩和はAmazonといった海外資本やアメリカ型流通の問題との関連で日本側の敗北と捉えるものなど、その前提は様々である¹⁵。本論では再販制そのものの歴史や是非を問うのではない。むしろ、産業構造と文化が一体不可分となって議論を複雑にしている例として捉え、出版業界のふるまいとしてここまで議論を呼ぶものとなった歴史的な事件へと遡って考えていく。

上述の畠山が取次の社員としての本名を明かさずに「寺林修」の筆名で書いている試論では、公正取引委員会の提言を受けての「文化」と「消費者保護」を切り分けた議論が行われている。その中で、

たしかに出版史を繙くと業界は「定価販売制度確立」のために血みどろの努力を払ってきており、まさに業界としては「歴史的必然性」があるが、だからといって昭和二十八年の「出版物法定再販」が同じ意味でイコール「必然性あり」とは断定しがたい面がある¹⁶。

と書かれているが、ここで畠山が言う「歴史的必然性」が今日各所で聞かれる一種の神話としての出版業界の戦いの記憶、再販制護持の文化的淵源につながっている可能性はないだろうか。

ここで畠山の言う「血みどろの努力」とは、明治末から大正期に行われた雑誌の定価販売制度定着の運動のことである。この運動は、その後の産業構造両面にとって重要な局面でもあったが、出版業界に埋め込まれた記憶として業界のふるまいとしての文化を醸成する重要な転機であった。出版業界のニュースを扱う文化通信社で長年出版業界の状況を観察してきた星野渉は今日の出版流通の問題点として以下のように指摘している。

(出版社の雑誌収入の説明を受けて)

流通を担う取次にとっても事情は同じだ。計画的な流通が可能な雑誌は収益性が高いが、一冊ずつ内容が違い、末端の顧客から一冊単位の注文が大量に寄せられる書籍はロットでの流通が難しく、費用のかかる商材なのだ。

(中略・雑誌売上減の話を受けて)

雑誌の収益に依存してきた大手出版社、そして出版産業の物流・決済などインフラ的な役割を果たしてきた取次の経営に打撃を与えている¹⁷。

この雑誌が主力となる出版流通の成立には、一つは第3章で見た日配の成立によるインフラ統合が影響している。更に遡れば、書籍のための客寄せ商品であった雑誌が、定価販売の定着・委託性の定着・業界の組織化によって出版の主役に躍り出る大正期の構造変化が前提となっている。こうしてみると、今日の出版産業が雑誌で利益を上げにくくなり、書籍中心

の体制へとシフトしている様子は、この構造変化以前への先祖返りと見えなくもない。

村上信明もまた、大正の定価販売制を出版取次成立の条件としてあげている¹⁸。第3章で簡単にまとめた内容とやや重なるが、ここで村上と畠山のまとめをベースに置きつつ、より詳細に雑誌定価販売の成立を確認してみる。新聞・雑誌の売捌所から広域の流通が成立し、その中で雑誌を中心に扱う取次が成立したのは既に見たとおりである。こうした初期の取次の中で出版社として成功した博文館の販売ルートの活用し、他の出版社の出版物も扱う東京堂が「雑誌・図書の出版と販売」という取次業の基本形態を持った会社として誕生する。

初期の雑誌の扱いは東京堂の歴史に以下のように書かれている。

明治二十年代の書店は雑誌の販売に力を用いず、わずかに絵双紙や新聞を並べて売るのが精々で、その売上量は出版物の五分程度。大正三年東京雑誌組合成立当時、三割位（以下略）¹⁹

ということであり、雑誌はあくまでも書籍を売る手段として扱われていた。書籍で利益を上げるために雑誌は客寄せ商品として安入り、乱売も行われるようになった。また取次側も書店との取引獲得のため雑誌の賞味をギリギリまで引き下げること、雑誌は流通量が多いものの旨味の少ない商品として扱われていた。

この状況に対して繰り返し乱売防止の取り組みが行われている。明治25年には東京雑誌売捌営業組合の結成、明治43年にも乱売防止協定が結ばれているが、前者は6年で解散、後者は強制力や実効性に乏しくあったが効果がなかったとされている。

安売りに対応するために「身を削るような正味」で行われていた取引対策として、実際に効果を持った団体として立ち現れてくるのが、大正3年に東京堂の大野孫平が呼びかけて作られた「東京雑誌協会」である。当時の雑誌取次7社および雑誌出版社による団体で、定価販売の呼びかけと推進、違反者への取引停止、売掛金延滞対策を軸として活動を行った。なお小売業者・書店についても、同年雑誌取次と小売書店による「東京雑誌販売業組合」が結成されている。このことが雑誌の定価販売への暫時以降を後押しし、完全定価販売制の定着となっていく。この定価販売制と委託制が組み合わさることで、大量の出版物を全国津々浦々に配送するいわゆる大規模出版流通への路が開かれることとなる。

定価販売に対して、委託制が具体的にいつから始まったのかは定かではない。村上信明も引用しているように『日本出版百年史年表』、明治41年に簡単な記事がある。

従来、買切制度が主であったが、大学館が東京市内の小売書店に三～五部を委託し、月に一～二回まわって、売れたものの代金を受取り、また補充する方法を取った（略）²⁰

ここで述べられているのは、今日想像する配本型での委託制からすると極めて小規模かつ限定的なものと言える。この頃の状況は「返品引き売切・買切制度」とも呼ばれているが、出版者が自身で届けられる範囲で委託をお願いして回っている様子は、今日のミニコミ紙などでよく見られる、やや牧歌的とも言える風景である。もちろん、当時の出版者にとってもこ

ういった手法はある程度の安定的な収入につながる効果もあった。

制度の嚆矢であるか否かはべつとして、大規模に委託販売を行ったことで出版史上名高いのが実業之日本社である。明治42年に発売された『婦人世界』新年号について売れ残りの返品を自由とし、公称二十万部の売上を達成している。当時、雑誌といえばやはり博文館であり、女性向け雑誌でも博文館『女学世界』の八万部が首位であったが、この返品自由という方法によって『婦人世界』の売上が一気に抜き去り、三十万部を超える売上を誇る号もあったという²¹。

この後、実業之日本社は委託扱いを『日本少年』『少女の友』にも拡大、大正3年にはついに全雑誌について返品を自由とした。この結果として、明治末「博文館時代」と呼ばれていた時代から、「実業之日本社時代」へと移っていく。委託扱いの定着と並行して、前述の「東京雑誌組合」が取引誓約書を作ることで流通・取引ラインが明確化する。委託制と定価販売の定着を一つの契機として「四大取次時代」とも呼ばれる雑誌黄金時代が到来することになる。

委託と定価販売、今の再販制と委託制に通じるシステムの前提が出来上がったことで、大量生産・大量販売時代が到来。講談社が短期間に大手出版社の座に上り詰めるのも、この時代背景があつてのことである。明治末大正初の動きは、出版産業の現代まで続くふるまいの根本を作り出した文化的根源であり、産業構造の源であった。流通量の拡大と販路の整備は取次の事業を拡大させる一方で、効率性と大量販売の影に返品増加や運賃問題など今日につながる問題の源ともなっている。「委託販売性は、出版業界の転機を告げる革命的かつ悪魔的制度」と村上は評しているが、これは今日問題となっている流通問題への連続性を持っている。

ここまでは、主に村上の叙述に従って大まかに雑誌の定価販売および委託制度の成立について確認してきたが、実際に雑誌団体の発行した資料ではより詳細にその流れを確認することができる。ここから、実際に協会設立に関わった人物らにインタビューをして記録を残した『日本出版販売史』の記述、および東京雑誌協会を引き継ぐ団体である日本雑誌協会がまとめた『日本雑誌協会十年史』での記述を確認したい。その記述の「違い」に、ふるまいとしての文化が一貫性を持つのではなく、時代と状況で変わることを読み取ることができる。

『日本雑誌協会十年史』は東京雑誌協会を引き継ぐ団体として、昭和31年に成立した団体で、「名実ともに出版業界の最も有力な団体として」活動をしてきたと称している²²。戦後日本の出版産業の利益構造を考えると、この自称もあながち大げさなものとはいえない。

『日本雑誌協会十年史』の中での東京雑誌協会に関する記述は、過去に存在した雑誌団体活動をいわば歴史的なストーリーテリングとして振り返るものとなっており、前振りとしての位置づけの「出版関係団体の変遷」の中でまとめられている。そのため、次に見る『日本出版販売史』に比べると当事者性には欠ける。しかし後身の団体がいかに雑誌販売を捉え、ふるまいとしての文化を内在化してきたかを読み取ることができる資料でもある。

では『日本雑誌協会十年史』における、雑誌協会の成立ストーリーを見ていこう。まずは

明治26年に「東京雑誌売捌業者組合」が結成され、早くも明治31年に解体する動きが紹介されるが、「新旧書店間の販売競争が激化し」ていることを引く例として簡単な紹介にとどまっている。ついで「出版関係団体次々に結成」と題して、明治五年の「東京書林組合」、明治20年の「東京書籍営業組合」そして明治25年の「東京書籍組合」の成立が簡単に紹介され、これから「分封」して成立した「いろいろの部門」の一つとして前述の「東京雑誌売捌業者組合」の結成と解体が再び述べられる。

そういった様々な発足する団体の一つとして、大正3年に「東京雑誌組合」、「東京雑誌販売組合」の成立が述べられる。しかし具体的な成果についてはあまり触れられておらず、むしろ「東京図書出版協会」とその後身である「東京出版協会」が「出版権」成立に向けた活動を精力的に行ったことに頁が割かれている。

このようにやや淡泊に進む歴史の記述が様子を大きく変えるのは、「東京雑誌協会」と改名した組合が大阪の雑誌協会と手を握り「日本雑誌協会」を結成した大正13年の記述からである。それまでは各団体についてはあまり詳しく書いていなかったが、ここでは約4ページに渡って日本雑誌協会の規約と規則を引用し、「名実ともに日本における雑誌業者と売捌業者による大同団結団体となった。」と歌い上げている。

この後、ストーリーは戦中を経て戦後の新しい「日本雑誌協会」成立へと続いていく。戦中も日本雑誌協会は独自に雑誌配給の合理化を行っていたが、日本出版文化協会への合流、配給機構も日配に統合される。そして戦後、GHQによって統制機関としての日本出版会や日配は解体することとなるという流れは、すでに見たものと同様である。その後は自治団体として用紙割当の実施を行ったが、昭和21年共産党系および極左出版会の「策謀」(原文ママ)による戦犯追放と日本自由出版協会の設立などを経て昭和24年全国出版協会が結成、これを軸に日本出版団体連合会が設立するとされている。最終的には昭和31年に戦前の日本雑誌協会の財産を引き継いで日本記念会が、さらに新たな日本雑誌協会が誕生することとなる。

『日本雑誌協会十年史』の記述が、戦前の日本雑誌協会を引き継いだ雑誌団体の公式の見解だとすると、注目すべき点がある。この中では雑誌の定価販売と東京雑誌組合・日本雑誌協会との関係についてほとんど触れられていないのである。東京雑誌組合と東京雑誌販売組合の成立時に「再び雑誌の濫売や掛代金延べ払いの弊害をなくす目的で」と書かれているにとどまっている。「血みどろの努力」や「身を削るような正味」とは比べるべくもないあっさりとした表現である。この段階では雑誌の定価販売は当たり前的前提となっており、またとやかく議論するようなものでもないと考えられることもできる。

一方の『日本出版販売史』は当時東京雑誌組合(すでに見たとおり、後に改名して東京雑誌協会)結成に尽力したメンバーに対して、当時を振り返ってのインタビューを行っている。定価販売を定着させ、脇役であった雑誌を出版産業の中心に置くことに成功した出版関係者達の声が残されている。具体的に数名をあげると、すでに村上の論において名前が上がった大野孫平、栗田書店を創業し栗田出版販売の基礎を気付いた栗田確也らが協力している。東京雑誌組合発足時の状況を振り返った証言は、「出血乱売競争に悩む」というインパクトのある見出しから始まる。やや長くなるが以下に引用すると、

明治四十三年には、東京堂の取引高は百万円を突破したけれども、利益はほんのわずかしかがあがっていない。それは雑誌の乱売競争のためである。東京堂は博文館からは特に安く仕入れているからまだ良かった方で、東海堂や北隆館の苦しさは“惨憺たるもの”と形容されるほどだった。なにしろ、雑誌の定価はあってもないに等しく、たとえば「実業之日本」の卸値は八錢一厘か二厘であったが、小売店でこれを八錢で売るという始末。それが結局取次業者にはね返って、これまた出血的な値で卸さざるを得なくなる。困った挙句に再度にわたって取次間に協定を結んでみたが、なんの実行もなく、血みどろの乱売競争はいつ果てるともしれない状態であった。

書籍の方でも定価販売はなかなか守られなかったが、雑誌は余計甚だしかったようだ。当時の小売店ではまだ、雑誌は書籍売るための”客引き”ぐらいにしか考えていなかったせいでもあったが、儲けがないから、したがって雑誌の方の支払いはとどこおり勝ちとなり、取次も発行所も次第に窮地に陥ってきた²³。

このような悲痛な叫びにも似た証言に続いて、村上のストーリーと同様に東京堂専務、大野孫平の登場となる。協力者として名前が上がるのは、東海堂の川合晋、北隆館の福田良太郎などである。大野構想では当初「雑誌卸売業者を以て組織し、発行業者は組合の名誉賛助員」とするいわゆる取次の団体を想定していた。しかし、いざルールを破ったものが現れたときに発送停止などの懲戒を行うための実効性を考えて「東京において雑誌を発行する者および雑誌卸売を業とする者」つまり「書店」以外の出版流通プレーヤーからなる団体を結成することとしたとある。

この後、大正3年2月から3月までの間に組合結成に向けて交渉を行った相手、また規約の制定に向けた話し合いが、福田良太郎の日記を引きながら具体的に書かれていく。協議相手として書かれているのは、実業之日本社、博文館、時事新報社、東京社、同文館、春陽堂、女子文壇社、明治製版所、ニコニコ倶楽部、政教社、富山房、秀才文壇社、興文社、大日本雄弁会、中央公論社、婦人之友社、南北社、英語研究社、婦女界社、東海堂などである。24日の創立総会においても、幹事として指名された15社（時事新報社、実業之日本社、同文館、東京社、富山房、大日本図書、演藝画報社、政教社、中央公論社、市町村雑誌社、早稲田文学社、博文館、東海堂、北隆館、東京堂）に対して、リストから漏れた取次が苦情を出し再調整するなど、協会が発足するまでの細かな苦労が記されている。なお、幹事としては取次7社（東海堂、北隆館、東京堂、至誠堂、文林堂、良明堂、上田屋）および発行所8社（時事新報社、実業之日本社、同文館、東京社、富山房、中央公論社、市町村雑誌社、博文館）で出発している。実はこの取次7社体制というのも、スムーズに決まらなかったことが分かる。

また、東京雑誌組合が結成されたことが即、定価販売の実施につながったわけではないことも述べられている。『日本雑誌協会十年史』では簡単に触れられているにとどまった「東京雑誌販売業組合」が、定価販売に向けた重要なカウンターパートとなっている。証言によれば、東京雑誌組合の結成にあたって事前に「主なる小売業者二十名を招いて、卸売業者七

名もそれに参加して協議」したとある。ここで組合結成の承諾を得るとともに、小売・取次側も定価販売の刊行並びに不正競争を避ける目的を持って東京雑誌販売組合を結成することとなる。東京雑誌販売業組合、東京雑誌組合の結成で、当時の雑誌出版および流通、販売に関わる各プレーヤーが定価販売に向けて足並みを揃えたということになる。

各プレーヤーの共闘体制で定価販売を推し進めていくことになったが、その方法はいわゆるソフトランディングであった。「二十年来の弊風を一挙に」変えるのは難しいということで、大正3年7月からは暫定的な割引販売が認められている。

- ・ 定価九銭までのものは割引せず
- ・ 定価十銭以上二十銭までは一銭引き
- ・ 定価二十一銭以上三十銭までは二銭引き
- ・ 定価三十一銭以上四十銭までは三銭引き
- ・ 定価四十一銭以上五十銭までは四銭引き
- ・ 定価五十一銭以上は十銭ごとに一銭引き²⁴

つまるところ一銭以下を切り捨てにして、まずは一割引を目安に価格協定が結ばれたということになる。なおこの割引率は大正7年にはやや変則的ながら五分引きが基準となり、以下のように変更される。

- ・ 定価十銭までのものは割引せず
- ・ 定価十一銭以上三十銭までは一銭引き
- ・ 定価三十一銭以上五十銭までは二銭引き
- ・ 定価五十一銭以上七十銭までは三銭引き
- ・ 定価七十一銭以上九十銭までは四銭引き
- ・ 定価九十一銭以上は二十銭を増すごとに一銭引き²⁵

最終的には大正8年2月より、完全定価販売制へと移行することとなる。この五年間が長いと見るか短いと見るかは難しいが、少なくとも出版業界全体が足並みを揃えて定価販売を進めたことは事実だと言える。

本項の中心的な議論からは一度離れてしまうが、東京雑誌販売業組合の結成は、単に雑誌定価販売を進めただけでなく、流通と小売の効率化と調整、見方によっては業界内の利益の再分配にもつながっていく。結成時は誰でも加入できた販売業組合も、大正7年からは加入金制度を採用、さらに新規加入者が出店する場合に既存の店舗から一定の距離を保つ様に組合規約を改正している。

「第七条 新加入者ノ営業所ガ現在組合員ノ営業所ト接近シ甚敷妨害アリト認定シタル場合ハ其加入ヲ許可セザルコトアルベシ」「こうして東京雑誌販売業組合は、東京雑誌協会（大正七年改称）と相携えて、雑誌の定価販売の励行に成功し、全国の小売店も又之に歩調を揃

えたので、当の小売店はもとより、間接には発行所や取次の業務も安定した。²⁶」と証言されているが、単純に定価販売の励行のみならず、こうした出版業界内の調整機能を持っていたからこそ、成功し得た体制だとも取れる。

東京での「成功」につづいて各地での雑誌組合が設立されていくこととなる。東京雑誌組合は公的な組織ではないため、各地の団体全てが正式にカウンターパートとしての承認を求めたわけではないが、以下に示すように当時の大都市はほぼ網羅されていくこととなる。

「東京雑誌組合に承認を得た組合」

- ・大正3年：熊本県雑誌販売業組合、神奈川県小田原雑誌販売業組合、大阪雑誌販売業組合、京都雑誌販売業組合、滋賀県雑誌販売業組合、愛知県雑誌販売業組合、長野市雑誌販売業組合、香川県書籍雑誌販売業組合、兵庫県書籍雑誌商組合、高崎雑誌販売業組合、会津一市五郡雑誌販売業組合、静岡雑誌商組合
- ・大正4年：青森西部雑誌販売業組合、足利雑誌小売業組合、福岡市雑誌販売業組合、佐原書籍商組合、九州書籍商組合
- ・大正5年：浜松市雑誌業組合、松山雑誌販売業組合、仙台市雑誌販売業組合、函館書籍商組合

東京雑誌組合そのものものも、発足後に発展・拡大を遂げていく。大正3年に発足した際には81名だった会員も、大正7年に「東京雑誌協会」と改名、さらに大正13年「日本雑誌協会」として拡大していく中で、昭和5年には474名、昭和15年の解散時には559名にも登る会員を抱える、まさに日本の雑誌出版・流通を支える団体として成長していくことになった。

当時の証言で追う定価販売制定着までのストーリーは以上のようなものであるが、『日本出版販売史』には村上の「身を削るような正味」、畠山の「血みどろの努力」の実態もインタビューとして掲載されている。むしろこのインタビューに代表される記憶（それが実際に現在の出版関係者が体験したものでないにせよ）がふるまいとしての出版文化として定着しているとも見ることができる。

ここで大野孫平は、明治末期の取次間の競争の激化のなかで、配送のための馬との馬方の雇入れや荷積みの能率工場、手車の台数を増やして一台あたりの重さを減らし汽車に間に合わせるために、「互いに息せき切って疾走する大レース」の様子などを生々しく語立っている。「毎晩十二時より早く寝ることはなかった。」「ある年の大晦日には、やっと最終の荷を発送し終わって万歳を唱えたら、もう初日がさしていた。」などのエピソードも交えているが、この苦労話は定価販売の問題につながる展開となる。

それほどわれわれ取次の業態というものはみな苦しかった。何しろ雑誌の利益というのは、たとえば「婦人世界」は一冊十五銭の定価で二厘の口銭、それを競争のひどい時は市内までは一厘までやった。博文館ものなぞは原価でやったことさえある。ですから成り立つわけではないんです。当然支払いも苦しくなるんですけども、それでもやっぱり騎虎の

勢いでやらざるを得ない。それから、社員の方は給料の少ないのはもちろん、その上年中無休でやらされたわけだ。²⁷

その時分には、定価売りはしようにもできなかつた。本屋という本屋がみな割引販売をしていた時代だから。そのかわり、売れ残った雑誌も本屋で割り引いて処分したので、返品というものは殆どなかつたが……²⁸

「実業日本」は原価を割ってまで、勉強堂なんかでは売ってましたよ。それから博文館のものは、何部以上か売ると割戻しがくるんで、小売店はその割戻しを目当てにして原価で売っていた。そんなぐあいですから、小売店もぐあいが悪いし、取次もぐあいが悪い。だから発行所に対しても、当然支払いが悪くならざるをえないことになる。²⁹

という定価販売以前のいわば過去の悪夢の語りの中に織り込まれるのが、東京雑誌組合の成果であり、「協定ができてからは元日から三日間は休めるようになったんだね」という証言である。

このような「取次の惨憺たる経済」を抜け出した雑誌販売は、取次を通じた委託制度と組み合わさることによって一躍出版業界の中心を担うようになっていく。すでに見たとおり、『日本出版百年史年表』明治41年に委託の記事があるが、大規模なものではなく、実業之日本社が『婦人世界』売れ残り品返品自由としたのを嚆矢として、『日本少年』『少女の友』へ拡大、全雑誌へ拡大していくというのが定説となっている。この件に関しても、『日本出版販売史』の証言を確認していく。

委託制に近いものは明治初期から行われていた。版元から新刊の出るたびに適當の部数を「送りつけ」て、受ける方も返品せず割り引いても全部売る時代があつたにはあつた。とはいえ「地方から出てくると食事も出せば泊めてやる、こちらも一年に二、三回は見本を持って得意先を回る。それで前に送った品物の精算もすませ、また新しい注文をとる。至極のんびりしたものであつた。」ということであり、明治中期からは結局前金制に移行していたとされている。委託が「復活」したのは、大正時代に取次制度が確立して、定価販売が定着し、小売店の地位も安定した後とされているが、この証言においてもまた「この意味において、定価販売の制度を確立した人々の功績は偉大と言わなければならない」と述べられている。

大正期の委託制度は、2010年代現在の委託制度と基本的には同様のシステムである。小売店は取次に対してあらかじめ一定金額の保証金を収めた上で契約を結ぶ。版元の側は取次に品物を渡し、一定期間（商品によって二ヶ月・三ヶ月・六ヶ月などの期間がある）の後に残品を引き取り、差し引き売上部数について代金を清算する。新刊の多い版元ではまとめて月ごとに計算をしていたということだが、こうなると今日の取次の清算方式にほぼ等しいものである。

ここで栗田・大野ら発言から委託制度の定着を引用してみる。

栗田「明治末年から大正の初年に「返品ききの委託制」が出てきたということは、その頃出版社がさかんに出てきたと同時に、国民の読書力が旺盛になっていたということですね。

(中略)

その当時は、主として雑誌をやっているところでは必然的に書籍には力を入れなかった。雑誌重点の取次が書籍を送る場合には、送りつけでなく、やはり注文を取っておくっておったから、そこに小さいせどり屋の活躍する余地があったわけです。これが大正の初めごろまでの状態です。そのうちに講談社ができ、更に次々と雑誌社ができてくるに従い、書籍も雑誌と同じように、送りつけるようになって、だんだん今の委託制度に進んできたのです。

(中略)

そこに革命的な変化が起きてきた。すなわち、大きい取次店と中小の取次店の境目が、対象の初期にはっきり現れてきたのです。そして、次々と有力な雑誌社が出てくるに従って、大きい取次の取扱は急激に増大する一方、小さい取次の方は発行所から直接に仕入れることができなくて、大きい取次店からおろしてもらって商売をするようなことになり、「又取次」とか「中取次」という言葉も出てきたわけです。」

大野「実業之日本社のやり方と反対に、博文館は相変わらず返品を取らんとという主義であったから、だんだん落ちていったんですね。われわれとしても、余ったら返すという条件の取引なら安心して積極的な部数が扱えるし、小売店もそのつもりで仕入れることができるから、実業之日本社のものはどんどん伸びていく。」

鈴木「雑誌が返品可能と大量生産の時代に入った大正三、四年の頃から、雑誌に対する書店の考え方が百八十度転回したということです。それまで書店は、書籍や教科書に重きをおいて、雑誌は殆ど眼中になかったといっておかされた。…この大変化は、野間さんなどの積極方策の見事な勝利を語るものだと思います。」³⁰

定価販売と委託制度の登場によって、取次の位置づけが重要になったと同時に、この制度にうまく乗った実業之日本社・講談社が、まさに雑誌で伸びていくという事実も読み取れる。またそれまで、『太陽』を始めとする雑誌によって「博文館時代」と呼ばれる黄金時代を築いてきた博文館が対応できず後手に回っていく。博文館そのものは戦後に分割・解体するまで存続し、大橋一族は出版界における存在感を残すものの、この時期以降は出版社の主役の座は新たな雑誌社に譲ることになった。また、この時期以降も大きく発展していく取次東京堂は、もともとは博文館の関係会社として始まっている。そうであったとしても採算の上から発展性のある雑誌を積極的に取り扱わないわけに行かないという大野の述懐もみられる。

すでに見たように、村上は委託制の成立について「革命的かつ悪魔的制度」とのべているが、今日に状況から振り返ると「革命」性も「悪魔」性も、定価販売と組み合わせさせたこと、つまりこの商品としてではなく「量」として出版物を流通させられるようになったことによって増幅されている。そして定価販売については、取次を中心として出版業界全体を巻き込んだの改革によって成立したことが分かる。

このような改革によって、雑誌大量流通システムが確立していくのだが、実際に定価販売に移っていく際に読者がどのような反応を示したかについては、具体的な証言は残されていない。前項で示した発売日の問題に比べ産業構造にも出版物の配置のされ方にも、ふるまいの根本的な変化として大きな影響を与えてはいるが、業界と読者の関係については見えにくい。ただし、小さいながらヒントとなる情報も確認できる。東京雑誌販売業組合結成時の証言に「またこの頃は、雑誌回読会というものが流行したので、雑誌販売業者は回読会には雑誌を売ってはならぬことにし、違反者は除名または取引停止処分にすることにした。³¹⁾」とある。

雑誌回読会については永峰がその営業記録を元に、通常の出版流通とは別個の「読書装置」として評価している³²⁾。名前の通り雑誌の回し読みを提供するための業者であり、契約した読者に購入した雑誌を回覧していた。単に回覧サービスを行うのみでなく、古くなった雑誌を割引いての卸売や販売を行っていた。永峰はこのことによって、都市部以外に住む人々、特に低所得層が読書の機会を得たと評価しているが、本項で見てきた定価販売促進の流れからすると、認めることができないものでもある。

雑誌回読会に雑誌を提供していた書店は規約の通り除名されることとなったのだが、それに対して書店側は損害賠償の訴訟を起こしている。大正 11 年に始まる訴訟は結局組合側の勝訴となり、定価販売の定着を一層後押しすることになっていく。ここでも小さいながらも読者が、または読者と業者の協力で醸成しつつあった一つの読書文化が、業界側のふるまいとして形成されてきた文化と衝突し、その方向性を変えていく状況を見ることができる。

補足的にはなるが、書籍の定価販売について確認しておく。『東京書籍商組合五十年史』を確認してみると大正 8 年に東京書籍商組合の臨時総会での規約修正で、定価販売実施が盛り込まれている³³⁾。ただし、雑誌定価販売の開始時と同様に一定の便法もあった。また、雑誌のように書店側が積極的に組合を作り定価販売に協力したわけではなく、むしろ書店側から定価販売への抵抗が強かったということである。また雑誌の販売競争に比べると大きな割引競争がなかったこともあり、書籍出版社は無関心なところが多かった。その結果として、雑誌は委託が定着していたが、書籍は買い切り主流のまましばらく体制が続き、大量物流は雑誌が先行する状況となっていく。最終的にそれらが統合され、今日の出版流通体制ができあがっていくことについては本論第 2 章ですでに触れた通りである。

この様に、出版流通においては雑誌に付随する状態であった書籍が、出版業界をあげての流通の問題として注目を浴びるのは、戦後になってからのことである、そしてその具体的な対策がとられるのは、前章でみた JBC 以降のことであり、また次章でしめす出版産業の経済的な危機が到来した中でであった。第 5 章では、業界の常識であった状況が大きく変わり、安定的な出版流通とそのふるまいが破綻の危機に見舞われている現在の状況を確認し、その中での出版文化のあり方を見ていく。

1 佐藤健二「テキスト空間論の構想」(2009)

2 「雑誌発売日励行に関する協約」(1971 年制定、1981 年改訂)

3 「シリーズ追跡 いつまで続く、雑誌 2 日遅れの発売」『四国新聞』2001 年 4 月 2 日

4 具体的な数はカウントできないが、例えばクラウドソーシングを仲介するサイト Crowd Works において「週刊少年ジャンプを前週水曜日に早売りしている店舗について情報提供をお願いします」といった

依頼が出ていたり (<https://crowdworks.jp/public/jobs/1252764> 2017年12月31日閲覧)、ネット掲示板で「ジャンプ早売り店を出し合うスレ (*°ー°)★2 [転載禁止]©2ch.net」という情報交換の場が設けられていたりする (<https://medaka.5ch.net/test/read.cgi/ymag/1447681731/150> 2017年12月31日閲覧)。

5 少年週刊五誌とは、いずれも少年漫画雑誌である『週刊少年ジャンプ』(集英社)『週刊少年サンデー』(小学館)『週刊少年マガジン』(講談社)『週刊少年チャンピオン』(秋田書店)『週刊少年キング』(少年画報社)を指す。なお『週刊少年キング』は1988年以降休刊している。

6 「雑誌発売日問題が再燃」『新文化』1975年2月13日号

7 発売日論争からしばらく後ではあるが、キヨスクでの書籍の扱いが成功していわゆる駅中書店に発展、売上を伸ばしているという事が新聞記事に取り上げられるほどになっている。「売れてます“キヨスク書店” 弘済会商法大当たり 東京、上野に続き品川も」『読売新聞都民版』1978年3月17日号

8 同上および「京都・東京で早売り」『新文化』1975年2月20日号

9 「雑誌問題に総力体制」『新文化』1975年6月26日号

10 「雑誌発売日協約改定を提案 (日書連) 流通期間による差認めず」『新文化』1975年8月28日号

11 「雑誌発売日問題、打開へ 弘済会も早売り中止」『新文化』1975年9月11日号

12 「雑誌発売日 即売も当日発売 (児童七誌)」『新文化』1975年9月18日号

13 「書店・スタンド紛争に幕 発売日問題 即売も完全実施へ」『新文化』1975年10月23日号

14 「協約修正で罰則強化 雑誌発売日違反処置は厳しく」『新文化』1975年11月20日号

15 畠山貞『出版流通ビッグバン 21世紀の出版業界を読む』日本エディタースクール出版部(1998)、高須『再販／グーグル問題と流対協』(2011)。なお再販制維持に賛成している高須に対して、小田は必ずしも全面的に賛成しているわけではない。ただし、再販制見直しや提言の前提となっている経済構造の変化については批判的な態度を取っている。

16 寺林『出版流通改革試論』P.76

17 星野『出版産業の変貌を追う』pp.125-127

18 村上『出版流通図鑑』pp.22-24

19 田中治男『ものがたり東京堂史—明治、大正、昭和にわたる出版流通の歩み』東販商事(1975) P.130

20 『デジタル版日本出版百年史年表』<http://www.shuppan-nenpyo.jp/nenpyo/> 1908/2「出版関係」行2列目(2018年12月31日閲覧)

21 村上弘明『出版流通とシステム』新文化通信社(1984) pp.29-30

22 「日本雑誌協会の目的と事業」『日本雑誌協会 Web サイト』(2018年12月31日確認)

23 橋本『日本出版販売史』P.144

24 橋本『日本出版販売史』P.153

25 橋本『日本出版販売史』P.153

26 橋本『日本出版販売史』P.155

27 橋本『日本出版販売史』pp.160-161

28 橋本『日本出版販売史』P.162

29 橋本『日本出版販売史』P.162

30 橋本『日本出版販売史』pp.175-184

31 橋本『日本出版販売史』P.155

32 「大正期東京の「雑誌回読会」問題 雑誌のもうひとつの流通経路」『出版研究 29号』(1998) pp.1-28

33 東京書籍商組合編『東京書籍商組合五十年史』東京書籍商組合(1937) pp.163

第5章

取次の変化、出版流通の変化

第5章 取次の変化、出版流通の変化

本章は出版流通改革の事例を確認する最後の章となる。第3・4章では前提となっていた従来型の出版流通、つまり雑誌を主軸にした大量流通によって支えられてきた流通インフラが限界を迎えた現在の状況を軸に、その中での取次の変化を見ていく。現在取次は経営危機に陥り、複数の会社が破綻や再編を余儀なくされている。しかし、取次が経営危機に陥る状況は初めてのことでない。本章の前半では、まず大正期に起きた取次の破綻と業界再編を示し、それら過去の変化と今日の状況の根本的な違いを明らかにする。次いで現在の経営危機が、単に取次のみの問題にとどまらず、取次による出版流通をインフラとして使っていたプレーヤーすべてにとっての安定構造を崩しかねないという事実を示す。これは出版社や書店が書籍を中心に扱って、利益を得ていた場合であっても同様である。

さらには、雑誌と書籍といった商品の面のみならず、取次による出版流通を支えてきた産業構造そのものが変化しつつある。端的に言えば多数の出版社と多数の書店をつなぐことで持っていた取次による出版流通の存在感が、環境の変化の中で失われてきたということになる。さらに、この状況の進行と並行して登場する Amazon という新規プレーヤーがもたらす流通へのインパクトを、注文という流通方法に注目して読み解いていく。これまで取次は繰り返し改革を担うことを求められてきた。しかし、これらの事例は取次のみ改革としての出版流通改革では、新たな状況に対応しきれないという現実を突きつける。本章での整理は、流通改革の一定の段階において、出版文化が否が応でも変化せざるを得なくなる状況を示すこととなる。

1. 二つの時代の取次危機

第1章で引いた佐藤健二「テキスト空間論の構想」は、出版における「生産」「流通」「消費」の関係をずらし、より広い空間としてとらえなおすものではあったが、出版産業の見方のみを変えようというものでもない。そこで構想されているのは、社会全体を「地」とし、そこに配置された「図」としてのテキストの存在形態を浮かび上がらすためのモデルである。しかし、佐藤がテキストの社会性を見る断片的な事例として引いているものの中には、以下のようなものもある。

小売店側の仕入れ買い取り制ではなく、売れなかった商品としてのテキストの返品を可能にする委託販売制は、日本全国の書店の店頭の本棚を新刊中心の陳列空間としてテキストを社会に流布させ循環させる仕組みであったし、その陳列空間は立ち読みという読書行為を許容してごく普通の人びとの日常に読書する時間を生み出してもいた。その意味では小売店としての書店は図書館という空間とつながり、「私」空間としての書齋とも隣接する「公」「共」の場であった。最近の二〇年の間に、旧市街の中心にあった昔ながらの書店の数が減っていく一方で、新たに新店する書店の多くは郊外型で面積ばかり広くなりコンビニエンスストア化していったといわれる。そのそれぞれの空間の違いは、しばしば直感的に指摘されるけれども、総体として明確に分析されているとは言えない。¹

この問いかけに回答するわけではないが、2010年以降の動き、特に2014年から2016年にかけて起きている出版流通をめぐる動きは、佐藤が批判する生産・流通・消費の区分が解体していく現象として対応したものだとして整理することができる。

佐藤の解体した三機能を、戦後の出版産業に当てはめてみると生産・流通・消費がほぼ「出版社」「取次」「書店」の三業態に対応する。これらの三業態を総称して、業界三者と呼ばれることもある²。しかし近年になって「業界三者という言葉が使われなくなった」という証言が、文化通信社に長年勤務する星野渉によってなされている³。雑誌流通改革の項で示した『日本出版販売史』の段階では早くも「出版の事業は、これを刊行する版元と、これを普及販売する取次店ならびに書店と、この三者の密接な連携と運営に俟ってその使命を達し得るものであります。」と書かれていたし、2010年までの業界のスローガンでは「業界三者」という言葉が使われていた⁴。しかし現在は取次のシステム説明の中に多少みられるだけで、あまり表だって利用されていない。

戦後の出版産業において、生産・消費・流通それぞれを担ってきた各プレイヤーが解体しつつあるのが今日の状況であるといえる。そしてこの解体の根本にあるのは、戦後続いてきた取次を軸とする出版流通システムの変化であるのは間違いない。佐藤の示した枠組みを実際の産業の変化に若干ながらも応用することで、現在の、より正確に言えば雑誌流通を主体とした出版流通が定着した時代から現在までの日本の出版界の変化を説明することが容易になる。さらには、出版産業の過去と未来とを考えることで現在の状況を相対化することにもつながる。

出版売上が10年以上連続で下落してきた状況を目の当たりにし、未来に向けて企業として生き残るといった視点が求められる中で、「生産」「消費」「流通」の三区分を見直そうという議論は多く出されている。その際に引き合いに出されるのは「明治20年問題」と呼ばれている、江戸時代からの近代へ変わる際の出版産業プレイヤーの入れ替わりによる、日本の出版産業構造の変化である。現在の電子書籍による変化と対比しながら、出版社の経営者であり論客でもある金原俊は以下の様に述べている。

たとえ目的や使命が同じでも、用いる手法が大きく変化すると、同じ組織による継続が不可能なことを、明治20年問題は物語っている。注目したいのは手法の変化に伴う役割の変化だ。技術革新により各役者に求められる役割が変わり、これが役者の交代を促したと思われる。現代起こりつつある電子化においても同様となるのではないか。オンライン書店であるAmazonが、著者から直接、原稿を受けてKindle Direct Publishingにより出版する。これは、江戸の本屋の業態に近い。江戸の出版システムが数百年の歴史を有したのに対し、現代の出版はわずか130年の歴史しかないことを考えると、現代のシステムは過渡的な措置であり、出版と流通の一元化は、むしろ本来の形に戻るだけのことも知れない。

その際に分業化して生まれた出版社、取次、書店などが、それらの機能を合体した会社に「変態」することは、可能だろうか。今、急伸中の「comico」や「Lineマンガ」などの

コミックサイトも業務合体型であるが、出版社からのアプローチではない。「dマガジン」では書店や、商品企画と言う役者の役割を、何と DoCoMo が果たしている。既にじわりじわりと業態の変化が起きているこの出版界において、成熟しきった出版社、取次、書店などが変態を遂げ、10年後20年後にも、この出版と言う舞台に留まって、いっばしの役者で居られるだろうか。与えられる役割が大きく変化するのであれば、皆、個性派俳優だけに、その変態は難しいかもしれない⁵。

「変態」は、ここで引かれている電子出版の問題にとどまらず、従来型の紙の出版産業においても、現在起きている変化に当てはまる。いくつか例を挙げよう。「書店」、特に、今日出版界の中で注目されている書店は、別の形態に「変態」しつつある⁶。利益確保と集客力アップのために雑貨や文具を置く、いわゆる「マルチメディア業態」は、取次会社のトーンが力を入れてバックアップをしたこともあり、今や完全に一般化している。書店を基軸とした文具取り扱いに関しては、書店のチェーンレベルでのノウハウが蓄積され、ソリューションビジネスとしての提供すら行われている状況である⁷。また、コーヒーを出すブックカフェ形式の書店も、福岡の小規模書店ブックスキューブリックの成功を皮切りに続々と登場している⁸。下北沢の書店 B&B では、毎日トークイベントが開催され、通常も飲み物片手に店内を散策できる書店として人気を集めている。

さらに進むと、書店でありながら出版物を売ることは主目的ではないという、主客転倒に見えるかもしれないあり方も登場しつつある。ヴィレッジヴァンガードなどが出版物を扱う雑貨屋として代表例であったが、代官山 T-SITE のように本屋を名乗りながらも、出版物以外を含めての生活提案を全面に押し出し、本はいわば店舗空間のデザインの一部としても利用して雰囲気を作り出す店舗も登場している。その意味では「出版物」をアイデンティティーとし書店を名乗りながらも、機能的には書店の常識的な考え方からはみ出す例も登場してきたということができよう。内容を伝えるメディアだった紙の出版物が、特定のマーケットにおける扱いとしては知的な雰囲気を作り出すディスプレイの一部となりつつある。

もちろん、こうした状況を横目に睨みながら、出版物によって利益を得ている出版社・取次・書店も依然として存在するし、従来の収益形態で生き残りを図っている会社の方が多い。出版物の扱いの変化が先か、産業形態の問題が先かという問題は別の議論だが、現在の変化を踏まえておく必要はある。

現在の変化の中でやはり注目しなければならないのは、2015年から2016年にかけての取次の相次ぐ経営危機である。まずは業界第3位の規模を持っていた大阪屋が大規模な赤字決算となり、出版界各社の支援を受けることとなった。続いて、戦前から取次業を続けてきた栗田出版販売が民事再生をすることとなり、結局大阪屋と栗田出版販売は2016年から「株式会社大阪屋栗田～OaK 出版流通～」として合併しての再出発をすることとなった⁹。

大阪屋栗田の再出発の直前、2016年3月には太洋社が自主廃業・帳合書店の引受要請を公表したが、最終的には破産を申し立てることになった。様々な支援により生き残った大阪屋栗田の場合と違い、太洋社の破産に連動して引受先のない複数の書店が廃業・倒産する事態となっている¹⁰。変化を前に変態することができなかつたプレーヤーたちが徐々に退場す

ることになったのだが、こと総合取次の破綻は既存の流通システムの限界と変化を示しているといえるのだろうか。

しかし「現在の」流通システムの変化を、そのままテキストの社会的配置のあり方の変化に結びつけることはできない。ここで見られている流通の変化はテキストの社会への配置を、個々人のテキスト空間をどのように変えるのであろうか。技術的側面、認知的人工物への適応の問題など、文化資源学として出版流通産業を扱った議論のみで語ることはない要素もはらんでいる。出版流通を文化資源学的に考えるという立場から語れるのは、未来を考えるためにまず過去を見、事実として（根本的には改革はなされなかったが）これまでどのような改革が行われてきたのか、その中でどのような可能性の萌芽が見られたのかを追求することにすぎない。

この限定的な作業においても、戦後出版流通の基礎をなしていた生産・流通・消費が解体されていく現在の視点に立つと、従来の出版史・出版流通史の持っていた前提に変化が必要になる。これまでの出版史の多くは、特定の書肆や出版社に注目したものも含めて、「現在」の状況に至る、つまり出版社と取次と書店のどれかに至る結果を描く歴史であった。しかし、現在の状況がそう長く続かないことが明らかになった状況では、結果ではなく変化の過程と考える出版史へ置き換える必要がある。生産・流通・消費がどう担われてきたかではなく、また今日との違いを述べる形ではない記述をせざるを得なくなる。

このような観点で注目に値する事例が、明治末大正期における、つまり大まかに言って100年前に起きた取次の破綻である。明治末から大正初期、近代型の大量物流による出版流通が確立しつつある時代に、日本の出版流通は雑誌を主に扱う取次が活躍していた。すでに第4章で確認したように、戦前の流通は雑誌と書籍が別途に行われており、大手の取次は基本的に雑誌を商うことで成長してきた。この時期に活躍した雑誌中心の取次を元取次（大取次とも）と呼ぶ。明治40年代には、東京堂、北隆館、東海堂、良明堂、上田屋、至誠堂、文林道の七社が大きな力を持ち、俗にいう「七大取次時代」が到来する¹¹。これもすでに雑誌流通の章において示したが、明治末大正期に取次業が成立・拡大するなかで、定価販売制の半ば強権的な普及や、委託販売制の一般化が起こり、今日まで続くいわゆる「近代出版流通システム」の基礎が整えられたのである（図5-1）。

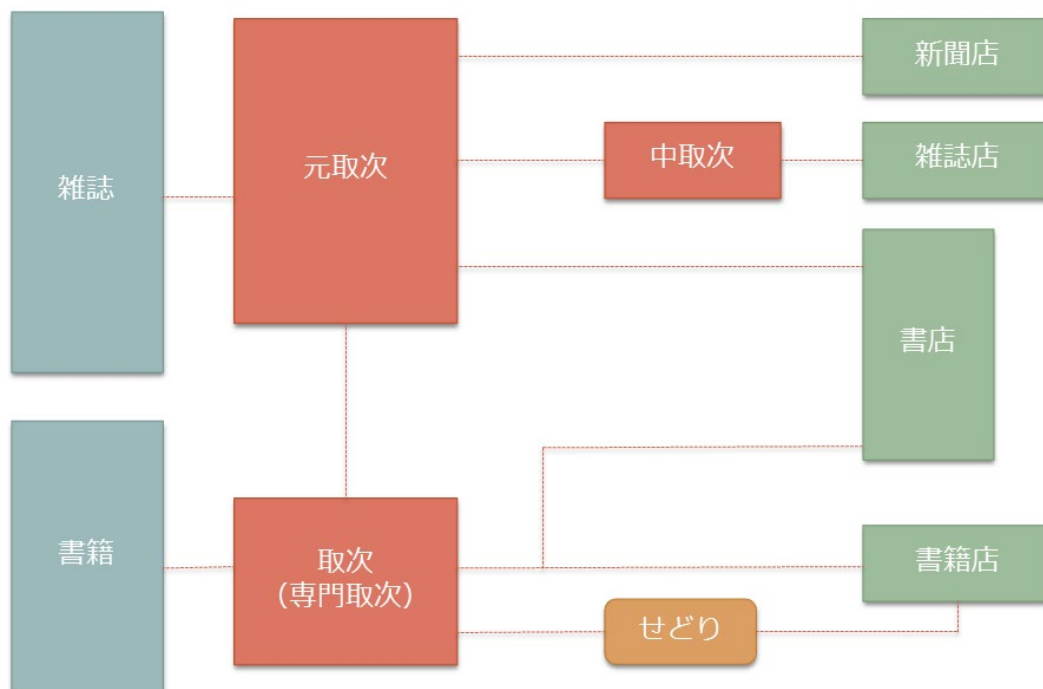


図 5-1. 元取次を軸とした大正期の出版流通模式図

しかし、関東大震災が起きた 1923 年前後に、複数の元取次が経営危機に陥ることとなる。七大取次のうち、まず最後発であった文林堂が整理に入り、昭和に専門取次として再出発するまで表舞台からは姿を消す。続いて 1919 年に良明堂が廃業する。この時点でも残りの五大取次が影響力を誇っていたが、1925 年に先の関東大震災による被害と相場の失敗が引き金となって最大手の一角である至誠堂が破綻することとなった。商いの大きい雑誌流通の一翼を担っていた同社の破綻は出版業界を大きく動揺させ、業界を挙げての救済と流通再編が行われることになった。

まずは至誠堂の業務を引き継ぐ暫定的な機関として大誠堂が作られ、この大誠堂と明治中期から活動していた盛春館、さらに東京中心に活動していた上田屋の雑誌部が合併して、大東館が設立することとなった。戦前のいわゆる「四大取次」体制として東京堂、東海堂、北隆館、大東館があげられるが、この新体制を準備したきっかけの一つが大手取次の破綻だったといえる¹²。

いうまでもないが、100 年前の取次破綻が新たな取次体制を作り出した一方で、現在の取次の経営危機を同じように眺めることはできない。どちらも震災後の起きた事件であったとしても、100 年前は元取次間でのエリア調整が行われていた一方、現在は取次間の熾烈な帳合切替競争が起きている。また四大取次成立は大量出版流通の勃興期、関東大震災からの出版都市東京の再建拡大を背景としたが、現在は大量流通が曲がり角を迎えており、出版物の売り上げは年々減少している。なにより至誠堂には、関東大震災によるダメージと投資の失敗という、本業以外の破綻理由があったのに対し、2015 年から 2016 年の取次破綻は、本業の縮小で体力をじわじわと奪われての結果である。

2. 取次機能と前提の動揺

前述のように、同じ取次の危機であったとしても、現在の取次が置かれた状況と 100 年前では大きく異なる。また同様に取次の持っている機能も異なっている。そして、現在の取次の危機は、取次が持っている機能の限界と、出版流通システムの変化を示していると考えられる。

出版流通システムの変化はこれまでも繰り返し叫ばれてきたし、取次悪玉論をあげるまでもなく、常に取次による流通システムへの批判は行われてきた¹³。「繰り返し叫ばれてきた」というのは、本当に単なる繰り返しだったということもできる。前項までに示した昭和 14 年の議論、1980 年代の議論、いずれにおいても雑誌中心の流通の問題、返品率の上昇問題、書籍注文品の流通問題、取次批判が中心的な議論であったが、根本的には変革がなされなかった¹⁴。言い方を変えると、多少の文句はあるが取次があったほうが、そして従来の制度に乗っていたほうが出版社にとっても書店にとっても都合が良かったともとれる。生産・流通・消費のプレーヤーに分かれて自分の領分で勝負していた方が便利だったということもできる。それぞれのプレーヤーが、部分最適でそれぞれに自身の機能を果たしていれば、出版物が社会に配置されていく時代が確かにあったのである。

この中で取次が担ってきた機能を、本論文第 1 章においては物流機能、仕入・配本機能、書店営業機能、金融調整機能、新規開発機能として分類し説明している。しかし、これらの五つの機能で出版流通を十全に支えることができる時代は終わりつつある。五つの機能の中で、オペレーションの問題で明らかに限界を迎えているのは物流機能である。売上の低下の一方で出版点数が増加している状況において、物流は今まで以上に効率化を求められるようになっていく。

そして、その解決手段の一つとして物流機能の外部化に踏み切る取次も登場した。トーハンは 2013 年に関係会社ベストアシストとトーハン・ロジテムを合併してトーハン・ロジステックスを設立し、直後にそれまで自社で抱えていた物流機能をすべてトーハン・ロジステックスに移管するグループ再編を行っている。経営的にみると、それまで物量にかかわらず一定額を支払っていた人件費などの固定費を、関係会社との間の業務量による変動費に替えることでコストを抑えることができる。流通会社が物流を外部化することでスリム化を図るほどに、出版物流の位置づけが変わってきたのである。実際、トーハン・ロジステックスはトーハンからの出版物の物流に加えて、「加工食品、雑貨、衣料品等のインターネット通販物流センター運営、コンビニ・スーパー向けのチルド食品センター業務など」を行うことで経営を成り立たせている¹⁵。あくまでもトーハンの事例のみではあるが、物流機能はもはや取次という会社経営においてはあたりまえの機能ではなくなりつつある¹⁶。

また取次自身が経営危機に陥ることで、金融調整機能も限界が明らかになった。金融機能は、いわば出版流通を巡る問題を吸収し、一時的に先送りできる基盤でもあったといえる。取次の金融機能が最大限生かされていたため、特定の書店や出版社の経営問題、または販売の非効率性などの個別の問題は、流通全体のキャッシュフロー内で吸収されてきた。赤字続きであっても経営は続けられるというような形で、致命的な結果に陥る例は少なかったのである。この状況は、2001 年に専門取次鈴木書店が倒産した場合であっても同様であった。

小規模の専門取次であったとしても、やはり取次会社に倒産が出たということは業界を騒がせはした。しかし、この事件によって根本的なシステムの問題が表面化したわけでも、多くの書店や出版社が連鎖倒産の危機に直面したわけでもなかった。

しかし2014年から2016年にかけて、大手取次が赤字を出し倒産するという事態に至ると、従来の金融機能ではそのショックを吸収しきれないことが明らかになった。大阪屋の大幅債務超過に関しては、出版界全体で緊急支援スキームが組まれた。そして2015年、業界第四位の栗田出版販売が民事再生手続きに入り、2016年に太洋社が破産し連鎖倒産が生じた結果、取次の金融機能に頼り切ったことで隠されていた問題が表面化したのである。いまや出版研究においても、出版産業内においても「取次後」の状況についての議論が戦わされるのはごく当たり前になってきている¹⁷。

取次の機能のうち金融機能が順調に機能しているうちは、出版社・書店ともにその時の手持ち資産の状況を確認すればよく、それ以上の売掛金買掛金については、把握する必要がなかった。実際は把握する必要があったとしても、月の送返品の差額を決済できているかぎりには、把握しなくても経営を続行することができたのである。しかし、金融機能を担っていた取次が破綻することで、それまで明示されていなかった利益・損益が突然明示されることになる。

鈴木書店のように人文系の書籍を中心に扱う専門取次が相手の場合、多くの取引書店は大手取次から仕入れにくい商品を「複数帳合」の一つとして受け取っていただけの場合が多い。そのため、破綻に際しても店舗全体の売掛買掛が明示化しなかった。また仕入れた商品も、場合によっては取引のある他の取次経由で処理することも可能なので、書店が不良債権や不良在庫を抱える事態もそれほどはっきりと現れなかった。もちろん、出版社としても自社の出版物及び売掛金がすべて棄損するという事態には陥りにくかった。しかし、大阪屋・栗田のような大手取次は、それぞれ一社ですべての商品を提供する「一本帳合店」が多く、倒産すると資金も在庫も動きが取れなくなり、連鎖倒産が発生しかねない。これが出版業界全体の売り上げが下がっている状況であっても、無理をしてでも大阪屋と栗田を救済した背景だったのだが、太洋社の破産によってほぼ現実のものとなった。

物流と金融のように産業全体の構造に関わる変化と比べると影響範囲は小さいが、新規開発機能もその意味を大きく変えている。新規書店の開発促進によって業界全体のパイを増やすことが開発機能の重要な意味であったが、書店の絶対数と業界全体の売上が減少する今日においては撤退した書店の代わりを確保する機能、そしてなによりも他取次の売上を奪って減少するパイの中でシェアを伸ばす機能としての側面が強くなっている。いうまでもなく、この競争に敗れたことが中堅取次の破綻につながったのであり、また今日の取次危機の深刻さを示している。

「出版失われた10年」などとも言われているが、出版業界全体では1996年をピークに売上を減らし続け、2014年の売上総額16,941億円は1984年と同程度となっている¹⁸。もちろん流通を担うすべての取次の利益も減少を続けてきた。つまり、常態としての売上減少と利益減少で行き詰まりをおこした結果の倒産である。

出版産業分析という視点では当たり前の議論になってしまうが、この行き詰まりによる倒

産の原因を整理してみる。1990年代頃から日本の出版流通は雑誌流通の効率を追求し書籍が二次的な扱いを受ける「雑誌中心主義」が批判されてきた。しかし、一方で雑誌中心に利益を上げ、その利益で書籍の出版が支えられてきたのも事実である。2000年以降、雑誌の売上が大きく毀損している。書籍の売上も減っているが、それ以上に雑誌の減少が大きい。

毎回それほど大幅な部数の変更がなく、定期的に発行されてまとめて流通させることができるため、制作にかかるコストについては別としても、流通にかかるコスト、営業にかかるコストは雑誌のほうが圧倒的に少ない。雑誌で効率的に利益を得て、書籍の利幅の小ささを補うのは取次においてまた同様である。定期的な読者を獲得しやすく、オペレーションも定型化しやすいという意味で、書店にとってもうまみのある商材である。自社では書籍しか扱わないという小規模な出版社や書店であっても、書籍が流通するインフラは雑誌の利益によって支えられていると考えれば、雑誌の恩恵を間接的に受けているということもできる。

この構造が明確に破綻した結果が、表5-2で示した取次第1位と2位の日販・トーハンの2014年度決算である。この時点でトーハンではすでに雑誌全体の売上が書籍を下回っている。この後の状況は、さらなる雑低書高のまま進んでいる。2014年がポイントオブノーリターンであった証左となるだろう。なお、この時点で日販は雑誌の売上がまだ大きいように見えるが、コミックの売上を含めているとの断りがある。トーハンと同程度のコミック売上があると仮定するとやはりこの時点で雑誌販売が厳しい状況だと推測できる。雑誌を前提とした取次の利益構造が棄損し、取次が支えていた出版業界全体の金融構造に限界が来ているため、否が応にも業界の再編成が起きざるを得ない¹⁹。

トーハン 2014年度決算			
	売上	増減	返品率
書籍	182,247	-3,951	41.5
雑誌	179,929	-10,900	45.8
コミック	56,897	21	27.4
MM	61,845	3,191	12.1
合計	480,919	-11,637	39.3
日販 2014年度決算			
	売上	増減	返品率
書籍	246,419	-12,251	31.3
雑誌	270,196	-18,733	38.8
コミック	-	-	-
MM	32,542	483	29.5
合計	549,158	-30,502	35.2

表5-2 トーハン・日販の2014年度決算 ※日販のコミックは雑誌売上に含まれる

取次後のシステムが議論されている一方、取次自身も従来の出版物以外のいわゆるマルチメディア商品への注力や他業種との連携によって変化しつつある²⁰。現状では今後の出版物の扱いがどうなるかについて予見するのは容易ではない。10年後20年後に出版物が付加価値商品として生き残っているのか、それとも例えばプラモデルのようにごく一部のマニア向

けの流通市場を形成する形まで縮小して残っていくのか、テキストを載せるメディアとしての役割を終え単なるディスプレイとして扱うことで幾ばくかの利益を上げていくのか。本論で議論するには余るが、今日的な意味においての出版産業に属する個々の企業の生き残り戦略は、雇用の継続や経済活動の継続にとっても重要な問題である。

そもそも現在危機に陥っている取次のシステムは、一つの大きな前提に立っている。多数の出版社と多数の書店をつなぐ位置にいるということ、言い方をかえれば取引をする出版社も書店も複数存在することである。付随して二者の間で、大量の商品が取引されているということも必要になる。大量の取引先の間で大量の商品を扱う流通、それを様々な面で効率化するからこそ取次が必要となるのである。そして、大量の出版物はどんなに広い書店であってもすべてを在庫しすべてを陳列することができない。出版社、取次、書店の間を流通し続ける出版物に、有限の売り場からアクセスするという購入方法があることで、取次の担う出版流通は成り立っているのである。

逆に考えれば、取次の様に様々な機能を持つ中間流通業者が不要な状況も多数ある。例えばニーズのあるメーカーがほぼ一社で市場を独占しており、そのメーカーが小売にまで影響力をふるう状況においては、流通業者はあくまで物流のみに集中し、卸としての多くの機能を失うことになる²¹。また販売者が巨大で、特定の市場においてほぼ独占または寡占状態にある場合も同様である。

一方でこのように考えると、現在出版を議論する際に、ある時は新しいプラットフォームとして、ある時は読者の味方として、またある時は業界の敵として語られる Amazon の特殊性が浮かび上がってくる。ネット上という領域、特に書籍のネット販売においては非常に大きなシェアを持ち²²、仮想的には無限の売り場を展開できる Amazon は、いうなれば「そもそも取次を必要としない流通圏にいる」のである。実際に2015年以降、Amazon は日本の出版社から出版物を直接仕入れる、いわゆる直取引を推進している²³。さらに上陸以降の動向を考えると、出版流通が届ける先、つまり出版物の選び方・購入の仕方に対して Amazon は大きなインパクトを与えている。

ここまで「Amazon」と表記している会社は正式には Amazon.com の日本語版サイト Amazon.co.jp を運営するアマゾンジャパン合同会社と、その本体であるアメリカの Amazon.com, Inc. である。なお、アマゾンジャパン合同会社がどこまで自律的な経営判断を行えるのかについては明確ではなく、人々が Amazon を語る場合は無意識にその背後にある Amazon.com, Inc. までも含めての発言であることが多い。Amazon.com, Inc. は1994年にジェフ・ベゾスによって創設されたアメリカの企業で、今日ネット通販サービスにおいては最大手と言われており、ネット書店としても代名詞的な位置づけにある²⁴。日本でも2000年にサービスを開始して以来、単なるネット書店という範疇にとどまらず、ネットショッピングというスタイルを普及させ、様々なサービスで現代の消費者行動をリードしている。

一例をあげれば、2002年に始まった「マーケットプレイス」は、登録したユーザーに対して中古販売の窓口を担うというもので、2008年に「フルフィルメント By Amazon」として出荷代行も開始、素人の中古市場への急激な参入を生んだ。サラリーマンなどの小遣い稼ぎとして新古書店で安く仕入れた書籍をネット上で販売する「せどり」が、紹介されるまでに

なった²⁵。2010年の全国翌日配送サービスの開始と送料無料化、音楽配信サービス「Amazon MP3ダウンロード」から「アマゾンミュージックストア」への発展、電子書籍サービスの嚆矢である「Kindle」、「アマゾンPrime」によるサブスクリプションモデルを中心としたプレミアムサービスなど、出版ももちろんだがそれ以外の販売業に与える影響も大きい²⁶。

直取引を含めた従来の利益配分とは異なる、独自の取引ルールやビジネススタイルの確立について、憶測を交えた様々な議論がなされる一方、「Amazonポイント」と再販制度の問題、取次に対しての取引方法の問題など、従来の制度とのせめぎ合いでも議論が行われている。いうまでもなく、これらの動きは現在進行形であり、今後も日本の出版に対して影響力もつことになるだろう²⁷。

しかし、すでにAmazonによって取次の前提となる条件がゆさぶりをかけられている。一つは言うまでもなく「インターネットにアクセスできる環境なら、いつでもどこでもAmazonが扱っている出版物が買える」という特性からくる、小売りの多数性の否定である。さらにもう一つは、「出版物を選んで買う」際の行動が、従来型の大量物流取次システムには不利な形で提供されていることにある。

筆者が2012年に執筆した修士論文において中心に置いているが、出版業界では「客注」と呼ばれる購入方法が長らく問題になってきた。客注とは、簡単に言ってしまえば、顧客である読者が商品を注文する行為である。その裏側には、それに対応するために商品が流通するシステムが作られている。客注は客にとっても店にとってもかなり評判の悪いものだった。実際に店頭である本の取り寄せを依頼すると、「問い合わせてみないとあるかどうか分からない」「いつ届くか分からない」「問い合わせたが、出版社に在庫があるか分からないのでもう少し時間がかかる」等の要領を得ない対応が多く、実際に注文をしても商品が手元に届くまで数週間以上かかり、場合によっては一月以上経ってから「やはりなかった」という回答が来る等ということもあった。

なぜ客注はこれほど面倒なものであったのか。出版流通の技術的な問題を要因の一つとしてあげることができる。第2章の産業史や前章までの事例で示した通り、今日の出版流通メインルートは雑誌を扱う大量物流を軸とした流通システムとして成長し、書籍も雑誌流通に取り込まれる形で完成したものである。雑誌型の大量物流の基本となるのは、物流機能で説明した中の新刊物流にあたる。これは主に委託品としての条件で小売へ商品を送ることを考えると、委託流通と言いかえることもできる。取次への搬入日や搬入量が定まっている新刊出版物は、取次内部の配本業務で販売の予測がしやすく、物流業務でも流通計画を立てやすい。この様に大量物流を行いやすい形で、委託制に則って小売へ送品し、売れなかった本は返品されるという流れが出来上がっているのである²⁸。

しかし、注文される商品は、多くの場合「過去に出版された」出版物である。ピークを過ぎた状態である2018年においてもまだ書籍だけでも年間7万点以上の新作が発行されていることから分かるように、出版物は多品種製品である。また、他の多くの消費財と違い出版物には型落ちすることがない。改訂版は別にすると、ある作家が新しい本を出したからと言って、前の作品は型落ちで機能が劣ったものとなるなどということは考えられず、書籍だけでも大量の蓄積が生じている。さらに雑誌のバックナンバーなどを含めれば、絶版などで減

っていく出版物があるとしても、すべての出版物を在庫しておく事は物理的に不可能である。

客注を受けた際の対応は、「まずその本を在庫しているかを探す」「在庫がない場合は、さらに出版社に問い合わせてそこに在庫があるかを探す」という、とにかく探す作業から始まる事になる。また出荷のための作業を想定しても、注文品は委託品よりも複雑な作業を必要とする。同じ商品がまとめて搬入され、それを店ごとに分けるという作業で出荷を行える委託品に対し、店と商品が一對一で紐づけられた注文データに基づいて商品をピックアップして箱詰めする注文品は、一冊あたりに費やす時間と、投入される人員の両面でコストが大きくなる。デジタル化が進んでいなかった時代は手作業で管理が行われており、職人芸と人海戦術がメインであった。小売店が取り寄せようと思って注文した商品は、この様な問題があったとしても出版業界の外側にとっては遅れが顕在化しない問題だったが²⁹、客注においては遅さと不正確な流通状況を顧客が直接体感することになり、クレームの元となっていたのである。

再販制と委託制による配本が、その効率性からメインの流通手段になってきたという歴史的要因、個別の注文に対応するためには多品種少量商品にある程度のストックを持った状態で扱わなければならないという物理的かつ技術的要因によって、注文流通の改善は遅々として進まなかった。正しく言えば改善の取り組み自体は行われていたが、根本的な変化はほとんどなかったという事ができる。発売日の問題でも名前が挙がった書店組織日書連は、1978年に注文速度向上のキャンペーンを行い内外にアピールをしたが、結果としてはほとんど何も変わらなかった³⁰。この状況を打開するために、JBCなどの取り組みが行われ最終的には大手取次の設備投資により、書籍流通効率化と流通データのデジタル化が進んだのは前章でみたとおりである。

ここで改めて、Amazon を通して普及したネット書店特有の購入スタイルを考えてみる。ネット書店での購入方法は、実は客注に近い。多くのネット書店は、ほぼ注文専門の特殊な購入方法の書店であると言い換えてもよい。Amazon には、通常の書店と同様に新刊委託と注文両方のルートで取次から商品が搬入されている。しかし、裏側に Amazon の倉庫に配本された在庫があったとしても、サイトに来た顧客は書店の在庫を見てみてそぞろ歩く様にサイトを移動するのではなく、検索窓にキーワードを入力して商品を購入することが多いだろう³¹。これは、ある商品を目指して直接店頭で問い合わせる注文型、自分の欲しい本を決めて購入するスタイルに近いものである。動きを先取りして説明すれば、Amazon は今日「注文即日出荷」体制を作り、一部商品は翌日、場合によっては当日中に手元に届くという状況を作り出している。Amazon のサービス充実による注文型購入方法の普及が出版流通改善をそれ以前の取り組みと全く違ったものになっていく。

2000年のAmazon上陸と前後して始まった新しい動きは、二つの方向に分ける事ができる。一つは対顧客サービスの変化、二つ目は流通改善の担い手と担い方の変化である。一つ目の変化はAmazonに対抗するネット書店を開設し、ネット上のマーケットでもユーザーを獲得するという分かりやすい動きである。取次によって開設されたネット書店には、大阪屋による「本の間屋さん」（サービス停止）、日販による「本やタウン」（現 Honya Club.com）、図書館流通センターを中心とした企業連合による「bk1」（後に honto とサービス統合）、トー

ハンによる「e-hon」がある。また書店をはじめとする小売業が主体となったサイトでは、「紀伊國屋書店 BOOKWEB」、文教堂による「JBOOK」(honto とサービス統合)、セブンイレブンジャパン、ヤフー、ソフトバンク、トーハンの共同による合弁会社イー・ショッピング・ブックス株式会社(現セブンネットショッピング)による「esbooks」(後に「7&Y」、現「オムニ7ーセブンネットショッピング」)、この他に中小サイトが多数開設された。

ネット書店開設という分かりやすい動きの裏側で、流通改善として書店向けの客注専用サービスや客注効率化の取り組みが急ピッチで進行していく。まずは取次による客注に特化した配送サービスの開始が挙げられる。栗田出版販売が中心となった株式会社ブックサービスによる「おとりよせ@ブックサービス」、トーハンの関係会社として設立されたブックライナーによる「本の特急便」が代表的な配送サービスである。「本の特急便」では通常書店が支払う金額に特別料金プラス上乗せすることで特別対応の原資を作り、スピーディに商品を店頭へ届けるというサービスを行ってきた³²。

流通改善の担い方の変化は、トーハン・日販など大手取次がサプライチェーンマネジメント(SCM)構築を掲げ、物流のさらなる効率化とスピードアップを図っていくという動きに現れている。SCMとは、複数の部品を分業で生産している製造業等において、消費や景気動向に合わせて完成品の流通量を調整するために、各部品の生産数までを管理し、完成品の流通をスムーズに行うための情報共有手法であり、生産量管理手法である。大手取次が掲げた出版SCMがどのようなものであるか、トーハンの説明を引用してみる。

需要と供給のギャップを埋めるためには、市場動向を把握し、業界三者でその情報を共有していくことが必要不可欠です。

そこで、商品の企画、資材の調達、卸売から小売りに至るまでの、商品と情報の流れ(サプライチェーン)をネットワークで結び、様々な情報を共有することで全体を総合的に管理し、効率を大幅に向上させるのがSCM(サプライチェーン・マネジメント)です。これは出版流通システムを抜本的に改革するものになります。

出版SCMで構築されるインフラによって、業界三者が販売・流通・在庫情報をリアルタイムに共有し、より精度の高い配本と個々の書店に適した品揃えが可能になります。このことによって、必要な本を必要な時に、必要としている読者へ届けるという需要創造型の新しい流通サービスが確立されます。

(…中略)

また、従来の注文品流通では読者に届くまでの時間が長かったり、在庫の照会が明確ではなかったために、販売機会が失われてきました³³。

この宣言の前段階では、需要と供給のギャップが生じている原因を「読者のニーズが多様化し、多品種少量型の出版傾向が一層強まって」いるとも述べられている。この原因設定が的を射ているかは別としても、ここで訴えられている様に、業界で情報を共有し、取引先の現状に合わせて適切な配本とスピーディな商品供給を行う事で、販売の効率化を狙うものとして企画されていることが分かる。

いずれにせよ、2000年以降の取り組みによって客注を巡る混乱はほとんど見られなくなったことも事実である。1997年の『新文化』に掲載された「レジから撤 有難い客注の現状」という記事には「他の店は面倒がって客注を断るから、客注を積極的に受け入れると差別化を図れる」という、書店店主による逆説めいた発言が掲載されていたが、今やほとんどの書店では「断る」まえにインターネット回線を使って取次在庫をチェックができる状況が成立している³⁴。また、業界全体の状況を見渡しても、客注サービスは大きな問題として注目されるトピックではなくなっている。表5-3は2000年前後に業界紙『新文化』に掲載された、客注に関する記事数と客注に関する中心的なトピックをまとめたものである。あくまでも『新文化』による分類に従っているものの、2000年をピークに減少し、最近はほとんど記事にならない状況である。

発行年	記事数	トピックとして目立つもの
1995年	44	注文のシステム化要望、出版VAN構築
1996年	45	須坂計画、出版VAN構築
1997年	49	須坂計画、出版VAN構築、Amazon.com
1998年	49	出版VAN等受発注オンライン化、須坂計画、客注迅速化への要望
1999年	71	ネット書店、ネットによる在庫確認システム
2000年	71	客注サービス(ブックライナー、直行便、ブックサービス)、ネット書店
2001年	52	客注サービス、出版社の受発注サイト、ネット書店
2002年	27	
2003年	40	(以下 特にメインとなるトピックなし)
2004年	20	
2005年	23	
2006年	25	
2007年	24	
2008年	12	

表5-3 2000年前後の『新文化』に掲載された客注問題記事数

また客注スタイルでの買い物は、消費者にとって当たり前の購買行動として定着した。既に述べた通りネット書店での検索発注は一般的な行為になっているし、ネット書店との対比でリアル書店と呼ばれる従来の小売店でも、店頭での検索システムやチェーン店間のネットワーク化、今まで述べてきた流通の効率化によって、出版社や取次に顔の効く熟練の書店員でなくても客注対応が可能な状況が生まれている。

Amazonの上陸と客注対応を巡って生じた変化は、最終的な結果だけみれば外圧によって産業が効率化された事例ともいえるが、その一方で「注文型」の購入の一般化に対応する流

通がくみ上げられていった事例ともいえる。この注文の多様性に対応する流通の確立とともに、小規模物流の利益構造は変化しかなかったことが、翻って今日の取次危機の遠因の一つとなっているのである。

3. 取次改革から流通改革へ

今日の状況に話を戻すと、取次の合従連衡や倒産による再編が進む中で、取次は出版流通の立場から出版業界の売上を伸ばす、または販売の効率性を上げるためにアクションを行っている。それらはすでにみた取次の機能を効率化して強化し、さらに言えば取次が前提とする「多数対多数」の状況を担保するためのアクションであるといえる。例えば返品率を低く抑えた場合にはキックバックを、多く返品した場合はペナルティーを科すといった責任販売や効率販売は、データに基づく仕入・配本・営業機能の強化であるということもできる。また取次によって書店買収・系列化が進んでいる現状は³⁵、書店が倒産して減っていく状況を少しでも打開し「多数の書店」がある状況を確保するための施策ともいえる。またトーハンが始めた新規出版社支援であるPI推進プロジェクトは、同様に「多数の出版社」を確保するために、従来参入障壁が高かった問題を解決する動きである。

出版業界の危機が語られる場合、多くは取次と大量流通を維持できない状況をどうするかという話を中心となってきた。本章で触れた注文制度の問題についても、第3章のジャパンブックセンターに関する議論でも、出版業界は結局取次に改革を求め、取次の話題に終始してきたということができるかもしれない。しかし、実際に取次が持っている資源やスキルの範囲はある意味明確である。そのほとんどは第1章で整理した五つの機能の範囲内であり、取次改革もその範囲内で行われてきた。根本的な流通改革、例えば大量物流がなくなる、雑誌の流通が限界を迎える、再販制や委託性が変化するといった、現在の構造を乗り越える改革を語る際には、取次改革のみにその責任を問うことはできない。

大量物流や多数対多数に対応しないアクションは、取次以外のプレーヤーが担って進められている。例えば、出版から時間が経過したため再販拘束を外して割引販売を行うバーゲンブックは、出版と古書販売を手掛ける八木書店が中心となって推進している³⁶。また大量物流ではなく、小型の書店をだれでも始められる小規模の物流を担おうとする「ことりつぎ」や³⁷、土日のみ開店する書店でありながら小規模物流も行う「H.A.B」なども誕生した³⁸。ただし、これらの動きは、すでにJBCの事例で見たのと同様に、あくまでも取次による流通の補助的な位置にとどまっている。

現在取次として業務を行っている各社のなかで、戦前の雑誌書籍別流通が日配によって再編され、戦後の日配解体による現在の取次成立までを経験してきたのは、大坂屋と一体化した栗田出版販売のみである。もちろん、会社の連続性が記憶の連続性と一致するわけではないが、多くの取次が現在の流通の前提のみしか経験していないのもまた事実であろう。

取次が現在の前提しか経験していないと同様、今日多くの出版社も書店も現在の前提しか経験していない。流通改革が考えられること、取次システムに対して批判が生じることはあるが、取次そのものをなくす、または取次が主軸にない出版流通システムを考える動きは大きくない。しかしその状況は大きく変化しているのも事実である。

2017年4月、Amazonは主要取引先の日販への「日販バックオーダー発注」を同年6月末で停止すると発表を行なった³⁹。この問題はAmazonによる取次外しという論調で語られることもあるが、むしろ本論の流れに沿って整理すれば、日本においては2017年段階にいたってもAmazonでさえ取次という従来型の主要プレーヤーに大きく依存していたという事実の確認と、その一方で出版流通改革が取次改革にとどまらない状況になったことを示す例となる。

この問題を理解するためにはまずAmazonの書籍発注システムをまとめる必要がある。Amazonの発注は「カスケイド (Cascade=滝)」と呼ばれる方式を取っている。これは滝が上から下へ流れ落ちるように、第一カスケイドの取引先に注文を行い、在庫がなかった場合は第二カスケイドに…という風に、優先順位をつけた取引先に次々に注文を行なっていくものである。取引先の各社が出荷できず最下段まで流れ落ちた注文を、日本における第一カスケイドである日販に依頼して各出版社の倉庫などから取り寄せるのがバックオーダーという発注方式であった⁴⁰。

バックオーダーで発注したとしても、実際に商品が入荷してくる割合 (Amazonの用語では「引当率」) が極めて低く、多くの売り上げ損失が生じているというのがAmazonの主張であり、そのためにバックオーダーを取りやめるということになったのである⁴¹。整理すると、Amazonはあくまでも非在庫品発注の際、取次を介することをやめるというだけのことであり、従来のカスケイドの序列を変化させ、取次との付き合いをやめると表明しているわけではない。

取次への非在庫発注をやめるということは、その商品は直接出版社に対して発注を行うことになるということでもある。言い換えれば、Amazonがまた新しい動きを、つまり出版社との直接取引を推進することも事実と言える。本論にとってより重要なのはAmazonの発注形式であるカスケイドの上位を占めるのが、日本においては日販であり、大阪屋・栗田である点であろう。

前節で述べた通り、Amazonの上陸によって注文による購入が改善されてきた。Amazonは出版流通システムに影響をあたえ、またバックオーダー問題に端を発する直接取引の推進も行ってきた。しかしそうであってもAmazonの主な出版物の第一の仕入先は、今のところは取次なのである。Amazon自身は徹底した秘密保持を行い、各国の具体的なカスケイド順位を明らかにしてはしていないが、今回のバックオーダー問題で、少なくとも書籍に関する第一カスケイドが日販であることは明らかになった⁴²。

日本に上陸して10年以上が経つAmazonであっても、出版物の仕入れ先が取次であるという事実は、その機能の限界を叫ばれつつもやはり取次がこれまでの出版物の流通を担ってきたし、それに変わるシステムも生まれてこなかったことの証左でもある。その一方で、バックオーダーに関わる一連の動きがこれまでと大きく違うのは、Amazonが従来の出版社や書店と違う解決方法を採用したことにある。本論で取り上げた問題、JBCにせよ雑誌の発売日に関する問題にせよ、そこで目指されていた改革は流通改革とはいいながらも、取次による流通システムを根本的に否定して新たな組織化を図る改革ではなかった。しかしAmazonはバックオーダー問題の解決に向けて、取次を利用しながらも別の独自の流通システムを準備

してきた。その方法が、先に述べた出版社との直取引、直接発注の積極化である。

実はバックオーダーが大きな問題になる以前から、Amazon は出版社と直接取引をするためのルートを開拓してきた。いわゆる直接取引と、より簡易的な「e 託販売サービス」⁴³である。出版社のみではなく、個人での売買や中小規模の取引にも活用できるプラットフォームと言える e 託は条件が明示されており、和書（アダルトを除く）については税込価格 60% が商品供給側に提供される。また今回のバックオーダー問題と前後して、より有利な条件を提示したことが明らかになっている⁴⁴。e 託に関しては、Amazon は複数の倉庫業者。物流業者と提携し、取次を介さない出版流通網を開拓している。出版社への集荷を取次のみを頼らず行うことができるのである⁴⁵。

もちろん、バックオーダー問題以前から、Amazon は定期的に好条件による出版社直取引勧誘を行なっている。中小規模の出版社の団体である日本出版社協議会は、この動きに対して改革を求める声明を出しているが⁴⁶、ここで求めている改革は取次による「正常ルート（原文ママ）による取引と再販制を断固として堅持」することである。Amazon が流通の問題を取次以外の方法で解決しようとしたことと比べ、規模の差があるにせよ、流通改革に対する考え方としての隔世の感がある。

いずれにせよ、これまで取次システムに対する批判が行われ、取次改革による流通改革が求められてきた時代から、ついに出版流通改革と取次改革が切り離されて語られうる時代になってきた。実際、出版社と小売の直接取引の動きは単に Amazon のみにとどまらない大きなうねりとなっている⁴⁷。紀伊國屋書店が、村上春樹の新作である『職業としての小説家』の約 90% 買い切りで直接仕入れたことは大きなニュースとなったが⁴⁸、この動きはさらに拡大し、2016 年にはトーハンの関係会社であるトーハンロジスティクスと、取次としてではなく自社の直取引を担う物流会社として提携を結んでいる⁴⁹。

本章を通して見てきたように、日本の近代出版産業において出版流通の基礎的インフラであった取次による流通システムは、2017 年時点で従来のあり方の限界を迎え、2019 年時点では既に次の時代への議論がなされている。この状況はまた、出版流通改革とは取次改革であった時代の終焉でもある。本章冒頭で引いた佐藤の説は、産業としては出版流通総体を取次流通として考えればよかった時代に、敢えて「生産」「流通」「消費」、つまり「出版社」「取次」「書店」の三業態を解体することでテキスト空間を取り戻す思考実験であったが、今日その三業態を支えていた取次は必然の存在ではなくなってきた。この変化がただちに、出版物のあり方を「生産」「流通」「消費」から解放するわけではない。むしろ参加するプレイヤーが絞られ、寡頭体制による「生産」「流通」「消費」の固定化をもたらす可能性が残っている。この問題は、産業のふるまいとしての出版文化の変化を否応なしにもたらすこととなる。さらに進んで読者や作者の出版文化を、どう変えるか予測するのは容易ではないが、次章では文化資源学として、この出版流通と出版文化の変化をどうまとめることができるか、議論を進めていく。

1 佐藤「テキスト空間論の構想」P.169

2 業界三者という言葉の初出については今のところ明確な線引きを行えないが、少なくとも 1970 年代には使われていたようである。1973 年の学校図書館協会機関誌『学校図書館』には「本の届かぬ学図と出

版流通：業界三社の意見」という特集が組まれている。もちろん学校図書館関係で語られる前に出版産業内で語られているはずである。

ただし1950年代に出版業界全体の懇親組織である「日本出版クラブ」が作られた際には、その言葉が見えず「出版界の総親和」とのみ語られている。

3 星野渉（講演）「これからの出版の話をしよう～失われゆく「取次」と、そのあとの世界～」(2015年9月19日) 於 beco cafe

4 野間省一「序に変えて」橋本求『日本出版販売史』(前掲) P.1

5 金原俊（医学書院副社長）「舞台に留まろう その2」一般社団法人日本電子出版協会 JEPA キーパーソンメッセージ 20151010 (2015)

6 序論で示した通り「本好きが行くべき店」「素敵な書店空間」に関する特集を組む雑誌はいまだ（またはいまだからこそ）多い。その中で、ここでいう「変態」した書店として繰り返し取り上げられる例は、本文中で言及しているブックスキューブリック、B&Bのほか往來堂書店、恵文堂一乗谷店などである。もちろん、こういった特集で取り上げられる書店すべてが成功した書店とも限らない。注目されてきた書店であっても、必ずしも生き残れるわけではない。例えば「なぜだ!? 売れない文庫フェア」や、「中学生はこれを読め!」で一躍有名になったくすみ書店は、資金繰りの問題から2015年に閉店している。本論の利益構造の部分でも示しているように、収益の上げ方は、変態とは従来の委託配本からの変態なのか、出版物を扱うという概念からの変態なのかで大きく異なる。どちらのあり方が成功するかは現時点でははっきりと断言できないが、企業としての継続性は収益の上げ方に大きく依存する可能性が高い。

7 例えば、京都のふたば書房は文具雑貨ショップ「ANGERS」も運営しているが、ここで蓄積したノウハウを取次会社トーハンと協力して書店向けソリューションビジネスとして展開している。

8 ブックスキューブリックは2001年にセレクトを重視した小規模書店として開業し、2008年からカフェを併設する業態の二号店を展開。店長の大井実は、ブック&カフェの業態での若者の出店を後押しする活動や講演も展開している。大井実（講演）「本の学校連続講座第18回：地域再生の核となるブック&カフェの存在意義」(2015年8月26日) 於：岩波セミナールーム

9 「大阪屋栗田ニュースリリース：経営統合による新会社を発足いたしました」

<http://www.osakaya.co.jp/newsrelease/archives/1> (2016年4月1日確認)

10 太洋社の倒産に伴って、首都圏中心に展開していたチェーン書店である芳林堂が倒産した。またつくば市の友朋堂や鹿児島市のひょうたん書店は、全店舗を閉鎖し外商と通信販売のみに切り替えている。

11 『出版販売小史』東京出版販売(1959) P.37

12 村上弘明『出版流通とシステム』pp.31-33

13 木下修『書籍再販と流通寡占』、小田光雄『出版社と書店はいかにして消えていくか』、畠山貞『出版流通ビッグバン』、湯浅俊彦『デジタル時代の出版メディア』

14 学会誌に現れる代表的なものとしては、小林一博「出版物流通の諸問題」『出版研究5号』日本出版学会(1970)、小出鐸男「出版産業論」『出版研究30号』日本出版学会(1999)。出版業界新聞『新文化』新文化社、および業界雑誌『出版ニュース』出版ニュース社の記事

15 「トーハン・ロジステックス：企業理念」<http://www.tohan-logi.co.jp/company/philosophy.html> 2016年7月1日閲覧

16 出版流通に間接的にかかわる問題として、出版物を運ぶトラックのシステムが限界を迎えているという指摘がある。多くの取次は地方の出版物流については共同で運送会社と契約しコンテナをトラックに積み込む形で配送している。しかし、コンビニや書店への個別対応や商品の多様化などの要請は、トラック事業者の減少や車両不足の中で難しくなっている。取次・出版社・運送会社などでつくる出版物関係輸送懇談会では、減少する配送業量とオペレーションの効率化の議論が行われている。

17 2015年度の日本出版学会研究発表大会ではワークショップ「出版プラットフォームの変化—取次システムの崩壊と新たな基盤作りの動向」(司会者：星野渉・問題提起者：堀鉄彦)が開催されるなど、出版学としても「取次後」への議論が進んでいる。

18 2015年5月、出版科学研究所によるデータ

19 注意しなくてはいけないのは、現在のシステムが根本的に間違っていたのではないという点である。村上『出版流通図鑑』で引かれているように、1980年代までは、このシステムは非常に効果的であり、利益の再配分によって出版物の多様性を支えた「世界最高」とも称される流通システムでもあった。今日、委託制や再販制に支えられた取次システムが危機に瀕しているということと、そもそもそのシステ

ムが悪であったという批判は別物であることは言うまでもない。

20 俗に「雑誌のトーハン・書籍の日販」と呼ばれていたが、決算を見るだけでもトーハンはマルチメディア商材に力を入れては始めていることがわかる。出版物と同時に配送するには工夫が必要だが、「七分口銭」といわれて七分程度しか利益率のない雑誌や書籍に比べると、数割という高いマージンを得ることができる。

21 例えば iPhone や Mac などを生産するメーカーである Apple は、Mac OS を搭載したコンピュータを作成する唯一の企業であり、生産から小売までを垂直統合することで価格決定やブランド力、流通への発言力などを高めている。『アップルのデザイン』日経 BP (2012) pp.34-37

22 アマゾンの日本での売上は 2015 年時点で 82 億 6400 万ドル (120 円換算で約 9916 億円) である。ジャンル別の売上は明示されていないので出版物がどの程度かは不明だが、十分にインパクトを持った数字である。

23 「出版協／アマゾンによる出版社直取引の勧誘で声明を発表」『流通ニュース』2015 年 12 月 16 日

24 Amazon 社史については、Amazon.com History & Timeline

(<http://phx.corporate-ir.net/phoenix.zhtml?c=176060&p=irol-corporateTimeline> 2011 年 12 月 1 日現在掲載)。

25 「せどり」については、河原すみ『せどりで副業! 30 代ダブルワーカーの日記』ブイツーソリューション (2008) や A Y U R A 『ぜったいできます! アマゾンマーケットプレイス&アソシエイト・プログラム』技術評論社 (2008) などのサラリーマン向けの体験記やハウツー本が出版されている

26 Amazon.com に対する分析は、出版の問題以外にアメリカの大企業に対する経営研究という面から行われていることが多い。Robert Spector "Amazon.com: Get Big Fast" HarperBusiness (2002)、脇英世『アマゾン・コム野望』、石井貴士『キンドル・アンリミテッドの衝撃』講談社 (2016)

また、「ロングテール」概念を提唱したクリス・アンダーソンも、成功例として Amazon.com をひいている。クリス・アンダーソン『ロングテール 「売れない商品」を宝の山に帰る新戦略』早川書房 (2006)

(Chris Anderson. *The Long Tail: Why the Future of Business is Selling Less of More*, Hyperion, 2006.) pp.64-69,191-224。

27 「Amazon、日本で電子書籍 年内にも 市場拡大に弾み」『日本経済新聞』2011 年 10 月 20 日号

28 本論の委託と客注の扱いの差とは別だが、書籍と雑誌では定期性があり内容も定まっている雑誌の方が配本を行いやすく。書籍は定期性がないために、配本の際の配分が難しいという問題もある。

29 もちろん、フェアなどを開催しようとして、または独自のこだわりから取り寄せた本が、予定通りに着荷しないことは、小売にとっても店づくりの根本につながる問題ではあった。

30 佐野真一『誰が「本」を殺すのか』(文庫版) P.147

31 Amazon は検索からの購入、アフィリエイトからの購入、サイト内をドリルダウンしての購入の割合がそれぞれどの程度かについては公開していない。しかし、デジタルコンテンツ協会による調査では、インターネット書店の検索およびデータベースを高く評価する意見が出ている、デジタルコンテンツ協会編・経済産業省商務情報政策局監修『デジタルコンテンツ白書』デジタルコンテンツ協会 (2008) P.131。より消費者に近い動きでは、東洋経済新報社の行ったアンケートで、ネット書店利用者の 55% がネット書店の検索機能を利用理由に挙げている、『東洋経済 6219 号』東洋経済新報社 (2009) P.83。

32 「本の特急便」に関しては、「平成 22 年に創立 10 周年を迎えるのを機に、読者の購買行動の変化に対応して利用者負担をゼロにすることと、書店の経営環境改善に貢献するため、「読者手数料の撤廃」と「書店取引正味下げ」を実施しました。」としてこれらの追加料金の徴収を終了している。トーハンニュースリリース「株式会社ブックライナー創立 10 周年を機に読者手数料を無料化～書店取引正味下げで書店負担も軽減～」2009 年 12 月 14 日

33 トーハン『よくわかる出版流通のしくみ』P.20。

34 トーハンは TONETS-V、日販は NOCS9000 というネット回線を利用した店舗オペレーション支援サービス上で、自社の在庫状況をほぼリアルタイムで開示している。

35 2016 年にトーハンが大手書店チェーン「八重洲ブックセンター」の株式を取得し、経営層を送り込むというニュースがあったが、日販・トーハンともにこれ以前から経営の厳しい書店への資金注入や株式取得などを行い、一種の系列書店化を行っている。

また、日販が大手マルチメディア (一時期はレンタルビデオが主力であったが、今日は多業種展開が多い) チェーンである、TSUTAYA を主な取引先とする流通会社 MPD を立ち上げている。

トーハンが出資や役員派遣をしている主な書店は、八重洲ブックセンターのほか、明屋書店、文真堂書店、東京ブッククラブ（オークスなど関東を中心に書店チェーンを展開）、ブックファーストなど

³⁶ 「バーゲンブック・アウトレットブック仕入れ」（八木書店 Web サイト）

https://company.books-yagi.co.jp/buying_bargainbooks 2016年6月1日閲覧

³⁷ 神楽坂にカフェ併設の書店かもめボックスを展開する校正会社鷗来堂が展開するサービス。2015年からサービスを開始している。サービスの説明に「そして「本屋」というのは本を売る場所です。本棚は空間を権威づける高価な壁紙ではなく、書店員が情熱と工夫とともに本を挿し、読者が興味と期待からそれらを手に取り、新陳代謝を繰り返す生き物のように存在するものです。「ブックプラス」として本屋に他業種を加える方法があるのなら、「プラスブック」として他業種に本屋を加えてもいいはず。それが、僕らの考える本屋の広がりかたです。」と述べているように、ここにおける本屋は本を扱う小売業としてかなりの広がりを持って想定されている。

本を何かと併せて配置したい、身の回りに置きたいという動きへの対応が、実際の出版物販売につながるのか、それとも単なる空間演出として受け入れられるのかは未知数。また「取次」のメタファーで展開しているが、返品や新刊委託等のいわゆる従来の書店向けサービスは前面に出していない。

³⁸ 元取次勤務の店主が土日のみ行う書店。少数の出版と流通を行っている。買切と委託の両条件があり、買い切りの場合通常よりも正味が抑えられている。

「流通/Distribution」（H.A.B Web サイト）

<http://www.habookstore.com/%E6%B5%81%E9%80%9A-distribution-1/> 2016年6月1日閲覧

³⁹ Amazon は2017年4月28日付で各新聞社に通達を行なっている。「アマゾンジャパン、日販非在庫書籍取寄せ発注を6月30日で終了」新文化5月1日・「アマゾン、出版社と直接取引強化 日販への発注一部中止へ」共同通信5月1日・「アマゾン、出版と直接取引 一部書籍、取次の日販介さず」日本経済新聞5月2日

⁴⁰ 星野渉「「バックオーダー発注」停止を考える」『文化通信』5月15日。

なお、星野が取材をもとにまとめているのもあくまでも2017年の発注方法であり、今後Amazonが様々な新しい方法をとることは十分に考えられる。

⁴¹ なおこの件に関して日販は「一方的な通告を受けたことは大変遺憾」とする見解を明らかにしている。「アマゾン書籍直接取引で波紋 取次の日販「一方的で遺憾」」日本経済新聞5月3日

⁴² カスケイドの下段階へ注文が流れて行き、どこにもヒットしなかったものが発注される受け皿がバックオーダー発注である以上、バックオーダーを提供してきた日販が日本におけるAmazonの第一カスケイドとなる。

⁴³ Amazon 自身による説明ページ（2017年6月現在：これまでも随時 url は変化してきたし、今後とも変化する可能性がある。）<https://www.amazon.co.jp/b?node=4160761051>

⁴⁴ 「アマゾン・日販バックオーダー停止の波紋」（文化通信5月29日）。

⁴⁵ Amazon の主な委託先として確認できる倉庫・物流業者には、大村製紙、京葉流通倉庫、工藤出版サービスなどがあるが、これらはこれまで出版物保管や輸送で出版社と取引があった会社でもある。これらを組織的に自社の物流に組み込んだ点に、Amazon の強みがあるとも言える。

⁴⁶ 日本出版社協議会「アマゾンによる出版社直取引（e 託取引）の勧誘に対する声明」2015年12月16日 <http://shuppankyo.cocolog-nifty.com/blog/2015/12/e-c2b7.html>

⁴⁷ 従来でも直取引を専門とし、書店への直接営業と直接出荷を行う出版社は複数あった。規模の大きな会社としては、ディスカバートゥウェンティワンや永岡書房などがある。また石橋『まっ直ぐに本を売る』でトランスビュー方式が有名になったトランスビューやミシマ社など、直取引を中心とした業態で新たに成立した出版社や流通代行業者もある。ただし本論では流通全体の動きを見るためにこの件は省略する。

⁴⁸ 「紀伊國屋書店、村上春樹氏の最新刊「買い占め」」『日本経済新聞』2015年8月21日

⁴⁹ 紀伊國屋書店プレスリリース「紀伊國屋書店 トーハンロジテックスと提携した直仕入物流を開始」2016年8月2日

第6章

出版文化のせめぎあいとしての出版流通改革

第6章 出版文化のせめぎあいとしての出版流通改革

本章では1・2章における概念的な整理、3・4・5章での事例を踏まえ、序論で展開した問いに対する答えを導いていく。再度確認しておく、本論で立てられた問いは以下の通りである。「日本の出版流通産業はいかなる枠組みで改革が行われてきたのか。そしてその際に「出版文化」という言葉で語られてきたものが、どのような役割を求められ、実際には何を担ってきたのか」というものである。

本章ではまず、出版流通を巡る先行研究のうち、1・2章で確認した産業的視点から離れたものを検証する。これらの新たな枠組みでの出版流通研究を参照枠としながら、文化資源学的視座に立った出版流通と出版文化を考えていく。そのために出版流通をフローとストックという二つの見方から整理していく。

最終的な問いへの回答を端的にまとめてしまえば、「出版流通の変化は、出版文化のせめぎあいがその枠組みを規定してきた。そして出版文化は、変化を生む駆動力にも停滞させるバリアーにもなってきた」ということになる。しかし、このせめぎあいは、いくつかの段階に分かれている。そしてせめぎあいは、第2章で整理した三つの出版文化のうち「出版物を作り出し世に送る人々・組織のふるまいとしての文化」を主な原因として生じてきた。読者や作者の、いわば出版物の読み取られ方や内容に関わる出版文化は、こういった衝突の際に、前面に押し立てられる看板としての役割を担わされてきたということもできる。

しかし、産業のふるまいとしての文化はさらに細分化される。つまり書店や取次、出版社といった個別のプレイヤーのふるまいと、大枠としての出版産業全体の構造的なふるまいである。前者は時々の状況に応じて変化をするが、後者は出版流通という範囲においても根本的には変化しにくい。出版文化のせめぎあいは、出版産業全体の構造と個別のプレイヤーのふるまいの間に生じる、いわば代理戦争としての役割を与えられてきた。それゆえ流通改革を失敗させるバリアーにも、成功させる駆動装置にもなりえるのである。

ただし、「出版物を生み出し世に送るものとしての文化」「出版物を読むことで生まれる文化」は単なる業界の言い訳として存在するわけではない。こうした出版文化もまた、産業構造によって規定されつつも、それに対する矛盾を突きつけ変革をもたらすものとなりうる。本論の問いのさらに先を考えるために、読者がアクセスしうる出版物の蓄積としてのテキスト空間を補助線として置き、今後の出版文化の動きを考える。

1. 新たな枠組みの中での出版流通研究

論文冒頭で述べた通り、出版流通研究は従来の役割を終え、新たな役割を模索している状況にある。出版産業が直面している課題は取次単体の業態分析や流通ルートのあり方の評価ではなくなり、そういった視点での研究が産業の効率化や高度化につながる可能性も低下している。もちろん、変化の中において中小の出版プレイヤーが具体的にどのような取り組みをしているのか、業界にむけたノウハウや知識の提供は常に求められている¹。その一方で、これまでの出版流通のあり方を別の枠組みで捉え直す研究も登場してきている。本論もまた、出版流通を経済活動や産業構造としてのみではなく、文化的な視点を踏まえつつ見直すこと

を目的としている。最後の議論に入るまでに、新しい枠組みで出版流通を捉えた先行研究をまとめておく。

第1章および2章で見た流通ルートや制度を研究するアプローチと同様に、新しいアプローチも出版流通産業の構造を解明しようというものではある。しかし、より概念的、または解釈的に出版流通を捉えようとする方法である。解釈の軸は導入された概念によって異なるが、いずれも産業としてのみ出版流通を考える分析では見えなかった、出版流通の持つ複合的な意義を明らかにするアプローチである。

メディア論を利用した出版流通、および出版産業研究は一つの軸として重要である。すでに本中で引用を行っている、柴野京子による『書棚と平台』や、長谷川一『出版と知のメディア論』を始め、永嶺重敏『読書国民の誕生』などは、メディア論の概念をたくみに盛り込んで出版産業および出版流通を捉えている²。第1章でとり上げてきた既存の産業分析が、言わば出版産業内部での議論を目的としていたのに対し、これらの研究は産業構造や取引制度の変化としてではない、出版業界外部の視点をもち、産業以外との関係性の中での変化を追及している。その意味において文化と産業を無理なく結びつける参照軸として重要である。

第3章において雑誌を巡る「発売日」の問題を議論する際に参照した、戦前の出版産業と読者の形成を中心に研究を行う永嶺重敏は、読者の要請に応えるために産業が努力し成し遂げたかの様に語られてきた流通の効率化と全国均一物流の成立が、却って読者に受容者としての意識をすりこみ、行動を規定してしまった事を明らかにしているし、さらに読者側からどのような要請がよせられてきたのかを詳細に分析している³。

長谷川一は、技術決定論的なテクノ・メディア論ではなく、歴史社会的にメディアの多相性を読み解くソシオ・メディア論に即しながら、「知」に結び付けられる学術出版コミュニティの変化を捉えている。研究者としての「キャリア」と言うシビリアな問題と大学出版の関係を経史的に読み解き、さらにデジタル化が進む学術出版の世界をも視野に入れている。さらに専門書と教養書の接続領域にある「人文書」というジャンルに注目し、産業的な成功および失速、そしてその未来をメディア論の視点を交えて分析している。

柴野の『書棚と平台』においては、出版流通そのものが明確にメディアとして扱われている。円本による出版流通の改変が個々人の本棚を均質化していく過程、また書店店頭での購書空間が充実していくことで書店が「幅広く読者層をとりこむ装置」として働くメディアとなっていく過程は、まさに出版流通がメディアを流通させるだけでなく、それ自身がメディアとして振る舞うあり方を示している。

これらの議論をさらに発展させるものとして、試論として示されるにとどまっているが、佐藤健二が重要な指摘を行っている。彼は「生産」「流通」「消費」という、言わば借用語である産業分析の言葉によって一般化した流通経路を想定し、その経路上の問題として出版を説明する従来の取り組みの限界を示した。佐藤は面的な広がりを持った空間として読書・テキスト世界を分析する方向性を提案している⁴。フローのみでなく、ストック機能としてどの様に社会と出版物が繋がるか、人々の営みとしての「読む」「書く」「集まる」「重なる」「写す」「刷る」という点への注目などが議論されている。方向性の指摘にとどまっ

や経済支配と言った観点から切り離して考えるという提案も、本論と軌を一にする。

長谷川、柴野、佐藤らのアプローチは、出版産業についての研究であった出版流通研究を、より広がりを持ったものとして展開させる可能性を持っている。その一方で気をつけなくてはならないのは、「出版文化」を巡る議論で指摘したのと同じ、現実からの乖離や恣意的な解釈という問題である。本論は、出版流通において実際に生じている事例の分析と概念的な整理と並行して行っている。この点から考えると、小出鐸男が20世紀末に出版産業研究に対して行った「出版の持つ規範的な文化性にとらわれ、産業論に必要な実証研究が不得手」⁵という指摘は、このアプローチにおいて特に注意しなければならない点である。

ただし、第1章の冒頭で述べたように既に「産業論」としての従来型の出版流通議論はその役割を変えてきている。また「規範的な文化性」とらわれることは警戒すべきではあるが、出版物には単なる消費財としての面以外に、それが世の中に送られ蓄積されていくことによって発生する多様な出版文化の源流という面があることは否定しえない。第2章で『新潮45』を例としてあげたように、出版産業の状況と社会全体の状況、および自身の持つ危機感を安易に結びつけて議論を散漫にする言説は避けなければならない。また、既に否定されているものの繰り返しメディアを賑わせる「活字離れ」といった曖昧な言説と出版不況を安易に結びつける議論も避けなくてはならない⁶。その一方で、出版物の在り様がそれによって支えられている制度や、本論において腑分けした出版文化については、現場の状況と並行して議論すべきである。繰り返しになるがここでいう出版文化は、執筆や読書に関わるもののみではなく、出版産業のふるまいも含む。第2章で設定した、本論における出版文化を再度示しておく以下のおりである。

1. 出版物を生み出し世に送るものとしての文化
2. 出版物を読むことで生まれる文化
3. 出版物を作り出し世に送る人々・組織のふるまいとしての文化

こうした議論の延長上で筆者の修士論文段階で組み立てた軸が、流通過程で作られる出版物の集積、つまり出版物のストックへの注目である。書店店頭で消費者が手に取れる商品、書店に送られるために取次や出版社の倉庫に置かれている在庫品など、出版物が集積された状況に注目し、それを形成する機能として出版流通を捉えようという試みである⁷。産業構造を見ていく先行研究において、出版流通とはプレーヤー間をつなぐルート上を、どの様な種類の商品が移動していくか（または移動しないのか）を軸に議論を展開している。この移動に際しての契約や制度、またプレーヤー間の繋がり方を軸にした議論が設定できる。

出版流通のフロー面を重視した分析には、佐藤健二が流通構造に対する研究を批判した文章にもあらわれる問題点がある。

その出版分析の基本的な視座が狭い意味での「流通経路」の概念に縛られるために、結果として印刷物というテキストの持つ事物としての性格は、ひどく平板で外面的になってしまう⁸。

佐藤は、「流通経路」つまりフロー部分を中心にすることで分析し得る出版流通は、出版物の持つ多様な側面を排除し、いわば没個性の商品としての側面の議論のみに終止してしまう可能性を指摘している。出版物の中身およびその周辺に生まれる文化的な側面が、無個性な商品として一般化される中で失われることになる。

出版流通を単なる商品のフローとして一般化させないためには、個々の出版物が、または出版物の集積が、社会との関係の中で配置されている状況から考える必要がある。佐藤の試論が掲載されている『テキストと人文学』も、柴野が書店店頭や出版流通をメディアとして論じた『書棚と平台』も、流通経路の上を流れている一商品としてだけ考えると、一つの数字と化してしまう。独自の内容を伴った出版物として認識するには、いずれかの流通段階で集積され、そこに流通段階で関わる他のプレイヤーや、より広く読者との関係が生まれる必要がある。

流通面に注目しすぎたために出版物の個性を無視している例として分かりやすいものとして、「だれ殺」などと略して人口に膾炙するまでになったルポルタージュ、『だれが「本」を殺すのか』内での指摘がある。作者である佐野眞一は、さまざまな出版プレイヤーと話をする中で、ある種の違和感を持ったと述べている。その典型例は、セブンイレブン・ジャパン（現セブンアンドアイホールディングス）の鈴木敏文に対してのインタビューと、それに対する佐野自身の感想に見ることができる。鈴木は元々トーハンにも勤務していたながら、日本最大の流通経路を開拓した、「ぬるま湯的体質とはまったく違った」凄みを帯びた人物として描かれている。その一方で、「こと「本」の内容となるとほとんど関心を持っておらず、むしろ冷淡のようにさえ思われた。」と、鈴木が進める流通の効率化には一種の妄想を絡めなくては理解できない何かを覚えたと述べている⁹。前述の佐藤による「流通経路」問題と同様に、出版物を単なる商品としてのみ考えることへの疑問を読み取ることができる。

もちろん、佐野自身が出版という営みと出版された内容に対して一定の価値基準と評価軸を持った読書人であり、「だれ殺」の中で当時売れていた『リアル鬼ごっこ』に対して非常に厳しい評価を下し「ストーリーのあまりの荒唐無稽さと文章のあまりのひどさに一ページめでぶん投げた」と述べている部分に端的に現れているように、典型的な「良書好き」「本好き」スタンスから意見を述べている点も踏まえておかななくてはならない¹⁰。

商品としての出版物を扱う出版流通のフローに対して、ストックは出版物が社会の中に置かれている状況と設定できる。具体的には、書店店頭に置かれた出版物、図書館におさめられた出版物などがストックを作る要素となる。読者および社会へのアクセスが保証されているという意味では、今や取次の倉庫に在庫された商品や Amazon の倉庫および各種提携先の倉庫会社に蓄積されている出版物もストックとして十分に評価できる。いわゆるメインルートの出版流通という枠を取り外せば、古書店の店頭に並んだ出版物、本による町おこしで町中に置かれた本などもストックを形作る本の集積である¹¹。ストック形成の機能として考えることで、動的なエコシステムとして出版流通を捉え直すことができるだろうというのが、筆者の考えであった。

この考え方は、筆者も企画・運営に参加した東京大学文化資源学研究室による文化資源学フォーラム『書棚再考』を発想源の一つとしている。このフォーラムでは、人々が本の集積

アクセスできる状況を「書棚」と呼ぶことで、新しい視野を開こうと試みた。

あるべき理想や本に関する既存の枠組みを前提とするのではなく、既存の枠組みを踏まえながらもそれにとらわれず、現実には本と人が出会う場所やそこで生じていることそのものに焦点を当てたら、どのようなことが見えて来るでしょうか。私たちは、本が集められた場が人々に開かれている状態を〈書棚〉と呼ぶことにし、そこから何が生まれうるかを探ろうと考えました¹²。

『書棚再考』における「書棚」は、人と人とのつながりや場所に重点を置いたため、直接に一般の人々がアクセスできることを軸に考えている。しかし、取次や出版社の倉庫など直接アクセスできない場所に集積されていたとしても、個々の出版物としての別は生まれうる。ストックの持つ意義は内容や量、アクセスを行う人やアクセス方法、関係する流通経路等によって変わってくる。出版物の特性は集積されている場にある程度縛られる、または場がもつ特性によって集積される出版物が決まってくるということができただろう。

例えば、いわゆる取次を介したメインルートにおける出版物の集積であっても、大きく二つに分ける事ができる。一つは書店店頭や図書館など読者が直接手にするための集積であり、もう一つは今あげた様な集積に対して出版物を供給するためのもので、取次の持つ在庫や、出版社が手元に置いている商品などを挙げる事ができる。直販やネット通販によって、後者の在庫と読者の関係はより近づいていると考えることもできる。

読者が直接触れることができる集積も、個人で所持するための出版物を提供する小売業と、図書館などの公共の財として利用される場合に分ける事ができる。さらに、小売業と言ってもその特性は様々であり、小売業と一口に言っても規模、立地、業態で集積する出版物は大きく異なってくる。駅前にある売り場数坪の書店と大型書店では、在庫規模も在庫されている出版物の内容も、そして書店として求められる役割も異なってくる。同じ駅前の小型書店でも、ベッタタウンにある場合は通勤時や帰宅後によむ本や雑誌を中心にまんべんなく在庫しているであろう。一方で、ビジネス街にある小規模書店であれば多くはビジネスマン向けの実用書やビジネス雑誌を中心とした品ぞろえとなっているだろう。

また、本をインテリアとしても扱うような書店を兼ねた他業種の小売店では見た目を重視した大型本や洋書が、書店兼雑貨屋を営むヴィレッジヴァンガードのような業態であれば敢えて通常の書店にはないようなニッチなジャンルの出版物が中心となって集積することとなる。他にも、書店以外にコンビニエンスストア、駅ナカの売店、スーパーなどに設置された雑誌ラックなども挙げる事ができる。ここには専門的な出版物やページ数の多い文芸書が置かれることはまずなく、雑誌や文庫、しかも最近発売された新しいものを中心にストックしている事が多い。

ストックされる内容に加えて、ストックされる期間も業態によって異なってくる。例えばCVSなどでは、マニュアル化された店内オペレーションによって定期的に商品が入れ替えられるため、出版物がストックされている期間は非常に短い。一方で、特定のジャンルに特化した専門書店などでは、店のコンセプトや顧客を考えて長期的に特定の傾向でストックがな

されている可能性が高い。なお、このストック期間は、売れないで在庫され続けている期間ではないことは述べておかななくてはならない。ストック期間が長いことは商品の回転率（一定期間、書店では多くの場合は一年間に商品が何回販売されたかを算出したもの¹³⁾）が低いということではない。在庫しておく必要がある出版物が売れた場合、注文等で取り寄せて再度配置すれば、ストックの形を保つことになる。

フローとストックという言葉を使って議論を整理しているものとして、根本彰による提案を挙げる事ができる¹⁴⁾。図書館学の専門家である彼は、日本において商業出版流通は知的情報のフロー機能、図書館はそのストック機能を持つものとして役割を整理している。市場に新旧問わず大量の出版物が流れていたのが図書館の役割が明確でなかったが、今後はフロー量も減少するので図書館によるストック機能によって補完される必要性が増すという。彼の議論は現在の状況まで出版売上が減少する以前に行われているが、現状の出版流通の状況を考えると、先見性を持った知見であると言える。

ストックがフローの変化を補完するという根本の指摘は的を射ているが、「商業＝フロー」「図書館＝ストック」という二分法は、やはり出版流通を捉えるには限界がある。根本は図書館を軸に情報の動きをまとめる議論の中で議論しているという点を勘案しなくてはならないが、商業出版流通においても、上述のCVSのようにほぼフローの一部として流れていく場合もあるが、専門書店のように長期に渡ったストック形成がなされる場合もある。

ストックとしての書棚の状況を、出版産業の実態と結びつけて論じているのが前述の柴野京子の『書棚と平台』である。出版物の流通状況の変化を背景として追いながら、実際に人々が出版物のアクセスする書店の店頭での販売方法、物体としての「書棚」と店頭販売の「平台」の導入の歴史に注目して分析を行うことで、出版流通というメディアがいかなる変化を遂げてきたかを明らかにしている。本論においてこの分析に付け加えるのが、流通の実態がいわば相互作用として変化してきたという点である。

流通の川上が変わり、書店が変わり、結果としてストックが変わるという歴史は従来型の出版流通の完成過程においては有効な分析軸である。しかし、より現代に近づき、大量流通が完成したのちの流通改革においては、発売日問題やJBCを通じてみたように、書店・取次・出版社などすべてプレーヤーの相互作用の中でストックの形態とその支え方を変えていくと見なくてはならない。

2. 出版文化を起点に見る出版流通・出版産業の変化

このフローとストックを巡る相互作用を生むものとして、再び出版文化を軸に考える必要がある。出版流通という営みは前項で示したように、書棚に代表されるような出版物のストックを作り、支えるものである。一方で、2章において日本の出版史をまとめ、3章以降で事例を追ってきた中でわかるように、流通改革とは実態としてはフローを支える機能の変化であり効率化（場合によっては非効率化）である。フローが変化にさらされることで、ストックもまた変化する。しかし、全ての出版物へのアクセスを可能にするようなストックのあり方を支えることを目的として、出版流通のフローが変化してきた訳ではない。さらには、これまで追求されてきた流通の効率化は、取次を巡る、また出版産業を巡る環境が大きく変

化するなかで、5章で示したように新たな方向性を模索しなくてはならない段階にきている。

出版流通の、つまりフローの変化の方向付けは、複数の出版文化のせめぎ合いの結果として行われて来た。この文化のせめぎ合いと、産業そのもの合わせて俯瞰することを可能にするのが、産業分析に固定せず文化的な議論にも終わらない文化資源学の視点である。佐藤のテキスト論でも佐野のルポにおいても、産業のみに立脚した出版の議論には疑義が呈されている。本論もその点には同意する。しかしその一方、3章以降で示してきたこれまでの流通をめぐる変化は、いずれも産業の問題を解決しようと試みる、産業としてのふるまいとしての文化のせめぎあいから生じてきた。または文化のせめぎあいを生じさせていたともいえる。フローの結果として形成されるストックは、産業の変化とも文化のせめぎあいとも不可分である。産業のみに立脚して議論することもできないが、一方で産業の現実を全く切り離して議論を行うことは、前項で示した小出による批判を免れ得ない。

ここで産業が形成する出版物のストックとテキスト空間の関係を考えると、佐藤の論を別の形で整理をする必要がある。そこで整理されるべきは、文化資源学の用語を借りれば書籍の「ことば」と「かたち」の関係、実態的には個々人の読書経験の蓄積として形成される「ことば」としてのテキスト空間と、実態としての書物が形成する物質的なかたちとしてのテキスト空間の関係である。

佐藤は次のように述べている

「テキスト空間」は、情報を記録し意味を表象する「物体」としてのテキストと、それを生み出し考え集め伝える「主体」としての人間とで構成される¹⁵。

ここで述べられている物体としてのテキストは出版物という範囲に留まらないが、読み手であり書き手である人間と相互に関連しながらテキスト空間を織りなしていく。上述の文章とともに佐藤によってまとめられたものが、図6-1である。ここで佐藤は人間の意図や動機を超えるものとしてテキストを主語に「集まる」「重なる」と配置をし直している。

しかし、この再配置はあくまでも概念としての出版に関わる行為の再配置である。本論文で目指す、産業の実態との考えてきた具体的な産業と社会の状況に対応させることで、佐藤の試論を更に拡張し、現実の産業分析と、読者の出版文化と産業のふるまいとしての出版文化とつなぐことが可能となる。

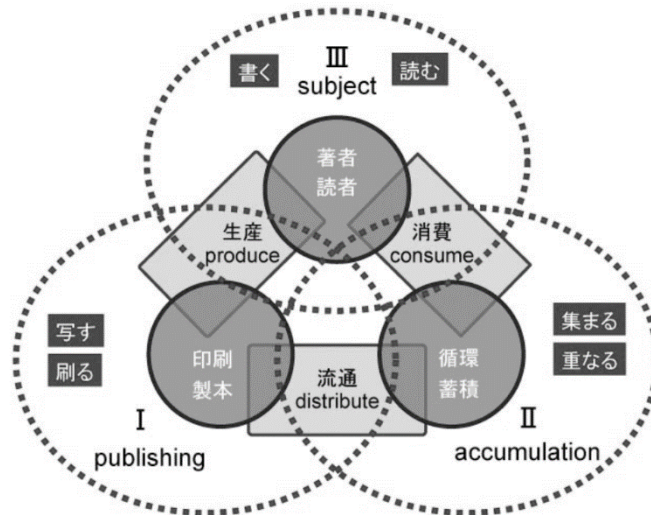


図 6-1 佐藤健二によるテキスト空間の再配置

読者（著者）のテキスト空間は、物体としてのテキスト（本論の範囲に限定すれば出版物）が集まり重なった循環・蓄積を具体的な接点として、無限のテキストのストックへとアクセスできる可能性を持つ。しかし現実には、読者（著者）個々人がアクセス可能なテキストの範囲は限られている。それを規定するのは、読者がどのような出版物の具体的なストックにアクセス可能であるかという物理的かつ出版流通的な要因である。

出版流通は各所に様々なストックの形成を行っている。しかし、それぞれのストックは必ずしもアクセスする読者が求める、または構想しているテキスト空間を形成可能にするものではない。佐藤は新刊中心の陳列空間であることを断りながら、書店を「私」空間としての書齋とも隣接する「公」「共」の場であると述べている。たしかに書店は個人が所有するストックよりも多様性を持ち、また複数の個人が交差する空間ではある。よく知っているお客が好みそうな商品を置くなどの即物的な対応として読者の求めるテキスト空間の形成を志向する場合がある。また出版社や取次も市場調査やマーケティングと言う形で間接的に読者の求めるものと可能性はある。

しかしながら、これまで見てきた通り基本的には出版流通産業の持つ方向性は商品としての出版物を効率的に配置するためのものであり、そこでのふるまいは出版産業の持つ文化に大きく依存する。そのため最終的に出版物にアクセスする読者の持つ全ての要望に答えられるものではない。概念的には無限に存在する出版物全てに対して開かれるストックへのアクセスは、物理的にはその限界が厳然として存在している。もちろん書店店頭において発見性や利便性を高める努力など、ストックの整理や更新という努力がなされて入る。

各所に形成される出版物のストックの内容や形態を決定してきたのは、出版産業における流通のありかたである。そこでは、つねに産業としてのふるまいのせめぎあいが生じている。ここで整理なくてはならないのは、このふるまいとしての出版文化には、二つの面があるということである。本論文で扱ってきた期間の大半、2010年代までの出版流通においては、大量の均質な出版物を各所に配置することが志向されてきた。そのため、むしろ個別の読者の志向よりも流通の効率性、つまりいかに多くの出版物をフローに乗せるかが重視されてき

た。前提となっているのは、第4章後半において示したように、大正期に強力なリーダーシップのもとで定着した出版流通産業全体のふるまいである。このふるまいは3章でみたJBCの改革の時点で、問題がることが自覚され始めていた。また、Amazonの例を引いた際に示したように注文物流という面からも根本的な修正を求められてきた。しかし、根本的には変化をすることなく、安定的に続いてきた。そして、変化が求められるときには、例えば再販制やAmazonの上陸に対する抵抗などの様に、出版業界の各プレイヤーは出版文化を守るためという旗印のもとで、さまざまに行動を起こし、変化を押しとどめようとする。この変化しないふるまいが第一の側面である。

一方で、個別の書店・出版社・取次の単位でのふるまいは、その時々状況に応じて変化してきた。JBCは書店というプレイヤーが、産業全体のふるまいに対して改革を求め、一時的には多くの賛同を得たものである。第4章でみた発売日論争では、特殊な小売りである駅売店が、新たな販売方法を展開したことで、衝突が生じている。流通改革や流通を巡る論争は、こういった出版産業のふるまいの代理戦争としてみることが可能である。出版流通は読者の求めるストックを形成するための努力と考えることができるかもしれない。流通改革の事例においては、例えば3章における書店の主張の中に、または5章で示した取次の主張の中に読者が現れているように思えるが、実はそこに読者や作者の出版文化からの主張を明確に読み取ることはできない。

このように産業のふるまいとしての出版文化を整理し、出版流通改革の事例を確認してきたことで、本論文の問いである「日本の出版流通産業はいかなる枠組みで改革が行われてきたのか。そしてその際に「出版文化」という言葉で語られてきたものが、どのような役割を求められ、実際には何を担ってきたのか」へは次のように回答できる。

出版流通の変化は、出版文化のせめぎあいがその枠組みを規定してきた。そして出版文化は、変化を生む駆動力にも停滞させるバリアーにもなってきた。そしてせめぎあいは、読者対産業、作者対読者という異なった位相でのせめぎあいではなく、あくまでも産業のふるまいとしての出版文化の間で生じてきた。産業のふるまいは、明治大正期の雑誌流通改革や、日配という流通機構の成立に持つ中で、戦後成立した強固な産業全体の構造と、その中で常に変化する各プレイヤーのふるまいの二つの側面を持っている。

すでに引いた通り、戦後確立した取次による出版流通は「世界にも例を見ない存在であり、効率のよさは世界最高」と呼ばれたこともある¹⁶。出版物のフローとストックのあり方が2000年初頭までの出版流通において保たれ、そのフローとストックによって支えられ規定されてきたのが2000年代初頭までのテキスト空間であった。このような出版文化と出版流通の関係を整理すると以下のような動きとなる。

1. 特定の時期において、フローの水準で成功を収めた出版流通の仕組みが、産業全体の構造を形成し、出版物のストックのあり方を規定する。
2. 形成された仕組みのもとで産業内の各プレイヤーに利益が発生し、徐々に業界全体の構造として定着していく。その結果として、無意識化された前提として「産業全体のふるまい」としての文化が成立する。

3. 「産業全体のふるまい」を大きく変化させる圧力が生じた場合は、個別のプレイヤーの枠を超えて、定着した出版文化を支持する。
4. 「産業全体のふるまい」が定着する一方で、個別のプレイヤーはその枠内でふるまいを最適化させ、または変化させる。場合によっては、「個別のプレイヤーのふるまい」の間で矛盾が生じる。
5. 「個別のプレイヤーのふるまい」としての文化の衝突が起きた場合は、小規模なルール変更や調整が行われる。相互に影響が起き小さな変化および改善は起きるが、「産業全体のふるまい」として定着した文化を変えるまでには至らない。

上記5の段階における衝突の例が雑誌発売日を巡る論争である。一方で再販制の見直しに対する議論やJBCの理想と現実の乖離は3の段階の例といえることができる。繰り返し流通改革を行いつつも、結局は取次による大量流通によって利益配分が行われてきた長年の歴史そのものもまた、いわば3の典型的な状況であるといえるだろう。

しかし、第5章の後半で見たように、現在生じている衝突は小さな変化や改善では収まりきらない段階に来ている。その結果として求められている出版産業構造そのものの変化にむけて、出版産業・出版流通が守ってきた出版文化の矛盾を意識化させ、強固で安定的な構造を打ち破るきっかけは、読者が求めるテキスト空間からの要求でも出版学や文化資源学による予見的分析はなかった。きっかけは目の前に迫った抜き差しならない出版産業全体の経営面の危機である。

このように考えると、出版文化の衝突、せめぎあいは出版産業というコップの中の嵐にすぎず、流通のありかたを根本的に変える動機となりえていなかったようにも取れる。しかし、この変化の時代に直面したからこそ、戦後の出版流通を相対化し、テキスト空間と現実のストックを文化と産業の橋渡しとして利用し、文化資源という枠組みで流通を捉えなおすことを試みることができた。抽象化して考えて見ると、この論文において、文化のせめぎあいを整理することを可能とした背景もまた、ややトートロジカルではあるが現在生じている産業の状況と、小規模な文化のせめぎあいの限界によって状況が相対化されたからである。

本論文における問いと、出版文化の整理については、このようにまとめられる。しかし、これはあくまでも2010年代まで通用していた出版産業の枠組みとしての出版文化ということになる。第5章で示した通り、強固なものとして変化しなかった産業全体のふるまいは、否応なしに変化をせざるを得ない状況に直面している。前述の1-5の流れの整理でいえば、振出しの1の段階に戻ったものである。今後どのような産業構造が形成され、それが2010年代までの産業のふるまいとしての出版文化のように長期間にわたって定着するものになるかは、現在のところ予言の域を出ない。しかし、これまで言わば従の位置にあった、「出版物を生み出し世に送るものとしての文化」「出版物を読むことで生まれる文化」という側面と、テキスト空間を補助線として利用することで、現在進められている出版流通改革を整理することが可能である。

佐藤が書店に託した「公」「共」は意識的に読者とのコミュニケーションを行い、テクス

ト空間を形成しようとしてきた一部の書店においては見られたかもしれない。しかし従来型の出版流通においては、多くの書店はむしろ「金太郎飴書店」と揶揄される、新刊本と雑誌によって均質化された空間であった。これは、産業としてのふるまいが基本的に変化せず、産業側が送りたいものを適正に大量に効率よく動かすフローの結果として、読者が接触できるストックが書店店頭形成されていたからである。しかし、直近の状況は読者のニーズを反映させたストック形成のために、フローを設計するという逆転の発想へ傾いてきたということもできる。

こうした動きの端的な例が2018年に取次大手二社が揃って打ち出したキーワードとしての「マーケットイン」である。マーケットインは産業的な用語として様々な業種において使われている言葉で、消費者のニーズを重視して商品企画を行うことを指す。出版流通の場合は、これまでの取次による一律の配本を軸にしたフロー型の大規模流通から、書店からの個別の受注に基づくストック形成を軸とする多品種流通に移行することとして使われていると考えてよいだろう。

マーケットイン推進に言及したトーハン社長の言葉を引くと

現状のプロダクトアウト型の流通からマーケットインへの転換が重要だと考えている。刊行情報の事前活用を徹底し、発売前に書店からの受注を固め、売り切ることを前提とした「欧米型の受注流通モデル」を構築していく。これを進めるには当然利益の再配分が必要になるが、その原資は返品減少に求めるしかない。物流部門の省人化・省力化と併せ、業界全体で返品減少を成し遂げ、その利益を業界三者で再配分していきたい¹⁷。

ということになる。もちろんこの変化を生んだ根本的な動機は、前章で述べた取次ルートでの売上規模の縮小を始めとする環境変化、業界3位以下の再編を生んだ経営危機であり、究極的には企業の存続と利益追求である。何よりも大きいのはトーハンが物流を外部化したことに現れているように、物流コスト負担が限界に近づいているという点にあるだろう。マーケットインは、あくまでも産業の利益構造問題として議論されているので、志向されているのは読者の求めるテキスト空間の形成、読者の求めるストックそのものではない。しかし、「書店からの受注を固め、売り切る」ためには、当然ながらこれまで以上に各書店を訪れる具体的な読者と彼らが求めるストックを想定した流通が必要となる。

マーケットインが達成されるためには、これまでのような仕入・配本システムでは立ち行かないことは明白である。そのための布石は既に打たれはじめている。一つは日本出版インフラセンター（JPO）を事務局として、2014年に出版情報の整備のために設立された出版情報登録センター（JPRO）の活動である。「出版新時代の情報インフラの構築 JPROは紙と電子両方の書誌・権利情報、販売促進情報を収集・活用し、出版物の円滑な流通に寄与します」¹⁸とあるように、出版されている、そして出版が予定されている書誌・書影を取次、書店、図書館等に提供する機能を担っている。前身である近刊情報センターを発展的に解消し、近刊情報センター時代に作られたネットワークを引き継ぐ形で、出版情報の網羅的な提供を目指している。

さらなる布石として、2018年11月に日本出版取次協会（取協）が出した「お願い」がある。日本出版取次協会は名前のごとく取次各社を会員とする一般社団法人で、取次間共通の問題を話し合い、解決するための組織である。取協は「書籍業量平準化に向けた JPRO からの事前書誌登録お願い¹⁹」として、前述の JPRO に発売の約2ヶ月前、より正確には取次搬入が「上旬銘柄」（搬入予定1～15日）は前々月25日、「下旬銘柄」（16～31日）は前月10日を締切りに情報登録を行うように依頼を行った。お願いという体裁をとってはいるが、これまで出版社が取次窓口で交渉・申請し、その後数日で販売・発送を行ってきたシステムを改めようという取次の方針をはっきりと読み取ることができる。

出版情報に対する方針転換は、さきにトーハン社長が述べた「欧米型の受注モデル」への切り替えのために重要なものとなる。書店が今後出版される予定の書籍を確認した上で、読者から直接注文をとったり、自店によく来る客の属性を考慮して発注を行ったりするためには、予め書誌情報がわかっていなくてはならない。しかし、第1章で取次業務を解体し「配本機能」として示した、従来型の中数日での発送システムでは、書誌情報に基づいた判断による書店店頭でのストック形成は難しい。そのため、従来の書店の形成されていたストックの大半は、配本機能によって自動的に送られてくる出版物ということになる。注文も、これから出る本をもとにストックを形成したいから事前に予約するというよりは、店頭で配本されなかった既刊を客の要望に答えて後から入手するための「客注」の手段となってきた。この客注がどのように変わってきたかについては、既に第5章で見た通りである。

2020年現在、マーケットイン型出版流通は志向されているものの完成はしていない。強固なふるまいに支えられてきた出版流通の仕組みは、ある部分を少し変えただけで全体を変えられるほど単純なものではなく、また出版社・取次・書店そして商品を求める読者までも含んだ複雑な構造になっているからである。この複雑なシステムと、そのシステムの矛盾に直面した際の出版流通と出版文化のせめぎあいは、今日まで出版物のストックのあり方を規定してきた。今日理想とされるマーケットインは、これまではいわば看板にすぎなかった読者の出版文化と、それに応じなくてはもはや立ち行かなくなった産業側のせめぎあいの中で、一つの方向としてたち現れてきたものである。

この方向で流通改革が推し進められた結果として、読者の求めるものに完全に応じることが可能になるのであれば、それは理想的な状況を生むようにも見える。しかし、常に読者の要求に全面的に従うことが、出版産業に新しいふるまいとしての出版文化を更新し、読者と産業の間の矛盾を完全に解決することにつながるかは不透明である。例えば、検索による注文が一般化することによって、却って多様な価値観のテキストに触れる可能性が低下することもありえる。インターネット上のコミュニティーにおいて、同意見の議論のみが見えることで、特定の意見が過剰に増幅される「エコーチェンバー」現象が指摘されている。この現象と同様に、無限に存在するテキストへアクセスするための方法が、従来型の検索および検索や購入結果によるおすすめ機能に限定されている限り、全く新しい異なった価値観と出会う可能性も低下してしまいかねない。

マーケットインに対応した出版流通体制はいかなるものになるのかは、2020年以降の出版業界が壮大な実験の場になる。多少悲観的な見方をすれば、在庫スペースを必要とする物

理的な商品としての書籍では、完全に個々の読者のテキスト空間に合致するストックを形成するのは不可能と言えるかもしれない。その意味では、電子書籍という発展途上のメディアが出版流通にどうかかわるかも今後の出版文化にとって重要となるだろう。本論は事例を含めて出版流通の視座を「物理的な出版物」に限定してきたために取って代わられなかったが、電子書籍のあり方が更に変わることで、電子的なストック、バーチャルなテキスト空間は可能になるかもしれない。

マーケットインを目指す出版流通と拡大しつつある電子書籍によって、今後の出版産業はどうかになるかについては、いまだ予言に近い予想の粋を出ない。2020年以降の出版産業は、新しい出版文化形成の壮大な実証実験の場である。出版物へのアクセス・ストックの形成・テキスト空間との接続がどうかになるかについても、傍証として扱うための情報すら不足している。先を見通すことは難しいものの、ネット書店・電子書籍の一般化やマーケットインを志向した流通改革によって、テキスト空間につながるストックのあり方が変容している事実は否定できない。

インターネットへの接続さえあればどこでも検索・読書可能な電子書籍に範囲を広げれば、テキスト空間を形成するためのストックはすべての出版物へと拡張していくようにも見える。こういった検索による発見と実物の出版物の蓄積を目の前にした場合の発見にはどのような違いがあるのかについては、現在も議論が続いている状況である²⁰。その一方で、より分断され専門化されたテキスト、雑誌の一つの記事や本の一章、または検索した語の周辺の文章といったレベルまで断片化された情報へ直接アクセスできる環境はすでに整っている²¹。ストックされるテキストの粒度そのものが大きく変化している。この包括と断片化があいまった状況が、新たなテキスト空間を形成するのか、物体から離れたテキストがいかなる形で読者のテキスト空間につながるのか。デジタル化された出版流通形成するテキスト空間の未来について語るには、現時点ではまだ情報が足りず、本論の範囲も大きく超えている。ここでは、現在の出版流通の変化とマーケットインをテキスト空間という視点から整理し直すにとどめたい。

本論文では、出版流通と取次の現実と出版文化を事例に基づきつつ概念的に整理することで、相互に関わるものとして再評価してきた。文化優先論として産業の実態を無視するのではなく、また逆に産業の都合で規定された結果に出版文化が合わさっていくという議論でもなく、テキスト空間と産業の両者が出版文化によって相互に縛られながら、そのせめぎあいの中で改革が行われてきたことを示すことができた。また、このことは「ことば」と「かたち」を扱う文化資源学が、現役の産業を分析する視座を持ちえることも示している。出版流通と取次を分析することでその一端を示せたこともまた、出版流通改革を出版文化のせめぎあいして示し、また産業のふるまいとしての出版文化の強固さをしめした結論同様に、本論において強調しておきたい発見である。

このまとめを受けて、最後に指摘しておきたい文化資源学の展望が一つある。本論で取り上げた2010年代までの出版流通体制と同様に、今後は2020年前後の変化とその後に来るであろう新しい出版流通システムも、新たな軸を設けることによって文化資源的考察の対象と

なりえるということである。これは本論で軸とした出版産業のように、様々な現在進行系の産業を、文化資源学が分析の対象とし得るということを示すにとどまらない。今や学問分野を問うことなく学术界全体で大きな問題となっている学術情報の流通、例えば様々な情報の囲い込みや、その一方で進むオープン化も、文化資源学研究の射程に含められるということである。

例えば、オランダに本拠地を置く国際的な学術出版社エルゼビアを巡る議論である。エルゼビアは歴史ある出版社であり、ある段階までは様々な学術情報をデジタル化し、流通させるための重要なインフラであった。しかし、購読料問題などをめぐり、現在は自由な学術情報流通を妨げるものとして「学会の春」とも呼ばれるボイコット運動が起きるような状況になっている。こうした問題もやはり、電子的な環境を含めて産業構造や産業の文化のせめぎあいを追求することで、学術的テキスト空間の変化を軸に文化資源学の問題として扱おう。また、日々充実していく文化財のデジタル情報においても、提供者のみでなく研究者がどのようにそれに関わっていくのかについての議論も同様である。学術情報流通、文化情報流通について今後の議論を進めていくことが、出版流通からスタートした産業と文化両面を踏まえた文化資源学研究の次のステップとなるべきであろう。

-
- 1 象徴的な例として、日本出版学会において長年にわたって活動してきた分科会「出版流通研究部会」は「出版経営研究部会」と統合し、より広い枠組みの「出版産業研究部会」へと発展的に改組した。
 - 2 長谷川一『出版と知のメディア論－エディターシップの歴史と再生』みすず書房（2003）、柴野『書棚と平台』、永峰『読書国民の誕生』
 - 3 永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたか 本郷・駒場の読書生活 130年』平凡社（2007）
 - 4 佐藤「テキスト空間論の構想」pp.158-165
 - 5 小出鐸男「出版産業論」P.28
 - 6 林「「活字離れ」論の文化史」
 - 7 鈴木「出版流通の再評価」
 - 8 佐藤「テキスト空間論の構想」P.160
 - 9 佐野『誰が「本」を殺すのか』（文庫版）P.188
 - 10 佐野『誰が「本」を殺すのか』（文庫版）pp.271-274
 - 11 日本でも「高遠ブックフェスティバル」「不忍ブックストリート」など、本による地域振興が盛んにおこなわれるようになった。高遠の取り組みについては『書棚再考』pp.56-59 および「高遠本の街 Web サイト」<https://honomachitakato.wixsite.com/info>（2019年4月1日閲覧）
 - 12 『書棚再考』pp.4-5
 - 13 下村彦四郎『新装版棚の生理学』出版メディアパル（2004）pp.14-19
 - 14 根本彰『情報基盤としての図書館』勁草書房（2002）pp.28-31
 - 15 佐藤「テキスト空間論の構想」P.153
 - 16 箕輪『消費としての出版』pp.87-102
 - 17 トーハン創立 69 周年記念式典近藤敏貴社長挨拶 2018年9月19日
https://www.tohan.jp/news/20180921_1273.html（2019年4月1日閲覧）
 - 18 「出版情報登録センター（JPRO）」 <https://jpro2.jpo.or.jp/>
 - 19 「書籍業料標準化のお願い」 <http://www.torikyo.jp/b-gyoryo/index.html>
 - 20 仲俣暁生（講演）「電子書籍の未来」第20回東京国際ブックフェア講演 2013年7月5日
 - 21 鈴木親彦、天野絵里子、中西秀彦、中村健「オープン化と出版産業の変化 学術ジャーナルを軸に」日本出版学会春季研究発表会 2018年5月12日

参考資料：第2章において KH-Coder に利用したタイトルリスト

本論文第2章において、「出版文化」の使われ方を数量的に分析した際に利用した記事の全タイトルを掲載する。なお今回の分析を再現可能にするために、利用したデータそのものも Web 上に公開しておく。このデータを本文内と同じ設定で実行することで、同じ結果が得られる。

<http://ik1-305-12975.vs.sakura.ne.jp/var/www/html/datashare/titledata.xlsx>

・タイトルの収集法について

収集対象：CiNii <https://ci.nii.ac.jp/> 上で「出版文化」というキーワードでヒットしたすべての記事のタイトルを収集

収集時期：2018年12月21日

収集数：1200記事

・リストの分析方法

「KH-Coder」を利用し、タイトルに登場する単語の「出現回数」および「共起分析」を実施。

指定したストップワード：

「ブック・ストリート」

「ブック」

「ストリート」

(※「ブック・ストリート」が業界誌『出版ニュース』に長期掲載されたコーナー名のため)
「特集」

「回」

(※記事に内容とかかわらず登場する語のため)

「TI」

(※CiNii で付与されるタイトルを意味する接頭辞のため)

以下、利用した全タイトルリスト

- 震災からの歩み(第84回)被災地で守り続ける出版文化
- ブック・ストリート 出版文化 教科書から「文学」は消える?
- ブック・ストリート 出版文化 「新潮45」の休刊
- ブック・ストリート 出版文化 小さい雑誌の役割
- 雑誌『新生活』と徳川夢声：占領期における出版文化の一側面
- 江戸の出版文化：メディアミックスにより庶民に広がった妖怪ブーム。(特集 江戸東京 妖怪探訪)
- ブック・ストリート 出版文化 剽窃・盗作を超えた議論を
- ブック・ストリート 出版協 出版文化の維持、発展には
- ブック・ストリート 出版文化 歴史としてのバブル
- 文庫本は貸し出さなければならない(「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」(2017年

全国図書館大会第 21 分科会報告集)を読んで)

- ブック・ストリート 図書館《拡大版》 住民の図書館利用者を増やすこと（「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」(2017 年全国図書館大会第 21 分科会報告集)を読んで)

- ブック・ストリート 出版文化 出版機能も?

- ブック・ストリート 出版文化 『西南役伝説』を読む

- ブック・ストリート 出版文化 雑誌はどうなる

- 「飯田学」を論ずる(特集 信州と出版文化)

- 地域を編む(特集 信州と出版文化)

- 出版人・古田晁と筑摩書房(特集 信州と出版文化)

- ブック・ストリート 出版文化 文学賞のこと

- 林羅山と江戸初期の出版文化(特集 江戸初期の学問と出版)

- ブック・ストリート 出版文化 幸福書房の閉店

- 南宋における四書疏釈書の登場とその要因：師説の継承と出版文化(特集 学びのネットワーク)

- 社会に貢献し人生を応援する(第 33 回出版粋会出版文化賞(本賞 石風社、特別賞 無明舎出版) 第 14 回出版粋会新聞社学芸文化賞(本賞 左右社))

- 創業 50 周年を目指して(第 33 回出版粋会出版文化賞(本賞 石風社、特別賞 無明舎出版) 第 14 回出版粋会新聞社学芸文化賞(本賞 左右社))

- 粋会出版文化賞を受賞して、三七年を振り返る(第 33 回出版粋会出版文化賞(本賞 石風社、特別賞 無明舎出版) 第 14 回出版粋会新聞社学芸文化賞(本賞 左右社))

- ブック・ストリート 出版文化 出版不況が作品に

- 特集 人生の先輩たちと絵本を楽しむ(vol. 2)

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会秋のプログラム

- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第 38 回)お猿と帽子売り

- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 祝 国際アンデルセン賞作家賞受賞 角野栄子さん

- 特集 絵本から読みものへ

- 特集 絵本どうぶつえん

- 特集 子どもたちのキラキラ光る瞳に出会ってしまったら、もうやめられない! 読みきかせは楽しい!

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会夏のプログラム

- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第 37 回)狙(ねら)われてる

- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 出久根育さん 絵本を描く人になりたいと思っていました

- 特集 好奇心・探究心をはぐくむ科学絵本

- 長谷川義史さん 著作リスト(特集 おもしろいやで! もっと知りたい! 長谷川義史: 徹底解剖)

- 絵本作家・長谷川義史ができるまで(特集 おもしろいやで! もっと知りたい! 長谷川義史: 徹底解剖)

- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第 36 回)幼い子に語る『一寸法師』

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会春のプログラム

- 特集 児童書店員+編集部が選ぶ 未来に残したい絵本 2017
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん ミロコマチコさん いろいろな人に絵を見てもらいたいんです
- 特集 いわさきちひろ生誕 100 年
- 絵本作家さんからの年賀状：二〇一八年 戌 新春
- 出版界スコープ 第 33 回梓会出版文化賞：出版梓会
- ブック・ストリート 出版文化 本の値段考
- 出版文化と著作権(下)デジタル化とネットワーク化の進展の中で
- ブック・ストリート 出版文化 ノーベル賞など
- 出版文化と著作権(上)デジタル化とネットワーク化の進展の中で
- ブック・ストリート 出版文化 追悼記事のこと
- ブック・ストリート 出版文化 選評を読む
- ブック・ストリート 出版文化 怒りも娯楽に?
- ブック・ストリート 出版文化 宅配ドローンも?
- 戦後の与謝野源氏と谷崎源氏：出版文化史の観点から（特集 平成二十八年度 全国大学国語国文学会冬季大会シンポジウム 女性作家と『源氏物語』）--（公開シンポジウム）
- ブック・ストリート 出版文化 京都の書店を回ってきた
- ブック・ストリート 出版文化 霊への接近
- ブック・ストリート 出版文化 ひっそり出会いたい
- 第五五九回 近世出版文化の中の絵図・地図：海洋把握の変容と「日本」（彙報 二〇一六年度後期東洋学講座講演要旨 江戸の書物文化）
- ブック・ストリート 出版文化 時代を表す言葉
- 近世出版文化の中の絵図・地図—海洋把握の変容と「日本」—（2016 年度後期東洋学講座講演要旨）
- 国文学研究資料館所蔵品にみる生巧館の活動と木口木版の受容
- 社史・年史編纂に関わる分類試論（小特集 アーカイブズ・ノート）
- ブック・ストリート 出版文化 美術小説の隆盛
- 親子二代にわたる事業『新・国史大年表』（第 32 回出版梓会出版文化賞(本賞 大月書店、特別賞 太郎次郎社エディタス) 第 13 回出版梓会新聞社学芸文化賞(本賞 旬報社、特別賞 国書刊行会))
- 働く者の権利の実現に寄与することを追求（第 32 回出版梓会出版文化賞(本賞 大月書店、特別賞 太郎次郎社エディタス) 第 13 回出版梓会新聞社学芸文化賞(本賞 旬報社、特別賞 国書刊行会))
- 次世代は新しい主体で仕事をせよ（第 32 回出版梓会出版文化賞(本賞 大月書店、特別賞 太郎次郎社エディタス) 第 13 回出版梓会新聞社学芸文化賞(本賞 旬報社、特別賞 国書刊行会))
- 時代と格闘し抗いながら多様な出版活動を継続していく（第 32 回出版梓会出版文化賞(本賞 大月書店、特別賞 太郎次郎社エディタス) 第 13 回出版梓会新聞社学芸文化賞(本賞 旬報社、特別賞 国書刊行会))
- ブック・ストリート 出版文化 先取りレビュー
- 研究プロジェクト活動報告 近代日本児童出版文化史の研究：明治期における博文館出版文化の内容と特質

- “りかゴコロ”を子どもたちに(1)京都大学総長 山極壽一さんに聞く
- はじめての海外文学
- 特集 絵本で世界をひとまわり アフリカ
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 祝!デビュー30周年 いたうひろしさん まだまだ描きたいものがいっぱいある
- ひみつのかまくら
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会冬のプログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第35回)人参と大根と牛蒡(ごぼう)
- 特集 『ちいさいおうち』のヴァージニア・リー・バートンの世界
- 近世における出版文化の諸相(二〇一六年度大会パネルセッション)
- つなぐ つながる 子ども文庫
- 見返し美人(2)古典芸能&古典文学の絵本
- 特集 高齢者にも高学年にも 古典芸能&文学の絵本
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 祝! 絵本作家50周年 西巻茅子(にしまさかやこ)さん いつも、これまでにない絵本をつくりたかった!
- おにぎり 100 こ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会秋のプログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第34回)鬼の面
- 絵本のある空間 個性派ぞろい 街の本屋さん in 神保町
- 特集 みんな大好き のりものえほん
- 絵本から読み物へ 身近な科学に親しもう(特集 夏休みの外遊びと自由研究のヒントに 不思議がいっぱい科学絵本)
- 追悼 佐藤さとるさん コロボックルをありがとう
- 特集 100%ORANGE の10冊
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 松岡達英(まつおかたつひで)さん 親子で野山を体験してほしい
- いつも さんぽで おあいしますね
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会夏のプログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第33回)すえひろ
- 見返し美人
- おすすめ科学絵本(特集 夏休みの外遊びと自由研究のヒントに 不思議がいっぱい科学絵本)
- 写真絵本 vs 写実絵本(特集 夏休みの外遊びと自由研究のヒントに 不思議がいっぱい科学絵本)
- 2016年に亡くなられた絵本作家さん追悼(特集 2016年 心に残った絵本)
- 2016年 心に残った絵本(特集 2016年 心に残った絵本)
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん きくちちきさん 骨董市で絵本と運命の出会い
- もぐらのモリィ はるのみ一つけた!
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会春のプログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第32回)ふくろうの染物屋

- 来日記念インタビュー バーバラ・マクリントックさん
- 特集 春は別れと出会いの季節 新しい一歩を踏み出す子どもたちに手渡す本
- 絵本作家さんからの年賀状：二〇一七年 酉 新春
- 出版界スコープ 第32回梓会出版文化賞：出版梓会
- ブック・ストリート 出版文化 月四百円の意味
- ブック・ストリート 出版文化 校閲ドラマが話題に
- インタビュー 出版〈文化〉内部からのヘイト本への〈抵抗〉（特集 文化が紡ぐ抵抗/抵抗が鍛える文化）
- ブック・ストリート 出版文化 「ネタバレ」禁止の行き過ぎ反対
- ブック・ストリート 出版文化 「承知しました」への違和感
- ブック・ストリート 出版文化 怒る受賞者
- ブック・ストリート 出版文化 「FAKE」と「STAP」
- ブック・ストリート 出版文化 小さな雑誌の必要
- 書評 日比嘉高著『ジャパン・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』
- ブック・ストリート 出版文化 演劇史の貴重な記録
- ブック・ストリート 出版文化 哲学書房の廃業
- ブック・ストリート 出版文化 正しさという圧力
- 出版界と図書館界の共存共栄を求めて 図書館の発展は出版文化も発展させる
- ブック・ストリート 出版文化 コンマリ本が米で年間一位に
- 第12回出版梓会新聞社学芸文化賞 本の成功はなんで決まるか（第31回出版梓会出版文化賞を受賞して(花伝社) 第12回出版梓会新聞社学芸文化賞を受賞して(勉誠出版)）
- でもなく、でもない、で35年（第31回出版梓会出版文化賞を受賞して(花伝社) 第12回出版梓会新聞社学芸文化賞を受賞して(勉誠出版)）
- 名前を挙げたいふたり（第31回出版梓会出版文化賞を受賞して(花伝社) 第12回出版梓会新聞社学芸文化賞を受賞して(勉誠出版)）
- 梓会出版文化賞を受賞して（第31回出版梓会出版文化賞を受賞して(花伝社) 第12回出版梓会新聞社学芸文化賞を受賞して(勉誠出版)）
- ブック・ストリート 出版文化 べつの言葉を
- ギャスケルの「ジョンソン」：言語、語り、出版文化
- 書評 林洋子、クリストフ・マルケ編『テキストとイメージを編む：出版文化の日仏交流』
- 特集 児童書店が選ぶ クリスマスに贈る絵本
- この人にあれもこれも こんにちは！ 絵本作家さん いわむらかずおさん 「家族」と「自然」は幸せの基本
- あなら
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ！ おはなし会冬のプログラム
- おはなしおぼさんのおはなしのたねあかし(第31回)歳神様
- 手遊び歌遊びの絵本大集合
- 特集 「エルマー」「じふた」「へなそうる」 渡辺茂男の世界：子どもの本と図書館

- 村中李衣さんに「絵本に読みあい」について聞きました（特集 人生の先輩たちと絵本を読む）
- 山花郁子さんに「歌と語りの会」について聞きました（特集 人生の先輩たちと絵本を読む）
- うっかりヨミ子さん 高齢者施設で絵本を読む（特集 人生の先輩たちと絵本を読む）
- この人にあれもこれも こんにちは！ 絵本作家さんスペシャル ヨシタケシンスケさん 打たれる杭は飛び出せる
- よみきかせロボ メダタシー
- おはなしおぼさんのおはなしのたねあかし(第30回)お日様とお月様と雷様の旅
- 各国大使館にきく 絵本と読みきかせ(2)
- 特集 片山健のまなざし
- 特集 子どもと一緒に楽しみたい 2015年の絵本を振り返る
- この人にあれもこれも こんにちは！ 絵本作家さん 山本祐司(やまもとゆうじ)さん あわてず・いそがず・トコトコと
- 三びきのネコ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ！ おはなし会春のプログラム
- おはなしおぼさんのおはなしのたねあかし(第28回)おぼっちええ
- 特集 かこさとし 90歳 90冊
- 絵本作家さんからの年賀状：二〇一六年 申 新春
- 小学校1~6年上半期 国語の教科書に載っている児童文学
- 特集 夏休みは絵ずかんで好奇心が躍りだす！
- この人にあれもこれも こんにちは！ 絵本作家さん 鈴木(すずき)のりたけさん 分け入っても分け入っても、絵本！
- あかちゃん みせて
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ！ おはなし会夏のプログラム
- おはなしおぼさんのおはなしのたねあかし(第29回)大きな く・ち・び・る
- 各国大使館にきく 絵本と読みきかせ(1)
- 特集 生誕100年 日本児童文学研究者、翻訳者、作家 瀬田貞二のまいた種
- 日本の製紙産業の技術開発史:第6回 和紙産業の対応及び環境への意識
- ブック・ストリート 出版文化 読みたい本が載ってない？
- ブック・ストリート 出版文化 アレクシエービッチの受賞
- 作家が語る「図書館亡国論」 作家 百田尚樹インタビュー 「出版文化」を亡ぼすのは誰だ
- アレッサンドロ・マルツォ・マーニョ，清水由貴子訳，『そのとき、本が生まれた』，柏書房，2013年3月，240頁，ISBN978-4760142491，2,100円+税 / ラウラ・レプリ，柱本元彦訳，『書物の夢、印刷の旅-ルネサンス期出版文化の富と虚栄』，青土社，2014年11月，288頁，ISBN978-4791768318，2,800円+税
- 富山県立公文書館所蔵の往来物資料について
- 富山県立公文書館所蔵の往来物資料について
- ブック・ストリート 出版文化 インタビューアーの禁じ手？
- ブック・ストリート 出版文化 ノンフィクションの賞

- ブック・ストリート 出版文化 読書日記をつけたい
- ブック・ストリート 出版文化 台湾の小説にはまる
- さらに深い出版文化交流が必要である 日韓修交 50 周年・出版に関する三つの感想
- 漫画談義 打ち砕かれた「熊本マンガ王国」の自負：沖縄古本屋ツアーから見えてきた沖縄と熊本の出版文化の格差
- ブック・ストリート 出版文化 「作家さん」の違和感
- ブック・ストリート 出版文化 業界の慣習って？
- ブック・ストリート 出版文化 本で床は抜ける？
- 私の著書と近畿大学中央図書館
- 江湖詩人の詠梅詩：花の愛好と出版文化（南宋江湖の詩人たち：中国近世文学の夜明け）―（江湖詩人の文学世界）
- 〈柔らかな統制〉としての推薦図書制度：文部省及び日本出版文化協会における読書統制をめぐって
- 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ：移民文学・出版文化・収容所』
- ブック・ストリート 出版文化 『旅のラゴス』はなぜ売れた
- 出版文化・書物文化の交流をめざして 東アジア出版人会議の 10 年
- Digital Publishing (No. 145) 出版文化を守るために必要なもの 「定義」と「根拠」のない議論のリスク
- 特集 鼎談 出版文化と江戸の教養
- ブック・ストリート 出版文化 大阪出身作家の活躍
- 「フロー情報」の氾濫に抗して（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 音楽業界の「昭和君」と「平成君」（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- ネットばかりだとバカになる（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 「本屋さんの街」があるのは日本だけ（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 図書館の“錦の御旗”が出版社を潰す（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 日本の出版文化を守りたい：アマゾンと闘う理由（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 我々は「本が作った国」に生きている（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 本はタダではありません！（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 「読書と教養」が国民の大局観を育てる（特集 「出版文化」こそ国の根幹である）
- 出版界スコープ 第 30 回梓会出版文化賞決定：一般社団法人出版梓会
- ブック・ストリート 出版文化 ツヴァイク復活？
- 第 30 回梓会出版文化賞を受賞して あけび書房 第 11 回新聞社学芸文化賞を受賞して ミシマ社
- 中国近現代出版文化史の一断面：生活書店から三聯書店、そして再び生活書店へ
- 大蔵虎明『語間之抄』について：寛永年間の出版文化と中世末期・近世初期学問史の一隅をめぐって
- Muse Special Guest 記憶が消えても、記録は残る：この道 4 半世紀、思えば遠くに来たものだ 株式会社出版文化社アーカイブズ研究所所長 記録管理学会元会長 小谷允志さん（記憶と記録：紡ぐ、結ぶ、伝える）

- 出版文化的視点から見るジェイン・オースティン（第8回大会シンポジウム発表論文）
- 特集 『100万回生きたねこ』をどう読むか
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 五味太郎(ごみたろう)さん オレにとって絵本は人生
- カエルぴょん
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会冬のプログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第27回)相撲をとる貧乏(びんぼ)の神
- 編集部おすすめライブラリー50冊 (特集 橋渡しができるのは身近な大人 絵本から読みものへ)
- 渡辺暢恵さん 子どもたちが本を読めるようになるには読み手としての経験を重ねることが大事です (特集 橋渡しができるのは身近な大人 絵本から読みものへ) -- (実践の現場から)
- 脇明子さん 成長期の子どもたちには物語性のしっかりしたおはなしを届けることが大事です (特集 橋渡しができるのは身近な大人 絵本から読みものへ) -- (実践の現場から)
- 児童文学作家に聞く (特集 橋渡しができるのは身近な大人 絵本から読みものへ)
- 書評 ゲーリー・マーカー著(白倉克文訳)『ロシア出版文化史: 18世紀の印刷業と知識人』
- 特集 『どうぞのいす』『どんくまさん』でおなじみの柿本幸造さん 生誕100年
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん ひろかわさえこさん 小さな扉の大きな世界
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第26回)尻(しり)鳴りべら
- 特集 赤ちゃんと1・2・3歳の絵本
- 読みきかせ・おはなし会用語事典(第3回)
- 特集 写真で見る おはなし会の舞台裏
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん あべ弘士(ひろし)さん ぼくが旅に出る理由
- 徒然草
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第25回)みょうが宿
- 特集 戦後70年企画 戦争と平和を伝える子どもの本
- ナポレオン戦争期イングランドにおけるジョアンナ・サウスコットの「奇跡的妊娠」: 出版文化が生んだスキャンダル
- 日本発信アジア太平洋地域出版文化英文情報誌「ABD」: ACCUを舞台にしたアジアの教育・文化協力の現場から(5・最終回)
- 読みきかせ・おはなし会用語事典(第2回)
- 被災地に子どもの本ができること
- 子どもたちと楽しむ 2014年の絵本を振り返る
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 柳原良平(やなぎはらりょうへい)さん 海と船とぼくと
- へんてこじゅげむ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第24回)椿長者
- プチ特集 中高生にもおすすめ ノンフィクション絵本を読もう

- 特集 おはなし会で使える 紀元前から語り継がれている イソップ物語
- 絵本作家さんからの年賀状：二〇一五年 未 新春
- 日本文学全集とその時代(上)全集が出版文化をリードした頃 (新春特大号 特集 日本文学全集)
- 大蔵虎明『語間之抄』について：一寛永年間の出版文化と中世末期・近世初期学問史の一隅をめぐって
- なぜ日本では記録管理・アーカイブズが根付かないのか(特別講演)
- ブック・ストリート 出版文化 有名作家の自費出版
- ブック・ストリート 出版文化 原稿料はブラックボックス?
- 書評 日比嘉高著『ジャパニーズ・アメリカ：移民文学・出版文化・収容所』
- ジャグラ/自費出版ネットワーク 第17回日本自費出版文化賞大賞に「獅子頭書票集」：610点の応募作品から13点の受賞作品が決定
- 「八〇後」作家の出版研究：郭敬明集団による出版文化産業の創出を中心に
- ブック・ストリート 出版文化 「劇画 長谷川伸」シリーズの面白さ
- 情報区 日本自費出版文化賞受賞作の決定
- ブック・ストリート 出版文化 知的少数派と多数派?
- 多摩地域に出版文化の灯を：けやき出版の創立 (特集 図書館員が注目する各地の出版社)
- 出版文化と春画 (小特集 書物とエロス)
- ブック・ストリート 出版文化 『文藝年鑑』から消えた文芸時評
- ブック・ストリート 出版文化 駒沢敏器の遺作
- 日本出版学会会長就任にあたって 出版文化の総合的な研究をめざして
- 日本出版文化史研究 戦時『FRONT』の東方社と戦後の平凡社 (時代の岐路に立つ)
- ブック・ストリート 出版文化 官僚本を読む
- ブック・ストリート 出版文化 「図書館」のようなすごい雑誌の本
- 日本図書館協会と日本出版インフラセンター：出版文化の発展に向けて (特集 公益社団法人日本図書館協会スタート)
- ブック・ストリート 出版文化 中国の若い作家に会った
- 近世前期における地方在住僧侶の出版活動：肥前国稲佐山宝寿院住持普寧を中心に
- 特集 文化庁「著作権法」改悪で日本の出版文化が破壊される日
- <東洋文化講座「大陸から目白へ：学習院の東アジア学資料」講演録>朝鮮の出版文化
- 寛永十九年版『録内御書』に関する書誌学的考察
- ブック・ストリート 出版文化 新しい文芸誌『グラント』と『モンキー』
- ブック・ストリート 書店 梓会出版文化賞・直木賞、そして幻の作品
- 秋田県立図書館所蔵往来物の出版地域に関する一考察：弘前・酒田・山形との比較検討
- 慶安本『とうだいき』に見る古浄瑠璃正本の形態の変遷
- 朝鮮の出版文化
- ブック・ストリート 出版文化 作品に光当てる編者の仕事
- 第29回梓会出版文化賞を受賞して(童心社) 第10回新聞社学芸文化賞を受賞して(幻戯書房)
- ブック・ストリート 出版文化 新『日本文学全集』に期待する

- 研究プロジェクト活動報告(2) 明治・大正・昭和前期における児童出版文化史の研究 : 元博文館編集者の書簡調査から (平成 23~25 年度 JSPS 科研費成果報告)
- 被災地に子どもの本ができること
- 時代を遡って受賞作家をみてみましょう (特集 歴代受賞作品を紹介 国際アンデルセン賞)
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 松成真理子(まつなりまりこ)さん 絵本で私ができること
- おれは だれだ?
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 23 回)笠地蔵
- 特集 谷川俊太郎と絵本
- 追悼 古田足日さん、ありがとう : 名作『おいしいのぼうけん』40 周年
- 特集 孫と一緒に楽しもう! 育ジイ・育バアの読みきかせ
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん いまいあやのさん 重なり合う物語
- おるすばんのよる
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 22 回)芋ころりん
- おめでとう! JBBY40 周年 JBBY 創立 40 周年記念講演(第 1 回)角野栄子&高樓方子&富安陽子 子どもの本のこれから : 未来への贈りもの
- 昔ばなし絵本 シリーズ徹底比較! (特集 誌上講座 昔ばなしセミナー(最終回)拡大版 昔ばなしのおもしろさの秘密)
- 昔ばなしのおもしろさの秘密 (特集 誌上講座 昔ばなしセミナー(最終回)拡大版 昔ばなしのおもしろさの秘密)
- ミア・ボローニャ! 私のボローニャ訪問記
- 昔ばなしセミナー(39)ラプンツェル
- 特集 誰でもカンタンにできる おはなし会のワザとコツ
- 学校図書館って、どんなところ? 子どもたちの笑顔が集まる学校図書館
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 岡田千晶(おかだちあき)さん 手ざわりを描く
- おにぎりちょうだい!
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 21 回)馬の田楽(でんがく)
- 被災地に子どもの本ができること
- 特集 宇宙飛行士 山崎直子さんとめぐる 2014 年宇宙絵本の旅
- 大切なことを目に見せる : 『星の王子さま』という企画をよむ (特集 それは何か?〈よむ〉とは) -- (出版文化を〈よむ〉)
- 出版産業の変化を読み解く (特集 それは何か?〈よむ〉とは) -- (出版文化を〈よむ〉)
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(38)花咲かじい
- 学校の図書館ってどんなところ? 子どもたちの笑顔が集まる学校図書館 : 図書館情報学の専門家から見た理想の学校図書館像とは

- 50号記念企画 読みきかせとともに歩んだ12年
- 50号記念企画 うっかりヨミ子さん 著作権を学ぶ
- リンリンリン いらっしやい みんな みんな いらっしやい
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第20回)ことしゃみせん
- 特集 ナンセンスの巨匠 長新太の世界へようこそ!
- 絵本作家さんからの年賀状：二〇一四年 午 新春
- 坂元昌樹・西槇偉・福沢清編『ハーンのマなざし—文体・受容・共鳴』：(熊本出版文化会館、二〇一二年)
- 記録管理の国際標準「ISO 30300」への期待と和訳試案
- 近代活版印刷史について：一九八〇年代末からの研究をたどる(特集 それは何か?〈よむ〉とは) -- (出版文化をくよむ)
- 同時代印刷物から見たリスボン地震(1755年)への反応と対策
- 日比嘉高著、『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』, 二〇一四年二月二〇日, 新曜社, 三九二頁, 四二〇〇円+税
- メディア・出版文化論(フォーラム 方法論の現在 II)
- ブック・ストリート 出版文化 書く立場から書かれる立場に
- ブック・ストリート 出版文化 休刊相次ぐ出版社 PR 誌
- 世界に誇る日本の出版文化を壊すな
- ブック・ストリート 出版文化 印刷に基盤を置いた出版社
- 情報区 日本自費出版文化賞受賞作の決定
- 『南都名所記』についての一考察：山形県立博物館教育資料館所蔵本の資料性
- 転換期におけるメディアとしての出版
- アマゾンの“値引き販売”に待った! 再販制度が崩壊すれば出版文化は危機に
- ブック・ストリート 出版文化 地域の書店の支援を!
- ブック・ストリート 出版文化 「泥仕合」から見えてくるもの
- ブック・ストリート 出版文化 本をよぶ本
- ブック・ストリート 出版文化 誤植で光当たる漱石の幼なじみ
- 書評と紹介 磯部敦著『出版文化の明治前期：東京稗史出版社とその周辺』
- 日本出版文化史研究 本屋と薬屋：本の隣りにあるもの(書物の宇宙、編集者という磁場)
- ブック・ストリート 出版文化 草森紳一と中町信の没後の話題書
- ブック・ストリート 出版文化 想像ラジオが描く震災
- ブック・ストリート 出版文化 大江賞受賞作がアメリカで評判に
- ブック・ストリート 出版文化 出るわ出るわ「〇〇力」の本
- 第28回梓会出版文化賞特別賞を受賞して 歴史の証人を発掘・記録・広報する
- 遼帝国の出版文化と東アジア(契丹[遼]と10~12世紀の東部ユーラシア) -- (契丹[遼]の社会・文化)
- ブック・ストリート 出版文化 読者が見抜く本当の「お薦め」
- 近世前期における地方在住僧侶の出版活動：肥前国稲佐山宝寿院住持普寧を中心に

- 誌上講座 昔ばなしセミナー(37)白くま王ワレモン
- 特集 始めてみませんか ブックトーク入門
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 鈴木まもるさん 生命が育つ形を求めて
- あかいけいと
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第19回)子だくさん
- 被災地に子どもの本ができること「日本一!楽しい図書室」プロジェクト てくてく座 in 北上小学校
- 特集 赤ちゃん絵本大集合
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(36)炎の馬
- 被災地に子どもの本ができること in 陸前高田
- ズームアップと実物大 写真絵本の新潮流
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん おめでとう! 30周年 村上康成(むらかみやすなり)さん 毛穴に向かって描く絵本
- さつまいも
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第18回)橋役人
- 学校の図書室ってどんなところ? 子どもたちの笑顔が集まる学校図書室
- 特集 歴代受賞作品を紹介 ケイト・グリーンナウェイ賞 保存版
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(35)北の巨人
- 知っていればあわてない 発達障害と絵本
- 被災地に子どもの本ができること in 塩竈
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん さとうわきこさん 私を導いたもの
- みて!
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第17回)『かっぱと相撲』『かっぱと綱引き』
- 10歳から15歳に出合っておきたい本(後編)
- ハンス・フィッシャー (特集 夏休みは原画展を見に行こう!)
- レオ・レオニ 絵本のしごと展 (特集 夏休みは原画展を見に行こう!)
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(34)三人の糸紡ぎ女
- 松岡享子さんが手がけた絵本『うれしいさん かなしいさん』刊行!
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 三浦太郎(みうらたろう)さん 人生、アイデア勝負!
- つかまえた
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第16回)飛脚とうわばみ
- 10歳から15歳に出合っておきたい本(前編)
- 特集 おめでとう 50周年 ぐりとぐら
- 絵本作家さんからの年賀状: 二〇一三年 巳 新春
- ブック・ストリート 出版文化 Kindle の攻勢”期間限定セール”

- 堺市立文化館・与謝野晶子文芸館のページ 与謝野晶子文芸館の活動 企画展 晶子さんとその時代「宇崎純一と華やかな大阪出版文化」
- ブック・ストリート 出版文化 丸谷オ一氏と新聞書評のこと
- 「本」を主役に出版文化を盛り上げる “ほんらぶ”プロモーションのご案内
- ブック・ストリート 出版文化 常識覆す復刊「コヨーテ」の熱気
- 情報区 日本自費出版文化賞受賞作の決定
- 山形県立博物館教育資料館所蔵の往来物資料：目的別分類からの考察
- ブック・ストリート 出版文化 インタビュアーをインタビューする
- 出版文化再生ブログから(2)
- ブック・ストリート 出版文化 橋下大阪市長の文楽攻撃は何なんだ
- 「出版文化再生ブログ」から
- 戦略経営者登場 小城武彦 トウ・ディファクト 日本の出版文化を守るべくハイブリッド電子書店を展開
- ブック・ストリート 出版文化 付録はいらない
- ブック・ストリート 出版文化 聞くことへの努力
- アジアを知る三冊 世界を渡る大気流を読む[劉建輝『魔都上海：日本知識人の「近代」体験』, 李建志『朝鮮近代文学とナショナリズム：「抵抗のナショナリズム」批判』, 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』] (アジアの〈教養〉を考える：学問のためのブックガイド)
- ブック・ストリート 出版文化 アマゾンのカスタマーレビューは?
- ブック・ストリート 出版文化 すずむ地図のデジタル化
- ブックラボ インタビュー フランス著作権事務所 所長 カンタン・コリーヌさん 大震災の深い部分にある真実を両国の次世代につなぐことが、出版文化に携わる私にできることです (本のつばさ)
- ブック・ストリート 出版文化 ネットの前評判と書評の速度
- 酒田市立光丘文庫所蔵の往来物資料：目的と出版地からの分類分析
- 書評 『出版文化再生：あらためて本の力を考える』(西谷能英著)から見た書物の「知」の捉え方
- 草子本『さんせう太夫物語』に見る寛文期草小屋の活動
- ブック・ストリート 出版文化 惜しまれる「週刊ブックレビュー」の終了
- 出版界スコープ 第27回梓会出版文化賞決定
- コツコツと地道に種を蒔いて 梓会出版文化賞を受賞して
- ブック・ストリート 出版文化 雑誌の本・書店特集
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(33)魔法の鏡
- 被災地に子どもの本ができること
- 本を届ける物語：北の大地編
- 絵本作家さんの夏休み@青森
- 祝!!第47回東燃ゼネラル児童文化賞受賞! この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 加古里子(かこさとし)さんスペシャル 遊び、学び、生きていこう
- キツネともみのき
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第15回)人の年

- 絵本のある空間 アイ ウェント トゥ ロンドン。ビコーズ、ええーっと… IBBY 世界大会 in ロンドン
奮闘記

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- 特集 徹底研究 おはなし会プログラムのつくり方
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(32) ソン・クレウスのどうくつ 〈マヨルカ島〉
- 特集 広がりの 10 年、惑いの 10 年 子どもたちの本の今
- 被災地に子どもの本ができること
- おはなし会を盛り上げよう! 簡単な工作編
- 追悼 モーリス・センダック
- みんなでおでかけ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 14 回) ちゃあっくりかきす
- 絵本作家たちの文士劇 てくてく座公演レポート
- 特集 2012 年の受賞作から 1938 年までを遡って全作品紹介 コルデコット賞絵本
- 研究プロジェクト活動報告 明治・大正・昭和前期における児童出版文化史の研究 : 元博文館編集者の書簡調査から

- 中学校 1~3 年 国語の教科書に載っている文学作品
- 昔ばなしセミナー(31) 赤ずきん
- 特集 紙芝居の選び方 おはなし会でも活躍 紙芝居のこともっと深く知りたい!
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん おくはらゆめさん 「好き!」から世界が広がるよ
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 高島那生(たかばたけなお)さん 進化は続くよどこまでも

- このたねなーに
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 13 回) においの値段
- 被災地に子どもの本ができること
- 特集 世界中のみんなが大好き ディック・ブルーナとちいさなうさぎ
- 誌上講座 昔ばなしセミナー(30) 赤馬物語
- 被災地に子どもの本ができること : こどもたちへ あしたの本
- 追悼 これからもずっと大好き 元永定正さん
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 荒井良二さん 日常にありがとう
- キリンさんに会いに
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第 12 回) 一粒は千粒
- 絵本のある空間
- 特集 色の魔術師 エリック=カールさん その世界を垣間見る
- 絵本作家さんからの年賀状 二〇一二年辰 新春
- 戦時下学生の読書行為:—戦場と読書が結びつくとき—

- 米国およびカナダにおける公文書管理の最新動向
- ミランダ・レムネク編、『書物の空間-ロシア社会の想像力における出版文化』
- 朝日崇、『実践アーカイブ・マネジメント-自治体・企業・学園の実務-』，出版文化社，2011.10，227p.，2,000円+税，ISBN:978-4-88338-450-1
- プロクター&ギャンブル(P&G)社の記録管理(学術エッセイ)
- 三木清と戦時下の出版文化―全集未収の婦人論と哲学辞典の改訂をめぐって
- 富田成子著『ジョージ・エリオットと出版文化』
- ジャグラ・日本自費出版ネットワーク 大賞に「アイヌモシリ・北海道の民衆史」：第14回日本自費出版文化賞受賞作品決まる
- 北から南から 出版文化と図書館―筑摩書房創立70周年記念イベントを通じて
- 民俗医療をめぐる社会制度と出版文化―バリ島東部の事例から
- 『図書新聞』の1950年代―思想/出版文化/マス・コミュニケーション
- 文字化する宗教知のゆくえ―備後国沼隈郡大東坊蔵書を事例として
- 出版界スコープ 第26回梓会出版文化賞―社団法人出版梓会
- 私のことば体験(20)出版文化の危機
- 小学校1～6年下半期 国語の教科書に載っている絵本と児童文学
- 昔ばなしセミナー(29)語りの法則の発見実習「おいしいおかゆ」
- ゼーンぶプレゼント もう読んだ? 新刊100!!
- 被災地に子どもの本ができること
- 特集 酒井駒子さんの世界
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 司修さん：創造から伝わる喜び
- ねているあいだ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ!おはなし会プログラム
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第11回)『夢長者』
- 特集 次代の子どもたちに受け継ぎたい新しいロングセラー
- 昔ばなしセミナー(第28回)「金貨の入った財布」出題と解説
- 今考えたい、平和の絵本
- こんにちは! 絵本作家さん 葉祥明 自分らしく生きていこうよ
- 描きおろし絵本 あべ弘士『ふたごのしろくま』
- おはなしおばさんのおはなしのたねあかし(第10回)
- 特集 被災地に子どもの本ができること
- 特集 お話会を開こう!
- 国語の教科書に載っている児童文学(小学校1～6年上半期)
- 昔ばなしセミナー(第27回)「魚の玉」出題と解説
- 馬場のぼるさん「11ぴきのねこ」原画展に寄せて
- 特集 「読みきかせ」から「ひとり読み」へ
- こんにちは! 絵本作家さん 山口マオ 3歳の僕を超えたい
- 描きおろし絵本 太田大輔『化けた化けた』

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第9回)
- 林明子さんの作品(特集 林明子さんの世界)
- 特集 林明子さんの世界
- 「子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」スタート!
- 追悼 佐野洋子さん
- 絵本で世界をひとまわり オランダ編
- 描きおろし絵本 田島征三『わたしのイガグリモンスター』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本ほか
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第8回)
- 特集 0~2歳の赤ちゃんと楽しむ絵本
- 絵本作家さんからの年賀状
- 飯田の出版文化 その源流をたどる: 山村書院と山村正夫
- 記録管理学会「社会基盤としての中間書庫のあり方に関する研究会」について(学会成果)
- 松岡資明『日本の公文書-開かれたアーカイブズが社会システムを支える-』, ポット出版, 2010, 194p., 1,800円十税, ISBN 978-4-7808-0140-8
- 丙午出版社と近代仏教出版文化(近代仏教/メディア/大学, パネル, <特集>第六十九回学術大会紀要)
- 決断のとき 畠山重篤氏 牡蠣の森を慕う会代表、水山養殖場社長 森を救って牡蠣が復活
- 自費出版ネットワーク 第13回日本自費出版文化賞大賞に「対馬国志」
- 再録 尾崎さんの出版文化論(追悼 石川弘義)
- 「超」整理日記(Number 507) 電子書籍を出版文化向上に寄与させるには
- 秋田県立図書館所蔵の往来物資料について
- 「聚珍版」の東伝と我が国の近世木活字出版文化の形成
- 出版界スコープ 第24回梓会出版文化賞 社団法人梓会
- 昔ばなしセミナー(第25回)「三本の金髪をもった悪魔」
- 絵本で世界をひとまわり ロシア編
- こんにちは! 絵本作家さん ましませつこ 今号のお題「ひらいたよ、感受性の花」
- 描きおろし絵本 野村たかあき『月と木』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本ほか
- おはなしお婆さんのおはなしのたねあかし(第7回)
- 30周年記念対談 田中和雄(童話屋)×越高一夫(ちいさいおうち)
- 誰よりも子どもたちの平和を願う 太田大八さん 92歳、いまでも現役!(太田大八さん 92歳、いまでも現役!)
- 太田大八さん 92歳、いまでも現役!
- 昔ばなしセミナー(第24回)「三本の金髪をもった悪魔」
- 絵本で世界をひとまわり イタリア編
- こんにちは! 絵本作家さん 田畑精一 今号のお題「うんとこしょ!つないでひっぱれ いのちと希望」
- 描きおろし絵本 『ある秋の森の石』

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本
- おはなしおぼさんの おはなしのたねあかし(第6回)
- 特集 マザーグースをひもとく
- 昔ばなしセミナー(第23回)
- 絵本で世界をひとまわり フランス編
- こんにちは!絵本作家さん 田中清代 「トマトさん」、世界の海へじゃっぷーん!
- こんにちは!絵本作家さん いわむらかずお 自然と向き合う「実体験」を
- 描きおろし絵本 『ぼく くま』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本ほか
- おはなしおぼさんの おはなしのたねあかし(第5回)
- 特集 なぜ、読みきかせするの?--みなさんの生の声&本音にアプローチ
- 追悼 かがくいひろし--全15作品+幻の1作紹介
- 永江朗のブックトリップ(最終回)本の工房を訪ねる--和本工房
- 資生堂 福原義春さんインタビュー 国民読書年に向けて。10年後を信じて、よい本を子どもたちへ
- こんにちは!絵本作家さん いもとようこ 今号のお題「私の絵を求めつづけて」
- 描きおろし絵本 『ぜんまいの ときさんの みやげばなし』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本+手遊び・歌遊び
- おはなしおぼさんの、おはなしのたねあかし(第4回)
- 贈る絵本--お見舞いに贈る絵本
- 特集 安野光雅の世界[含 安野さんに絵本の出版をすすめた松居直さんに伺う]
- 絵本作家さんから寄せられた年賀状
- 金原理著 『日本の古典と漢文学 ——和歌と漢文学・類書・大宰府と道真 他——』：(熊本出版文化会館、二〇〇九年)
- 公文書管理法とはどのような法律なのか 知的資源の活用と説明責任のために
- 西川祐信画春本の誕生：「性」と出版文化(近世部門, 第三〇回研究発表大会・発表要旨)
- 金原理著, 『日本の古典と漢文学-和歌と漢文学・類書・大宰府と道真 他-』, 二〇〇九年五月二五日, 熊本出版文化会館刊, 一九一頁, 一五〇〇円
- 木村八重子著, 『草双紙の世界 江戸の出版文化』, 二〇〇九年七月二〇日, ペリかん社刊, 二二〇頁, 二八〇〇円
- 出版界スコープ 現代人の読書実態調査
- 海外出版レポート フランス 「明日の書籍」特集記事から眺めた出版文化
- ブック・ストリート 出版 出版文化を危うくするグーグルの挑戦
- 2009年保存版 全国児童書専門店リスト
- 昔ばなしセミナー(第18回)
- ゼーンぶプレゼント もう読んだ? 新刊100!
- 永江朗のブックトリップ 本ができるまで(取次会社編)見学に行ったところ 株式会社トーハン トーハン桶川 SCM センター
- 特集 近藤信子さんとわらべうたで遊ぼう!

- こんにちは!絵本作家さん--熊田千佳慕 今号のお題「三眼レフのカメラを持って」
- 今江祥智×黒井健 描きおろし絵本『タコたこ、あがれエ・・・』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本
- 贈る絵本 拡大版--卒園・卒業していく子どもたちに手渡したい絵本
- 特集 絵本で世界をひとまわり(アメリカ編 後編)
- 絵本作家さんから寄せられた年賀状
- 「礼失われて諸を野に求む」 : 実例で和刻本漢籍の価値を試論
- 長い間、こんな本が欲しいと思っていた!--『北海道の出版文化史』を手にして
- 出版文化と納本制度--納本制度六〇周年記念アンケート調査の結果から
- 小出版社の志--梓会出版文化賞特別賞を受賞して
- 図問研のページ「図書館利用に障害のある人へのサービス」交流のページ 読書の楽しみを弱視者(高齢者・低視力者)に--大活字本の出版文化をつくる
- ブック・ストリート 流通 「出版文化」なるものに対する違和感
- 全体会(パネルディスカッション) 出版文化の危機と新しい図書館像(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 情勢報告(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 国立国会図書館における電子図書館サービスの課題と方向性(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 千代田図書館の取り組み(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 基調講演「出版文化の危機」をどう見るか(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 基調講演 出版コンテンツのデジタル化と図書館の新たな挑戦(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)--(図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像)
- 図書館運営研究会--全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門)と合同開催--研究主題:出版文化の危機と新しい図書館像(平成21年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書)
- パネルディスカッション(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)
- 情勢報告(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)
- 事例発表 国立国会図書館における電子図書館サービスの課題と方向性(平成21年度 全国公共図書

館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)

- 事例発表 千代田図書館の取り組み(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)

- 基調講演「出版文化の危機」をどう見るか(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)

- 基調講演 出版コンテンツのデジタル化と図書館の新たな挑戦(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)

- 開会式(平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像)

- 平成21年度 全国公共図書館研究集会(サービス部門 総合・経営部門) 関東地区公共図書館協議会運営研究会 出版文化の危機と新しい図書館像

- 昔ばなしセミナー(第21回)

- 永江朗のブックトリップ(第13回)本の工房を訪ねる--新潮社装幀室(東京都新宿区)

- 絵本のある空間 しかけ絵本 メグゲンドルファー(神奈川県鎌倉市)

- 特集 絵本に見る日本

- こんにちは! 絵本作家さん accototo ふくだとしお+あきこ 今号のお題「どこかでだれかと、きっとつながる」

- 『ヨミネエは本がすき』

- IBBY 会長アルダナさん×JBBY 会長島多代さんスペシャル対談 多文化社会の子どもたちと IBBY のこれから

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本+手遊び・歌遊び

- おはなしお婆さんの おはなしのたねあかし(第3回)

- 贈る絵本--新成人に絵本を贈ろう

- 特集 絵本で世界をひとまわり--イギリス編

- 復刊絵本の15年

- 特集 実践 寺子屋ブックトーク拡大版 ティーンのためのブックトーク

- こんにちは!絵本作家さん なかやみわ 今の子どもたちに伝えたいこと

- こんにちは!絵本作家さん 田島征三 未知なるアートを体感しよう

- バーサンスレン・ボロルマー 描きおろし絵本『月のうえの女の子』

- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本

- おはなしお婆さんの おはなしのたねあかし(第2回)

- 永江朗のブックトリップ(第12回)本の工房を訪ねる--本棚の工場

- 特集 どうぶつ絵本大集合

- 内田恭子さんにインタビュー

- 中学校1~3年 国語の教科書に載っている文学作品

- 昔ばなしセミナー(第19回)

- 永江朗のブックトリップ 本の工房を訪ねる(第11回)ルリユール工房
- 特集 おはなし会を始めてみませんか
- こんにちは! 絵本作家さん--戸田幸四郎 今号のお題 『センス』を育てていますか?]
- 描きおろし絵本 『おなかのウシ』
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム+行事絵本・季節の絵本
- おはなしおぼさんの おはなしのたねあかし(新連載)
- 贈る絵本--平和を考える絵本
- 特集 夏休み、自然とふれあう科学の絵本
- 展示された文学史--〈プラハのドイツ語文学〉とそのベルリン展(1995)の射程
- 宗教家フランクリンと彼の大いなる野望
- ベルリン東洋美術館所蔵『熙代勝覧』にみられる出版文化とその分析
- 岩波文化人三木清の出発とその思想 : 出版・教養・公共圏(〈特集〉モダニズム期における社会と芸術の〈交通〉)
- 近世出版文化と旅の情報受容(〈特集〉第35回大会共通論題「情報通信と社会変容」)
- 近世出版文化と旅の情報伝達(三 大会報告要旨(共通論題), 第三五回大会・二〇〇九年度総会報告)
- 犀星日記における原稿料 : 出版文化の基礎的研究・その一
- 鮎川信夫と『新領土』(その9)
- 江戸の出版文化と塙保己一
- 岩手県立図書館所蔵の『往来物』について
- 十八世紀末ウィーンの出版文化--ゲオルク・フィリップ・ヴーヒェラーの出版活動を例にして
- 納本制度 60周年記念 公開座談会から 出版文化と納本制度について考える
- 「情報がカネを産む」--18世紀出版文化の仕掛け人たち
- 「文字文化・出版文化」に関する連続セミナーの頃(特集 絵を読む 文字を見る--日本文学とその媒体)
- 出版文化開花前夜における忘れられた媒体「扇」について(特集 絵を読む 文字を見る--日本文学とその媒体)
- 海外出版レポート フランス 2008年のフランス出版文化を展望
- 出版界スコープ 第23回梓会出版文化賞--社団法人出版梓会
- 昔ばなしセミナー(17)
- 永江朗のブックトリップ 本ができるまで 製本工場編
- 特集 おはなしおぼさん 藤田浩子さんに聞きました
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 西村繁男さん いまきみちさん夫妻
- 昔ばなしセミナー(16)
- 贈る絵本 読んでも食べてもおいしい絵本
- こたつのなかで
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- 特集 おはなし会を盛り上げよう!
- 贈る絵本

- 特集 絵本で世界をひとまわり：アメリカ編(前編)
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん 黒井健さん 今号のお題 感じるままに描く喜び
- あかちゃんのおさんぽ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- もっと知りたい家庭文庫 地域文庫 町の中の小さな図書館(最終回)石井桃子さんの「かつら文庫」をはじめ、4つの家庭文庫が志をひとつに 東京子ども図書館
- 昔ばなしセミナー(15)
- 読書のおもしろさを伝えよう! 寺子屋ブックトーク(第1回)特別編 夏休みに読みたい絵本と童話
- 特集 ハンディキャップを乗り越える・理解する すべての子どもたちに読書の楽しみを
- 永江朗のブックトリップ 本ができるまで 印刷工場編
- このひとにあれもこれも こんにちは!絵本作家さん いせひでこさん 今号のお題 つながる手の記憶
- カメレオンの時間
- 特集 みんな大好き! シリーズで読めば楽しさ倍増：日本編 絵本の中の人気もの
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- 絵本のある空間 大東文化大学 ビアトリクス・ポター資料館：世界的にも貴重な書籍や原画をコレクション
- 贈る絵本
- 永江朗のブックトリップ 本ができるまで(製紙工場編)
- 特集 子どもの?(ハテナ)に答えます 加古里子(かこさとし)と科学を楽しむ
- 昔ばなしセミナー(14)
- 特集 おはなし会で使える! 12カ月の絵本歳時記
- この人にあれもこれも こんにちは!絵本作家さん きたやまようこさん 今号のお題 観察から生まれてくるもの
- チャオちゃんはカメラマン
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- 贈る絵本 文字のない絵本
- 京都ではなくなり 永江朗のブックトリップどす(第6回)京都編
- 特集 緑・大地・宇宙 偉大なる詩人 まど・みちお
- 新春恒例 絵本作家さんから寄せられた年賀状
- 菊池寛賞受賞 復刻本マツノ書店に「出版文化」の原点を見た(新・文化を訪ねて)
- 『北海道の出版文化史』編集発行の経緯(書誌と書誌論)
- 城戸幡太郎編『私たちの生活百科事典』にみる生活把握
- パロディと出版文化:一十七世紀日本文学を中心として一
- 秘伝書の情報学:『源語秘訣』の書写・伝来を通して(〈特集〉文学としての情報/情報としての文学)
- ルネサンス—知られざる出版文化の誕生(特集 いま ルネサンスに学ぶ)
- 江戸後期出版文化における龍宮イメージ:絵双六「新板龍宮飛双六」をめぐる
- 書評 宮紀子著『モンゴル時代の出版文化』
- 図書館の貸出は出版文化を支えているか—図書館と出版文化の相互理解のために(特集 図書館をア

ピールする)

- 「毎日出版文化賞」受賞にあたって
- 書評と紹介 丹和浩著『近世庶民教育と出版文化--「往来物」制作の背景』
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の出版流通(11)
- <記憶>の中の源氏物語(30) 出版文化の波に乗って
- 出版界スコープ 第22回梓会出版文化賞
- 昔ばなしセミナー(13) 同じ場面は同じ言葉で語る
- 写真絵本で見るリアルな世界 (特集 写真絵本の魅力にフォーカス)
- Interview 写真家・今森光彦 (特集 写真絵本の魅力にフォーカス)
- もっと知りたい家庭文庫地域文庫 町の中の小さな図書館(vol.6) いぬいとみこさんの文庫を引き継いで10周年 まーしこ・むーしか文庫
- 絵本作家とよたかずひこの でんしゃにのって そうだ、京都行こう!
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん はたこうしろうさん 仕事、めっちゃ好きなんです!
- オッピーちゃんのクリスマス
- JPIC 読書アドバイザー(JRAC)おすすめ! おはなし会プログラム
- 絵本のある空間 八ヶ岳小さな絵本美術館 : 長野県諏訪郡
- 贈る絵本 ラッピングにクリスマスソングをのせて
- 永江朗のブックトリップ(第5回) 吉祥寺界限書店
- 特集 落語 歌舞伎 能 狂言 いま、日本の古典芸能がおもしろい!
- 昔ばなしセミナー(12) 昔話は描写しない
- もっと知りたい家庭文庫地域文庫 町の中の小さな図書館(vol.5) 語り子どもたちへ。15周年を迎えたまめの本文庫
- 特集 没後20年 堀内誠一の旅行カバン
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 谷川俊太郎さん もっと知りたい“詩”のことを
- ネコのおすしやさん
- JPIC 読書アドバイザー(JRAC)おすすめ! おはなし会プログラム
- 永江朗のブックトリップ 番外編 国立国会図書館
- 贈る絵本 なぞなぞな~んだ!?
- 絵本のある空間 木城えほんの郷
- 特集 プログラムの作り方教えます!
- 昔ばなしセミナー(11) 昔話の文法(3)
- この人が語るこの本のたねあかし(第4回) もりひさしさん
- 特集 絵本で世界をひと回り : ヨーロッパ編
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん 和歌山静子さん アジアの中の日本を考え続けて
- こうだったらいいのにな…
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会プログラム
- 永江朗のブックトリップ(第4回) 児童書専門店

- 贈る絵本
- 安藤さんのおすすめ絵本（特集 お父さんの育児は絵本で楽しく）
- 父親の読みきかせ 安藤哲也さん 絵本ナビ パパ's 絵本プロジェクト NPO 法人ファザーリング・ジャパン代表理事（特集 お父さんの育児は絵本で楽しく）
- 父親の読みきかせ 椎名誠さん 作家（特集 お父さんの育児は絵本で楽しく）
- 昔ばなしセミナー(10) 昔話の語り口には法則がある(2)
- 駒形克己さんのワークショップに潜入! 9つのいろ
- おはなし会で活躍する JPIC 読書アドバイザーが厳選! 紙芝居最新セレクト（特集 紙芝居、その奥深き世界）
- 現実の空間に出てきて広がり、“共感”の感性を育む。紙芝居はたぐいまれな文化財（特集 紙芝居、その奥深き世界）
- この人にあれもこれも こんにちは! 絵本作家さん いとうひろしさん 絵本よりも大切なこと
- フラワーバード
- おはなし会プログラム
- 贈る絵本 ベビーを迎えた人へ、親子で楽しんでほしい1冊を
- 永江朗のブックトリップ(第3回)神保町書店街
- 特集 子どもと文学への深い思い 石井桃子の100年
- 巻頭特集 絵本作家さんから寄せられた年賀状
- 一九世紀イタリア出版文化の中のリソルジメント—トレヴェス社、ソンゾーニョ社を中心に
- 書評 宮紀子著『モンゴル時代の出版文化』
- 農文協の出版・文化活動における「食農教育」の取り組みとその背景（共通テーマ 地域における教育と農）
- 所雅彦先生の退職を記念して(送別の辞)
- 江戸末期浮世絵による擬似体験としての日本：歌川広重「名所江戸百景」の視点
- イギリス出版文化史覚書—一八世紀の本の流通(10)
- 出版文化としての図書館—本の町・神保町と連携した千代田図書館の新しい取り組み
- 書評と紹介 丹和浩著『近世庶民教育と出版文化—「往来物」制作の背景』(近世史研究叢書)
- 元禄・享保期の出版文化と往来物作者たち（特集 教育のメディア史）
- GHQ 占領期の出版と文学—田村泰次郎「春婦伝」の周辺（特集 出版文化と昭和）
- サークル誌ネットワークの可能性—『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガリ版文化（特集 出版文化と昭和）
- 紀伊國屋書店という文化装置—『紀伊國屋月報』『レツェンズ』を中心に（特集 出版文化と昭和）
- 円本の「罪悪」と功績と—出版界・文学者に及ぼした「被害」をめぐって（特集 出版文化と昭和）
- 特集 出版文化と昭和
- 海外出版レポート フランス 今年〔2006年〕開催される出版文化行事の展望
- 明末清初期の蔵書家の活動と出版
- 伊藤誠哉[北海道帝国大学]総長の祝辞—北海道出版文化祭記念式典(1947年)において
- イギリス出版文化史覚書—一八世紀の出版流通(9)

- 出版界スコープ 第21回 梓会出版文化賞—社団法人出版梓会
- 昔ばなしセミナー(9) 昔話の語り口には法則がある
- プチ特集 書店では見かけないけれど…… 月刊保育絵本ってどんなもの?
- 特集 残したい、伝えたい 日本語の美しさ・楽しさ・おもしろさ 土地ことばで読む絵本と児童書
- このひとに根ほり葉ほり こんにちは!絵本作家さん 降矢ななさん 絵の受け止め方って不思議!
- ミシュカとてんしのはね
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 冬のプログラム
- 永江朗のブックトリップ(第2回) 青山界隈の個性派書店
- 贈る絵本
- 特集 ワクワク、ドキドキ、大人もびっくり! 仕掛け絵本
- 昔ばなしセミナー(8) 昔話が語る子どもの成長(3) 思春期の行動を語る「シンデレラ」
- 特集 ママと赤ちゃんがいっしょに楽しむ 赤ちゃん絵本から始めよう
- もっと知りたい家庭文庫地域文庫 町の中の小さな図書館(vol. 2) 石井桃子さんらが主宰した4つの家庭文庫が始まり〈かつら文庫〉
- このひとに根ほり葉ほり こんにちは!絵本作家さん 宮西達也さん お父さん論
- まめうしとかなしか
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 秋のプログラム
- 永江朗のブックトリップ(第1回) 都内大型店
- 贈る絵本
- 絵本のある空間
- 特集 おはなし会をもっと楽しく 拡大版 おはなし会を盛り上げる7つのヒント
- 昔ばなしセミナー(7) 昔話が語る子どもの成長(2)
- おはなし会をもっと楽しく!(第17回) みんなのお悩みを解決
- もっと知りたい家庭文庫・地域文庫 町の中の小さな図書館(vol. 1) 松谷みよ子さんの私設文庫〈本と人形の家〉
- 贈る絵本
- 佐々木マキさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 浜田桂子さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- くるくるブランコ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 夏のプログラム
- 特集 『赤毛のアン』を生んだプリンス・エドワード島と L(ルーシー)・M(モード)・モンゴメリゆかりの地を訪ねて
- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第16回)
- おはなし会で読んでも楽しい!! JRAC が選んだ珠玉の20冊 (特集 だから大好き! ナンセンス絵本大特集)
- 内田麟太郎 VS 竹内通雅 ナンセンス対談!! (特集 だから大好き! ナンセンス絵本大特集)
- 昔ばなしセミナー(6) 昔話が語る子どもの成長
- おはなし会をもっと楽しく!(第16回) 世界のじゃんけん

- 特集 草花が芽吹き、動物たちも活動を開始する！心もふんわり、春の絵本たち
- 突撃レポートしちゃいます！あの作家に会いたい 神沢利子さん
- ぼくのベッド
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ！おはなし会 春のプログラム
- あの書店がとっても居心地いいわけは？ 児童書店のすてきな店長さん訪問!! (第15回)
- 国立国会図書館国際子ども図書館展示会 『もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本』開催中!!
- 贈る絵本
- 絵本美術館に行こう (第16回) まどそのそのまたむこう：福島県・いわき市
- 特集 出版100周年にわくプリンス・エドワード島に赤毛のアンを訪ねて
- 国際交流 韓流を通してみる韓日出版文化交流の現況
- 講演会 歴史・物語 目取真俊の小説を通して見える世界(オキナワ) (東シナ海近世現代出版文化研究--「東アジア出版文化の総合研究」報告書(2))
- 朝鮮版五臣注『文選』の研究 (東シナ海近世現代出版文化研究--「東アジア出版文化の総合研究」報告書(2))
- 東シナ海近世現代出版文化研究--「東アジア出版文化の総合研究」報告書(2)
- 「教育のメディア史」における「江戸」：「文字社会」と出版文化 (提案, 教育史研究のメディア論的展開, (2) シンポジウム, II 教育史学会第49回大会記録)
- 漢籍の情報化--これからの出版文化--漢情研[漢字文献情報処理研究会]第七回大会から (漢情研[漢字文献情報処理研究会]2005年公開講座報告 東洋学研究と著作権問題)
- 山口昌男先生と札幌大学文化学部
- チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』：十九世紀前半英国の出版文化
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の本の流通(8)
- 米国の中国出版文化史研究 (現状と課題)
- 近世期出版文化に於ける日用類書の研究：「重宝記」序文から得られる考察
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の本の流通(7)
- 昔ばなしセミナー(5)白雪姫(第4回)
- 特集 現場の生の声を徹底リサーチ！読みきかせ、みんなはどうしてる？
- 高島純さん (突撃レポートしちゃいます！あの作家に会いたい)
- さいとうしのぶさん (突撃レポートしちゃいます！あの作家に会いたい)
- ゆきだるまおじさん
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ！おはなし会 冬のプログラム
- あの書店がとっても居心地いいわけは？ 児童書店のすてきな店長さん訪問!! (第14回)
- 日本の古典から昔ばなし、民話、創作絵本まで (特集 子どもたちと日本のたいせつな宝もの 赤羽末吉の世界)
- わたしと赤羽さんとの思い出 小澤俊夫さん (特集 子どもたちと日本のたいせつな宝もの 赤羽末吉の世界)
- わたしと赤羽さんとの思い出 松居直さん (特集 子どもたちと日本のたいせつな宝もの 赤羽末吉の世界)

- 昔ばなしセミナー(4)白雪姫(第3回)
- 言葉と心のサイエンスⅣ(4)肌と肌のふれあいや、子ども本来の遊びを考えてみる どうしたら「ゲーム脳」は改善される? ゲーム脳にならないために親や学校ができることは何?
- 特集 秋のおはなし会を盛り上げる絵本たち
- 突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい 長谷川摂子さん
- へんてこわらべうた おおさむこさむ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 秋のプログラム
- おはなし会をもっと楽しく!(第14回)手遊び・わらべ歌本特集!
- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第13回)
- 特集 キラキラと透き通った言葉の世界へ 知りたい、いま読み直したい 宮沢賢治
- おはなし会をもっと楽しく!(第13回)ちょっと教えて!素朴な質問
- 昔ばなしセミナー(3)白雪姫(第2回)
- 言葉と心のサイエンスⅣ(3)前頭前野の機能低下と「キレル」ことの深い関係 子どもがキレてしまうのはなぜ? また、そのとき脳はどんな状態になっているのでしょうか?
- 特集 科学絵本を楽しもう
- あきやただしさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- あまんきみこさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- くるりん じまん
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 夏のプログラム
- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第12回)岐阜編
- 絵本美術館に行こう(第14回)藪内正幸美術館 山梨県・北杜市
- 特集 みんな大好き! 夏のおはなし会 キーワードは 海 山 おばけ
- 昔ばなしセミナー(2)白雪姫
- 言葉と心のサイエンスⅣ(2)「人間らしさ」とは脳のどこに存在するのか 前頭前野をはじめ、人間の脳にはどんな役割と特徴があるのでしょうか?
- 国立国会図書館国際子ども図書館連動企画 本にえがかれた動物展Ⅱ 十二支を手がかりに
- でんしゃにのって 第2弾 とよたかずひこさん “夜汽車”にのって北の大地へ 20時間の旅
- もりのいちば
- 突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい 上野紀子さん なかえよしをさん
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 春のプログラム
- おはなし会をもっと楽しく!(第12回)おはなし会を続けるためのヒント
- 活字離れを吹き飛ばせ! 新聞社による読書推進運動で落語家さんも絵本作家さんも大活躍!
- 絵本美術館に行こう(第13回)安野光雅美術館 島根県・津和野町
- 読みきかせにおすすめ アンデルセンの絵本&紙芝居厳選18 (特集 アンデルセン 生誕200年)
- 現代によみがえるアンデルセンをテーマに生誕記念出版なども (特集 アンデルセン 生誕200年)
- 東北アジア研究センター共同研究「東アジア出版文化の総合研究」研究成果報告 「東アジア出版文化の研究」に係る研究成果等の社会公表
- 大木康著、『明末江南の出版文化』(研文選書92), 研文出版, 二〇〇四・五刊, 四六, 二七一頁, 二

四〇〇円 / 『馮夢龍『山歌』の研究-中国明代の通俗歌謡-』, (東京大学東洋文化研究所報告), 勁草書房, 二〇〇三・三刊, A5, 八三七頁, 一五〇〇〇円

- 野上彌生子の<先生> : 漱石という体験
- 海外出版レポート フランス 「アラブ世界」の出版文化とフランス
- イギリス出版文化史覚書---一八世紀の本の流通(6)
- 総括 (シンポジウム 近世出版文化の社会史)
- 西洋史 (シンポジウム 近世出版文化の社会史) -- (シンポジウム参加記)
- 東洋史 (シンポジウム 近世出版文化の社会史) -- (シンポジウム参加記)
- 日本史 (シンポジウム 近世出版文化の社会史) -- (シンポジウム参加記)
- シンポジウム参加記 (シンポジウム 近世出版文化の社会史)
- 近世フランスの新聞出版とジャーナリズム--『ガゼット』紙を中心に (シンポジウム 近世出版文化の社会史)
- 出版文化から見た中国明清小説の特徴 (シンポジウム 近世出版文化の社会史)
- 近世日本の書物知と仏教諸宗 (シンポジウム 近世出版文化の社会史)
- シンポジウム 近世出版文化の社会史
- この人にインタビュー 今泉吉晴さん--『シートン 子どもに愛されたナチュラルリスト』で第 52 回小学館児童出版文化賞を受賞
- 書物史的視点からみる 18 世紀英国小説 : 作家と書籍商の関係から
- イギリス出版文化史覚書---一八世紀の本の流通(5)
- 貸出しの多い図書館を育てて、出版文化の繁栄を--作家たちの図書館批判を、図書館を利用する側から考える
- 昔ばなしセミナー開講にあたって
- 言葉と心のサイエンスIV(1)「ゲーム脳」の名づけ親がひもとく、脳の世界 子どもたちの脳の「人間らしさを司る部分」はどのような状態になっているのでしょうか?
- 韓国編 韓国の絵本の歴史と現在(いま) (特集 お隣の国にはどんなおはなしがあるのかな? 絵本でアジアと交流しよう!)
- 中国編 中国のおはなしが日本に届くまで (特集 お隣の国にはどんなおはなしがあるのかな? 絵本でアジアと交流しよう!)
- 絵本美術館に行こう(第 12 回)大島町絵本館 : 富山県・射水郡
- 突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい 松谷みよ子さんスペシャル
- かれは ふるふる ゆきがふる
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 冬のプログラム
- おはなし会をもっと楽しく!(第 11 回)マギー司郎さんに教わる手品(2)
- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第 12 回)仙台スペシャル
- クリスマス会のプログラム (特集 基本にかえってもう一度 おはなし会を開こう)
- 誌面運動講習会、実況中継!! おはなし会をより充実させる手遊び・歌遊び (特集 基本にかえってもう一度 おはなし会を開こう)

- おはなし会のおさらいをしましょう (特集 基本にかえってもう一度 おはなし会を開こう)
- 声の達人 インタビュー 自然の美しさ、東北弁のあたたかさ、汗の気持ちよさ そして、母とすごした時間の思い出…………… 幼い日に体感した懐かしい記憶がたくさんつまった「宮沢賢治」の純粋な世界を多くの人に伝えたい。 林隆三
- 座談会 ボローニャ国際児童図書展 行ってみたら、もっと知りたくなって聞いてみた!
- 言葉と心のサイエンスⅢ(4・最終回) 言語の知能はこうして伸ばすことができる! 「脳を育てる」=知能の発達に欠かせない環境とはいったいどんなものなのでしょうか?
- 今までも、そしてこれからもずっと 日本の宝もの絵本 30 選 (特集 日本のロングセラー絵本たち)
- 母から子へと読み継がれている 日本のロングセラー絵本たち (特集 日本のロングセラー絵本たち)
- 蔡皋(サイコウ)さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 太田大八さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- か・げ
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 秋のプログラム
- おはなし会をもっと楽しく!(第 10 回) マギー司郎さんに教わる手品(1)
- 絵本美術館に行こう(第 11 回) 国立国会図書館 国際子ども図書館 : 東京都・台東区
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第 11 回) 絵本カフェ編
- 特集 もっと知りたいメルヒェンの世界 グリム童話の楽しさを深めるために
- 声の達人 インタビュー 子どもは無意識になんでも吸収します だからこそ伝えるべき大事なものは“言葉”と“五感” 大家族の中で育った経験は、かけがえのない私の財産 大山のぶ代さん
- JPIC だより 行ってきました ボローニャ国際児童図書展!
- 言葉と心のサイエンスⅢ(3) 幼児期に絵本を読んであげることも大切 子どもを取り巻く環境はさまざまな知能の発達にどれくらい影響しているのでしょうか?
- 特集 語りの世界へようこそ!
- 絵本美術館に行こう(第 10 回) 安曇野ちひろ美術館 : 長野県・北安曇郡
- せなけいこさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- とよたかずひこさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- おとうさんえほん あそんでもらおう いまのうち
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 夏のプログラム
- おはなし会をもっと楽しく!(第 9 回) 大型絵本
- 日本で出版されて 25 年以上たつ ロングセラーの海外絵本 珠玉の 30 冊 (特集 ロングセラーの海外絵本たち)
- 世界でも日本でも愛されつづけている ロングセラーの海外絵本たち (特集 ロングセラーの海外絵本たち)
- 声の達人 インタビュー 女優、ナレーターという仕事を通して読み聞かせを語る 登場人物になりきって、本の世界を思い切り楽しむ。私の「読みきかせたい!」 檀ふみさん
- 言葉と心のサイエンスⅢ(2) 言語、運動、音楽 さまざまな知能が親から子どもへ遺伝する可能性っていったいどのくらいなのでしょう?

- 特集 紙芝居の魅力を探ってみよう!
- どいかやさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 川端誠さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- やまださんちのてんきよほう
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! おはなし会 春のプログラム
- 連動講習会つき! おはなし会をもっと楽しく!(第8回)心を通わせるわらべ唄
- 絵本美術館に行こう(第9回)IN NAGASAKI 祈りの丘絵本美術館&童話館
- 特集 春 出会いと別れの季節
- フランス出版文化史の本流(上-補遺)ヨーロッパ古代文明史上の源流を展望
- フランクフルト BF と日本の出版文化--出版も世界戦略を持たなければ生き残れない
- 絵本で語りつぐムラの誇り 絵本『おたまさんのおかいさん』講談社出版文化賞・絵本賞を受賞
- 『図書館栄えて物書き滅ぶ』とは本当のことか--琵琶湖のほとりの小さな町の図書館から (特集 対論・図書館活動と出版文化を考える)
- 誰のための公立図書館か (特集 対論・図書館活動と出版文化を考える)
- 公共貸与権と補償金制度について (特集 対論・図書館活動と出版文化を考える)
- 図書館の新たなビジネスモデルで出版市場との共存を (特集 対論・図書館活動と出版文化を考える)
- 特集 対論・図書館活動と出版文化を考える
- イギリス出版文化史覚書--18世紀の本の流通(4)
- 海外出版レポート フランス 出版文化の基盤を揺がす「文庫本」ブーム
- 東アジアの出版を考える : 国民文化祭・出版文化展
- 文化人革命時期における中国出版事業の一光景 : 毛沢東に献上された幻の「大字本」の正体について(特別寄稿解題)
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の本の流通(3)
- 海外出版レポート フランス 『書物百科事典』刊行開始--出版文化史展望
- 加賀屋中西敬房の著述と出版--文化サークル内の書肆
- 海外出版レポート フランス フランスの文化遺産と出版文化史
- 言葉と心のサイエンスⅢ(1) 子どもの心--知性を豊かに育む「幼児脳教育」が注目されています。脳を教育するって、どんなことなのでしょう?
- 声の達人インタビュー 物語は子どもに必要不可欠なビタミン 探し物をするように読む、これが読みきかせのコツかな
- 私のお気に入り絵本はコレ! (特集 2周年記念特別企画 絵本作家さん大集合!)
- 絵本美術館に行こう(第8回)いわむらかずお絵本の丘美術館 : 栃木県・馬頭町
- スズキコージさん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 大島妙子さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 初氷 はつごおり
- 読みきかせ会をもっと楽しく!(第7回)連動講習会つき おはなしおばさん藤田浩子さんの小道具で楽しもう! : わぁーっと歓声があがる おはなしの小道具
- この季節ならではのとおきを選レクト 冬のおはなし会プログラム (特集 冬休みは読みきかせ

の季節)

- あったか〜いお部屋で心ゆくまで…… この絵本で冬休みを迎えたい (特集 冬休みは読みきかせの季節)

- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!! (第9回)

- 園児集まれ! ぼくは、わたしはこの本大好き!

- 2003 「上野の森 親子フェスタ」講演会から

- 言葉と心のサイエンスⅡ (4) 言語と非言語コミュニケーション 周囲のやさしい働きかけで刺激を受けた言葉の素質は想像力をともなってグングンのびる

- 赤ちゃん絵本 BEST20 (赤ちゃんに読んであげたい絵本大集合)

- なぜ言葉がわからない0歳児から絵本なのか (赤ちゃんに読んであげたい絵本大集合)

- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!! (第8回) 京都スペシャル

- 長谷川義史さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)

- 長野ヒデ子さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)

- ベティのサーカス(2)

- 秋は本との出会いの季節 JPIC 読書アドバイザーおすすめ! 読みきかせ会秋のプログラム

- 連動講習会つき! 読みきかせ会をもっと楽しく! (第6回) 注目度がUP! 手ぶくろ人形

- 絵本美術館に行こう (第7回) 黒姫童話館 : 長野県・信濃町

- 声の達人インタビュー 一対一の読みきかせに勝るものはありません 読みきかせの醍醐味は好きな人に好きな本を読むこと

- はじめの一步はここから 谷川さんの詩を読んでみよう (ひらけ! ココロのとびら 谷川俊太郎さんと詩の世界へ)

- ひらけ! ココロのとびら 谷川俊太郎さんと詩の世界へ (ひらけ! ココロのとびら 谷川俊太郎さんと詩の世界へ)

- 園児集まれ! ぼくは、わたしはこの本大好き!

- 言葉と心のサイエンスⅡ (3) 知能は、遺伝と環境のどちらにより強く影響されるのか?

- プツと笑える詩から、じんわり浸れる詩まで…… あんな詩、こんな詩、見つけた (特集 大人も子どもも楽しもう! 詩の世界へご招待)

- 殺伐とした時代だからこそ、大人も子どもも詩を読もう いい詩との出会いが子どもの心を解き放つ (特集 大人も子どもも楽しもう! 詩の世界へご招待)

- あの書店がとっても居心地いいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!! (第7回) 広島スペシャル

- 突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい PAIR TALK 中川ひろたかさん×村上康成さん

- あいたいな

- 絵本の中にも涼がある! JPIC 読書アドバイザーおすすめ! 読みきかせ会夏のプログラム

- 読みきかせ会をもっと楽しく! (第5回) 子どもはみんな大好き! じゃんけん手遊び

- 声の達人インタビュー 落語、声優という仕事を通して、読みきかせを語る 人に楽しんでもらうためには自分も楽しむことが大切です

- 特集 絵本の原画を見てまわろう! 小海線・小淵沢〜清里の初夏に行く 絵本を訪ねる高原の旅

- 園児集まれ! ぼくは、わたしはこの本大好き!

- 特集 ぽかぽか春の絵本で笑顔も満開! 上級生まで楽しめる 春に出会う絵本たち
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第6回)
- 突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい 長新太さん
- ふくろうくんのおしごと
- 出会いの春にぜひ! JPIC 読書アドバイザーおすすめ! 読みきかせ会春のプログラム
- 読みきかせ会をもっと楽しく!(第4回)わくわくエプロンシアター
- 絵本美術館に行こう(第6回)えほん村: 山梨県・小淵沢村
- 声の達人インタビュー コミュニケーションのプロとして 何を語りたいか、何を感じてほしいか、その“思い”が大切なんです
- 越高一夫さんおすすめの絵本で見る 女房ものばなしのあれこれ (特集 語り継がれてきたストーリーを今 民話・昔ばなしは宝もの(2))
- 編集の仕事を通して出会った昔ばなしを語り、描く、至高の人々 (特集 語り継がれてきたストーリーを今 民話・昔ばなしは宝もの(2))
- 園児集まれ! ぼくは、わたしはこの本大好き!
- 21世紀のフランス出版文化史展望--西暦2000~2003年間の新潮流
- 電子化で漢字圏をつなぐ (東アジア出版文化シンポジウムのあとで)
- ブックロード今昔談 (東アジア出版文化シンポジウムのあとで)
- 東アジア出版文化シンポジウムのあとで
- 「貸出」は図書館も出版文化も発展させる
- デジタル出版よもやま話《第47回》「印刷物と宗教改革」って何?中国の出版文化史
- 天海版一切経木活字の特色
- 表現文化の新しいパラダイム形成: 大学における電子出版文化の創出に向けて
- Book Review 中国文献学の名著『中国出版文化史--書物世界と知の風景』井上進
- 書評 井上進著『中国出版文化史』--書物世界と知の風景
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の本の流通(2)
- 対馬宗家文庫所在内賜本『陣法』について
- 出版文化と出版文明の相克: 出版開発と多国籍出版
- イギリス出版文化史覚書--一八世紀の本の流通ネットワーク(1)
- この人にインタビュー 永井伸和さん--第17回国民文化祭とっとり2002で初の「出版文化展」を企画
- 言葉と心のサイエンスⅡ(1)子どもはどうやって言葉を覚えるの?
- 絵本美術館に行こう(第5回)伊豆高原 ワイルドスミス絵本美術館: 静岡県・伊東市
- 特集 語り継がれてきたストーリーを今 民話・昔ばなしは宝もの
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第5回)
- 武田美穂さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- 内田麟太郎さん (突撃レポートしちゃいます! あの作家に会いたい)
- ねんど丸(まる)くんのそりあそび
- JPIC 読書アドバイザーおすすめ! 寒い冬だって楽しもう! 読みきかせ会 冬のプログラム

- 読みきかせ会をもっと楽しく!(第3回)ちょこっとパネルシアター
- 俳優・佐野浅夫さん(三代目黄門さま)が訪ねる おはなし会全国行脚 in 京都・兵庫
- 特集 クリスマスのおはなし会を盛り上げよう!
- 園児集まれ! ぼくは、わたしはこの本大好き!
- 言葉と心のサイエンス(最終回)男の育児参加と父親力について
- 絵本美術館に行こう(第4回)ちひろ美術館・東京 : 東京都・練馬区
- たまには、自分のためにだけ選んでみるのもいいね 大人が読んでも楽しめる本(特集 本の達人が選ぶ 秋のおすすめ「私の3冊」)
- 「早く読んで!」「早く読もうよ!」 親子でわくわくの子どもと一緒に読みたい本(特集 本の達人が選ぶ 秋のおすすめ「私の3冊」)
- 西巻茅子さん(突撃レポートしちゃいます!あの作家に会いたい)
- ささめやゆきさん(突撃レポートしちゃいます!あの作家に会いたい)
- ベティのサーカス
- 読書の秋がやってきた! 読みきかせ会 秋のプログラム
- 読みきかせ会をもっと楽しく!(第2回)ペープサートにチャレンジ
- 絵本作家とよたかずひこさんと行く でんしゃにのって 遠くへ行こう : すてきな店長さん訪問 スペシャル版 名古屋編
- コールデコット賞の作品ヒストリー(特集 いろんな国の絵本を見てみよう)
- 手に入れたい! 原書絵本25冊(特集 いろんな国の絵本を見てみよう)
- 園児集まれ! ぼくは、わたしは、この本大好き!
- 言葉と心のサイエンス(3)男性が話す「母親語」、その影響力を解剖
- 絵本美術館に行こう(第3回)箱根☆サン=テグジュペリ 星の王子さまミュージアム : 神奈川県・箱根町仙石原
- 声の達人インタビュー コミュニケーションのプロとして 読みきかせの世界は自然のリズムに身をおけるもの
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第3回)
- 木村裕一さん & 磯みゆきさん(突撃レポートしちゃいます あの作家に会いたい)
- 荒井良二さん(突撃レポートしちゃいます あの作家に会いたい)
- ポツリ・ポツリ グングン
- 読みきかせ会をもっと楽しく!(第1回)手遊び歌で連帯感と集中力をアップ
- 特集 さあ、お父さん! 出番ですよ! お父さんだって読みきかせたい!
- 特集 夏だ! 絵本から飛びだして遊ぼう!
- 園児集まれ! ぼくは、わたしは、この本大好き!
- 言葉と心のサイエンス(2)絵本の読みきかせは「母親語」が有効的
- 子どもたちの風景 PHOTO GALLERY(2)のれんの奥の駄菓子たち
- 声の達人インタビュー コミュニケーションのプロとして 母のぬくもりを感じた「読みきかせ」が今の自分の原点に
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第2回)

- 中川李枝子さん（突撃レポートしちゃいます！あの作家に会いたい）
- あべ弘士さん（突撃レポートしちゃいます！あの作家に会いたい）
- ゆきだるまがとんできた
- 絵本美術館に行こう（第2回）村上康成美術館：静岡県伊東市
- 特集 パソコンで絵本の世界を探検だ！
- 特集 新入園、新入学に出会う本
- 園児に聞いてみました!! ぼくは、わたしは、この本大好き!
- フランス出版文化史の本流(上) 古代・中世から16世紀まで
- 新指定重文・寛永寺蔵『天海版一切経木活字』について（平成14年度 天台宗教学大会記念号）
- 国文学研究資料館=編『明治の出版文化』
- 天海版一切経木活字の特色
- 報告 出版文化のなかの美術のディレンマ（本とは何だろうか?(2)）--（共同討議 本はどこで生まれるか(2)）
- 座談会 活気ある出版文化再生のために--出版流通改善協議会『再販制度の弾力運用レポート4』から
- 新指定重文・延暦寺蔵『宗存版木活字』について（平成十二年度 天台宗教学大会記念号）
- 日本と韓国の出版文化交流の裏方として--「韓国出版功労賞」を受賞して
- 高麗の出版文化（特集 高麗-文化）
- 書評 清水一嘉『挿絵画家の時代--ヴィクトリア朝の出版文化』--小説家と画家の主導権争い（味読・愛読・文学界図書室）
- 公立図書館は出版文化の発展を支えている--「公立図書館-無料貸本屋」論批判
- 出版文化と説話--蛇性の鱗をめぐる説話伝承史（特集:説話の脱領域）--（メディアとしての説話）
- 海外出版レポート フランス 「パリ書籍見本市」とフランス出版文化(下)
- 小特集 図書館は出版文化をどう支えるか
- 海外出版レポート フランス 「パリ書籍見本市」とフランス出版文化(中)
- インターネットの真実(18) 著作権の崩壊(3) インターネットによる出版文化の変容
- 第41回産経児童出版文化賞(1994年)ほか『半分のみさと』李相琴(イサンクム)--まったく不幸だとも言えない--私が日本にいたときのこと（特集 文学賞受賞作品を読む）
- 海外出版レポート フランス 「パリ書籍見本市」とフランス出版文化(上)
- 海外出版レポート フランス--TV 書評が支えるフランス出版文化
- 出版文化にふれる--印刷博物館/紙の博物館/講談社野間記念館（特集 新東京文学散歩）--（文学館に遊ぶ--実践的細見の文学への招待）
- この人にインタビュー 伊藤たかみさん--『ミカ!』で第49回小学館児童出版文化賞を受賞
- あの書店がとっても居心地がいいわけは? 児童書店のすてきな店長さん訪問!!(第1回)
- 言葉と心のサイエンス 乳児から幼児へ 子どもはどのようにして言葉を獲得するの?
- 子どもたちの風景 PHOTO GALLERY(1)公園の動物遊具
- コミュニケーションのプロとして 明日の自分を楽しみに経験を積んでいきたい
- 絵本美術館に行こう(第1回)イルフ童画館：長野県岡谷市
- 突撃レポートしちゃいます!! あの作家に会いたい 飯野和好さん

- ねんど丸(まる)くんとゆきむすめ
- ワクワク・ドキドキ! 楽しみだね! おはなし会がやってくる! (特集 やってみよう! 読みきかせ)
- すてきなママにインタビュー 香坂みゆき 私と本と読みきかせ (特集 やってみよう! 読みきかせ)
- 子どもと読みたい おすすめの 43 冊 (特集 やってみよう! 読みきかせ)
- 聞き手も、読み手も楽しいから やってみよう! 読みきかせ (特集 やってみよう! 読みきかせ)
- 園児 26 名に聞いてみました! ぼくは、わたしはこの本、だいすき!
- イギリスの出版文化--私の仕事について (文献探索・書誌・書誌論)
- 出版物再販制度存廃の攻防 (<特集>図書館・情報センターと法制度)
- 毛綸, 毛宗崗批評『四大奇書三國志演義』と清代の出版文化
- 尾崎さんの出版文化論 (特集 尾崎秀樹研究)
- 江戸の知恵(11) 出版文化の始まり
- 実用・節儉精神とともに--近世後期大坂出版文化の一特質
- 書評 梅田俊英『社会運動と出版文化--近代日本における知的共同体の形成』
- フランス パリ書籍見本市とフランス出版文化(下) (海外出版レポート)
- フランス パリ書籍見本市とフランス出版文化(中) (海外出版レポート)
- 出版 角川書店社長 角川歴彦 新しい出版文化創造に百億円をポン!と寄付 (特集 時代を変える!)
- 海外出版レポート フランス--パリ書籍見本市とフランス出版文化(上)
- この人にインタビュー 末吉暁子さん--『雨ふり花さいた』で第 48 回小学館児童出版文化賞を受賞
- 情報財の形成と流通 - 出版物のデジタル化によって出版産業が直面する課題 -
- ロシア出版文化関連人物書誌--邦題文献限定
- 化物と遊ぶ--なんけんけれどもばけ物双六 (特集・「不思議」を楽しむ--江戸のメディアと俗信)
- [書評] 梅田俊英著『社会運動と出版文化--近代日本における知的共同体の形成』
- 法然伝と出版文化
- 三月革命以後のドイツにおける出版文化(2) : 1848 年から 1871 年までの出版界(小川悟教授古希・退職記念号)
- 出版文化と作者--貞享期の西鶴を中心に
- 書評と紹介 梅田俊英著『社会運動と出版文化 近代日本における知的共同体の形成』
- 市古夏生著『近世初期文学と出版文化』
- 梅田俊英著『社会運動と出版文化--近代日本における知的共同体の形成』
- フランス パリ書籍見本市にみるフランス出版文化(下) (海外出版レポート)
- 海外出版レポート/イギリス: ロンドンとボローニアの BF から/アメリカ: オンライン書籍販売の進展/
ドイツ: クラウス・マン没後 50 年/フランス: パリ書籍見本市に見るフランス出版文化(中)/ロシア: 新書
誌基準の採用/中国: 1998 年度・台湾出版界 10 大ニュース/韓国: 「20 世紀韓国の知性」を選ぶ
- ユニバーシティ・プレス-4-早稲田大学出版部--21 世紀をにらんだ出版文化の創造--多様化するリサ
ーチ・フロントにどう対応するか
- 市古夏生著『近世初期文学と出版文化』
- 引用索引と個人研究業績評価
- 人文科学分野における引用分献の利用

- 市古夏生著『近世初期文学と出版文化』
- 幕末期における情報化社会の成立とその展開：石清水八幡宮社士・河原崎家の事例を手がかりにして
- 「出版文化と図書館」国立国会図書館 50 周年シンポジウム報告
- 現代文化論--出版文化にみる読書とマンガの考察（総特集・国語教育 研究と文献）
- 木活字と和文鋳造活字のあいだ--座談会「出版文化と近代文学」を読んで
- 尾崎紅葉の手紙について（特集 出版文化としての近代文学）
- 大正9年・習作期横光利一の検討--「ドストエフスキ-論(メレンヂコフスキ-)」をめぐって（特集 出版文化としての近代文学）
- 活字と肉筆のあいだ--『心』の「原稿」から（特集 出版文化としての近代文学）
- 制度としての原稿用紙--その予備的考察（特集 出版文化としての近代文学）
- 速記は「言語を直写」し得たか--若林〔カン〕蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性（特集 出版文化としての近代文学）
- 座談会 出版文化と近代文学（特集 出版文化としての近代文学）
- 特集 出版文化としての近代文学
- 分野別書評(社会)明治期出版文化の変容をトレース--永嶺重敏著『雑誌と読者の近代』（BOOKS ナビゲーション）
- 覚書・昭和22年開催の北海道出版文化祭--戦後占領期・北海道出版ブーム下の読書週間
- 大正期大阪の「出版文化展」
- 情報の多次元展開へ向けて デジタル時代における情報流通への期待:デジタル時代における情報流通への期待
- ブータンにおける図書館設立に関わって(〈特集〉戦う図書館員)
- 三月革命以後のドイツにおける出版文化(1): 1848年から1871年までの出版統制(寺川央教授古稀・退職記念号)
- メルヴィルとボストン版シェークスピア全集：アメリカ出版文化小論
- 読書へのアクセス(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ)
- メディアとしての可能性(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ)
- 江戸のペーパー・トラヴェル(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ)
- 時代を裂いたアウトサイダーの編集感覚(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ)
- 啓蒙イギリスの本屋さん(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ)
- 西欧と連動させつつ江戸の出版文化ズームアップ(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる))
- 日中文化交流史のなかで--二十四孝挿絵の展開--呉猛の煙(特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)) -- (出版文化と江戸文学をめぐる諸問題)

- 筆禍と出版機構（特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)）--（出版文化と江戸文学をめぐる諸問題）
- 江戸の情報社会--現代のインターネット社会とパラレルに（特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)）--（出版文化と江戸文学をめぐる諸問題）
- 板本と絵の関連性をどう考えるか--金々先生栄花夢の趣向と絵（特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)）--（出版文化と江戸文学をめぐる諸問題）
- ジャンルを横断し, 変身する作者たち（特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)）--（出版文化と江戸文学をめぐる諸問題）
- 出版文化と江戸文学をめぐる諸問題（特集 近世の出版--本屋と作者(メディアは変わる)）
- 地域から描く 21 世紀の出版文化--本の学校の実験（特集 がんばろう!地方）
- カラーグラフ / 96 講談社出版文化賞カメラマン・村田信一の受賞後第 1 作!ルワンダ再訪--心と体に刻まれた大量虐殺
- 現代ブラジル出版文化を担ったマンシェッチ社創設者アドルフォ・ブロッホの死（特集 BRASIL96）
- 常設展示「日本の出版文化」
- マルチメディア時代の出版文化
- 電子メディア環境の拡大と紙メディアの役割（〈特集〉紙）
- 人で輝く出版文化の明日を拓く--「本の学校」の目指すもの
- 電子出版の現状と展望 -21 世紀の出版文化産業を探る- JPIC シンポジウム-
- 「絵図屋庄八」について：近世以降の奈良出版文化管見
- 生涯学習政策における図書館関連事業--出版文化産業振興財団の事業をめぐって
- 書物と読書と民衆と--初期アメリカ史における印刷出版文化
- フランス革命期前後の出版文化史研究序論--出版流通面からの展望-下-
- イギリスにおける日本研究の発展
- フランス革命期前後の出版文化史研究序論--出版流通面からの展望-中-
- 江戸期以前日本出版文化史年表--国立国会図書館所蔵資料を中心に
- BRITISH LIBRARYの出版活動
- 電子原稿・電子出版・電子図書館 -0「SGML 実験誌」の作成実験を通して-
- 「出版の自由」のモニュメント・出版文化研究博物館設立への構想・研究
- 明末江南における出版文化の研究
- 図書館報. 第 185 号
- 出版の文化的役割と出版文化の再生（マスメディアの文化性と経済性〈特集〉）
- 「未刊史料による日本出版文化(5)近代出版文化」弥吉光長
- フランス革命期前後の出版文化史研究序論--出版流通面からの展望-上-
- 福島義一, 『阿波藩撰博物誌「阿淡産志」の研究』, 徳島県出版文化協会, 徳島, 1990 年, 394pp., A5 版, 9,500 円
- 「的と袍衣--中世人の生と死」で毎日出版文化賞を受けた横井清さん(編集長のインタビュー)
- 変貌する出版文化（言語生活の変質〈特集〉）
- 民間出版物の 2 部納本制について--出版文化財の保存と利用のために

- 昭和初期の出版文化--円本ブームを中心に（昭和のことは60年〈特集〉）
- 〈論文〉フィリピンの出版文化：その歴史と今後の課題
- 〈論文〉アジアの出版文化：1960-1984の展望と今後の課題
- 長友千代治著「近世貸本屋の研究」、宗政五十緒著「近世京都出版文化の研究」、柴田光彦編著「大惣蔵書目録と研究」（紹介）
- 近世出版文化研究
- 出版文化はどこへゆく（現代マスコミ入門）
- 宗政五十緒著「近世京都出版文化の研究」
- “再販修正”と出版文化のゆくえ（公取委 X マスコミ X 出版「再販問題」〈特集〉）
- 江戸時代の出版文化と都市（献呈論文）
- 「絵」を読む江戸文学史：鈴木重三著、『絵本と浮世絵-江戸出版文化の考察』、昭和五四年三月、美術出版社刊、本文五八七頁、アート図版五五頁、五千八百円
- 児童をめぐる出版文化
- 良書とはよく売れる本のこと--書店主の実践的出版文化論
- 大阪近代出版史文壇史参考文献目録（特集・大阪の出版文化）
- 織田作之助の「大阪」とは何か（特集・大阪の出版文化）
- 大阪本屋仲間記録の出版について（大阪の出版文化（特集））
- 大阪の木活字本（大阪の出版文化（特集））
- 明治中期に於る大阪の文界と出版の動き（大阪の出版文化（特集））
- 大阪で出来た異色の本--大阪出版一夕話（大阪の出版文化（特集））
- 大阪近代出版史文壇史参考文献目録（大阪の出版文化（特集））
- 織田作之助の「大阪」とは何か（大阪の出版文化（特集））
- 「生玉万句」以前の大阪刊本を疑う（大阪の出版文化（特集））
- 明治42・3年頃の心齋橋中心の大阪の本屋（大阪の出版文化（特集））--（大阪の出版業と出版文化の変遷）
- 大阪の出版業と出版文化の変遷（大阪の出版文化（特集））
- 省みて大阪出版文化をおもう（大阪の出版文化（特集））
- 大阪の出版文化（特集）
- 「福沢屋論吉」の発展・転換過程--明治前期出版文化史の一断面
- 東国の出版文化と金沢文庫（講演）-2-
- “南北問題と出版文化（出版時評）
- 出版文化史を築く道程
- 東国の出版文化と金沢文庫
- 民衆の抵抗と出版文化（出版時評）
- 鈴木敏夫著『出版』（出版ニュース社）、弥吉光長著『脱活字化の世界』（講談社）、金平聖之助著『世界の出版流通』（サイマル出版会）、ユネスコ東京出版センター編『アジアの出版文化』（現代ジャーナリズム出版会）
- 出版文化の退廃と反動化（特集・反動・退廃文化との闘争のために）

- 出版文化の退廃と反動化（反動・退廃文化との闘争のために(特集)）
- 明治・大正・昭和出版文化を開拓した人々-完-良心的出版の車の両輪
- 明治, 大正, 昭和出版文化を開拓した人々-11-石川武美--婦人家庭雑誌の創造者
- 明治・大正・昭和, 出版文化を開拓した人々-10-山本実彦--「改造」の急進主義と円本革命
- 明治・大正・昭和出版文化を開拓した人々-9-菊池寛--「文芸春秋」隆盛の基礎を築く
- 明治・大正・昭和出版文化を開拓した人々-8-野間清治
- 出版文化についての一私見
- 明治・大正・昭和・出版文化を開拓した人々-7-坂本嘉治馬--富山房を築いた着実な歩み
- 明治・大正・昭和・出版文化を開拓した人々-6-滝田樗陰と嶋中雄作
- 明治・大正・昭和・出版文化を開拓した人々-5-下中弥三郎--世界連邦を夢みた大型出版人
- 明治・大正・昭和出版文化を開拓した人々-4-大橋佐平・新太郎父子
- 明治・大正・昭和出版文化を開拓した人々-3-佐藤義亮
- 明治・大正・昭和・出版文化を開拓した人々-2-岩波茂雄
- 明治・大正・昭和・出版文化を開拓した人々(1)--田口鼎軒
- 特集・出版文化財と戦争
- 毎日出版文化賞受賞・東上高志著「同和教育入門」によせる
- ふるさとのすまい(1962年毎日出版文化賞受賞)
- 戦争の記録と戦争体験の記録：記録にふれたいくつかの感想（〈特集〉戦争体験をどう生かすか II）
- 中世の出版文化—当文庫本を中心に-1-
- 出版文化史-29(終)-
- 出版文化史-28-
- 出版文化史-27-
- 中国清末教育史における日本教育文化進出の一断面—中国の教科書出版文化に及ぼした日本の影響に就いて
- 中国清末教育史における日本教育文化進出の一断面—中国の教科書出版文化に及ぼした日本の影響に就いて
- 明治大正六十年の出版文化
- ロシヤの革命運動と出版文化
- 事業としての出版文化の内側(今日の問題研究会)
- 出版文化展と上野図書館
- 出版文化展で自祝する80年
- 出版文化と学校図書館—出版社と語る会(座談会)
- 「毎日出版文化賞」うちわ話

参考文献一覧

書籍・論文・講演・口頭発表

- 石井寛治『日本出版流通史』有斐閣（2003）
- 石井貴士『キンドル・アンリミテッドの衝撃』講談社（2016）
- 石川幸憲『キンドルの衝撃』毎日新聞社（2010）
- 石橋毅史『「本屋」は死なない』新潮社（2011）
- 石橋毅史『まっ直ぐに本を売る』苦楽堂（2016）
- 糸田省吾「出版業界に求められる「再販制度」からの脱却－日本の出版業の健全な発展と消費者利益の向上のために」『出版研究 37 号』日本出版学会（2006） pp. 85-92
- 上里春生『江戸書籍商史』出版タイムス社（1930）
- 上村卓夫『書店ほど楽しい商売はない』日本エディタースクール出版部（2007）
- 漆原拓也「グローバル時代の日本の伝統的工芸品産業－秋田県川連漆器産地の海外進出事業を事例に－」『文化資源学 第 4 号』（2005） pp. 75-83
- 大井実（講演）「本の学校連続講座第 18 回：地域再生の核となるブック＆カフェの存在意義」（2015 年 8 月 26 日）
- 奥山益郎『出版文化』東京堂書店（1972）
- 小田光雄『ブックオフと出版業界』ぱる出版（2000）
- 小田光雄『書店の近代－本が輝いていた時代』平凡社（2003）
- 小田光雄『出版業界の危機と社会構造』論創社（2007）
- 小田光男『出版社と書店はいかにして消えていくか 近代出版流通システムの終焉』論創社（2008）
- 小田光雄『出版状況クロニクル』論創社（2009）
- 小田光雄『出版状況クロニクル II』論創社（2010）
- 河原すみ『せどりで副業！ 30 代ダブルワーカーの日記』ブイツーソリューション（2008）
- 木下修『書籍再販と流通寡占』アルメディア（1997）
- クリス・アンダーソン『ロングテール 「売れない商品」を宝の山に帰る新戦略』早川書房（2006）
- 小出鐸男「出版産業論」『出版研究 30 号』日本出版学会（1999） pp. 28-40
- 小林一博「出版物流通の諸問題」『出版研究 5 号』日本出版学会（1970） pp. 137-161
- 佐藤健二・吉見俊哉『文化の社会学』有斐閣（2007）
- 佐藤健二「テキスト空間論の構想－日本近代における出版を素材に」『テキストと人文学』人文書院（2009）
- 佐藤健二「近代日本民俗学史の構築について／覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』165 集、国立歴史民族博物館（2011） pp. 13-45
- 佐野眞一『だれが「本」を殺すのか』プレジデント社（2001）
- 佐野眞一『誰が「本」を殺すのか』（文庫版）新潮社（2004）
- 柴野京子『書棚と平台 出版流通というメディア』弘文堂（2009）

- 清水英夫『出版学と出版の自由』日本エディタースクール出版部（1995）
- 清水又吉『本は流れる 出版流通機構の成立史』日本エディタースクール（1991）
- 下村彦四郎『新装版棚の生理学』出版メディアパル（2004）
- 庄司徳太郎・清水文吉編著『資料年表日配時代史－現代出版流通の原点』出版ニュース社（1980）
- 鈴木親彦「出版流通の再評価 文化におけるストック形成に焦点を合わせて」東京大学人文社会系研究科修士学位論文（2012）
- 鈴木親彦「ジャパンプックセンターの再評価 出版流通研究の拡張可能性を視野に入れて」『出版研究 45号』日本出版学会（2014） pp. 159-179
- 鈴木親彦・中村雄祐「文化資源学の射程：大学院教育プログラムへの人文情報学的アプローチ」『文化資源学 第13号』文化資源学会（2015） pp. 91-101
- 鈴木親彦、天野絵里子、中西秀彦、中村健「オープン化と出版産業の変化 学術ジャーナルを軸に」日本出版学会春季研究発表会（2018年5月12日）
- 鈴木俊幸『蔦屋重三郎』若草書房（1998）
- 鈴木藤男（講演）「電子「書籍」の再販について考える－公正取引委員会への異論－」出版流通研究部会（2013年11月12日）
- 高須次郎『再販／グーグル問題と流対協』論創社（2011）
- 高橋正美「出版流通機構の変遷－一六〇三～一九四五」『出版研究 13号』日本出版学会（1982） pp. 188-228
- 高橋正美「出版流通機構の変遷－一九四五～一九四九」『出版研究 15号』日本出版学会（1984） pp. 59-113
- 田中治男『ものがたり東京堂史－明治、大正、昭和にわたる出版流通の歩み』東販商事（1975）
- 蔡星慧（チェソンへ）『出版産業の変遷と書籍出版流通 日本の書籍出版産業の構造的特質』出版メディアパル（2006）
- 辻泉「雑誌に描かれた「男らしさ」の変容－男性ファッション誌の内容分析から－」『人文学報』467号、首都大学東京（2013） pp. 27-66
- 寺林修『増補 出版流通改善試論』出版研究センター（1984）
- 長岡義明「出版文化なるものに対する違和感」『出版ニュース』2009.1上、出版ニュース社（2009） pp. 64-65
- 長友千代治『江戸時代の図書流通』思文閣出版（2002）
- 中野三敏『和本のすすめ－江戸を読み解くために』岩波書店（2011）
- 中町英樹「マーケティングに基づく出版社経営の再生」『出版研究 39号』日本出版学会（2008） pp. 53-65
- 永嶺重敏「大正期東京の「雑誌回読会」問題 雑誌のもうひとつの流通経路」『出版研究 29号』（1998） pp. 1-28
- 永嶺重敏『読書国民の誕生』日本エディタースクール出版部（2004）
- 永嶺重敏『東大生はどんな本を読んできたか 本郷・駒場の読書生活 130年』平凡社（2007）
- 仲俣暁生（講演）「電子書籍の未来」第20回東京国際ブックフェア講演（2013年7月5日）

- 中村雄祐・美馬秀樹・増田勝也・鈴木親彦 “Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku 文化資源学) in Japan”, *Journal of the Japanese Association for Digital Humanities* (2017) pp. 60-72
- 根本彰『情報基盤としての図書館』勁草書房 (2002) 能勢仁・八木壮一共著『昭和の出版が歩んだ道』出版メディアパル (2013)
- 能勢仁『世界の本屋さん図鑑 45カ国・50書店の横顔見て歩き』出版メディアパル (2016)
- 橋本健午『発禁・わいせつ・知る権利と規制の変遷』出版メディアパル (2005)
- 橋元博樹「2000年代の出版流通研究」『出版研究 44号』日本出版学会 (2014) pp. 3-27
- 橋本求『日本出版販売史』講談社 (1964)
- 長谷川一『出版と知のメディア論—エディターシップの歴史と再生』みすず書房 (2003)
- 秦洋二『日本の出版物流通システム 取次と書店の関係から読み解く』九州大学出版会 (2015)
- 畠山貞『出版流通ビッグバン 21世紀の出版業界を読む』日本エディターズスクール出版部 (1998)
- 畠山貞『出版販売試論 新しい流通の可能性を求めて』論創社 (2010)
- 林智彦「「活字離れ」論の文化史——「定義」と「統計」の実証研究」日本出版学会春季研究大会 (2015)
- 林信行『iPad ショック』日経BP (2010)
- 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版 (2014)
- フランコ・モレッティ『遠読』(2016) (みすず書房)
- 福原義春『だから人は本を読む』東洋経済新報社 (2009)
- 星野渉『出版産業の変貌を追う』青弓社 (2014)
- 星野渉 (講演)「これからの出版の話をしよう～失われゆく「取次」と、そのあとの世界～」(2015年9月19日)
- 星野渉「「バックオーダー発注」停止を考える」『文化通信』(2018年5月15日)
- 前田壘『紙の本が亡びるとき?』青土社 (2009)
- 三谷八寿子「街をしつらえる技術と時間—汐留シオサイトの開発を通して」『文化資源学第14号』(2016年) pp. 95-111
- 箕輪成男『消費としての出版』弓立社 (1983)
- 箕輪成男『情報としての出版』弓立社 (1987)
- 箕輪成男「イギリス出版再販制史」『新装版 本は違う イギリス再販制裁判の記録』新泉社 (1992)
- 箕輪成男『出版学序説』日本エディターズスクール (1997)
- 宮武外骨『一円本流行の害毒と其裏面談』有限社 (1928)
- 村上信明『出版流通とシステム 「量に挑む出版取次」』新文化通信社 (1984)
- 村上信明『出版流通図鑑—50万アイテムの販売システム』新文化通信社 (1988)
- 山田順『出版・新聞絶望未来』東洋経済新報社 (2012)
- 柳与志夫『千代田図書館とは何か』ポット出版 (2010)

- 柳与志夫「解説」アントネッラ・アンニョリ『知の広場』みすず書房（2011）
- 湯浅俊彦「日本における出版メディアのデジタル化の現状と読書の変容」『出版研究 39 号』日本出版学会（2008） pp. 67-82
- 湯浅俊彦『デジタル時代の出版メディア』ポット出版（2000）
- 横田増生『潜入ルポ アマゾン・ドット・コム』朝日新聞出版（2010）
- 吉田則昭「90 年代の出版流通研究—何が語られてきたのか」『出版研究 32 号』日本出版学会（2001）
- 脇英世『アマゾン・コムの野望』東京電機大学出版局（2011）
- AYURA『ぜったいできます! アマゾンマーケットプレイス&アソシエイト・プログラム』技術評論社（2008）
- Anderson, Benedict *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (1983)
- Darnton, Robert *The Literary Underground of the Old Regime*. Cambridge, Harvard University Press (1982) .
- McLuhan, H. M. *Understanding Media: the Extensions of Man*, McGraw-Hill (1964)
- Spector, Robert *Amazon.com: Get Big Fast*, Harper Business (2002)

年鑑等

- 出版年鑑編集部編『出版年鑑 1996』出版ニュース社（1996）
- 出版年鑑編集部編『出版年鑑 2018』出版ニュース社（2018）
- デジタルコンテンツ協会編・経済産業省商務情報政策局監修『デジタルコンテンツ白書』デジタルコンテンツ協会（2008）
- 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室「文化資源学フォーラムの企画と実践」2010 年度履修生『書棚再考 本の集積から生まれるもの』東京大学文化資源学研究室（2010）
- 東洋経済新報社『東洋経済 6219 号』東洋経済新報社（2009）
- トーハン『よくわかる出版流通のしくみ '07~08 年版』メディアパル（2007）
- 日外アソシエーツ編集部編『日本出版文化史辞典 トピックス 1868-2010』日外アソシエーツ（2011）
- 日経デザイン『アップルのデザイン』日経 BP（2012）
- 日本出版学会研究発表大会ワークショップ（講演）「出版プラットフォームの変化—取次システムの崩壊と新たな基盤作りの動向」（2015）
- 編集の学校／文章の学校監修『本を売る現場で何が起きているのか！？』雷鳥社（2007）
- 本の学校『出版デジタル化の本質を見極める 本の学校・出版産業シンポジウム 2010 年記録集』出版メディアパル（2010）
- 『出版指標年報 1998 年版』全国出版協会・出版科学研究所（1998）
- 『出版指標年報 2019 年版』全国出版協会・出版科学研究所（2019）

社史

- 『東京書籍商組合五十年史』東京書籍商組合（1937）
- 『出版販売小史』東京出版販売（1959）
- 『東販創立五年史』東京出版販売（1954）
- 『東販十年史』東京出版販売（1959）
- 『東販二十年史』東京出版販売（1969）
- 『東販三十年史』東京出版販売（1979）
- 『飛翔：トーハン50年の軌跡』トーハン（2000年）
- 『トーハン10カ年の歩み・平成12年1月～平成21年12月』トーハン（2010）
- 『日販20年の歩み』日本出版販売（1969）
- 『日販三十年の歩み』日本出版販売（1980）
- 『日販四十年の歩み』日本出版販売（1990）
- 『日販50年の歩み』日本出版販売（2000）
- 『日販60年の歩み』日本出版販売（2010）
- 『平安堂八十年のあゆみ』平安堂（2007）

新聞・通信社報

- 『北信濃新聞』
- 『共同通信』
- 『四国新聞』
- 『信濃毎日新聞』
- 『新文化』
- 『須坂新聞』
- 『南長野新聞』
- 『日本経済新聞』
- 『文化通信』
- 『読売新聞』

通達・法令等（年度順）

- 「私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律」（1947）
- 雑誌発売日励行委員会「雑誌発売日励行に関する協約」（1971年制定、1981年改訂）
- 須坂市議会会議録 平成6年3月9日（1994）
- 須坂市議会会議録、平成6年6月14日（1994）
- 須坂市議会会議録 平成9年6月12日（1997）
- 須坂市議会会議録 平成12年6月14日（2000）
- 公正取引委員会「著作物再販制度の取り扱いについて」（2001）
- JBC株主通知「ジャパンプックセンター解散」（2002）
- 公正取引委員会「医療用医薬品の流通実態に関する調査報告」（2006）

国土交通省「総合物流施策大綱 2005-2009」国土交通省（2009）

Web サイト（URL アルファベット順）

- 「日本古典籍データセット」
<http://codh.rois.ac.jp/pmjt/>
- 「バーゲンブック・アウトレットブック仕入れ 八木書店 Web サイト」
https://company.books-yagi.co.jp/buying_bargainbooks
- 「日本古典籍総合目録データベース」
<http://dbrec.nijl.ac.jp/>
- 「NDL デジタルコレクション」
<http://dl.ndl.go.jp/>
- 「流通／Distribution H.A.B Web サイト」
<http://www.habookstore.com/%E6%B5%81%E9%80%9A-distribution-1/>
- 「沿革 平安堂 Web サイト」
<http://www.heiando.co.jp/company/index.php>
- 「高遠本の街 Web サイト」
<https://honomachitakato.wixsite.com/info>
- 「出版情報登録センター（JPRO）」
<https://jpro2.jpo.or.jp/>
- 金原俊「舞台に留まろう その2（一般社団法人日本電子出版協会 JEP A キーパーソンメッセージ 20151010）」
https://www.jepa.or.jp/keyperson_message/201510_2606/
- 「日本雑誌協会の目的と事業 日本雑誌協会 Web サイト」
<https://www.j-magazine.or.jp/user/guide/index/1>
- 「紀伊國屋書店プレスリリース 紀伊國屋書店 トーハンロジテックスと提携した直仕入物流を開始 2016年8月2日」
<https://www.kinokuniya.co.jp/c/company/pressrelease/20160802122528.html>
- 「大阪屋栗田ニュースリリース：経営統合による新会社を発足いたしました」
<http://www.osakaya.co.jp/newsrelease/archives/1>
- 「出版協／アマゾンによる出版社直取引の勧誘で声明を発表 流通ニュース 2015年12月16日」
<https://www.ryutsuu.biz/backnumber/strategy/h121605.html>
- 「デジタル版日本出版百年史年表」
<http://www.shuppan-nenpyo.jp/nenpyo/>
- 「日本出版社協議会 アマゾンによる出版社直取引（e 託取引）の勧誘に対する声明 2015年12月16日」
<http://shuppankyo.cocolog-nifty.com/blog/2015/12/e-c2b7.html>
- 「トーハンニュースリリース 株式会社ブックライナー創立 10 周年を機に読者手数料を無

料化～書店取引正味下げで書店負担も軽減～2009年12月14日」

<http://www.tohan.jp/news/20091214.html>

「トーハンニュースリリース トーハン創立69周年記念式典近藤敏貴社長挨拶 2018年9月19日」

https://www.tohan.jp/news/20180921_1273.html

「店舗オペレーション TONETS V (トーネッツヴィ)」

<https://www.tohan.jp/works/retail/operation.html>

「トーハン・ロジステックス：企業理念」

<http://www.tohan-logi.co.jp/company/philosophy.html>

「書籍業料標準化のお願い」

<http://www.torikyo.jp/b-gyoryo/index.html>

「業界地図 電子書籍情報まとめノート」

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~yama88/pla.html>